THE CENTRAL REVIEW

中央公論

第廿五年 第拾貳號

第二百七十三號

● 天下益々多事ならんとして

「英雄を要すること今日より急なるはなきの秋に方り」

福本日南先生新著＝英雄論は、見よ。成れり

萬人渇仰の活文字

英雄論

大判洋裝頗美本
全一册貳百五十頁
寫眞版數葉挿入

正價壹圓

送費（内地 八錢
　　　清、朝 卅錢

カーライル曰く『世界の歴史は英雄の傳記也』と。實に英雄の傳記は全世界史の精髓也と稱するとも決して過言にあらず。世に興味深く、價値多きは豈英雄の言行事迹に非ずや。文壇の巨擘福本日南先生常に思ひを成敗興亡の理に潜めらる、の傍ら、其の炬の如き批評眼に、上下數千載間の人材群英が偉勳鴻業の迹を大觀し、先づ筆を英雄の定義に起して、神人的英雄—英雄の人心收攬術—英雄の風丰—英雄の本領—英雄得能—英雄の得失—英雄の襟度—英雄の性僻—英雄の資格—文學的英雄の諸項に分ち、自在に古今東西の偉人英雄を拉し來つて、史實を考覈し、逸話を旁證し、滔々數萬言、宛ら天より落ち來る電火の如き豪爽の文をもて、得意の縱橫闊議を試みられたる大快著にして、卓勵風發、光燄萬丈、眞に天下の耳目を聳動せしむるの概あり、嗚呼！王侯將相寧ろ種あらん乎、人は何人と雖も英雄たるの資格を有す。苟くも當代に處して、コンマ以上の人物たらんと欲するの士は、疾く本書を一讀して、英雄教の洗禮を受けよ。

東京神田區今川橋大通　東亞堂　電話本局八八四番　振替東京一七一番

今は支那を知る



菊版布製・貳拾五巻・壹萬六千貳

第二回豫約募集

申込十二月廿日限

▲支那五千年間に於ける思想界の精華は萃まつて此書に在り▼

國字解の要項

▲豫約價▼即納廿八圓 分納壹圓卅錢宛廿五回

▲送料▼一回に付當市内四錢 内地拾貳錢清韓樺臺廿五錢

▲送本期▼明年一月より一巻宛

二大好書

我學界に漢籍の必須なるや多言を要せず之が根本典籍を網羅して平易の解釋を施せる國字解全書が出版界空前の歡迎を博せしもの固より其所なり而して支那五千年の治亂の跡を娯樂の間に詳知すべきものは通俗廿一史を以て隨一とす今や極東の風雲日に急を告げ支那研究は愈々切要なり上記二書の需要が益々俄然劇增して其照會、無數

國字解要目

孝經 大學 中庸 論語 孟子 易經 詩經 書經

小學 近思錄 老子 莊子 列子 孫子 唐詩選 古文前集

古文後集 左氏傳 傳習錄 楚辭 管子 墨子 荀子 韓非子

本書は豫約以外に販賣せず此

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

べき大切の時なり



百餘頁

菊版布製・貳拾卷・七千餘頁

再刊の理由

なれども二書ともに豫約部數に照して印刷せし者にて前者は既第一版全部を結了し後者は既に其の過半を發行せし後なれば今や之を如何ともするを得ず江湖をして缺望せしむるや大なり故に茲に無慮三十七卷の再刊を企て至便の豫約法を設けて一書の普及を圖らんとす嚮に機を逸して憾を殘せる諸彥は再び此好機を逸すべからず

廿一史要目

十二朝軍談
列國志前編
列國志後編
附 戰國策
楚漢軍談
西漢紀事
東漢紀事
三國志

續三國志
續後三國志前編
續後三國志後編
南北朝前編
南北朝後編
隋煬帝外史
唐太宗軍鑑
唐玄宗軍談

五代軍談
宋史軍談
兩國志
宋元軍談
元明軍談
明清軍談
附 阿片戰爭
附 髮賊亂志

▲過去に於ける支那の革命を知らんには此書を讀まざるべからず▼

廿一史の要項

▲豫約價▼ 即納拾貳圓 分納壹圓廿錢宛拾貳回

▲送料▼ 一回に付當市内四錢 内地拾貳錢 清韓樺臺廿五錢

▲送本期▼ 明年一月より一卷宛

見本 申込次第送呈

東京市牛込區早稻田 振替東京壹壹貳參番

早稻田大學出版部

豫約取次 各地書林

機を逸する者は永久の悔あり

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

摸範的覆刻世界の寶典

文學博士 重野安繹先生　文學博士 三島　毅先生　竹添進一郎先生
文學博士 星野　恒先生　文學博士 服部宇之吉先生　校訂評點註釋

漢文大系

全部完成

金本全二十卷　菊判各卷千頁内外　定價全部參拾圓　各卷貳圓五拾錢　各卷送料内地十六錢

光輝燦然たる金本十二卷、何れも是れ漢文學の精華にして、悉く世界的經典ならざるはなし。新春の書架紳士の居室に備へて家庭に新なる光を添ふべし。本大系收むる所の原本は實に二百七十有餘卷。中には一部を求むるに百金を投ずるも得難き「韓非子翼毳」の如きあり、今之に大家の校訂を加へ詳細なる國字の頭註を附し、普く一般人士の讀物たらしむ。其價額の廉なると推し知るべし。本邦に於て他に類なきクロースの装釘は内容の尊嚴なると相俟つて一層貴重の念を強からしむ。特に中清動亂後の我國民が英語と共に研究すべきものは漢文を以て最とすべし。對清貿易が我が國富に大影響あれば、本大系の必要なるは顯著なる事由あり。學校官衙は勿論千卷萬卷を列ぬる書齋に本大系無かる可らず。本書を家庭に備ふるは子弟教養上無形の効果あるとも甚大ならん

文學博士 服部宇之吉先生校訂
第一卷第七版 **四書** 大學說 中庸說 論語集說 孟子定本

文學博士 服部宇之吉先生校訂
第二卷第四版 **古文眞寶後集**（箋解） **唐詩選** **三體詩**

文學博士 三島毅先生評
第三卷第四版 **唐宋八家文**

重野、星野、服部三博士校訂
第五卷第四版 **十八史略**（附年表） **小學孝經** **弟子職**

文學博士 重野安繹先生校訂
第六卷第三版 **史記列傳** 史記評林

文學博士 服部宇之吉先生校訂
第八卷第三版 **韓非子** 大田全齋著 韓非子翼毳

文學博士 服部宇之吉先生校訂
第九卷新刊 **老子** **莊子**

井井竹添進一郎先生著
第十一卷新刊 **春秋左氏傳** 左氏會箋

星野、服部兩博士校訂
第十二卷新刊 **詩經** **書經**

內容 **見本進呈** 往復葉書申込

五十二冊特別價發賣●全部十二卷一時拂廿貳圓●送料内地一圓四十四錢●一冊分賣貳圓外に送料●全部十[illegible]五圓●申込の際金二圓拂込、爾後毎月金二圓及送料拂込、着金直ちに一冊宛送本詳細見本

振替東京五〇一一番
東京神田　冨山房

信用なき小店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

壯烈獻身　神出鬼沒

花ハ櫻人ハ武士、武士中ノ武士即チ花中ノ華ニ於テ本書ハ爛漫タリ

陸軍大將伯爵　乃木希典閣下題辭
陸軍砲兵少佐　井田麟鹿君編

（最新刊）

忠烈 花中の華

本書は教育總監部に於て編纂せられたる忠勇美談中極めて壯烈、献身的にして眞に軍人中の軍人として後世の龜鑑となるべき事蹟を簡潔に記錄したるものなり、之に依て日露戰役各會戰に於ける兵士活動の狀況は勿論、戰鬪の實況を眼前に觀るの感あらしむ、今日在隊の兵士は勿論一般靑年子弟の精神敎育に資するには無比の良書なり。

菊判洋裝頗美本口繪三色版紙數二百五十餘頁
定價六十五錢
郵稅金八錢

井田白嵩著

（最新刊）

武漢革命 巨帥

本書は曾て劍を執りて南國を蹈破せし人の其奇怪なる見聞に基づき水滸傳的なる淸國革命黨統領の前身を巧みに描寫せし所、著想奇拔にして喜劇あり悲劇あり妙趣津々最も家庭の讀み物に適し眞に時好に投じたる好著なり。

四六版美裝
口繪三色版
定價三十五錢
郵稅金四錢

流麗ノ文、奇絕ノ光景、眞ヨリ出テタル虛、虛ヨリ出テタル眞。

發兌　東京神田松下町十　振替口座四八壹四　以文館

取次　東京　東京堂　六合館　北隆館　盛文堂　其他全國書肆

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絕す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

來春大雄飛之前提

中學世界

第拾六號　正價廿錢　郵税二錢

◎學生の氣風を一變せよ　法學博士　清水澄

◎腹式呼吸の衛生法　醫學博士　二木謙三

●生物の變化　井上農學士

●品性の訓練　安部磯雄

●時評　笹川臨風

●千曲川のスケッチ　島崎藤村

●藥用の植物　上野博士

●羅馬武士魂の精粹　高須梅溪

●清國動亂の眞相　久保天隨

●山嶽物語　吉江孤雁

◎西班牙の闘牛見物　農學博士　澤村眞

◎亞非利加の森林探險　林學博士　本多靜六

東京本町

博文館

口座二四〇番

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告揭載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

教育界の最新二大名著

京都大學教授 文學博士 谷本富先生新著

女子教育

△教育方針に定見なきこと女子教育より甚しきはなし、女子果して教ゆべからざるか。否、其方法の誤れる故也博士は多年之が研磋に苦心せられ東西に亘り古今を較し遂に

△最後の斷案を見る、妻として母として主婦として必要なる事項を論じ以て婦人の覺悟と修養を説く論旨清新、叙述周匝女子教育に從事する者は勿論男女に共用する良書也

定價壹圓 郵税拾貳錢 菊版上製美本

女子大學校長 成瀨仁藏先生新著

進歩と教育

△社會の進歩に伴ひ之に明應する教育なかるべからず。活ける教育を施し活人物を養成せんとせば單に學校に於ける教授訓練を以て足れりとせず必ずや家庭社會自然の三要素を包容する境遇、機會を利用し感化教育、

△自然教育を爲さざるべからず、然り個人の修養、國民の教育は日常ありふれたる事項に依りて最も有效に教育するを得べし、本書は此等の諸問題に付き縦横に評論説述したるものゝ萬人必讀殊に教育家に取り無二の良師なり

定價七拾錢 郵税八錢 菊版上製美本

發行元 東京京橋南紺屋町 實業之日本社 振替貯金口座東京三二六番 賣捌全國各地書店

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

中央公論第二十六年第十二號目次

▲公論

▲說苑





中央公論



第二十六年
第二十二號
第二百七十三號

內閣は無能乎無定見乎

（一）

世或は現內閣の無能なるを痛罵するものあり、吾人未だ其の然るや否やを判知せず、然れども今何ほ爲すとなきの事實を否定し得ざるのみ。

明年度の豫算は、既に十一月に入るも未だ決定するに至らず、詔勅を以て議會の召集を公布せられたるも、豫算の方針すら未だ決する莫し、惟ふに議會召集の日を以て豫算案を議會に出すの先例は、之を追ふと能はざるべし、斯の如き素より絕無にあらざるも、實に稀有の例たりとす。

淸國の動亂に至ては、必らずしも千載一遇と稱す可らざるも、二三百年にして始めて視るを得る事實

にして、吾人は久しく歴史に由て之を彷彿せるも、實際に目擊耳聞する之を始めとす、是れ豈千載一遇の好機として、應さに大に爲すあるべき秋ならずや、況んや東洋の覇權を把て清國の死命を制し得べき今の地位に在るをや、而して現內閣未だ曾て爲すとなきは何ぞや。

（二）

世の多く噂する所によれば、豫算の編制に最も苦むものは軍備擴張案なるが如く、之に次ぐは鐵道港灣等の修築案なるに似たり、軍備擴張、殊に海軍擴張は、我が國多年の宿題にして、現に海軍當局は其の進退を賭しても必成を期するといひ、鐵道港灣の修築は、政友會年來の主張にして、殊に地方に對する宿約なるを以て、政友會は理由なく之を撤廢するを欲せずといふ、理由なく撤廢すれば大政黨の面目立つと能はざれば也。

然るに財政當局は、單に其の財源無きの故を以て一併に之を拒絕し、事每に無き袖は振るべからずと稱す、然れども無き袖振るべからずといはゞ、世豈技倆ある財政家を要せんや、識慮超群の政事家を要せんや、素より無より有を生ずべからずと雖も、國家の緩急を識別して、其の重要なるもののためには、萬難を排しても之を斷行すると、實に政事家殊に財政家の手腕を要する所とす、軍備擴張不必要ならば則ち已む、苟くも然らずとせば、假令今年之に着手せざるも、少くも一二年の後之を行ふの成竹を立てざるべからず、鐵道港灣もまた又然り、事玆に出でずして、一概に無き袖振るべからずと稱す、尋常私家に在ては則ち可ならん、眞に國事を擔當する者に在ては、斷じて口にす可らず、之を口にするは自から

無能を表白する者、政事家財政家としては恥辱之に過ぐる莫き也。

吾人の耳にする所にして若し違はずんば、現内閣の原山本兩大臣は、財政に就て井上侯の助言を求めしが如し、蓋し侯に由て軍備擴張案を抑へんと欲するならん、更に露骨にいへば、内閣自から軍備擴張の提案者たる軍人を抑ゆる能はざるが爲めに、餘儀なく閣外老翁の力を籍らんと欲するものなるべし、果して然らば是れ立憲内閣として正當に其の責任を盡す能はずして、卑むべき一種の權道に由るもの也、夫れ軍備擴張の提案者と雖も、閣臣として國事を擔當する以上、全く國家の財政經濟に昧者なるには非ざらん、即ち内閣にして眞に財政の調攝に定見あらば、今日假令擴張を斷行し得ざるも、幾回の後之に着手すべしとして、其の順序方途を明示すべし、然らずんば軍備擴張の不必要なるを明らかにして以て提案者を納得せしむべし、明白に軍備擴張の必要を認めながら、其の着手の順序をすら立つる能はずして、唯だ無き袖振る能はずと稱し、助けを法理上職責なき閣外の老輩に借て以て僅かに一時を糊塗せんとす、醜陋幾んど言語に絶せずや。

曩きに政友會の一部衆が紅葉館に會するや、實に其の宿約たる地方の鐵道港灣修築を實行せんとを要求する一種の示威運動なりといふ、蓋し多年積極主義を標榜し來れる政友會が、辛ふじて政見實行の地位に立つや否や、無き袖振る能はずと唱へて飜然消極主義に一變するとは、苟くも多少神經あるものの忍ぶ能はざる所なるべし、世に稱す、原内相大に山本藏相と爭ふの意あり、殊に港灣鐵道問題に於て然りと、若し然らば、原氏は實に政友會の主義を守るに忠なるもの也、然れども軍備問題を抑ゆるがため、

井上侯の助言を哀請せりといはるゝ原氏にして、果して斯の如き氣魄ありとすべきや否や、夫れ原氏は政友會の首領にして、事實現内閣の主人公たり、西園寺侯の如き素より一種の表看板のみ、斯の人にして自から下りて駈出しの大臣たる藏相山本氏と相爭ふといふは、餘りに自から侮るに過ぎずや、其の相爭ふといふは表面を裝ふのみ、結局は自から山本氏に讓り、我が提案すら斯の如し、公等宜しく自から屈せざるべからずと做して、以て巧みに他省の主張を抑ゆる作略ならざらんや、世人は原氏實に此の種の器略を有することを信ぜんと欲す。

或は曰く、山本氏が現職に就くを勸めらるゝや、當時減債基金五千萬圓を轉用して、以て他に應ずる成竹を有したりき、然るに此の轉用案は、前内閣系が目して以て自派に對する砲門を開くものと做し、而して澁澤男等の實業家もまた反對し、而して井上侯殊に之を非として山本氏に一喝を浴するに及び、竟に其の意を飜へせるがため、今や如何とも臨梅し能はざる窮地に立つに至れるなりと、果して然らば、氏や大臣として自信なきもまた甚だし、夫れ減債基金轉用の是非得失は姑らく措くも、世上實に之を唱ふるもの少からず、現に國民黨の如きは減債基金制を以て一種無類の愚制と爲し、而して財政經濟家中また實に之に和するものあるに於て、山本氏たるもの、始めより轉用の心あらば宜しく斷々乎として之を行ふべし、若し行ふを得ざらん乎、潔く冠を掛くべきのみ、然かせずして先づ閣外の威赫に駭きて初志を變ず、假令竟に勢禁じ形格して辭職するに至るも、誰か其の進退宜を得たりと稱す可けんや、況んや原氏と先後して井上侯の助言を哀請し、求めて閣外者の干渉を招くをや。

長袖善く舞ふ、然かも舞に妙なるものは、赤手と雖も亦舞ふべし、財源無きの故を以て一切の事業を中止し、而て後の方圖を立て得ざるは、全く無定見也、政事家財政家の事に非ず。

今の内閣果して一の政事家財政家なきか、何ぞ爲すことなきの甚だしきや。

（三）

我が軍備は何のためのものぞ、年々巨多の公費を糜して以て東洋無比の大陸海軍を備ふるは何のためぞ、曰く東洋の平和を保證するがためのみ、更に正しくいへば、支那大陸の平和を支持するがためのみ、蓋し我が最高政治の主たる目的は玆にあり、日英同盟は即ち全く之を基礎とし、而して日露協約、而して日佛協商、而して日米協商、一として之に因せざるは莫し、平生多くの價を拂ふて以て日英同盟を繼續し、之を對外政治の樞軸とするも、實に是に由て以て支那問題を解釋せんと欲するのみ。

今や清國の變亂幾んど底止する所を知らざらんとす、亂の起る實に十月九日にありしも、其の起るや起るの日に起れるに非ず、苟くも政事家として眼識を具ふるもの、皆今日あるを豫想せざるなく、唯だ其の爆發すべき時日を確知し能はざりしのみ、而して其の一び爆發するや、支那歷世の曾て示現したりしが如く、紛々擾々として一時底止する所なきも、また頗ぶる豫想し得べき所とす、然るに現内閣は、今に至て尙ほ爲すことなく、偏へに列國の意向のみを窺ふ如きは何ぞや、東洋の覇權を握りて、自から東洋の主人たる地位に在りながら、却つて客の鼻息をのみ窺ふが如きは、果して何の心ぞや。

試みに清國の現狀を看よ、竟に中心點なきこと、實に歷世末運の常習に違はざるにあらずや、袁世凱再

三の上諭を受け、資政院に選擧せられ、北京の上下に歡迎せられて新たに内閣の首班に立てるも、退きては政府の結束を堅くする能はず、進みては叛軍と獨立者とを平ぐる能はず、一切の情僞暴露せられて信望地を掃はんとし、資政院は即ち全く上下の信を喪へり、北方の中心が袁と資政院とにあらざるや言なしとす、而して清廷其のものに至ては、新亭對位の亡國者として、僅かに餘命を保つのみ。

武漢の叛軍は、近く袁世凱の媾和を斥けて百方戰備を修め、壇を築きて黄興を總都督に擧げしと、頗ぶる演劇染みたりと雖も、素より軍需に豐かなるに非ず、多くの精鋭を有するに非ず、討伐軍と其員數實力に於て幾んど伯仲の間にあり、各省の獨立を宣せるもの、また何等稱すべき權力あるに非ず、僅かに討伐するものなく、又攻戰するものなきが爲めに、獨立の空名を存するのみ、而かも各省と革命軍隊との間に明白なる聯絡あるにも非ず、隨つて清國現時の中心點なるもの孰れにもあるとなく、比較的重き中心すら發見し得ざるにあらずや、彼の頑迷なる一張勳怒りて矛を執れば、南京未だ守を失はずして、兩江の實勢紛々として容易に測りがたきにあらずや。

總ての方面已に中心點なし、是れ我が大に力を致すべき所ならずや、我が力一び用ゆれば、必ず當さに中心點となりて亦勢を一定せしむると極めて容易なれば也。

武漢の叛軍は、苦力の如き一時の雇兵を合計するも尚ほ四萬を超ゆるとなく、其の討伐軍また又然りとす、南京に至ては、一萬五千の精鋭を有すれば能く之を擧ぐるを得、即ち我が五個師團の兵を出さば、清國の事全く定まるや瞭然たらずや、形勢斯の如き時に在て、曾て一事を爲すとなく、唯だ汲々として

南北東西の不完全なる諜報情報公報の蒐集のみに齷齪す、果して何の心ぞや。

（四）

概して之を視るに、清國には今や大要三種の潮流あるが如し、其の一は言ふまでもなく孫黃等革命主義者の主張する所にして、彼等は支那を擧げて純然たる共和政體たらしめ、制度一に米國に倣はんとす、其の二は立憲帝政主義にして、今の愛親覺羅氏を存續し、以て英國の如き立憲君主政體を行はんとするもの、少くも慶親王攝政王等は此の派の主たるべし、其の三は同じく君主主義なれども、獨逸の如く聯邦制度を執らんとするもの、其數甚だ少きが如きも、獨立を宣言せる州中實に此の主義を奉ずるものあるが如し。

更に實勢より揣摩するに、湖廣兩江を首として南清に及ぶまでは、共和國として新たに獨立し、而して今の愛親覺羅氏は、黃河以北の直隸、山西、甘肅、新疆と蒙古とに君主として北方に偏安するも亦妙ならざるにあらず、或は四川、陝西等別に獨立するまた妨げず、詮する所支那を二分し又は三分するも可なりとす。

果して二分し三分して、各々好む所に安んぜしむるか、抑も又帝政主義を以て統一すべき乎、共和主義を以て十八省を保全すべき乎、總て彼等の欲する所に由て以て列國の利害を一致せしむべし、而して之を爲す、一に我が日本の欲する儘なりとす、我が實力は、彼等をして總て我れに隨從せざるを得ざらしむるに足れば也、故に日本は先づ第一に支那人の最も利便とする所に考へ、次に我が日本の立場に於

て最も便とする所に鑑み、併せて列國の利害を酌量して以て其の宜を制すべし、是れ世界人道のためにして、又實に天地の化育を贊襄する所以ならずや、然り、具に東洋の平和を維持して、以て支那を保全する所以ならずや。

此の明白にして、而して大に爲す有るべきの秋に爲さず、果して何の心ぞや、嗚呼果して何の心ぞや。

（五）

摩洛哥問題より惹起し來れる獨佛間の確執は、今や略々解決の緒に就きたるが如きも、トリポリ問題より發したる伊土間の戰爭は、容易に收局を告げがたからんとす、夫れ土耳古問題は、英佛露獨墺の最も深く利害を有する所、伊太利との紛爭を解くためには、此等の諸國當さに根本的方法に出でざるを得ざらんとす、また何ぞ多く他を顧眄する遑あらんや、即ち支那問題の如き、自から之を第二に措かざるを得ざらんとす。

墨其哥は最も多く米國人の投資する所、其の利害の深き實に大に他に異なるものあり、今や叛亂の氣勢頗ぶる昂まり、マデイロを排するもの竟に將さに蹶起せんとす、モンロー主義を標榜する米國は、勢ひ他の歐洲又は日本の容喙を欲せざるべく、必らずや自から之が解決に努力すべし、即ちまた遠く東洋を顧念する餘裕なからんとす、近時米國の支那に注目する、尋常に異なるものあり、其の太平洋艦隊を增遣して大に亞細亞艦隊の威力を加へんとするが如き、其の志察し難きに非ずと雖も、本來米國の地位としては、モンロー主義を支持する丈け其れ丈け、西半球の問題を專決して他の干渉を容れざる代り、

己れまた遠く東洋に手を延さゞるを當然とす、一方にモンロー主義を把りて、西半球に占據しながら、己れ獨り遠く東亞に脚を伸ばさんとし、此がため彼の荒廢なる日米戰爭論をさへ傳說するが如きは、實に顧みざるの太だしき也、思ふに今や墨其哥の事甚だ急也、米國は恐らくば其の當然の理に由りて、一意墨其哥問題の解決にのみ銳意すべき乎。

果して然らば、支那問題を解決する主人は實に我が日本ならざる可らず、世界の謎として二十世紀に貽されたる三大老國が、今や東西同一期間に於て其の解決を待つに至れるは、豈天意ならざらんや、少くも英佛獨墺伊は土耳古問題を解決すべく、米國は墨其哥問題を釋くべく、而して我が日本は主として支那問題を擔當せざる可らず、蓋し是れ神の心ならん。

日本は全然土耳古問題に發言權を有せず、僅かに英國との同盟の誼に由て英國の主張を支持する間接の力たるに止まるべし、墨其哥問題に至ては、米國の措置如何に由り、或は容喙の權利を保留すべく、或は全く米國に一任すべし、其の決一に米國の對淸處置如何に存す、英佛獨墺は素より支那問題に無關係なる能はず、利害關係の上に於て洵に然らざるを得ざれば也、然れども恰かも土耳古問題の生ずる有るがために、勢ひ近きを先にして遠きを後にせざるを得ざるのみ、玆に於てか支那問題を解決するもの實に我が日本を主とせざるを得ざる也。

日本若し五個師團の兵を出さば、立ろに現在の支那問題を擧げて意のまゝに解決し得べし、如何に大事を執るも、十個師團を出さば十二分也、然り、他をして一指をも動かすと能はざらしむるに足れり、

歐米列國は、若干の海軍を出し得ると雖も、有力なる陸軍を出さんとは甚だ難し、其の兵站能く續かざれば也、其の兵士清國今日の水土風氣に適せず、又清國の民家に舍營するに適せざれば也、然かも軍隊の風紀と衛生と、其の夥しき消費とを犧牲とするも、得る所は到底失ふ所を償ふに足らず、是れ聰明にして利害の打算に敏なる列國政治家の知悉する所、支那問題の解決は、勢ひ日本に任ぜざるを得ざる所以也、何ぞ況んや日本は、儼乎として英國との同盟を存するをや。

日本に次て支那問題解決に有力なるは露國也、露國は廣く清國と境壤を接して利害の關係切實なるのみならず、又實に大兵を清國に出動し得べき地位に在れば也、茲に於てか日本は主として露國と相謀り、同盟國たる英國と議して、以て支那問題解決の主人公たるを當然とす、今の内閣如何ぞ之を知らざらん、然かも未だ何事をも爲さざるは何ぞや。

京奉線の安全を保持するは我が當然の責任にして而して又權利也、此の線路の安全は、我が南滿洲鐵道及び釜山より安東奉天を經て、天津北京に達する一線の利益保持上已む可らざるものなれば也、奉天天津北京の間或は匪徒の起るあり、動亂の發するありて、鐵道の支障を來さん乎、憂患實に測るべからず、而して北京にある列國の代表者及び臣民の安全將に保つべからざらんとす、我が日本は曩に多く北清守備隊を減じたりき、速かに之を復舊し、併せて露國に協定の上、前記線路の保安を圖るがため、相當の出兵を爲すを要せずや、一呼して大兵直ちに到り得るといふも、動亂の起る、實に咄嗟の間にあり、内閣は彼の第二十鎮統制張の發議に相次いて、北京の人心恟々を極むるに至れるを豫想し得ざりしに非

ずや、禍亂を未發に防ぎて我れと列國との利益を保護するためには、我れ實に十二分の準備を爲すを要す、此の事たる列國悉く之を能くし得ざるも、我れは必らず之を善くし得るを思へ、然るに我が内閣未だ兹にすら爲すとなきは何ぞや。

* * * * * * * * *

淸國問題を決するに方り、第一に協議を要する同盟國には、今や我が大使還りて在らざる也、露國の同盟國たる佛國に駐剳する我が大使また在らず、勿論其の代理者はあり、而して彼我の交渉、電致して能く辨ずべきも、其の使節の全く缺如する、豈甚だ稱す可けんや。

或は曰く、我が外交當局出兵の案を立てゝ先づ英國大使マクドナルド氏に計る、大使謂らく、請ふ暫らく俟て、我が政府の未だ爲すとなき實に之に由ると、今や英本國に在ては、トリポリ問題に就てすら外交非難の聲頗ぶる高きにあらずや、支那問題の如き、我れ百方同盟國を誘ふて以て同意を餘儀なくせしむるを當然とす、徒らに列國の心を測りて其の鼻息を窺ふが如きは、醜也、拙也、全く無定見に齊し。

現内閣果して全く無定見なりや、果して無能にして爲すあるに足らざる乎、吾人敢て謹んで敎を請はんと欲す。

袁世凱の運命

(一)

清國に袁世凱内閣成る、然かも瞶々者流の豫期せるが如き賴母しきものに非ずして、情僞早く既に暴露し來るに似たり。

袁の起つて湖北に赴むくや、或は手を額にして相慶するものありき、既にして資政院の嬌々として時弊を指摘し痛議するあり、殊に奉天より南下して湖北に向ふの途次、灤州に駐まりて改革を主張せる第二十鎭統制張紹曾が、十餘ヶ條の條件を擧げ、之を容れずんば兵力を以て强行せんと威迫するに及びては、北京政府戰慄して全く膽落ち氣沮み、色を失ふて出でん所を知らず、次て山西軍隊の叛するあり、清廷の親貴唯だ相對して涕泣するのみ。

茲に於てか袁世凱出でずんば蒼生を奈何とさへ叫ぶものあり、威信全く地を掃へる北京朝廷は、袁を總理大臣に任じ、其の召命に應ぜんとを懇請し、懇請に亟ぐに哀請を以てする狀態なりき、袁の聲望高まらざらんとするも得べからざる也、故に彼れが孝感より轅を還して北向し、其の北京に着するや、恰かも凱旋將軍に似たる意氣ありき、恟々たる人心は殆んど安んじ、陸續たりし避難者は急に踵を返すに至れりといふ、列國公使が先を爭ふて彼を訪ひ、以て彼れに結ばんとせる、また必ずしも多く嗤ふ可らざるに似たり。

然れども鍍金は竟に剝けざるを得ず、此の堂々たる豪傑が、未だ何日ならずして早く已に地金を現はし來れると、幾んど世人意料の外にあるが如し。

吾人は前月の本欄に於て、聊か彼の輪廓を描きたり、幸ひにして多く謬まらざりしとは、讀者具さに之を看取されしなるべし、今や則ち更に進んで彼の進退より視て以て其の運命をトせんとす。

（二）

袁には素より一の誠意あらず、有る所のものは權略のみ、機智のみ、然かも誠意なき權略機智の時を濟ふに足らざるとは、彼に出て最も明白に證據立てらる。

或は革命黨の蜂起を以て、袁が權勢を回復するための機略に出づと做すものあり、寧ろ穿ち過ぎたる說にして、彼に斯る絕大の力なきや言を俟たずとす、然れども彼れが密かに獨逸人より少からざる借欵を爲し（或は八百萬元とも稱す）、之を四散して縱橫に詭計を弄せるとは蔽ふべからず、現に武漢征討總督として南行する後、張紹曾をして兵を挾んで恣睢驚くべき奏議を爲さしめたるが如き、又資政院議員を買收し操縱して、暗に我が欲する所の如くならしめ、以て北京に回りて文武の大權を掌握する地位を開拓したるが如き、皆此の黃金行使の結果と稱せらる。

清國の政事家多くは金錢に卑吝にして、偏へに之を蓄積するに汲々たり、獨り彼れ袁は、能く黃金を行使して以て妙用の結果を收む、智なりと謂ざる可んや。

然れども彼れの已に總理大臣たるや、能く彼の國事匡濟會を組織せしめて、其の運動費二十萬兩を給

したるも、政府其のものゝ金庫の空寂を補ふ能はず。

彼れの股肱の智嚢と稱せらるゝ唐紹怡は、彼れに薦むるに、米國より借欵すべき策を以てしたり、唐が郵傳部大臣として未だ出勤せざるに拘らず、病を力めて北京に入り、密かに袁と面議せるは、實に此がためなりといふ、然れども革命黨の內情に昧からず、又袁の前途を揣摩して多く違はざるべき米國資本家が、果して袁內閣を信じて借欵に應ずべきや否やは疑問なりとす。

佛英白のシンヂゲートも、一たびは借欵に應ぜんとしたりしも、急に之を中止したるを疑ふべからず、獨逸が密かに袁に貸したるを不快として、東三省總督に五百萬兩の借欵を許さんとせる露國も、亦竟に之を拒絕するに至りぬ、清國の現狀を視るもの、如何ぞ珠を深淵に投ずるが如き冒險を敢てすべけんや、袁內閣が當さに覿面に苦むべきは其れ財政ならん、彼れ今や武漢の叛軍を伐たざる可らず、然かも軍器彈藥補充の途なきを奈何せん、否、途なきに非ず、資なきのみ。

袁如何に權略に豐かに機智に富むも、外國より借欵を爲し能はずんば、能く半歲をも支ふるに足らざるや論莫きのみ、窮すれば濫す、或は國土を擔保としてまでも借欵を起さんとせば、之に應ずるもの絕無ならざるべし、然れども後に大患を貽す之より甚だしきは莫し、袁たるもの窮して而して竟に之を敢てすべきや否や。

(三)

袁の組織せる內閣を視るに、徒らに八方美人主義を執りて、何等恃むべき根底を有するには非ざるが

如し。

彼れの內閣には、立憲君主主義を執る保皇黨の領袖梁啓超(司法大官に過ぎざるも)あり、共和主義を奉ずる革命黨の長者張謇あり、此の氷炭相容れざる異主義者を閣中に網羅せんとしたりしは、是れ一皿の內に水火を盛るに齊し、實に一種の手品と稱するの外なし、勿論淸國人の常習として、主義を死守するが如き執着性を有せず、保皇黨と雖も勢ひの趨く所竟に共和主義に變ずると同じく、共和主義の革命黨と雖も、時あれば乃ち甘んじて君主主義に屈するなきを保せず、隨て張と梁と其の當人自身と背後の援助者として袁に信倚する所あらば、未だ必らずしも入閣するとなしとす可らずと雖も、張や梁や、能く袁の爲人を看破して事を共にするを欲せず、二者各々就任を拒めるもの丶如し、而して袁や素より此の二者を抱合し、由て以て徐ろに此の兩主義を融和し渾合せしめて、以て宜きに隨はしむるの大志と經綸とあるに非ず、唯だ彼にも宜しく此にも宜しく、以て諸方面に人氣を博せんとせしのみ、即ち所謂八方美人主義を執れるのみ。

夫れ國步の艱難なる今日の如き時に方りて、毅然たる一定の方針を立て丶以て經綸を行ふとを爲さず、單に器略をのみ弄して八方美人主義に出んとす、然かも異主義者の出づると否とを問はず、漫然として閣僚を指定すると、恰かも木偶を配置するに異ならず、其の重きを爲すに足らずして、人氣を求めながら却つて輕侮を招くに至ると、實に其の處なりと謂はざるべからず。

彼れ袁は、君主制を以て淸國を統一するか、抑もまた共和制に由て秩序を保たんとする乎、身內閣の

首班に立て、文武の大權を執る以上、素より一定の懷抱なかるべからず、然るに袁には此の主義定見なるもの無きに似たり、彼れが二十萬兩の運動費を給與して組織せしめたる國事匡濟會には、楊度、汪兆銘の如き君主主義者と共和主義者とあり、各省の代表者と相議し君主共和孰れを採るべきかを審議決定せんことを主張せり、各省代表者若し之に應じて會議せば、共和主義の多數を占むるや論を俟たずとす、然れども支那人は由來事大主義者也、權勢崇拜者也、故に政府に立つ袁世凱にして、誠實に君主制のためにし、一身を犧牲としても必らず之を遂行し、由て以て支那を統一するの理想あらば、各省代表者を威爭し綏撫して、竟に立憲君主制に贊同せしめ得られざるに非ず、然れども袁には此の抱負なく、唯だ臨機應變を主義とするに過ぎず。

一定の抱負なく、八方美人主義を執て臨機應變手段に出てんとす、國難を匡救するに足らざるは論莫く、徒らに心ある者の輕侮を受くるに過ぎざらん、否ずや、袁今や外は各省革命派の侮蔑を蒙むり、內は慶親王徐世昌等の掣肘を受けて、殆んど爲すあらざるの窮地に陷ゐれることを、彼れの難關は未だ必ずしも財帑不給の一にのみ止まらざる也。

（四）

權變智巧もまた及ばざる所のものあり、袁が第一の失は、武漢の叛徒討伐に向へるにあり、彼れ始めは乃公一たび向はゞ、黎を屈して媾和せしめ得べしと信ぜるならん、然かも才辨一代を傾くと稱せらゝる蔡廷幹を說客としながら、徒らに黃興黎元洪輩の嗤笑を買ふに過ぎざりしは何ぞや、其の力實に彼等

を壓するに足らざれば也、片々なる一才人の蔭昌すらも、一たび陣に臨めば能く漢口を恢復し得たりしに、袁到るも叛軍の一陣を拔き一旗を奪ふ能はず、却つて叛軍の勢を長じて、官軍は寧ろ糧食足らず士氣振はずして勢ひ相抗せざるを暴露するのみ、上諭再三に及び、傲然轅を廻して北京に入れるも、叛軍よりいへば、是れ一種の遁逃のみ、袁にして起たずんば則ち已む、苟くも起たば、兵力優に叛軍を壓するに足るものなかる可らず、和戰兩樣の權を握りて而して黎に對せば、黎や謹んで媾和の命を奉ぜん、事玆に出でず、第二十鎮の兵を灤州に駐め、張紹曾をして彼れが如く上奏を爲さしめたるは、假令北京の形勢を急變し得たりと雖も、竟に叛徒を壓する能はざるに至る、乃ち袁の第二失なりと謂ざる可らず。

武漢の事未だ定まらざるに、早く已に北京に還れるは袁の第三失也、黎等和議を欲せずんば、更に增兵を請ふて必らず之を討滅すべし、增兵至らずんば、永く陣に在るも妨げず、曠日彌久の間、軍情益々不可にして竟に支ふ可らざらん乎、總て黎等の主張に聽きて以て和を成すも可也、既に和して然る後、徐かに北京の形勢を窺ひ、各省の勢ひを聯ねて以て事を定むるを可とす、徒らに張紹曾一輩又は資政院を操縱して朝廷を狼狽せしめ、乘じて以て北に還れるも、武漢の事定まらずして、各省呼應相起つに及びて、袁や奈何ともす可らず、北京に居て、政府の主腦となれる丈け、却つて益々困厄を滋くするのみ、愚と評せざる可らざる也。

洪秀全革命の兵を擧げ、太平天國と唱へて頗ぶる洋敎主義を執り、所在の神祠聖廟を破毀するや、曾國藩は慨然として起ち、滿朝を助けて以て漢風を維持せざる可らずと爲し、洪等を儒敎の敵として竟に

之を討滅したりき、今や袁たるもの曾の誠意なく、曾の抱負なく、唯だ權變智巧を弄して以て私を濟さんとす、而して其の權變智巧もまた及ばざる所あり、竟に成功しがたき素より其の處乎。

（五）

袁は實に其の私を濟すもの也、彼れにして眞に淸國を救ふの志あらば、岑春煊の如き、端方の如き英俊と握手して以て難局に當るを可とす、盛宣懷が理財の能また大に用ゆべき也、然るに盛を敵とするがため、資政院を指嗾して彼の如き虐待を加へ、岑に對しては目を側てゝ何等聲息をすら通せず、其の偏狹にして私にのみ急なる、幾んど英雄の資性を缺如せり、素より國難を救ふべき、性格を有せざる也。

袁の山東巡撫直隸總督たるや、頗ぶる外人の好評を博し得たりき、列國の使節等が袁を以て淸朝第一の人物と做せるまた必らずしも當らざるには非ず、然れども一誠なくして而して權變智巧にのみ走り、一定不拔の抱負なくして、唯だ臨機應變、以て私を濟さんとする姦雄の資漸く暴露するに及びては、列國使節また豈之を見限らざるなきを保せんや。

今や武漢の叛軍純乎たる革命軍となり、漸く諸方に聯絡を通ぜんとす、而して獨立を宣せる各省中、北京に迫りて君位を去らんとを勸むるあり、袁や愛親覺羅氏と齊しく竟に其の存在を認められざるに至らんとする也。

袁の臨機應變主義なる、或は竟に革命黨に投じて、淸廷に迫るに退位を以てすると莫きを保せず、然れども革命黨は此がため袁を尊重するに至らずして、益々其の輕侮を增すや論を俟たず、袁の爲す所勢

ひを指導して以て率先事を成すにあらずして、唯だ驥尾に附する蒼蠅の如く勢ひに附屬するのみ、然かも反覆常なく、且つ忍びざるなき姦人たると益々明著なる可ければ也。

現に立憲君主々義を標榜して政府に立つ、之を以て極力天下に唱へ、勢ひ競はずんば乃ち清朝を奉じて黄河以北に偏安すべし、然らば則ち清朝無二の忠臣として百世に不朽ならん、袁の知、未だ之を察せざる乎、彼れや遠からずして亡びんのみ。

小村侯を弔す

前外務大臣正三位勳一等侯爵小村壽太郎氏十一月廿六日を以て葉山の別墅に薨ず、年五十七。

侯初め日向國飫肥藩の貢進生となりて大學南校に入り、明治三年初度の留學生として米國に至る、齋藤修一郎、栗野愼一郎、鳩山和夫、原口要、古市公威の諸氏共に其の同行者たり、時に侯初めて十六、明治十三年歸朝し、翌年大阪にて判事たりしが、十七年六月外務權少書記官に任じ、爾來明治三十九年一月より六月まで五ヶ月間樞密顧問たるの外、本年八月まで實に外交官の地位を離れざりき。

明治二十六年十一月清國公使館一等書記官に任ぜられ、日清の國交切迫するや、速かに開戰するの至當なるを本國政府に稟申しながら、笑つて清國當局と交際したりき、其の旗を卷きて北京を去るや、行動駿敏、頗ぶる中外人の耳目を聳えしめき、侯の手腕の汎く世に認められしは、恐らくは此の時よりな

らん、井上侯失敗し、三浦公使暴擧せし後を承けて朝鮮公使となり、第一次日露協約を締結し、卅九年六月入て外務次官となり、卅一年九月特命全權公使となり、米國駐在を命ぜられ、卅三年二月露國駐在に轉じ、北清事變起るや、其の十二月更に清國駐劄となる、彼れ廿日鼠の綽名を列國公使間に獲て、其の技倆の超群なるを認められしは實に此の時に在り、三十四年桂内閣成るや、其の外務大臣に任じ、卅九年一月まで在任し、其の六月全權大使となりて英國に至り、明治四十一年第二次桂内閣成るに及び、再び外務大臣となり、以て本年八月に至る。

始めて日英同盟を締結し、三び之を重ね、日露戰役を開始し收局し、且つ日清條約を締結し、最近に於ては又條約改正を成したるは、實に侯の功績とす、彼のポーツマスに於ける露國との媾和條約の如き侯は實に俗論攻撃の焦點となれりと雖も、自家のベストを盡して而して能く戰局を收拾したるの功績は識者の切に認取する所とす、殊に大患の後、蒲柳の質を以て、ポーツマスより歸るや否や、時恰も極寒に向ふの秋なるに拘らず、病を努めて清國に航し、媾和條約を善くせしが如き、全く身を忘れて國に殉ずるの志を表せしもの、苟くも心あるものは、皆當時侯の誠意を感歎せざるは莫かりき。

侯初めは負債山の如く、寒素具さに至る、故に大に顯達せるも、僅かに原町に一小邸宅を構へしのみ、然かも兩三回其の門に過ぎざりしに止まり、葉山の別邸と稱するもの、亦小なる借屋に過ぎず、門邸蕭條、常に書卷に親むか、然らずんば瞑想沈思するのみ。

平生客を好まず、最も新聞記者を厭ふ、倫敦タイムスの日本號を發刊せんとするや、其の外報主任チ

ロル氏を日本に遣はす、氏一日刺を侯に通ず、侯斥けて面せず、氏竟に去て滿洲に向ふ、侯の左右聞きて深く侯を諫め、氏を神戸より呼還して侯に面會せしむ、氏後に語て曰く、侯小村の識度群を抜く、實に好個の外交家なりと。

桂侯聰明にして自から用ゆる深し、然れども外交の事に至ては、一に侯に信倚して總て其の裁決に任せしといふ、侯が故陸奥伯と共に、我が明治外交家中の双璧たることは、何人も之を爭ふものなし。

記者の米國に遊ぶや、侯また華盛頓に公使たり、語りて曰く、米國は地方分權の國也、唯だ玆に在るも以て形勢を知りがたし、桑港よりニウオルレアンス、シカゴ、セントルキ、紐育、ボストン、ヒラデルヒア等の事情を審かにして、初めて此の國の情僞を判すべしと、記者は之に由て侯の外交の常に密にして網の如きを思はざるを得ざりき、其の英露米清に對する、また實に規模雄大にして且つ頗ぶる密なるを視る。

一匹夫より起りて侯爵の榮位に昇る、人臣としては幾んど加ふべきもの莫し、侯や死して瞑すべき乎、然れども現に清國に變亂あり、東洋當さに多事ならんとす、此の時にして斯の人を喪ふ、國家の大なる損失にして、吾人の深く悼惜に堪えざる所とす、俄かに訃を聽きて、急に筆を走らす、心亂れて辭を爲すに遑なき也。

公論

支那歴代の人種問題を論じて今回の大革命の眞因に及ぶ

文學博士　白鳥庫吉

今回の支那の革命騷動が始つてから、世界の人が皆支那問題に熱中して、其成行に注目して居る。支那は已に世人の知るが如く世界に於ける一大帝國であつて、其人口から言へば、全世界人口の殆んど五分の一を占め、其領土も亦非常に廣い。そして其廣い領土が極めて豐沃であつて天產物に富んで居る。今や世界を見渡しても、各方面が皆已に大抵極りが着いて居るのに、此支那はまだ未定の問題として殘つて居る。夫れ故に革命の騷動が始らぬ前から、世界の各强國が皆此支那に向て壓迫を試みつゝあつたのである。處へ今回の騷動が持ち上つたから、世界の各政治家は今までよりも一層其手腕を振うて、各々自國の利益を計らうとし、所謂虎視耽々たるの狀景を呈して居る。世界列强の注目するのは皆各自の利益であるが、然しながら其支那の國と最も密接の關係があるのは、いふまでもなく我日本帝國であつて、支那の安危は直ちに我國の安危にも關するのである。夫れ故に今回の騷亂に對する我國の立場は、世界の列强が單に各自の利益を主眼と

するのとは趣を異にし、直接我國運の消長盛衰に關する事であるから、之を對岸の火災視して袖手傍觀する譯には行かぬのである。又自國の利益のみによつて此問題を見ずして、支那國民の爲めにも都合のよいやうに解決し、世界の安寧、殊に東洋の安全を保持するのが、日本國民の盡すべき責任と思ふ。夫れ故に今日日本人が支那の事を論ずるに方つては、各自の專門とする所からして全力を振うて眞面目の研究をなし、決して遺算なきことを期せねばならぬのである。自分は歴史を專門とするものであつて政治家でない。だから政治談は後廻しとして、支那の歴史の上から此革命運動の由つて來る原因を講究して見たいと思ふ。然し其原因を說く方面も多いから、一々之を誌上に述ぶることが出來ない。それで先づ其一班丈けを論じて見やうと思ふ。

其一班とは何かといふに、近頃新聞紙などを見ると、今度の革命運動の本は人種問題である。所謂漢民族と滿洲民族との軋轢が其大原因であると考察して居るものがある。又新聞の記事には革命軍が頻りに滿洲人を殺し、滿洲人は漢人に反抗してどこまでも此の怨みを報いたいといふ風の事が書いてあるし、又革命黨は興漢排滿といふ旗印までも翳して居る。して見れば此革命騷動は滿漢兩人種の軋轢に原因して居るかの如く見える。世人が往々人種問題を以て此騷亂の大原因とするのも強ち排斥し難い。併しながら此人種問題なるものが果して騷亂の大原因をなせりや否やは、只今日の一時の現象のみを以て判斷すべきものではない。之は支那の四千年の間の歴史上から見て、漢民族と外民族と從來如何なる關係に居つたかといふことを究めて、而して後初めて現時の兩民族の關係を明かに知ることが出來やうと思ふ。

扨此支那の國は、今でこそ人口四億萬も有して居つて、其領域は歐洲から露西亞だけを除いた他の全部のものに匹敵する程の大帝國であるが、然し之は漢民族が四千年來經營し來つた結果であつて、其初めは陝西省、山東省、河南省の三省の中殊に黃河の沿邊に接近

せる所謂黄土質（Löss）の最も富める所から起つた所の民族で、即ち地質が遊牧民族を誘うて段々耕作の民とする所の地質に基いて起つたものであつて、初めは極く小さなものに過ぎなかつた。それが土地がよいので漢民族の繁榮を來たし、他の民族よりも早く文化の程度に達したのである。所謂中原と稱したのは極く蕞爾たる部分に過ぎなかつた、そして其時には漢民族の周圍にはいろ〳〵の人種があり、一々名稱を擧げるのも煩はしいが、然し大體に於ては今居る人種と大抵似寄つたものである。夫れ故に今の人種に引あてゝ考へるに、支那で言ふ所の南蠻なるものは支那民族と大同小異の民族である。又東夷といふものも後にこそ朝鮮、滿洲の民族をも含めていつたのであるが、初めの中は山東省、江蘇省、及び遼東邊にゐた民族を指したもので、これも大概支那の民族と大差なしだから、東夷と南蠻は要するに支那民族に類屬する人種であつて、文化の程度も、生活の狀態も漢民族と大した逕庭のあつたものでない。夫れ故に漢民族が發展して領土を擴張することになつた時、先づ第一番に此方面から初まつたのは當然である。春秋から戰國時代になると、漢民族は東は太平洋に至り、南は楊子江の流域に至り、實に非常の膨大をなして居るのは全く土地の狀態も等しく、文化の程度も同じく、又生活狀態も異らなかつた爲めである。て支那民族は、此方面から侵掠を蒙るとか、若くは此方面が御し難いとかいふ事は極く上代にはあるけれども、大體に於て東夷南蠻から支那民族が襲はれた事が無いというてよいのである。

然るに西方と北方とには、上代から勇悍なる民族があつた。即ち西戎北狄といふものである。古の歷史でいふ所の西戎北狄なるものは其意味が非常に廣い。然し西戎の主もなるものは、今の西藏種に屬する民族である。北狄といふものは時代によつて違ふが、支那でいふ北狄なるものは東では滿洲人、西では蒙古人及び土耳其人を含むのである。これ以外の人種は古來支那には來なかつたのである。

そこで此西戎北狄といふ奴は東夷南蠻とは違ひ、非

常に勇悍な民族である。何故勇悍であるかといふに、それは生活の狀態から來て居る事で、漢民族とは丸で違つた生活をして居る。即ち土地の性質が違ふので此等の人種は土着とならずして遊牧民となつた。彼等は平常馬に乘り、肉を食ひ、ミルクを飲んで居るので、殺伐な事は毎日目擊して居る。侵略と掠奪とは此民族の毎日の仕事である。さういふ民族であるから此民族の間から豪傑が現はるれば、其豪傑のする所は外では無い。富める所に向て掠奪を試むるのが其唯一の慾望である。そして豪傑が出なければ自分の領分て生活をして居る。さういふ危險なる民族である、夫れ故に漢民族が四方の民族中昔から最も恐るべき民族といへば戎狄といふものに外ならなかつた。さういふ狀態になつて居るから、之を支那歷史に徵する時は、明かに此想像を證據立てることが出來る。例へば周時代の春秋の頃には戎狄が中國に入つて來たといふ事は、彼の孔子の言ふた「管仲微りせば我夫れ被髮左衽せん」との言葉でも分る。即ち管仲が齊の桓公を助けて戎狄を追拂つたから、漢民族の風俗を維持することが出來たので、若し管仲が爲なければ戎狄の風俗に化せられたてあらうとの意味を述べた文句である。之を以て見ても戎狄の禍が已に其時代にあつた事が分る。其當時の戎狄は西藏種、蒙古人、滿洲人てあつて、土耳古人はまだ此時代にあらはれぬやうに見える。春秋時代の北狄は滿洲人、蒙古人に限るから、滿洲人、蒙古人が支那に禍を爲したといふ事は由來の久しい事である。然し其當時は戎狄を悉く外方に追拂ひ、僅少の戎狄は漢民族に同化し、中原に安居して漢民族の勢力が盛んであつた。之れが歷史に於ける西戎北狄と漢民族との軋轢の幕明きである。

　それから戰國時代になると、支那の民族が非常に大きくなつた。所謂七雄が起つて七國に分れ、其勢力隆々として戎狄が入つて來ることが出來なかつた。然しそれでも北方民族が支那の國に侵略する態度の猛烈てあつた事は秦の始皇帝の時、萬里の長城が完成された事でも分る。萬里長城は秦一代て出來たものてないが

始皇の時に完成された。これでも北狄の猛烈であつた事が想像される。果せる哉秦始皇が天下を一統すると共に、北狄の中から廣大なる王國があらはれた。其れは匈奴といふ民族で、其中から冒頓單于といふものが出て出た。之が起つてから、今の蒙古の地、東は遼東から西は天山葱嶺に至るまでの廣大なる土地が悉く此一王の下に結合されて了つた。こゝに初めて大きな國が出來た。夫れ故に支那の國は始皇帝の時に今の支那本部位の領土が統一せられ、而かも郡縣の制で、中央集權(セントラリゼーシヨン)が行はれたのであるが、之に對して北方の民族も冒頓單于によつて結合せられて一國を形成し、漢民族と北狄と茲に初めて兩々相對峙したのである。これは支那の歴史に初めてあらはれた事で、支那民族が到底侮るべからざる一民族を北方に見出したのは此時を以て初めとするのである。

それで支那といふ國が初めてこゝに敵國を見出したといふ事は大いに注意すべきことである。敵國を有する事になればこゝに支那人は自分の國の外に、尚外にも國があると感ずるのは至當である。處が元來支那人の國體といふものはユニヴアーサリスムであつて、即ち自國即世界といふ觀念より外ないのである。世界には自國より外はない。自國は世界に君臨するもので、自國は世界の中心である、斯ういふ思想より外ない國である。夫れ故に支那では自國の支配者を天子といふ、天子とは讀んで字の如く天の子であつて、天子の支配するものは即ち天下である。此思想は支那の國體を解する根本の關鍵であつて、そして支那に此思想の生じたといふのは、漢民族が初めて國を成した時に其周圍の民族が自分よりも文化が低いから、之れは自分が支配すべきものだといふ假定の下に作られたものであつて、自分はあらゆる國の君主であるといふ觀念は非常に强いものとなつた。それだから嚴密にいへば漢民族は人種上の區別を置かぬ國民で、如何なる國民が支那に來ても、悉く支那民族の臣民である。只風俗の違つたものを蠻夷戎狄といふ言葉を以て輕蔑した丈けであつて、此蠻夷戎狄も中華の支配に歸して中華の風俗に

化すれば、之を中華の民とする、だから蠻夷北狄といふも未だ中華の文化に化せざる人民といふことであつて、異人種を嫌ふといふ事が支那の國體の上から無いのである。夫れ故に自國の外に國があるといふ事は、漢民族の方からは見て居ない。之が頗る注意すべき事柄である。

處が秦漢時代になつては、漢人も國力の上では戎狄に對して一歩を讓るやうになつた。漢の高祖が冐頓單干の爲めに白登城に圍まれて、虜にされんとする處であつたのを見ても、匈奴の武力には協はなかつた事が分る。斯樣な大きな國が出來たらば支那民族ももう眼を明きさうなものだ。自分の國の外には世界には尙强い國がある。自分は世界の一國であるといふ觀念が起りさうなものに思はれる。處が起らない、起らない理由は何であるか。即ち北方の民族は武力には强い、けれども文化の程度に於て低い。だから武力には負けるけれども戎狄には文化がないから、文化の點に於て屈服して來る。文化の上て自分の屬國てあるが、まだ自分の命令を聽かぬものであるから、之を荒外の民と名づけて居る。だから匈奴の如き大國が起つても、漢民族は從來の如く世界の君主て、此民族も追々自己に隷屬すべきものといふ思想を抛たぬのである。それて此匈奴といふものは何民族かといふ事は古來の大問題て、東西の學者は「匈奴問題」として辨難の甚しき事柄てあるが、然し自分の研究した結果によれば、匈奴が大國を建てた頃の匈奴の中には滿洲人、蒙古人、土耳古人を包括して居るけれども、元來の匈奴といふものは蒙古人を骨子としたもので、それに滿洲人及び其類屬者即ち今日謂ふ所のチングスを加へたものだ。要するに匈奴は蒙古民族と斷言して差支ない。それだから蒙古民族が支那に入つて支那の北方を荒らしたのは決して成吉思汗に初まつたのでない。其由來が實に久しいのである。匈奴が北方に大帝國を建てゝからの支那の歷史には、長城の北には常に漢民族と武力に於て對抗するものが出來たのである。後漢の時には鮮卑があり、南北朝時代には蠕々がある。此等は何れも匈奴と同じ

ものて蒙古民族てある。南北朝の末から隋唐にかけては突厥が起る。之れは土耳其民族て、土耳古人が支那の北方に勢力を得たのは之が初めてゝある。それて唐の時代には武力て以て、北方に對抗し、長城を境にして、南北の兩國截然として區劃された。然し北方民族は文化が劣等てあるから、漢民族は之を自分の臣民として見たのみならず、又之を歷史の上から說明せんとした。例へば匈奴の祖先は夏后氏(禹)の苗裔なりとして、其祖先は矢張り自分等と同じだなどゝいうて居る。又鮮卑にしても、蠕々にしても、矢張り支那人から出たものだと主張して居る所を見ても、支那民族は北方民族を異人種と見ることを好まず、矢張り自分等と同じ祖先から出たものとしたいのてある。だから漢民族が外民族を人種上から忌み嫌つたといふ事實は毫もなくして、只自己の文化に化せざる、未だ自己に服從せざる民族として見て居るのである。

然し漢民族も唐時代までは先づ北狄西戎といふもの、侵入を防禦し得た。又一時侵入されても之を擊退して、殘つた少數のものは之を同化し得た。處が唐末より五代、宋になると漢民族の武力が非常に弱くなつて了つて、こゝに支那の歷史上に比類のない現象があらはれて來た。殊に漢民族と戎狄との關係に今までにない事があらはれて來た。その新現象は何かといふに、それは契丹、即ち後に遼といふ國になつた民族が起つて、黃河の中流から下流にかけて支那を取つた。又西藏種に屬する西夏が黃河の上流を取つた事である。要するに五代から宋になると、黃河の全流域が西戎北狄に取られ、長城が長城の用をなさなくなつて了つた。黃河の上流域が西戎北狄のものとなつたのは五代から宋に初つたのではない、晉の時からして已に五胡十六國の亂があつた時分、矢張り西戎北狄が中國に入つて黃河の流域が一時兩民族に占領された事がある。夫れ故に西戎北狄の占領は五代から初つたのではない。然し前の占領と後の占領とには非常なる差異がある。といふのは五胡十六國の時には西戎北狄が支那の中に入ると彼等の本國との關係が無くなつて了つて、全然支

那人になつて了つた。例へば秦の符堅にしても、あれは西藏人である。けれども彼等は純然たる支那人になつた。兎に角五胡十六國の時は支那に入つて來ても支那に同化されて了つた。夫れ故に支那は相變らず武力に負けても文化の點に於て同化することが出來たのである。蒙古人も、土耳其人も、滿洲人も支那に入れば爭うて支那の風になつたのであるが、然し遼に至つては丸で違ふ。又西夏に至つては丸で違ふ。遼即ち丹契及び西夏は黄河の全流域を占めたと同時に、本國に根據を有して居る。西夏は西藏の東部を有し、契丹は其本部は遼東から天山に至るまでの地であつて、此兩民族は何れも其本國を捨てず頭丈け支那の本國に入つて居つた。これは支那に於ては嘗て例のない事で、五代から宋に至つて始めて起つた現象である。こゝに於て北狄西戎なるものが各々其本國の風俗及び文化を支那の方に輸入し來らんとするの態度を示した。其一つの證徵として見るべきは、契丹は初めて自分の國の民族の爲めに文字を作つた。即ち契丹文字である。之は今までの戎狄には例のない事である。今までの戎狄は支那に入れば一も二もなく直ちに支那の眞似をして、支那人になつて了つた。別に文字を作らうなどとは夢にも思ひ及ばなかつた。然るに西戎北狄各々文字を作つて漢文字に對抗せんとした。其次の女眞即ち金。蒙古即ち元でも各々文字を作り、女眞は女眞文字、元は蒙古文字を作り、身體を本國に据ゑて、頭丈け支那に突込んで來た。そして各々自國の文化風俗を主張せんとした。即ち蒙古の時分には啻に自國の文字を作るのみならず、自國の風俗を支那に移さんとした。即ち蒙古の風俗の特徴たる辮髮を支那人に強いたのである。尤も此蒙古の辮髮は今の支那人の辮髮とは違ふ。頭の兩側の方に二本の辮髮を作つたのである。それが中國にどん／＼入つて來て、蒙古時代には辮髮のものが餘程多かつた。即ち元の時に文字も作り辮髮も多くなつたのは、文化風俗の上に於ても漢民族を侵食した證據である。之を南北朝時代に比すれば非常の相違である。魏の托跋氏即ち北朝は蒙古人であるが、中國に入つて

洛陽に都した時に、孝文帝が國人の辮髮を皆切らして衣冠をつけさせた。それが元時代になると文字を作り又辮髮を強いた、要するに此項からして漢民族は國力に於て戎狄から壓倒されたのみならず文化風俗に於ても亦戎狄から侵害せらるゝといふ風になつて來た。然し漢民族の勢力も強い、殊に其文化の勢力が強い。夫れ故に一時戎狄が其勢を逞うして文化風俗を侵食せんとしてもそれは初めの王様の時代から二代か三代の間に限つて、永く支那を支配するといふ事が出來なかつた。次第に其風俗は漢民族に輕蔑せられて、遂に漢民族の文化に壓倒せられて了ふ。元の次に明が起つて、元て毀しかけた風俗文化を悉皆舊に復して了ふた。それから今の清朝が起つたのであるが、清朝は滿洲民族て、女眞即ち金と同じ民族である。これが起ると漢民族を犯すことが前よりも一層激しい。初めには契丹、女眞、蒙古などゝ同じ方針を取つて滿洲文字を作つて漢文字と對抗せんとした。そして其使用は前代よりも一層甚しい。四書五經を初めとして支那の主もなる文獻は皆之を滿洲文字に飜譯した。又公けの布告などには滿洲文字を漢文字と並べて用ひた。宮殿の門や官省の門にも滿洲文字を用ふるといふ風で、其使用の程度及び範圍は遙かに前代よりも甚しくなつて居る。つまり北方民族が武力に於てのみならず文化に於ても次第に激しく漢民族を壓倒するの傾向を生じたのである。殊に風俗に於て最も目立つて見えるのは彼の辮髮令である。辮髮は蒙古の時代にもやらせたが、それは武力を以てやつたのではない。然るに清朝に至つては武力て以て之を強行した、屢々令を發して辮髮を以て政府に服從した印即ち清國民たるの證據となした。即ち此辮髮なるものは北方民族が武力を以て支那を支配したのみならず、風俗習慣に於ても支配して來たといふ一の證徵である。夫れ故に今の清朝は漢民族に對して最も自己の國柄即ちナショナリルチーを主張したものであつて、今の清時代は漢民族の一番弱い時期であるといへるのである。蒙古時代にも蒙古人と漢人とを區別した形跡があるが、清朝に至つては一層激しく區

別じた。即ち役人の任命にても、軍隊の組織にても滿漢の區別を立てた。僅かの滿人ではあるが多くの漢人を支配し、武力のみならず文化に於ても支那を壓倒するといふ事は清朝の目的であつて、之は唐以前にはない事である。然し滿人の此意氣込に拘らず、漢民族の勢もなか／＼強く、乾隆帝に至る迄の前數代は滿文字を奬勵し、又滿人の風俗も移植せんとしたに拘らず、次第／＼に矢張り漢民族の文化に化せられて、今では滿洲語は殆んど忘却されて了つた、支那の人が滿洲語を忘却したのみならず今の清朝の本源たる吉林省の田舍に行つても滿洲語を話すものがなか／＼見當らない。先年自分は寧古塔より東の方東京城に遊んで、此邊に滿洲語を話すものが無いかと訊ねて見たが一人もなかつた。之を以て見ても滿洲語全く忘れられて漢語が支那を支配して居ることが分る。文字も亦然りで白旗とか滿洲の大官とかいふものでも、皆滿洲語も滿洲文字も知らない。夫れ故に清の太祖から乾隆帝まで苦心して移植せんとした滿洲の文化は今の支那には全くない。只其殘つて居るものは辮髮の風俗ばかりである。之も今日は餘程衰へてもう辮髮を切らうといふ議論のある程であるから、滿民族も遂に漢民族に同化されて了つたことが、以て知るべしである。又今一つ滿人の風俗を維持して居るのが、滿人の婦人が纏足せぬといふ事て、之は西太后なども時々巡視して矢釜しく干渉したので今日まで維持せられて居るのである。さういふ譯であるからして、今の清朝は北狄の中でも最も自分の國柄を主張したに拘らず、漢民族の同化力が強いが爲めに之れも矢張り漢民族の文化風俗に壓倒されて了つた。夫れ故に今日では滿人種、漢人種といつても、風俗言語何れも皆同じ事である。滿洲朝廷といふても、其役人なり人民なり毫も滿漢の區別がない、只頭だけが滿洲の風俗になつて居る丈けである。滿洲の風俗といつても漢人も皆一樣にそれをやつて居るから、つまり之も區別がない。それ故に滿漢民族といふ人種上の區別は今日の實際上ない事であつて、今回の革命騷動を人種上の爭と見るのは當らないのであ

る。若し多少かゝる感情ありとしても、それは第二位若くは第三位の事で、今の清朝が夷狄の中で、一番自國の風俗を押し賣りしたに對する反動だけであつて決して革命の主因ではないのである。元來支那の國民は前にも述べたやうにユニヴァーサリズム即ち自國即世界主義であつて、中外の別を設けず、人種上の區別を置かぬ國である。かゝる國柄であるからして、滿朝が若し辮髪を廢し、又多少殘存して居る官制上に於ける滿漢別を撤去すれば支那人が人種問題を以て反抗すべき根本の理由がないのである。漸漢別などと叫ぶのは唯一つのプレテンションであつて、支那人の本性から出た事ではない。然し若し滿洲朝廷が軍隊組織や官制に於て漢民族に對して偏見を抱けば人種問題が起るかも知れんが、それを撤去すれば人種問題を起すことは支那の國體の上から無い事と信ずる。

今回の革命が若し人種上の事でなければ、然らばどういふ理由で起つたかといふに、それは支那が開闢以來四千年の間に漢民族が未だ嘗て經驗した事のない思想上のレヴォリューションから起つたのである。此れは支那四千年の歴史を通じて無い處の變動である。其變動は何かといふに、漢民族は今まで世界に君臨する唯一の文明國、唯一の帝國であつて、武力で對抗出來ない時でも、文化で以て同化して來たから、假令帝室は滅びても、支那といふ國は依然として同じものであつて、何處までも自分の國柄即ちナショナリチーを失はないのである。此事實からして二つの性質が出て來るのである。即ち一つは保守的であることで、之れは文化の劣つた奴が時々入つて來るから、その風俗に化しない爲めに、自分の今迄の風俗を堅固に守る必要がある。それで堯典とか舜典とか或は四書五經とかを金科玉條として居る。何かあれば此等の本の文句や春秋左氏傳あたりの文句を引いて來る。こんな國民は世界の何處にもありやしない。これは外民族の侵略に對して自己在來の文化を保持せねばならぬといふ必要の下に生じた國民性である。他の一つの特性は倨傲尊大といふ事である。即ち我國は中華中國である、世界の中

心てある。他の國はみな自國に隷屬すべきものであるといふ考てある。蒙古人に取られたり、滿洲人に取られたりしてゐながら、こんな事を考へて居るのは一見矛盾した事で可笑しいやうなものであるが、然し戰爭に負けるといふ事は彼等にとつては尋常の事であつて別に驚かない。勝戰さよりも負け戰さの方が多い位のものである。けれども戰さには負けても彼等は文化に於て終に勝を占める。だから他の國のものはみんな自己の文化に征服されるものと信じ切つて居る。それてどうしても倨傲尊大の氣は脫けない。天の下にある人民は皆自國の臣民と思うて居る。それて何處の國から來たものを見ても皆來朝というて居る。來朝といふ事は臣民が捧物を奉るといふ事だ。そして來朝と同時に叩頭の禮をする。叩頭の禮は支那ては非常に重いものてあつて、これは臣民たるの證徵てある。而して之を外交上にも用ひてどこの國の人ても支那の天子の前ては叩頭の禮をすることに極つて居る。日本の小野妹子ても安倍仲麿ても皆それをやつた。あの頃の日本の國勢てはそれは止むを得ないとしても、露西亞などは近來までもやらせられて居つた。即ち自國の臣民と同一の禮をさせて居つたのである。處が近來になつて支那はどうしても眼を醒さなければならぬ事になつた。それは今迄は自國が世界であつて、自國の天子は世界を支配するものと思ひ込んて居つたのであるが、西洋人と接觸するやうになつて、其思想の大いなる誤りであつた事に初めて氣が附いた。世界には自國の外に自國と同等の國があるといふ事が分つた。之れは在來の支那人が夢にも知らない事てあつた。そして其接觸が久しくなるに從つて、啻に自國と同等の國があるのみならず其文化も自國と同等若くは自國よりも勝れて居るといふ事にも氣が附いて來た。此思想は四千年の歷史を通じて支那に無かつた所のもので、此思想こそ支那革命の眞原因であると信ずる。

然し此思想も一朝にして得たものではない。永い四千年の惰勢があるからして、こゝまで眼を開くまでには可なりの年月を費やして居る。即ち千八百四十年の

阿片戰爭には英國にやられ、又英佛同盟軍に北京を陷せられて千八百六十年皇帝熱河に逃げた。然しそれても彼等は驚かぬ。只不思議な奴があるものだ位に思うてゐた。つまり前にもいつた如く彼等は戰さに負けても驚かぬのである。恬として居る。英吉利といひ、佛蘭西といつても、戰さにこそ勝て、我中國に入つて來れば、我文化に化せらるゝものと思うてゐた。處が英國は香港に來るし、又上海には外國人がドン／＼入つて來る。近來は獨逸人は膠洲灣を占領し、日本人は遼東を所有して居る。處が此等の外國人は今迄の外民族とは違ひ、中國に入つて來てもなか／＼中國の風に化せられない。其建築といひ風俗といひ少しも中國風にならない。のみならず耶蘇教などいふものを持つて來て却て中國のものを自分の文化に化せようとするのである。それで此外夷は今迄の外夷とは違ふ、此れは變だと怪むに至つた。さういふ處へ持つて來て、今まで東夷とか倭奴とか貶稱して居つた日本といふ一小國が不思議にも中國に勝つた。のみならず露西亞といふ大國と戰うて之を破つた。之れは實に奇怪至極である。日本人が元來エライものでないのに、かゝる大捷を博するは全く優秀なる泰西の文物を採用した結果である。すれば西洋の文化は啻に中華の文化に劣らざるのみならず却て中華の文化よりも勝れて居るであらうといふことを考ふるに至つた。それで眼を醒ましかけて來た支那民族が日清日露の兩戰役によつて、世界には自國の外に國があり、自國の文化の外に更らに優秀なる文化のあることを強く意識した。之を強く意識するに至つたといふ事は、支那人にとつて精神上の一大革命である。そこて日本に留學生を派遣することになつたり、又西洋にも派遣することになつた。今まで東夷倭奴と貶稱して居つた日本に頭を下げて留學生を派遣することなどは支那人もよく／＼の覺悟をしたものと見なければならぬ。そして此改革思想は先づ青年の頭へずつと入つた。青年の方へは入つたが、然し上の方にゐるものは老人であり、且つ自分が權勢の地位に居るから、自分の利益を保護する上からも、容易に改革

を斷行し得ない。それて康有爲などが光緒帝を擁して日本や西洋の文化を採り大改革を實行しやうとしたに拘らず、西太后一派の反對によつて蹉跌して了つた。然し一度眼覺めたるものは再び眠ることが出來ない。青年を初め支那中流の人士には此改革意見が追々に擴まつて來るし、又外からは外國の壓迫が益々加はつて來る。て今まで眼が眞暗な中は盲目蛇に怖ぢずてやつて居つたが、眼が見えて來ると、自分が如何に奇態なる位置に居るかが分つて來た。褌を締めてかゝらねばならぬといふ考が自然に起つて來た。故に今回の大革命の眞因に溯れば急激なる改革の新思想と、在來の舊思想との軋轢に外ならぬのである。人種問題などは一つのプレテンションてあつて、辮髮を除いては何等滿人の壓迫を受けて居らぬのに排滿興漢を唱ふるは、支那の國民性及び現狀と矛盾した議論てあつて、只今日の清廷を倒して改革を行ふには人心を激する必要があるから、それに都合よき口實を設けたのに過ぎまいと思ふ。

そこて之までは歴史的の見解てあつて、自分は歴史家としては、之より先きを言ふ必要が無いのである。然し今の政治家とか實業家とかいふものは、多く歴史を無視して、現在の事は現在の事て解し得べきものとして居る。之は實に日本人の短見（ショートサイテッド）に基く事てあつて、獨り政治上の事のみてなく、經濟上ても、學問上ても其根本に遡つてグルンドネスにやることがない。それて學者といふものを以て一つの骨董品の如く見て居る。又今までの日本の學者も、實際問題を論議するものを俗だとして斥け、殊に自分の專門内にのみ立て籠つて、實際問題と自己の專門とを結びつくることをしなかつた。然し此れは兩方の誤りてあつて、學者は自己研究を以て實際問題を解釋し、實際家も亦充分學者の研究を尊重して、自己の參考に供すべきてある。然らざれば學者は實に無用の長物てあつて、學校を建てて學者を養成するの必要がないと思ふ。故に自分は自ら研究したる、支那の國民性及び革命の原因を述べて、世の短見者の惑を解かんとしたのてある。

之れから自分は歴史家の立場を離れて一言しやうと思ふ。此度の革命は要するに新思想と舊思想の軋轢である。而して新思想の由來前述の如しとすれば、支那の運命――騷亂の前途知るべきのみである、若し列强步調を揃へて支那を分割せんとしたならば如何の狀態になるか、それは自分の明言し得る所でないが、然し左樣な事は先づあるまいと考へる。左樣な事が無くして、支那を其成行に任せて置けば、一時の現象としては共和制になるか立憲制になるか或は聯邦制になるか分らぬが、兎に角支那といふ國はこゝに初めて團結したる鞏固なる一國となるのである。或種の中央集權を有する一國となつて、世界列强の間に立ち行くの資格を有するのである。今の紛々擾々たる有樣は此狀態に至らんとするのファースト、ステップである。此紛々擾々たる階段を上り〳〵て、こゝに初めて秩序あり統一ある一國を形成することが出來るのである。故に今日の混沌たる有樣のみを見て、支那が此先きどうなるか分らぬといふものは、只現在より外見えぬ短見者流の事であつて、之を彼の國民性に考へ、又革命の眞因に考へて此騷動を見れば、混沌は決して無意味にあらず、寧ろ必らず經過せざるべからざる一階段であつて寧ろ秩序整然、理路透徹なりと評せざるを得ぬと思ふ故に若し列强の壓迫が無ければ、此騷亂を經て、初めて支那は近世的の一國家を形成し、世界列强の間に立つて恥しからぬものとなるべきは、自分は歷史家として確言するを憚らぬものである。而して我日本帝國の政治家が如何に此間に處して、我國の利權を確立し且つ支那及び東洋の平和を保障するかは之れ政治家の任務にして自分の如き歷史家の嘴を容るべきことではない。然し以上の論斷は自分が歷史家として確信する所であつて、之を何人に向て斷言するをも憚らぬのである。

（完）

政治上の情弊打破

法學博士　鵜澤總明

私の考では明治維新は、王政の復古と共に、東洋に卓絶したる日本固有の政治精神即ち尊王愛民の根本義に立てる人格的政治の眞髓を、新たなる政治形式に隨つて廻轉せしめんとしたるものであると思ふ。而して維新は即ち此意味に於て政治上の新紀元を劃したるものであつて、是れ實に時代の要求であらうと思ふ。明治五年の五箇條の御誓文でも、明治八年の立憲政體採用の詔書でも、明治十四年の國會開設の勅諭でも、明治二十二年の憲法發布の勅語でも、總て此趣旨を御宣明されたものである。斯くの如く歐米各國に於て發達したる立憲政治の形式を採用したけれども、從來の政治精神を拋つて新たなる政治精神までも歐米から持つて來たのではない。歐米に於ては爲政家が愛民の精神を理解せざることもあり、又國民が尊王の大義を諒解しないといふやうな事柄からして、遂には爲政家と人民との闘爭の歷史を繰り返して居る。夫れ故に政治は道德的に出づること能はずして、多くは權力の掠奪を繰り返して居つた。之に反して我日本に於ては政治は常に道德的であつて、尊王愛民の眞髓は古來嘗て渝つた事がないのである。故に維新以來政治形式を分つて歐米の三權分立の形式に置いても、之は單純なる法律權利上の區別にあらずして、道德上の分類である。歐米に於けるが如く人民が天賦人權の議論をなし之を主張することなくして、爲政者は常に民人を愛することを以て理想となし、權利の如き形によらずして民の人格を尊重したのである。尤も明治五六年の頃には極端なる歐米の新思想を紹介するものがあつて、外國の民權論法律論に隨喜の涙を溢し、恰かも物新らしき寶物を

得たるが如く考へて居つた人もあつた樣であるが、それは從來の思想と新思想とを比較研究する暇がなかつた爲めに起つた現象であつて、其狀態は永く續くことが出來なかつたのである。かくて憲法の發布によつて三權分立の思想は遺憾なく憲法にあらはれ、憲法第二章には臣民の權利義務に關する規定が設けられ、臣民に對する國法上の保障は頗る完備することゝなつたのである。それから帝國議會、司法、其他行政權の行動も各々其畛域を劃して互に相侵すことなく、歐米立憲の思想は遺憾なく憲法の上にあらはるゝことになつたのである。

然しながら此形式は元來歐米の如く上下の軋轢、權力の爭奪によつて起つたものではなく、國運の趨向する所、時勢の促進する所にかゝり、自然に、平穩に、大詔の渙發によつて現はれ來つたものであつて、歐米に於けるとは頗る其趣を異にするものがある。又隣國の支那が我々の目前に示しつゝある慘憺たる光景の如きを嘗て見ることなくして出來上つたものである。かるが故に、憲法の上に政黨の明文もなく、恰かも政黨政治は帝國憲法に於ては排斥せられたるかに見ゆる點も無いではない。從つて一派の學者は日本憲法の運用上に於ても亦政黨を否定し、政黨は憲法上無用の長物と見做して、努めて政黨の發達を沮礙せんとするの傾向も見ゆるやうである。處が之は憲法の道德的精神を顧みずして單に歐米に模倣したる形式より判斷し、母法たる歐米の憲法に、或は政黨を許すが如き明文若くは慣例あるに拘らず、我帝國憲法に斯くの如き條章なしとの一片形式的見解であつて、直ちに憲法の正當なる解釋と信ずることが出來ない。若し其流義によつて解釋すれば三權分立の思想が帝國憲法に於て如何なる程度に於てあらはされて居るか、煩瑣なる註釋を費して終には他を顧みざる獨斷論に陷らざるを得ないと思ふ。予の見る所を以てすれば、帝國憲法の中に流るゝ大潮流は、日本帝國從來の道德的觀念であつて、之を三權分立といはんよりは、智仁勇の三德によつて區別されたる道德的分界と見るのが正當であると思ふ。已

に道德的分界なるを以て、相侵し相牽制する歐米の立憲思想と見んよりは、寧ろ相助け相一致する、即ち統一的區分にして、分解的區分てはない。破壞的の區分にあらずして組織的の區分てある。試みに憲法にあはれたる國家機關の構成に對して之れが說明を試むれば、統治權は智仁勇三德の完成せられたる狀況てあつて、立法權は智の行用、司法權は勇の行用、行政權は仁の行用てある。斯くの如く大體に於て智仁勇に基いて活動する趣旨てあつて、人格的の根據誠に瞭然たるものあるを覺ゆるのてある。

政黨は立法權の參與即ち智の方面に於ける活動を主眼とするものてあるからして、學識才幹常に國家永遠の利害休戚を洞察するに足るべき人物を以て組織構成すべきものてあつて一人の榮辱一人の利害を立脚とする利慾利念に駈らるゝ人士の集合體てないことは論を俟たない。議會の任期、問題の重要、意見の歸一、決議の方式等より政黨的組織を要することは、固より論を俟たざる所てあつて、而して天下國家の現在或は將來に關する重要案件を決議することを以て主眼とするが故に其政黨は公明正大なる公黨たるべくして、個人相據る倶樂部的の私黨たるべからざることも多言を要せざる所てある。此事は日本の從來の歷史に鑑るも根據のない議論てはなからうと思ふ。古より政權に與りたる日本の團體は、德川氏に至るまて、先づ氏族團體と見て大差なからうと思ふ。藤原氏から橘氏、源氏から平氏、其他北條、足利など一族一門によつて政治をなしたる例は歷史上明白なることてあつて、歐米の學者等に於ては斯くの如き氏族の政治を以て、主義政權を基本とする立憲政體の下に於ける政黨の前身なるが如く論ずる人もある。政黨進化論より判斷すれば此事は當然てあらう。然しながら斯くの如き氏族團體に於ても、光明正大なる天下民人を友とする尊王愛民の基本に立つ公明氏族團體にあらざれば、到底政治上の權力に立つことが出來なかつたのてある。此事を以て直ちに例證とする譯てはないが、憲法の下に於ける政黨も同じく公黨たるにあらずんば不可なること論者を俟

つまでもなからうと思ふ。然るに今日尙此憲法政治の運用に當つて政黨を詆排し、之を嫌忌する一部の人あるが如きは之れ政治を理解せざる一種の情弊より出るものであつて、此情弊は先づ打破せなければならぬ事と思ふ。

第二には公黨の看板を掲げたる政黨にして人才を吸集し、國務の研究を公平無私に、智的の立場から解決すること能はずして、徒らに舊來の緣故又は行掛りに拘泥して互に相反目し嫉視し只爭ふ事を知つて調和することを知らざる立場にあるのは、之は今日に於ける政黨の情弊であつて、之れ亦打破せなければならぬものと思ふ。今年行はれたる縣會の選擧に於ては、此情弊が遺憾なく發露せられてあつて、苟も憲政の將來を憂ふるものがあるならば、此點に關して必らず善後策を講ずることを怠つてはならぬと思ふ。然るに今日の立法權の智的行動を基本とすべき立場にありながら、縣會の如き地方議會にあらはれたる一部の問題を、政黨自ら解決することをせずして、或は司法の府に向つて之が解決を求めんとし、自ら侮りつゝあるが如きは怪訝に堪へざる所である。之は畢竟舊來の情弊から來る止むを得ざるの結果であつて要するに政治的見識の發達せざるが爲めに外ならんのである。

第三に於ては憲政の準備を洽ねく國民に知らしめんが爲めに青年に對して憲政教育を、或は學校に於て或は社會に於て施す必要があらうと思ふ。然るに世間往々政治の二字を恐れ、之を嫌厭して、勉めて青年をして政治の二字から遠ざからしめんとするの傾向がある。之は全く封建時代の思想であつて維新の精神ではないのである。青年の憲政的政治を理解するは國家の發展の爲めに甚だ有要なることであつて、憲法の運用上爲政者の正さに希望すべき所である。然るに今日此重要事を困却するのみならず、寧ろ防害するが如き傾向あるは情弊の甚しきものであつて、之れ亦打破すべきものであらうと思ふ。

次には世の政治家の大議論を拜聽するに、政治論は大抵只反對黨の惡口であるが如く見ゆるが、之れは文

章軌範、唐宋八家文的の政治であつて帝國をして世界に重きをなすべき日本大政治家の政治論とは思はれないが、而かも斯くの如き議論の出て、又世間に歡迎されて居るのは、之れ輿論の政治に對する情弊であつて、之れ亦打破すべきものと思ふ。之を要するに我國の憲法政治は智仁勇の三つを完全に發動せしむべき道徳的要求にかゝるを以て、其前途は頗る遼遠なりといはざるを得ない。

我國の對清方針

尾崎行雄

私は近年俗務に關係して居るが爲めに、支那に對して新らしい研究を續けて居らない。夫れ故に私の判斷の材料は私が昔集めた古いものに據るの外はないのである。私は明治十八年即ち今より廿六年前清國に遊んで、清國上下の形勢を目擊し、古來の變遷の跡を究めたのであるが、當時私は滿洲政府の命數は事實に於て長髪賊の時を以て盡きた。爾後彼が空しき形骸を存して居るのは、是れ列國勢力の均衡を保たんとするの力によるものであつて、決して清廷自身の力で立つて居るものでない。夫れ故に若し外からの保障が緩めば何時でも瓦解するの外はないと斷言した。昨今の革命騷動は即ち此豫言の事實に現はれたものであつて、革命黨が四方に崛起し、朝廷は毫も之を鎭壓するの力がない。即ち朝廷の名あつて實がない。今後特別の事情が起つて、實力がなくとも、偶然一時朝廷の名を維持し得ることがあるかも知れぬが、それは決して永く續くべきものでない。まかり間違へば外國の力によつて遠からず自滅するの端緒を開かぬとも限らぬ。世間或は此の騷亂を目して滿人と漢人の爭であるかの如くいふが、滿漢の爭の時代は已に〱過ぎて居る。今日は只

同じ漢人中の權力爭奪をやつて居るのである。同じ漢人が或は朝廷を挾んで勢威を振はうとし、或は別に共和制を採つて民心を收攬せんと欲するに過ぎぬのであつて要するに朝廷は只道具に使はれて居る丈けである。實際の權力爭奪は同じ漢人中に於て行はれて居るのである。今日已に然り、將來益々然らんてある。

此時に當つて同じく革命を唱導して居る連中の中にも漸進もあれば急進もある。又同じく現朝廷を挾まうとする連中の中にも漸進もあれば急進もある。朝廷派の漸進黨は名義丈けても成る丈け多く朝廷の權利を保存して置きたいし、急進黨は總ての權力を國會に委して朝廷は只虛器を擁するといふ事にするのである。又革命派の方でも一擧にして朝廷を衝き崩し純然たる漢人の天下を造らんとするは急進派であつて、漸進派は名義丈けは朝廷があつてもよい、先づ國會を速開しよう、國會を開いた後どうでもしやうといふのである。が滿朝を衝き崩さうとする同じ革命黨の同じ急進派でも一方は立憲君主制を採らうとし、一方は共和制を採らうとする。又共和制を採らうとする中にも各州を獨立さして聯邦制度を主張するものもあるし、又各州の權力を殺いで統一した共和國を造らうと主張するものもある。或は支那を南北の二つに分たうとするもの、或は三つに分たうとするもの、或は五つ、或は十。同じ分けるにしてもいろ〳〵の種類がある。夫れ故に之を自然に任して置けば、どつちになつても戰鬪は永く續くべき運命を持つて居る。然し戰鬪を永く續かして置けば人道上默視すべからざる罪惡が簇出して來る。即ち虐殺、掠奪等殘忍酷薄の暴動が四方に起る。のみならず列國との通商貿易の上に危害を及ぼして、列國は皆永く損失を蒙ることになる。夫れ故に此禍亂を永くするのは、人道の爲め、支那の爲め不可なるのみならず又世界の爲めにも不可である。是を以て私は我日本帝國を始め列國が支那に勸めて今回の爭を武力によらずして平和的に解決するの途を採らしたいと思ふのである。即ち他言を以て言へば今回の爭を立憲的ならしめたいのである。先づ假國會を開いて、建國の方法

即ち國を一つにするか二つにするか或は三つにするか、又建國の方式、政體の選定總て之を衆議によつて決定するといふ事が一番よい方法と思ふ。若し然らずして戰鬪を繼續する事になれば人道上、通商貿易上、又支那にある外國人の生命財產の保護等の關係より、列國之を座視すること能はず、何等かの干涉をなすの時代があるかも知れぬと思ふ。さうなれば禍が益々大きくなるから、支那及び世界の爲めに一日も早く戰鬪的狀態を罷め、平和的解決即ち各自の自由意志によつて討議する立憲的決議によつて建國の方法、政體の選定を決するのが最上の策であると思ふ。

世の中には隣國の君主制が倒れて、共和制之に代れば我國の君主制にも危害を及ぼさんなど〻杞憂を抱くものもあるが、之れ歐洲中世紀に行はれたる愚論であつて、之を我國今日の政治論となすが如きは、最も我國に禍をなす僞忠臣、僞勤王家といはなくてはならぬ。若し支那の政體の制定にまでも干涉することになつたならば支那人民中半分の志を得ぬものが我國に惡感情を抱くやうになることが極まつて居る。政體などは其國民の自由意思によるべきもので他國の干涉すべきものでない。若し外國の人民が我政體に嘴を容るゝものがあつたなら、我々は憤然として激怒する。此心持が分つたなら、支那人も亦他國より政體に干涉を受くるを快しとせざる知るべしである。且つや我國の政體は確固不動、二千六百年の我國特有の歷史が成立せしめたる結果であつて、隣國の政體如何によつて動かさるべきやうな薄弱なものでない。若し左樣な薄弱なものであるなら、我國は世界の共和國民主國と絕對に交際を絕つて、かゝる思想を書いた書籍の如きも絕對に輸入を禁止しなければならぬであらう。要するに論者の如きは歐洲中世紀に行はれた迷想を現代に振り廻さうとする僞忠臣、僞勤王家であつて、萬世一系の皇室を戴く我國獨有の歷史を根據とする我政體を信ずるの心なきものといはねばならぬ。他國民の政體に干涉して失敗したるの例は歐洲中世紀後屢々證明せられたる事實であつて、之れ最も古き思想、有害なる思想である。

我國は箇様なることには何處までも不干涉の態度を明かにし、又列國にも干涉させぬ方法を採り、支那人自らをして自らの好み喜ぶ政體を採らしむべきである、但し戰鬪を永びかしむることは人道上貿易上、又列國の人民の生命財產保護上、支那の爲め、世界の爲め不利益であるからして、之れは早く戰鬪をやめさして、平和的方法、立憲的方法によつて之を解決するの途を採らなくてはならぬ。若し此主義さへ確立して保障さるれば列國も强いて干涉しやうといふものがない。又支那については大抵の事が我國の意見通りにすることが出來るのである。支那人も亦列國の干涉を受くることの不利なるを悟つて、今回の騷亂に於て官革兩軍共此點に注意し、列國人民の生命財產を侵さぬやうにして居ることは世人の認むる通りである。故に我國が之に對するの方法宜しきを得たならば、隣國の自由意思によつて平和的に總ての問題を解決し、彼等の好む政體を採つて、遠からずして平和なる一國をなすに至らうと思ふ。

現內閣の死活問題　積極政策と消極政策

八方塞りの現內閣

福本日南

現內閣の近狀を見る每に聯想は佛國のブリアン內閣に及ぶのである。あのブリアンといふ男はラヂカル、ソシアリスト中の錚々たるもので日頃極端な社會主義を議院內に於て唱導して、隨分當局者を困らしたものである。それが一旦內閣に立つと丸て人が變つたやう

に、現佛國の心髓となつてゐる穩健なる共和黨の主張と一致するやうになつた。之については、もとの仲間からは黨を賣つたの、變節したのといふ多少の批難は受けたが、然しながら彼が佛國の公僕としては如何にも立派な行動であると內外から賞讃された。政友會內閣も多少此氣味があるかに思はれる。彼政友會は國步艱難の今日、即ち一方には財政缺乏を告げ、他方には國民の困窮を極めてゐるのを見ながら、單に自黨勢力の扶植上から割出して、無暗滅法に積極主義を振り廻した。それが政友會內閣とまでは手放していへないけれども、兎にも角にも同會中の諸首領が主となつて現內閣を組織した以來、之も丸で人が變つたやうに消極主義とお出なさつた。政友會と名くる一黨派の上から見れば無責任も實に甚しい。言語道斷といはなければならぬが、然しながら實際其局に當つて見れば、無いが意見の總仕舞である。如何に積極主義を振り廻さうとしても、無い袖は振られない。それで俄かに思ひついたやうに一切萬事を消極の基礎の上に、來年度の豫算を編成しやうとする。この處がブリアンに似て居るのである。政黨としては不都合千萬であるけれども、一國の公に唱へて國の身代を立て直さうと勸めらる丶かと思へば御同意しなければならぬ。此點については過去に送つた議會の會期中、而かも其閉會當日まで、我々仲間は、規模狹少だの、消極主義だのと罵られたが、昨今の處ではどうやら弟子入をされたかに見える、先生たるものは悟入し來る門人に對して何でイヤな顏をいたさう。感心だと實は賞讃してゐるのである。

が、いよ〳〵次期の議會も近々開會と仰せ出された今日、その所謂消極主義が實現せらる丶かどうかである。山本君彼何物ぞ、實は雇兵の一人ではないか。それが豫算の切り詰めを何處までも頑張るといふのは、彼一人の力で出來ることではないではないか。即ち入閣の初め貴殿を雇はう、雇はれませうと相談のついた其根本條件が、其處にあつた事を疑はぬ。それで正直な山本君は何處までも其方針を押し出さうとするのに外ならぬのであらうと思ふ。

然る所が、後ろの政友會內には政黨本位、國家第二位の先生も相應にあると見えて、それでは平常の主張に對して面目が無いの、黨の維持上に困るなど〻、國家は困らしても、黨を困らしたくないといふイルロジックな議論も大分出るやうである。此際西園寺侯が顧みて他を言つて居る心狀を察すれば、如何にもお氣の毒に存ずる。山本には最初から約束してあるし。といつて黨員は恐らせたくなし、まアどつち就かずにグツ〳〵に行く中には、待てば海路の日和ありといふ處に到着しさうなもの位の處であらう。幸にして老躍鬼の大將井上侯が山本君の尻押しをして吳れるさうな。之は如何にもよい年の取りやうである。年寄甲斐に其位の事はしてもよからう(是迄の罪障消滅の爲めにも)。そこで雇兵とはいひながら、先きには首相との約束もあり、後には隱居の尻押もあり、こ〻隨分存外强さうに見える。之は國家の爲めに甚だ賀すべき事である。然しながら果して山本君の意見が意見通りに實現せらる〻であらうかどうか、昨今一寸問題となつて來た。

此際に序に一言して置きたいのは、是れ迄ビユーロクラシズムで固めた役人原である。從來大臣の意見は屬僚の意見である。つまり大臣は黑頭巾の傀儡となつて、舞臺で躍つたに過ぎぬ。それに今度に限つては役者が一人で躍るといふ。それで黑頭巾連は大不平で、大藏省內で餘程評判がわるいらしい。其不評判を喜んで批難の方に提灯を持つ新聞屋に至つては沙汰の限りである。屬僚に批難せられて然る後初めて一個の大藏大臣らしき大臣を見るのではないか。我々は其批難を受ける點に於て、一層山本君を見上げるのである。

然しながらこ〻にどうやら局面が一變しさうである大藏省の屬僚が屬僚らしくもなく、割合に鼻息が强いといふのも、其鼻息は何かの消息を傳ふるのである。山本の意見を依然として現內閣が採用しつ〻あつたならば、內閣夫自身が危いといふ破目に至つてゐるのではないか。玆に哀れを留めしはと、山本君に對して世間で歌ふのも、事によつたら餘り遠い事ではないかも知れぬ。

扨て山本を追出して官僚系の要求通りに海陸軍大擴張、廣軌鐵道明年實施とやつて除けた所で、此内閣がそれならば安全であるかどうか。此處から又々疑問となつて來た。ヴォルテールではないが「雲は出てたり」と見るべき變象が、昨今依稀として眼前に見えて來た。極めて大時代の話てあるが、天神樣の菅公が、延喜の朝から取つて落された其前は如何てあつたか。三善淸行といふ侫儒の俗儒が辛酉革命の議を奉つたのが前提てはなかつたか。即ち當時の迷説たる讖諱説によつて辛酉の年には必らず革命が起る、時の天子を移動し奉らうといふ謀叛人が必らずあらはれるといふ事を眞面目腐つて、尤もらしく献言したのてあつた。然る後に時平の連中が、道眞には謀叛の企てがあるなどゝ申出したから、それ見た事かといふので、忽ち取つて抑へられ、遂には罪なくして配所の月を見るといふ歴史が永く殘されたのてある。之に類似の現象が昨今我輩の眼前にもあらはれる、それは今淸行の昨今の議論てある。彼等の議論を聞けば今や隣國には革命黨なるものが起つて、四千年來の帝國を一變し、新共和國を創建しやうと盲動する。大日本帝國として其隣國にかゝる忌はしき共和國の成立せんとするのを指を啣へて傍觀する現内閣は不忠不臣てはないかと躍起となつて尤め立てをしてゐるのてある。世に面白き議論もあればあるものてある。隣國に共和國が現出する、それが此の金甌無缺なる帝國の帝政を危險ならしむる一因とするならば、百有餘年來東隣に建立し居る北米合衆國といふ大共和國はどうするか。此帝國は五十年來之と親交して其親交が我帝政に何等の影響を及ぼすといふ事を杞憂した馬鹿者があつたらうか。其他歐洲の一大共和國たる佛蘭西に對しても、コルヂアル、アンタントの間柄てはないか。それに今初つたかのやうに、その隣國に共和國を打建てらるれば、帝國が爲めに危險に瀕せんなどゝいふ議論は、宛然たる新辛酉革命の議てはないか。此議を唱ふる今淸行は、お國柄こそ神風連のお國柄てあれども、其出身を顧れば、爾く高天原てもなかつたてはないか。デモクラシーの妙味の一繼位には指

を染めて、何とかの日本位を著はされた事のある先生ではないが。その先生が昨今生れ變つたやうに以上の議を主張するといふのはチト面妖といはねばならぬ。何等かの巧みが其底にありさうである。あるの何のてはない。支那問題の發展以來、此問題の主もなる解決者は結局我日本てなければならぬといふ事は、列國の公認する所てある。かゝる問題が起るのなら、あのやうに急いて內閣を他人に引渡すのではなかつたといふ後悔が、甲乙丙丁の間に昨今頻りに相談せらるゝやに聞えるのである。何某は熊本の大本營に奔つたとか、惠比壽の三郎は對馬海峽を渡つて東京に歸つたとか、大分往來が頻繁になつて來た。其下には何等かの魂膽が組立てらるゝやに承知する。

それと同時に一方には現內閣中の陸海軍大臣は、一雨〳〵に強くなつて來るやうに見えるのである。其の大臣の平常から見れば何れも大人しい圓滿な人物である。が噂に聞けば昨今は惡物のしたやうに強硬てあるといふ事である。我々は其正さに然るべきを想像するのてある。兩大臣が豫算の前に當つて各々其主張を一歩も枉げぬといふ事になれば、現內閣なるものは之を切つて捨て、內閣組織當初の消極方針を遂行するか、何れにしても擦つた揉んだてあ。笑談ぢやない。最早月は十二月に入つた。議會の開會は三旬以內に迫つて居る。議會開會に臨む迄次年度の歲計豫算案を成立し得ざる所の內閣は國政に任ずるの資格なしといふ結論の用意が此間に段々構成せらるゝのではないか。さらば陸海軍の希望も容れ、其他の諸事業も繼續して、それて豫算を立てるなら現內閣の壽命は維持せらるゝかといふに、それでも己れに政權を取返して支那善後の功名を我手に收めやうといふ魂膽の下に仕組まれた新脚色である以上、箇樣盲從しても現內閣の壽命が長く續くか續かぬかは請合にくい。此局に處して西園寺侯及び其股肱の先生方は何と覺悟をせらるゝか。我々がいふ迄もなく、前諸君が前一回毒酒を呑まされた苦い經驗は、諸君の記憶に新たなる筈てある。すれば此際は孫子の兵法てはないが、之を死地に陷れて然る後生

きるといふ、此一活路に求むる丈けではないか。我々は幾度歴史を繰り返して讀んでも大野道軒の犬死よりは木村長門守の討死をエライとする。長門守の銅像こそ中之島の公園に再建さるれ、道軒の銅像などは見た事がない。道軒たるか、重成たるか。諸君の最後の決は昨今一寸見物である。

消極乎積極乎

松山忠次郎

財政上の方針として消極と積極とどつちがよいかといふことは、抽象的に論じたならば隨分議論のある問題でありませう。詰り獨逸や露西亞などの取つて居る財政方針がよいか、亞米利加や英吉利でやつて居る財政方針がよいかといふ問題であつて、なか〳〵議論の多い問題であらうと思ふ。何故なれば獨露と英米とが全く反對の財政方針を取つてゐながら、四ヶ國共に國運益々隆盛であつて、何れも世界の一等國である。夫れ故に双方何れにも一利一害があつて、議論の容易に決しない問題と思ふ。

が然し日本の現状に於て消極がよいか積極がよいかといへば、それは消極方針を採るより外に仕方がないのである。到底も積極方針は採れないのである。積極方針を採らうと思へば、租税を増徴するとか、公債を發行するとかいふ必要が起つて來る。然るに日本の財政狀態に於ては戰爭が初まるとかいふ萬一の場合ならば兎に角、平日に此上租税を増徴することは到底も出來ないのである。又公債の發行に就ても可なり困難がある。で、消極方針を採るより外ないので、山本藏相の所謂無い袖は振れない事に歸着するのである。のみならず既定の計畫丈けでも實を言ふと已に歲入不足を告げて居るのである。今日の歲入で以て已に決定した財政經畫を實行せんとすれば、何年かの後必らず歲入不足が出るのである。そこで桂内閣の財政では鎭海灣の防備費とか神戸の防波堤とか或は水力調査費とかいふものは總て繼續的事業であるに拘らず、之を繼續

費として要求せず、只一年限りの要求にしてある。といふのは之が繼續費とすれば、何年かの後には歳入不足を生じて今日の歳入では到底も遣り切れない事が分るのである。そして歳出入の不均衡を來すのを示す、である、だから桂内閣ではわるくいへば誤魔化しをして、繼續的事業の頭丈けの要求をして尻尾を出さないで置いたのである。即ち今年要る費用丈けを見積つて翌年以後に必らず出て來る費用を見込まないで、それて何年かの歳出入の辻褄を合せたものである。即ちわるくいへば誤魔化しをしたのである。そこで此等の繼續事業を正面に繼續費として要求することになり、今後何年かの間の確定収入を以て確定歳出に充てやうとすれば實は既定の計畫でも減じなくてはならんのである。それてなければ立派に歳出入の辻褄が合ふといはれないのである。然るに西園寺内閣はその上更らに新事業を試みやうとして居るのである。巨額の海軍擴張案も問題になつて居る。陸軍も之と權衡を保たんが爲めに二個師團の增設費を要求せんとして居る。其上原鐵道院總裁は地方の鐵道を方々に布く費用を要求するのである。元來此地方の鐵道といふものは、政友會が黨勢擴張の爲めに利用したのであつて、オレが天下を取ればオ前の地方に鐵道を布いてやる。オレが天下を取ればオ前の方に港灣を拵へてやる、といふ具合に、在野の中に方々に約束したものである。然るに天下を取つてからそれが出來ないといふ事になれば違約をすることに當るから原は勿論熱心に自説を主張するのである。斯くて海軍も陸軍も又鐵道院も新事業の要求をすることになれば、遞信省も内務省も農商務省も其他の官省も――詰り各省悉くいろ〳〵の要求をするに違ひない。で既定の計畫ですらも歳入不足である所に向つて、爾樣に澤山の新事業費を要求することになれば、日本の財政の立ち行かぬは明かである。山本の消極方針を主張するのは最もである。が今の處山本は味方が少くて敵が多いのであり、各省が悉く要求する方の側に立つのである。それを拒むのは山本藏相丈けである。山本藏相は總ての閣僚と孤立て戰うて居るのである。

只味方と頼むのは大藏省の局僚ばかりである。が、孤立ではあるが山本の主張は正直であるから容易に打毀すことが出來ぬのである。そこで山本が勝つか他の閣僚が勝つかは未來の事であつて固より分らないが、山本の今日の立場は先づ立派といはなければならない。大藏大臣として主張すべき所を男らしく主張して居るといはなくてはならない。

が、茲に注意しなくてはならぬのは大藏大臣が新參者である間は、其主張は必らず立派なのである。そして古くなれば段々主張がわるくなるのである。初めは純白である奴が月日が經つに随うて、灰色となり鼠色となるのである。何故新參者のいふ事が立派だかといへば、日本の財政に於て大藏大臣の採るべき方針は誰にても明かなのである。六づかしい問題でないのである。からして情實も何もない新參者は、知らずに自分の理想を書いて其通りに主張せんと思ふから、新參者の主張は立派なのである。處が段々古くなるに随うて政治上の情實も生ずれば駈引も出來るといふ具合で、長くなるに随うて、灰色や鼠色に變るのである。現に四年前の桂内閣の出來た時がさうである。此前の西園寺内閣の時には矢鱈に積極方針を採つて財政は殆んど始末にいけなくなつたのである。租税は徴收し得る限り徴收し、其上にいろ〳〵公債支辯の事業を企て見たが、公債の發行が意の如くならないので繼續事業は中途で二進も三進も行かなくなつたのである。其時野にあつて之を眺めて居た桂公は知らずに立派な理想を書いたのである。そして新參の大藏大臣として（桂は政治家としては古參であるが、大藏大臣としては新參というても差支あるまい）其白紙に書いた理想を行はうとしたのである。即ち過大の事業計畫は年度割を改正しなくてはならぬとか、或は一般會計に於ては公債支辯の事業をやらぬとか又は毎年五千萬圓以上公債を償還するとかいふ方針を採つて頗る消極策を行つたのである。新らしい事業を起さぬのは無論の事、旣定の事業も或は切捨て或は繰り延べたのである。それで此の財政方針に就いては何人も異議が無かつたのである。

處が桂が長く政府を維持せんとするに隨つて、いろいろ駈引も必要になつて來る、政略も必要になつて來る、又情實も出來て來る。段々理想に遠ざかつた財政々策をやることになつて來た。二年目三年目と進むに從うて何時の間にか又放漫な積極策を採ることになつた。前きの西園寺内閣に輪をかけたやうな積極策を採ることになつたのみならず、仕舞には政友會の裏を掻かんが爲めに、政友會と競爭して鐵道港灣其他地方的事業の安賣を初めたのである。政友會が幾哩かの鐵道延長を約束して黨勢を擴張せんとすれば、桂は其上を超して例の十億圓の巨費を投じて鐵道網を全國に張らんといふ大風呂敷を擴げた。又港灣も其通りである、政友會以上の積極策を採つて地方の人民に、政友會よりオレの方が其有難味が多いことを知らしめた。治水事業に於ても亦其通りである。そこで三年目四年目の桂内閣といふものは殆んど政友會と積極策の競爭をしたものである。元來積極的政策といふものは多數の人民殊に地方の人民に氣受けのよいものである。人望のあるものである、然るに政治家といふものは人氣商賣である、だからして、永く權勢を維持しやうと思ふ大藏大臣が出れば必らず積極方針に出たがるものである。從つて大藏大臣の古いのは一番いけない、大藏大臣は新參者に限る。情實も知らなければ、駈引の有難味も知らない。新參者の大藏大臣が始終白紙に理想を書くのが國家の利益である。だから大藏大臣が古くなれば、時々新らしい理想を持つた人が代るがよい。此意味に於て私は今の山本藏相が主張する丈け主張して、其主張が通らなければ玉と碎ける。そして又新らしい新參の大藏大臣が出ることを希望する。

消極策を積極的に行へ

武富時敏

今日の財政困難といふものは、詰り積極政策を採つた弊害である。第一次の桂内閣は日露戰爭以後講和談判に失敗して間もなく辭職し、其れを受けた前の西園

寺内閣は、鐵道國有とか、鐵道新設とか、港灣修築とか、所謂戰後の經營といふ名義の下に頻りに政府の手を擴げた。そして之を稱して自ら積極政策と言つたのである。然し元來が金があつて遣つた仕事ではない。金がないのに漫りに手を擴げたが爲めに頻りに借金をした、借金の上に借金を重ねた。所がとう〳〵其借金もし得ない破目に陷つて西園寺内閣は倒れたのである。其後を受けたものが即ち第二次の桂内閣である。桂内閣が其間違つた政策を改めたかといふに少しも改めない。只西園寺内閣の遣りしくじつた事を彌縫した丈けである。彌縫に重ぬるに彌縫を以てした。そして彌縫〳〵て以て四年間もやつて來たのである。然し彌縫策の永く繼續し得ざることは理の當然であつて、とう〳〵彌縫し切れなくなつて内閣を投げ出し、又元の西園寺が引受けて今の西園寺内閣が出來たのである。然し出來た所でどうすることも出來ない。桂内閣の四年間、政友會は依然として積極主義を唱へ、鐵道を延長するとか、港灣を修築するとか、河川を改良するとか、產業の奬勵擴張を計るとか、いろ〳〵の方面に於て所謂積極政策を行はんことを言明したのである。夫れ故に今日政友會が政權を取つた以上は其約束を履行せなければならぬのである。が、それはどうしても履行し得ない。即ち國の財政が許さぬ。今日の財政では何も彼も出來ぬことになつて居る。大博覽會も罷めるとか、廣軌鐵道も罷めるとか、甚しきは前年來繼續事業となつて居る鎭海灣の防備とか或は水力電氣の調査とか、さういふものまでも罷める、罷めなければならぬといふ場合になつて來た。之が所謂大藏省の極端な消極策といふのである。大藏省は財政の權を握つて實際の事が分るから、今日の財政上消極策の外に途が無い事をよく知つて居る。然し他の省の連中はまだよく眼が覺め切らないものと見えて、積極政策を唱へ、世間て所謂積極主義と消極主義との衝突を來たして居るのである。然し實際今日に於ては積極策は行ひ得ないのであつて、誰がやつたつて所謂無い袖は振られないのである。

然しながら大藏省の消極主義といふものも、我輩から見ればどうも甚だ感心の出來ないものである。消極主義といつても、何も彼も手を出さずに、縮こまつて居るといふ意味ではない。歳出が增さぬやうに勉め、又歳入が減ずるやうな事には手を着けず、只有る丈けの金で、有り來りの事を遣る丈けで、新らしい事は一切罷めるといふ事になれば、年々月々國運が進歩するに伴うて行けやう筈が無い。國運の發展するに隨うて新らしい計畫も立てなくてはならぬことは分り切つて居る。それを新らしい事は一切やらぬといふ事は國家として出來ぬ事である。必要なものは何とかして此れが支辨の途をつけなくてはならぬ。つけなくてはならぬが今五億の歳入しか無いのに之を六億にも七億にもすることの出來ぬのは之れ亦分り切つて居る。といつて此上更らに歳入を增すことは今の處どうしても出來ない。今日は一般に民力の休養といふことが必要になつて居る。戰時からして隨分苛酷な稅を課せられて、それが今日迄も續き且つ更らに負擔が重くなつて居る。其不當なる稅の負擔は是非共之を減じて民力の休養を計るのが今日の急務である。然し稅の負擔を輕くすれば歳入が減るから隨て歳出も減さなくてはならぬ。之は今の內閣には一寸出來にくい藝當である。だからして國家に必要な新事業を行はうには、在來の費用の中不必要なものを省くより外途はないのである。勿論國家の經費に絕對に不必要なものはない筈である。然し比較的に不必要なものはある。少くとも緩急がある。緩急があるならば宜しく其緩なるものを罷めて歳入の不足に應じなくてはならぬ。只稅法を整理すれば歳入が減るから手を着けぬ。餘裕が無いから新らしい事は一切やらぬといふ事であるならば、それは餘り馬鹿な遣り方で、そんな消極主義があるものぢやない。それは主義でもなければ政策でもない。無主義無政策無經綸と評しなくてはならぬ。

そこで我輩の希望をいへば、消極策も積極的に行へといふのである。即ち新らしいものでも國家に必要なものは遣る。在來のものでも比較的不必要なものは罷

める。稅法の整理も遣る。稅法の整理をやつて歳入が減つても、不必要な事業を罷めれば、新らしい必要な事は遣り得るのである、何もかも新らしいものはやらぬ、その代り稅も增しもせず減らしもせぬといふ事は、盲目滅法のやり方であつて、さういふ政治家財政家といふものがあるものぢやない。例へば海軍の擴張の如きは、國の存立上、世界の狀勢に應じて止むを得ざることである。之は何とか繰り合せをつけて實行したいものである。但し當局者が出して居るやうな膨大な擴張は誰がやつたつて實行出來るものぢやない。あの案には勿論贊成は出來ぬが、然し相當の擴張は國の存立上必らず行はなければならぬ。之れは我輩も認める、そしてそれを行ふには現下の財政狀態に於ては只在來の不必要なものを罷める外途がない。之が我輩が消極策を積極的に行へといふ意見の大要である。

消極主義即積極主義

池邊吉太郎

私に消極主義を採るか積極主義を採るかと訊ねるものがあつたら、無論積極主義だと答へる、日本の今日の國運で、經營の根本を積極主義に置かぬといふ事は有り得べからざる事である。今の政友會の人達は常に積極主義といふ事を言うて居る。又言ふ許りでなく、其れを實際に遣らうとして居る。遣るが爲めには地方にいろ／＼の約束をして居る。鐵道だ、港灣だ、或は水道だ。といふ風に水利土功其他いろ／＼の方面に約束をして居る。私は皆贊成だ、悉く同意だと言ひたい。勿論技師風の眼で見たなら其中にいけないものも大部あるかもしれぬ。例へば大阪築港の如き、計畫其物には大分缺點があつたらしい。其餘弊を受けて今日はどうにもかうにも持て扱ひ兼ねて居る。といふやうな例も明かにあるから、計畫其物に缺點があるならば、充分に技師の意見も聞かねばならぬ。其意見によつて不同

意を唱へねばならものも出て來るかも知れない。けれども主義に於て、方針に於て同意といふの外が無い。詰る所、何かで遣らなくてはならぬ。日本の國運の發達を促すが爲めに、或は發達に促されて、或は地方自治て以て、或は公共團體て以て、或は國家の力て以て、或は半官半民て以て、兎に角何かの方法によつて何かを遣らなくてはならぬといふ事は定まつて居る。論はない。然しながら今日の國の財政問題、細かくいへば豫算問題に於て、世人の所謂積極主義を採るか、採らぬかと私に訊ねるものがあるならば、それは採られない、又採るに及ばないと言ひたい。詰り世人の所謂積極主義といふものは、國庫の金を分捕つてドシ／＼いろ／＼の事業を遣るといふ事て、地方は地方、官省は官省て皆それ／＼の要求がある。然し今日は到底其等のものを容れることが出來なからうと思ふ。一升の桝の中には一升五合の米はどうしても入れ様がない。いくらかけ集めて見た處が日本の財政の算用は一升てある。此一升の中に歳出の一升五合はどうしたつて入りつこがない。といふ理由のある外に、私はさうまで急いて、一生懸命になつて積極方針と取らなければならぬといふ必要もないと思ふ。事務の緩急本末を計つて其緩なるものと末なるものと急なるものと本なるものとの區別を立てるが經綸であらうと思ふ。この取捨選擇が實際の國務の上の大本てなければならぬと考へる。

近世の國家經營の上て、一番に積極主義を急進的に行ひ、事の緩急前後などいふ事に少しも頓着せずに、何でもあれ彼でもあれ一時に手を着けて、極端な、又急激な積極主義を行はうとしたのは、私は伊太利のカブールであると信ずる。そして其爲めに非常の負債を起して七轉がり八轉がりしたのである。借金の利息を拂ふ爲めに又更らに借金をする。とう／＼借金の爲めに頸が廻らぬといふ狀態に陷つた。此爲めに伊太利は長い間苦んだもので、其後の整理は昨今になつて辛やくつきかゝつたのである。或は巳についたといふ人もあるが、兎に角昨今まで其爲めに困んだのである。處がカブールの時の伊太利ては、カーブールがあゝ遣る

には、あゝ遣るべき理由を持つて居つたらうと私は思ふ。伊太利が小さく分裂して居つたのを統一して、急に近處の國家と肩を並べなくてはならぬことになつた。肩を並べるには並べ得べき丈けの地歩を占めなくてはならぬ。地歩を占める爲めには急進の積極策を採るといふ事の必要が必らずあつたらうと思ふ。もうどうしても外に致方がない。借金で困むることが分り切つて居つてもさうする外に途がなかつたのだらうと考へらるゝ。然しそれが近來になつて、何うにか斯うにか緩めらるべき時期に際會したから、最近の伊太利の政治家は消極政策を採つて、整理をつけたものと見える。

そこで伊太利が其樣な積極方針を急進的に採らなければならなかつた理由を考へて見るに、第一に伊太利の他位即ちあの國の場所である。伊太利があのやうな强大國の端に繫がつて居らなくて、南亞米利加あたりにあつたとしたら、そんな必要は無論なかつた。又最近になつて伊太利の政治家をして消極方針を採つて財政整理に成功せしめた原因は何かといへば、それは時機である。若しも昨今の歐羅巴の形勢が、那翁三世が佛蘭西に跋扈し、維廉一世が普魯西亞に勃興しやうとし、それに對して墺太利も伸張つて居る。英吉利も眼を放さずにムヅ／＼して居る時であつたならば伊太利が如何に消極方針を採らうとしても採り得なかつたかも知れぬ。詰り時機の問題と思ふ。

處で日本の國の地位は伊太利ではない。强大國とは大分距離のある處に國を持つて居る。然し世界の强大國が次第に東洋の方面に眼をつけ出して、殊に露西亞が餘りに壓迫して來て、日本の發展を妨げやうとしたから之に反抗して其手の出た所をチョン切つて一時の平和を作り得て居る。それまで遣る爲めには隨分苦しかつた。苦しくつても仕方がないから、軍備擴張の如きも其苦しい中からウンと遣つた。其後露西亞に勝つて見ると、一時は無論列國から怖がられた。多分露西亞の二の舞を遣つて、大いにアグレッシブに出て來るだらうと豫期せられた。其爲めに日露協約も出來た。

日佛協商も出來た。又日米協商も出來た。斯うして出來た協商協約なるものは、日本が列國を縛つたといふよりも、列國が日本を縛つたといふ方が適當であらう。がそれは日本の爲めには何でもない。そんな無用な事をしたのは元來列國の誤解である。日本にはアグレッシブに出やうとする野心がない。野心がないから縛られても、少しも痛くない。日露戰爭以後に於ける日本の地位は頗る安全なものになつた。今日日本が際會して居る時機といふものは、極く整理に適當な時機となつて居る。戰後經營といふよりも戰後整理といふことが第一着に充たさねばならぬことになつて居る。時機已に然り、地位已に然りである。無理をしてまでもさう急いで積極方針を採らなければならぬといふ必要が毫もありやしない。况んや日露戰爭に張り堪へる爲めに國債は廿何億圓になつて居る。こいつを背負つて歩くといふのも隨分苦しいのである。之も亦整理を促すことの一大動力になつて居る。さうまで急いで積極方針で進むといふ必要は全くありやしない。もそつとゆつくり構ひ込んでやつて行つて間に合はんことは私はないと思ふ。經綸の命ずる所は私はさうだと思ふ。只其積極方針を行ふことの必要をウンと持つて居るのは政友會である。日本の地方の人士が國の經營の何物たるかを初めて諒解して來て、國の血管たる鐵道とか、或は口とか鼻とかに譬ふべき港灣とかの必要に氣が附いて來た。政友會は其れに投じて自黨の黨勢擴張の爲めに、あつちにもこつちにも約束した。即ち我々が天下を取れば鐵道も布いてやる。港灣もこしらへてやるといふ約束をアッチにもこつちにもした。其約束の人氣で以て衆議院の多數を占めた。恰度關ヶ原の役以前に德川家康が、此戰に勝つたならばお前さんには丹波一國をやる。お前さんには筑前筑後をやる。又お前さんには肥前肥後といふ具合に、所謂お墨附なるものを出して、今日でいふ豫約をしたのである。何れも同じ人心收攬の策略に過ぎない。其の約束を履行する爲めに政友會は頻りに焦せつて積極方針〱と叫んで居る。それは我々の知らん事だ。同意しなくても差支はない。國の必要は別にある。即ち整理だ。國の進運は整理を命じて居る。それに准じて政治を行ふの外はない。今日一時消極方針を採るのは他日大いに積極方針を採る本を作るのである。であるから消極方針即ち積極方針である。區々として一地方の一事業の成行にのみ執着して國の大計を忘れるのは愚だ。我々は贊成出來ない。



數奇傳（七）

――一小文學者の自叙――

田岡嶺雲

（拾七）生のひこばへ

(1) 時鳥の如き不慈な父

父は其子を識らず、子は其父を識らず、父は其の未だ識らざる面影を夢寐にのみ見、子は其父として父ならぬ父を呼ぶ不幸なる子と父とは、其の生れて五歳の後にして初めて相見るの機會を得た。

予は不幸なる子、冷酷なる夫たるのみならず、亦實に不慈なる父であつた。鶯の羽翮（はがへ）の下に其兒を棄て委ねて顧みざる時鳥（ほとゝぎす）の如く、不慈なる親であつた。胎中にある吾兒が其母とともに贖ひ去らるゝに對して、予は之を救ふべき何等の手段をも努め無かつた、否啻に之を救ふことに努め無かつたのみでは無い、寧ろ前途の功名を夢みて覇氣徒に盛なりし予は吾が前進の重擔（ヘンディキャップ）を其背上より卸し得たことを竊かに喜んだでは無いか。其兒が今の父と呼ぶ其者からの、其兒の處分につきて吾を思ひ遣ての穩便な交渉に對して、予に其兒を如何にともすべき力あらば、何ぞ其母をも人の手に委ねんとさへ答へて拒

絕した。固より此の答には憤激の情も含まれてゐた。
併し當時の予は「子の愛」なる者を理解するには、餘りに若く餘りに無經驗であつた。予は其當時に在つて、其の生れて未だ見ず未だ知らざる吾が兒にさへ、一念常に纏りて忘れ得ざるほど、「親の情」なる者の切なる所あることを、想ひも浮べなんだ。唯「親子の名乘合ひ」といふ樣なドラマチックな一齣を將來に空想する外には、其兒の行末に就いて、深き考慮をも費さなんだ。斯くして吾が兒が其母とともに父ならぬ父の手に委ねらるゝに任した。父として何たる無情な、つれない父であらう。

此の父としての不慈に對する報は覿面であつた、吾が兒が生れたことを聞知ると同時に、言ひ知れざる懐かしさの情が涌いて、只管に親しく之を膝下に見るを得ざるを悔ゐた。

(2) 後朝の鐘を添乳に聞く

失ひし戀の名殘をせめてもの夢に尋ねて、追恨徒らに猶胸に新たなる、津山を去つた翌年の春の暮に、嫌疑を憚つて音信を絕つて居た女から、人を介しての手紙を受取つた。夫は其子の生れた便であつた。

『明けやすき夜を其聲に恨みし長法寺の曉の鐘を、添乳の枕に悲しく聞き申候』

手紙の末には、此んな言葉が書き添へられてあつた。

予は唯吾に代つて教養上に十分の注意を頼む旨の返事を出した後は、又元の如く音信を絕つた。

併し其兒が虛弱らしいとあつた手紙の言葉が心に懸つて、其後の便が切りに聞きたかつた。今までは何とも思はなかつた人の家の嬰兒の體格などが、妙に目に附くやうに成つた。

寒さにつけ暑さにつけて生立ちゆく其兒の健康を想ひやつた。手紙の中に我に肖たとあつた。其幼顏を想像して見ることもあつた。事に紛れては忘れてゐても、時には堪へられぬほど會つて見たいやうな事もあつた。

津山の知る人の便で折々其後の樣子を聞いた、父はと問へばアッチといつて遠くを指さす事なども書いて

あつた。

三十三年の北淸事變に從軍した時、萬一の死を想ふて、永久に相見るを得ぬ父と子の運命を悲しんだ。出發の前夜門司の客舍で『憐れなる吾兒』の一篇を草して、帝國文學へ寄稿した。

渡船の船中の一夜の夢に、母に抱かれた姿を見たが、其朧な面影は、覺めて後の記憶に捉へ得なかつた。

予が貧に驅られて西へ東へと職を求めて轉徙する間に、女も其贖はれた夫に隨つて其兒と共に、神戸から東京、東京から京都へと移り住んだ事は人傳に聞いてゐた。

恰も予が岡山へ來た翌歲、女が其子と共に津山に歸つた事を聞いた。

事情を能く知つた津山の人から、他所ながらに其兒に會ふことを勸めて來た。予は恥を忍んで津山に往つた。そして其人の家で始めてその吾兒を見た。

(3) 半時間後にはもう懷いた

予は六年目に再び津山の土を踏むだ。岡山との鐵道が通じて、町外れの停車場を町に連ねる新道に、土地の古びと不調和な粗造な人家が落着かぬ樣に列んでゐる外には、山も河も舊のまゝに、流石に目に觸るゝ物毎に懷かしい心地がした。但依然たる流落の客、當年の恥を償ふに足るべき、身に何の加ふる所も無くて、再び此山河に對するに忸怩たらざるを得なかつた。

其兒の今の父たる人は其頃朝鮮とかに居た、其兒を見ることは固より承認を經ては無かつたものの、猶密かに女と會したといふ嫌疑を避けんが爲めに、予は第三者の立會の下に、生れて相識らざりし吾兒と、別れて久しき其母とを見た。

其兒を抱いて室に入つて來た女と相向つた時、暫くは相見たまゝて、言ふべき言葉を知ら無かつた。女は想つたより老けて見へた、顔も思ひなしか窶れてゐた。

固より父と名乘つての出會ひでは無い、其兒の前には唯一個の見ず知らずの他人たるに過ぎなかつた。髮を有し目鏡をかけた目に慣れぬ予の姿は恐らく只恐ろ

しき叔父さんとしてのみ見へたのであらう。暫くは默つて予の面を見詰めてゐたが、次第に澁面つくつて終には全く泣き出した。予は吾兒の前に父たるの愛を示すことを得ない。予は黯然として覺えず、泣を飮んだ。

予は女に其兒を早晩吾が手に還さんことを諜つたが、女は此のみが今の身の唯一つの慰めであるといつて否んだ。其兒に對して母としての責を竭してゐる女に對して、予には之を強ゆる父としての權利が無かつた。

予は女に對して餘り多くを語ら無かつた、予は過去を語つて互の想ひ出を新にするに忍びなんだ。唯其兒に對する將來を托して、三十分間許で予は女を促して其家を去らしめた。

別れる頃には、小兒は早や幾分か我に馴染んで、吾が膝近くへ寄るやうになつてゐた。血緣に關する一種の神秘をおもうた。

予は翌朝岡山に歸つた。一歩遲れて女は再び其家に予を訪ひ來つたことを後で聞いた。恐らく其兒の將來に關する何等かの談があつた爲なのであらう。

(拾八) 死の滅び

(1) 人の家の死にも週期がある

予が岡山に來たのは恰も所謂而立の齡であつた。野蠻人種が遊牧の飄泊から農耕の定居に移る樣に、予も多年の放浪に倦んで岡山には從前に無く長く留まつた。

岡山に居た前後六年の間ほど、引續いて近親の者の死んだことは無い。第一に東京の牛込に居る叔父が死んだ、次の年には母が死に、其の又次の年には予の養母たる伯母が死んだ。一人の叔父は予が支那に往くとき死んだから、此で吾が家の老人は殆ど一時に盡きて了つたのである。

二十一年に父が死に、其翌年に祖母が其跡を追ふてから十幾年目に、『死』の影は再び吾一家の上を掩ふたのであらう。或る家の上に『死』の來るにも一定の週期

の様なものが有りはせまいか、斯くして舊き者は滅び、新しき者の時代は來るのであらう、而して其の所謂新しき者も、次ぎの週期には、同じく免れざる運命に出會ふのである。

舊き人が舊き形式と舊き信條とを以て新しき人に臨むのは、新しき人にとつては無用の干渉であり、煩さい束縛であるかの様に感じらるるものの、サテ其の舊き形式と舊き信條の維持者が忽然として、滅びゆいた時、新しき人は、いひ知れぬ便なさを感ずる。世間の冷淡なる無關渉と、隣人の毒を含む甘言との苦さを味ひ盡した時、吾等は初めて吾が肉身の舊き人の溫かき干渉と、潤ひある苦言の有難味を知ることが出來る、而して再たび其干渉をも苦言をも聞き得られぬことを想ふた時、吾等は溫き懐を奪はれたる嬰兒の寂しさを感ずる。

吾が一家が新しき人々の舞臺となつた時ほど、予は四人の同胞を有することを頼もしく心強く感じた事は無い。

(2) 人をやく煙が夕空に消える

明治三十四年の正月八日であつた、新聞社同人の新年宴會の酒の香と脂粉の匂と、漲ぎる燈の光と涌く如き歌吹の響との裡から、暗い寒い夜道を家に歸ると、一通の電報が机の上に置かれてあつた。夫は叔父の訃であつた。酒席の熱鬧中に笑ひ興じてゐた時、其一時間後に斯かる死の凶報を耳にしやうとは誰か豫期すべき、予は兩頰の酔が一時に覺めるを感じた。

予は直ちに喪に奔つた。

谷中の齋場に式を終へて、見送りの人の散じた後を、吾が兄弟等數人のみ外槨の飾を撤した寂しき柩を擁して、午後の日ざし弱き霜解けの泥濘を、日暮里の火葬場に送つた。棺を燒き釜の上に入れて扉を閉ぢた其刹那、悲さが一時に心頭に上るを覺えた。歸り路に振返ると、寂しく聳へた煙突から黒い煙が夕暮の空に消えゆくのが見える、叔父の亡骸も同じ煙に消ゆると想ふと、此まで詩や歌に見た荼毘の煙に無常を悲んだ言葉の味が痛切に胸に響くを覺えた。

骨上げに、顔、手、足、髮、爪を具へて、血流れ、脉持ち、見、聽き、物言ひ、動いた人間の五體が、唯切れ〳〵の白骨の外は、冷たき一堆の灰となつて、藁を燒いた夫れと同じく、感情もなく意識もなき唯の『物』に化し去つたを觀た時は、今更の樣に沁々と人生の果敢なさを感じた。

叔父は神經質で性急で潔癖で狷介で、其下を愛すると逆比例に、其上には盾を突くといふ氣象の人であつた。此が、叔父が維新の際東北に從軍した閱歷を有し、武人としては不相應の學問もあり、又其當時の人としては新知識を採るに怠らなかつたに拘はらず、思ふほどの榮達を得なかつた所以であらう、晩年までも其不遇に對する胸中悶々があつたらしい、何時も晩酌の折の醉後の氣焰は不平の語氣が多かつた。

予が未だ幼い頃、叔父が廣島鎭臺に居て歸省した事があつた。其頃予は必ず時間の餘程前に學校へ往くを勵みとしてあつた、或朝どうかして少し遲れたのが口惜しくつて、母親の手にも餘る程に拗ねて泣き喚いて居つたのを、離座敷に居た叔父に、聲を厲げて叱りつけられた。人には臆病な予が馴染の薄い叔父から叱られた其恐さは今も猶覺えゐる。併し其後で恰度其頃入用になつた算盤を買つて貰つたので、恐いが併し宜い叔父さんだと思つた。

此叔父は官を罷めて後多く東京に居たので吾等兄弟は皆恩を受けた。

(3) 死の影のやうに電燈の光も蒼白い

叔父は七八年も以前から既に不治の痼疾に罹つてゐたので、其死は吾等に左程突然の感を與へ無かつたが、母の死は意外であつた。

國に寡居して、其子等は皆他鄕に在る寂しき家を獨り久しく守つてゐた母は、其頃加賀に居た肉身の姉を尋ねた、次に和倉溫泉に入湯して、其歸途、仲兄に奉ぜられ、京都に遊びて、嵐峽の花を觀、仲兄の東京に赴くに別れて、大阪に長兄の許を過ぎ、岡山へも來る筈で神戶の仲兄の家に留まつて居る間に、遽かに疾革まつたのである。平生から虛弱多病では有つたものの、

其死が昨日今日とは豫期してゐなかつた。

訃に接して即夜伯母を奉じて神戸に赴いた。着いたのは既に夜半を過ぎてゐた。眠れる如く蒲團の上に横はれる遺骸の枕頭に侍して夜とともに之を護つた。目前に睹る死の嚴肅に撲たれて一座は只沈默に沈む、形なくして影のみある者の手の影に封じられたやうに陰にこもつた座敷の電燈の光も蒼白い、陰森たる夜氣人を襲ふて透間漏る風も無きに後を顧みがちに脊筋が寒い。予は死に伴ふ一種の鬼氣を感じた。

予は座の隅に首を俛れて母の一生を懷うた。

母が、氣の勝つた男勝りな其姑と、數多い小姑の間に介まりつゝ、吾等四人の兄弟を手鹽にかけて育てられた勛勞は察するに餘りがある。母は遠慮勝ちな引込み思案の、少しも邪氣の無い人で、何事にも寧ろ因循な方であつたから、酒に耽る其夫と八人の其子を抱へて家道を一手に支へた祖母の眼からは齒痒ゆくも見へたらう、何にかにつけて叱言が絶えないのを、小兒心に、打悄れた母がいた〳〵しく祖母が憎かつた。

母は煙草が嗜であつたが、忙しい用の間際などの其一服が如何にも悠長らしく祖母には思へたらしい、此等も毎に叱言の種であつた。併し母も何處にか尋常と異つた所があつた、四人の子を皆遊學の旅に出して、別に心配な素振をも見せなかつたことは、流石の祖母すら不思議とする程であつた、

母の一生は決して安樂な生涯では無かつた。其氣質の上からしても氣兼ねと氣苦勞の絶え無かつた一生であつたらう。併し四人の其兒等が既に人と成つたを見屆けた其晩年を、一生を犧牲の奮鬪のみに終へた父に比すれば、其勞苦に酬ゐらるゝ所があつたをせめてもの幸福と謂ふべきであらう。

吾等兄弟は、先塋の側に葬るべく遺骸を護つて海路、國に還つた。神戸を拔錨する時は晴れてゐた天氣が、夜半から暴れ始めた、物凄い雨と風とが暗夜の濤と鬪つた。船は此航路の最難所たるお岬（室戸岬）を廻る危險を虞つて、阿波の或港に避難した程であつた。死骸を積んだ船は暴れるといふ傳説を、長く海上生活を

した長兄から聞いた。

予は死の黒影に伴ふ一種の神秘を經驗したやうに想つた。

(4) 墓下の眠の安きを疑はぬ

伯母の死は母の死よりも更に突然であつた。

伯母は七十歳の高齢にも拘はらず極めて强健て、裁縫にも眼鏡を用ゐぬほどであつた。其朝も自ら箒を把つて庭を掃かるるを見ながら、予は家を出た。

午後に長崎の知人が、自宅から更に社へ尋ねて來た、伯母が腹具合が惡いといつて臥つてゐた事を告げてくれた。左したる事ては無からうと思ひながらも、早めに歸宅した。

容體をきくと吐瀉するのだといふ。折柄虎列剌流行の際て前日にも近隣に患者を出した際てあるから或はと疑つた。直ちに醫を迎へた。

其間に容體は益々險惡となりゆいて、見る〳〵うちに面の痩せが目に立つ、夫ても氣丈な伯母は强ひて起つて厠へ通はれるのを、妻と交る〳〵に扶けては、醫者の來るのをもどかしく待つた。

醫者の診斷は予の疑ひの通りてあつた。達者といつても老體である、の急激な病氣に堪へ得られることは疑はしい。予は車を郵便局に飛ばして、病氣危篤の電報を近親に發した。一方更に岡山病院から醫員の來診を受ける手續をした。

其醫員が來た頃は夜半近くてあつた。伯母の容體は既に絶望であつた。昏睡して痙攣の發作があつた。

其折には十分に沈着の態度を持して居た積りてあつた者の、生憎に女中が宿へ下つた跡て、人手といつては夫婦ぎりてあるし、遽の事て人を雇ふ遑も無い、多少の狼狽は免れ無かつた。跡て靜に考へれば斯くもすべきてあつたとおもふ應急の手當を施さずに了つた憾もあつた。

病院へ看護婦の派遣を頼んだが、夫も間に合はなかつた。

伯母は、京都の公卿の家に勤めて居た頃、或卜者の言によつて、自分の死期を何時と豫め定めてゐた。又

其死するに長き病苦に惱まさるるは惡業の報なることを信じて、自分は必ず卒中風で仆れる者と極めてゐた。夫が長い病苦は見なかつたにせよ、忌はしい流行病のために天壽を全うせられ無かつたのは、予の奉養上に罪なしとはいへぬ。

伯母は又人は死すれば神となる者、死者を悲むは即ち其人の神となるを擾り妨ぐる者との信念を有つてゐた。

廿六夜に月に載つて上る阿彌陀の尊像を目のあたり拜し得たことをも確信してゐた。

女としては理義に明るい人であつたが、矢張女の弱點たる迷信は免れ無かつた。而し縱使迷信にせよ、其信力は頗る堅く頗る強かつた。

其の堅い強い信仰の上に安じて、伯母は死に對して毫も恐怖を有して居無かつた、之を全くの無智の樂觀として侮るべきでは無い、是も亦一種の悟道である。凡ての哲學凡ての宗教も、要するに死に對する恐怖の詮めに過ぎぬでは無いか、吾が伯母の信仰は、若し此を迷信といはゞ、其迷信は哲學よりも實行的に有効な宗敎よりも形式の煩瑣の無い、寧ろ大なる哲學、勝れたる宗敎であつたともいひ得る。

予は吾が伯母が墓下の眠の極めて安きことを飽まで も信じて疑はぬ。

(拾九)　戰爭と新聞

(1) 予は予の短見を恥ぢる

明治三十五年から三十六年へかけては、露國に對する國民の敵愾心が最高潮に達した時であつた。國論は殆ど開戰論に一致して、盛んに政府の軟弱を攻撃した。

予も亦開戰を主張する一人であつた、固より予は理想として世界に統一的大平和の日の來るべき事を信ずる。人は個人として其個我を泯ぼして大我に歸一するを理想とする如く、亦國民としても人種としても其國民的疆域人種的阻隔を撤して、人道的世界的平和の境界に臻ることを人類の目的となさゞる可からざるを信ずる。而かも現勢に強弱の不平等優劣の不權衡ある以

上、先づ之を公正に恢復せんことを要する、貴族と平民の不平等が國民的均整を得んが爲めには佛國に見るが如き革命を要した、日本なる弱國が世界と其勢力を比肩せんが爲めには又非常の手段を採ることを要する。十九世紀は餘りに白人種が跋扈した時代であつた、白人種にのみ重く黄人種に輕き時代であつた、其不平等は均整せられねばならぬ。且つ文明は獨り白人種の獨擅では無い、東洋にも特殊の文明がある、此の東西兩洋の文明を渾融した所に始めて眞の世界的文明は生るゝのである、然るに今日の白人種はあまりに東洋國民を侮蔑してゐる、從つて東洋文明の眞價を理會することが出來ぬ。日本が東洋の先覺者として其國力を西人種に示す事は一方には世界の文明のため、一方には大平和の招徠のために必要である。

予は斯くの如く信じて露國との開戰を已む可からずと考へた。

併し其理論の裏面には一種事を好み亂を喜ぶ煽動的客氣と、大帝國建設の夢想的虚榮心とが含まれてゐた事を懺悔する、且世論に雷同した傾が全く無いとも云へぬ。戰後の國民が徒らに戰勝の虚名を贏ち得て、而して實際に苛税の負擔に呻吟する苦境に陷る現狀の如きに至るを豫め慮り得ざりし短見を今に於て恥づる。

此に比ぶれば當時所謂社會主義の一派が世論の潮流以外に卓立して非戰論を唱へた其勇氣は多とせねばならぬ。

予は所謂社會主義者では無い、而し其派の人々中に友人はあつた、殊に幸德とは同鄕の因みもあつた。彼等の勸誘もあつたが、予は終に社會主義者とはならなかつた。

(2) **予には名を負ふた主義はない**

予は元來所謂主義を標榜して、故らに人と異を樹つることを好まない、人が自己の本領を操守することは固より之を美とせぬでは無いが、或主義を看板にした爲め、其主義の弊處短處までも意地になつて固守せねばならぬ樣な立場に立つことは予は厭だ、又自から主義を創めるので無くて、既存の或主義に沒頭すれば、

必ず其主義固有の型式に束縛せられねばならぬ、己の思想は己れの往くべき所に往くべきである、何も敢て他人の造つた型の中へ身を逼塞する必要は無い。

予は幸德等とは親友であつた、予の思想の色彩は多少相似た所も有つたらう、併し予は所謂社會主義者なる名を被ることは欲しなかつた、是は敢て警視廳を恐れた譯でも無い、前に謂つた樣な理由からなのである。

予の思想は或は一種の社會主義的であるかも知れぬ、併し社會主義といふ或る定まつた信條を有してゐる社會主義では無い、予は秩序的に組織的に社會主義を研究した者では無い、若し予の思想が社會主義的の色彩を帶びてゐるとすれば、夫は予が社會主義者である爲めでは無い、社會主義なる者が偶々予の思想と相觸れた所があるに過ぎぬのである。

予は何事をも自己一流の主義から裁斷せんことを欲する、予に最も貴い者は我である、我を濾過せざる何の主義、何の說をも信ずることが出來ぬ。

予の思想を若し社會主義的なりとするも、夫は感情の上に建てられた社會主義である、理論でも學說でも無い。

予の社會主義（といひ得べくんば）は極めて簡單である。貧者に對する同情、只是だけである、資本がどうの分配がどうの、そんな經濟上の理屈は予には無い、强者に對する反抗、弱者に對する同情、此が予の思想の基石である。

若し予に社會主義の何たるを教へたものがありとすれば、カール、マークスでも無い、クロポトキンでも無い、寧ろヴクトル、ユーゴーである、トルストイである。予の社會主義は科學から入つた者では無い、小說から注入せられた藝術的社會主義であると謂ひ得る。

幸德等は正統的な社會主義者であつた、故に彼等は其主義として非戰論を唱へた。予は開戰論者で、此點に於て既に予は社會主義者たる資格を缺いてゐた。

併し幸德等の行動＝多數者に迎合せずして毅然として持論を貫かんとする意氣＝を壯とした、平民新聞

創刊の時には上京して彼等に文字上の援助を爲すことを約した。

上京して幸德等に有樂町の編輯局で會した時、彼等が從來の豪傑的態度からピユリタン的な嚴肅な生活に變じた殉道的克己に感ずると共に、稍其のあまりに矯揉に過ぎざるべきやを慮つた。

會した日は恰も天長節であつた、半日を久しぶりの歡談に耽つて、夕暮近く數寄屋橋の外に出ると、右手に夥しい球燈が簇星のやうに見へた、外務大臣の夜會がそこに開かるゝのであつた。

(3) 永久の左樣なら

時日は前後するが、序だから幸德が大逆事件の犯人として捕縛せられた當時の狀を、目擊者として少しく語らう。

昨年の五月、予は痾を養ふ爲めに湯河原に赴いた。四十一年發病以來每年轉地する習になつてゐた予は、此年も轉地先を選擇中に會々幸德が腸結核の宿痾の保養傍ら基督抹殺論を起草の爲めに湯河原に往つてゐたのと腸窒扶斯に罹つた正岡藝陽が病後の靜養に此も湯河原へ行くといふので、終に同行した。

幸德は天野屋といふ宿に居た、予は始め藝陽と同じく中西屋に宿まつたが、座敷が騷々しいので、幸德の居る天野屋へ轉宿した、五月の二十六日であつた。

幸德と予との室は相隣してゐた、幸德は只管、抹殺論の稿を急いで頻りに筆硯に親しんで居た。

確か六月三日であつた、幸德は上京してくるといつて、車の來る間を予の部屋で話してゐた、出て行つたのは七時頃であつた。

十時頃になつて宿の主人が慌しく來た。幸德が門川の停車場で、東京から來た判檢事の一行に邂逅して、湯河原へ連戻られた由の車夫の報告を予に語つた。

間もなく神奈川縣の警部と土地の駐在巡査と二人で予の部屋に來て、予に駐在所迄同行を求めた。

駐在所には、幸德が奧の細長い一間にぽッねんと坐つてゐた。其次の間に制服の巡査が洋服の膝を窮屈さうに護衞してゐた。

予は遮られて往つたまゝて、別に何事の調も無い。退屈まぎれに懐にしてゐた牡丹亭を讀んでゐた。

初夏の晴れ切つた日て、時は午に近く、外に虻の迂鳴が聞えるほどの靜けさてあつた。

巡査の好意て蒲團は敷いてくれたが、脚が寒いので女中に膝掛を取りにやつた。

軈て歸つて來ての話て、予が室の搜索中なるを知つた。

家宅搜索は可成其主人の立會ひの下に行ふべき筈てある。宿屋の一室と雖ども既に自分が之を占めてゐる以上は、其一室は即ち自分の家宅と同一てある、宿屋の主人と雖ども妄りに侵入すべきては無い。然るに故らに病軀の予を駐在所迄引出して、其不在中に搜索を行ふことは、たとひ宿主の立會ひはありとも、不法てはあるまいかと考へた。

十二時も過ぎて一時近くなる頃、判撿事の一行五六人許りが、駐在所へ引上げて來た。

予に對して二三件の訊問があつた後、予は歸宿を許された。

幸德に一言したいと望んだが固より許されなかつた。

起つて歸らうとする時、幸德が奥から聲をかけて、左様ならといつた。

生別即死別、此の左様ならが永遠の左様ならてあらうとは予は豫想だにもしなかつた。

彼が就刑を聞いた時、錆のある左様ならの彼の聲が、今更のやうに耳に響くを覺えた。

(4) 滑稽な秘密の厳守

幸德等の非戰論は多數の開戰論の怒聲の裡に葬られて了つた、輿論の勢力は終に軟弱なる政府をして宣戰を布告するの已むなきに至らしめた。

或は當時開戰論の聲を高くせしめたのは、政府が此に因つて露國を威嚇せんとする手段に出てたのてあつたかも知れない、併し一度決した積水の勢は氾濫せねば止まぬ、政府は其の自ら使嗾した輿論に驅られて、已むなく日露開戰の幕を落した。

宣戰の詔勅が電話によつて新聞社に達したのは二月十日の夜半であつた。

其日以後の新聞社は亦一個の戰場であつた。號外又號外、予等は號外の競爭に奮闘力戰せねばならなかつた、無事の時も夜半まで、一旦事があると徹夜が連日に及ぶことは珍らしく無かつた。

此間軍事に關する秘密は一切掲載を嚴禁せられた、其の所謂秘密なる者の範圍は極度にまで擴充せられて、寧ろ滑稽な樣な事もあつた。外國人の眼に觸れて外國の新聞に麗々と掲げられた事實をさへ、當局者は所謂秘密を頑守した、其秘密は寧ろ國民を愚にせんとする秘密であつた。公報以外に於ける記事は闕字の〇〇を以て塡める外は無かつた、恐らく當時ほど新聞社が二號や四號の〇〇を使用した事は無からうとおもふ、吾等は寧ろ露國側の公報の率直公明なるに感じた。

當時國民の心は一齊に皆旅順に注がれてゐた、旅順陷落！此が國民の殆ど最大の又最後の期待であつた。國民は擧げて旅順陷落の號外に待ちくたびれてゐた。大阪の新聞社では、豫め旅順陷落の號外を各地の賣捌所へ配布して置いて、電報一發で直ぐに配達する手配をさへしてゐたのもあつた。

併し旅順の動靜ほど當局から秘密を封ぜられたものは無かつた。國民は旅順包圍軍が如何に慘憺たる狀況に在るを知らず、唯日清戰役當時の如く容易に陷落に向つて進行しつゝあるものと信じてゐた。

秘密の嚴守が軍事的必要の範圍を超えて、國民操縱の一種の政略的手段に用ゐらるゝ事は有害である、彼の媾和後の日比谷事件の勃發は、吾人をして言はしむれば秘密嚴守の結果である、國民は唯政府が發する戰勝々々の公報以外に何事をも知らなかつた、文字通りに連戰連勝とのみ信じてゐた、從つて日清戰役當時の如く巨額の償金と割地とを夢みてゐた、然るに媾和の條件は豫期に反してゐた、不平の起つたのは當然である、政府は自ら蒔いた種を自ら刈つたのである。

日本の政府は獨り軍事のみでは無い、一切にあまり秘密を重ずるに過ぎる、蓋し此は民をして由らしむべ

し知らしむ可からずの東洋的專制政治の遺風に本づくものとおもふ。

秘密と間牒。之を用ゆるに長じた日本は戰爭に勝つた。併し日本國民は此が又我が國民性の其短處を最も著しく暴露したものたることを知らねばならぬ。

(貳拾) 天鼓亂打

(1) 思想上の田舍者

人間ほど厄介な動物は無い、聚りさへすれば其處に讒誣、排擠、嫉妬、離間、利用、種々の術策が用ひられる。之を大にしては國民と國民、人種と人種の間より、小にしては一家一族に至る迄、人間社會何れの處にも此等の爭競爭鬪の行はれぬ處は無い。微な自分の地位を保つ爲め、若くは微な他人の地位を爭ふ爲めに、互に術數を弄しあふ煩はしい世間、醜い人々の渦の中に捲きこまるることは吾等には其煩しさに堪へぬ。

予に當時若し家族の繫累なく、又家政に十分の餘裕あらしめたらば、予は恐らくもそつと早く岡山を去つてゐたらう。兎に角陰險な複雜な世事人事の纏糾の間を忍んで、五年間此地に足を留めたのは、予としては異數の辛抱であつた。

終に身を此地から去つて東京に歸つたのは、明治三十七年の十一月であつた。

數年の間に東京の市街は敷設せられた電車の爲めに新しい東京となつてゐた。本郷の通りや神田の須田町の如き目に慣れてゐた場所が、夫と判らぬ迄に改修せられてゐた。

夫よりも猶強く自分の頭を刺激したのは、自分が獨り市區の上の田舍者たるのみならず、思想の上に田舍者となつてゐた事である。

學校を出てより正に十年、糊口のために流轉してゐる間に、讀書は棄てがちに、思想は蕪るゝに任せた。予は新しき東京の街頭に立迷ふが如く、又新しき思想に對して茫漠の感を抱く文壇上の落武者となつてゐたのである。

予の在校當時は、殆ど圖書館て費した、自分の學問

が儕輩に比して甚だ懸隔のあるのに憤悱して、時間を惜むで讀書に耽つたのであつた。

然るに學校を出て以來、疎大の志を遣るに放縱の行を以てして、書卷を抛つて酒色に親しむに至つた。予は畢生の禍根は實に此てあつた。

窮して濫する、予等の如き薄志弱行の者には必然の逕路である、敢て自ら求めて惡を行ふの勇氣は固より我に無いが、窮した餘りに惡と知りつゝ止み得なんだ非行も尠くない。而して之を行ふて後の良心の不安を老莊の善惡無差別の哲學や、大功は細瑾を顧みずといふ豪傑流の放言に遁辭を見出して、強ひて自ら欺いてゐた。

自ら悔い自ら責むるも既に晚い、予が放逸の行に沈湎し、窮餘の罪過を重ねつゝある間に、時勢は人を待たず、予は既に文壇の上に過去の人となつてゐた、忘られたる人となつてゐた。

併し予としては筆の以外に業とすべき何ものをも知らぬ、再び文壇に起つより外予の立場は無い。

乃ち雜誌の發刊を企てた。

(2) **丁髷主義の主張**

予は此頃『非文明』の思想を抱いてゐた。

所謂文明なる者は人間の智巧の發展である。其智巧の矯僞矯飾によつて人間を自然の狀態より遠ざけ、倫理的には不朴質、生理的には不健全なる生活に陷らしむる者であると信じてゐた。

予が此の思想の根抵をなす者は老莊の哲學であつた、ショッペンハウアーやハルトマンの哲學からの感化も固よりあつた、但予に具體的に此觀念を教示したものは、カーペンターの文明論と、マクス、ノルダウの『因習的虛僞』、及び『墮落』等とであつた。

予は此の『非文明』の主張を旗幟として雜誌天鼓の發刊を創めた。

雜誌の題名には頗る苦しんだ、天鼓といふ名は確か岡野知十君の吾等のために選んでくれられた者であつたの久しく新聞紙の上の其日々々の不用意ななぐり書きに慣れて、想も文も荒みきつてゐたから、第一號に書

くべき文章に就いては尠からず苦心もし推敲もした。

自然の狀態に於ては戀愛に因てのみ結合せらるべき男女の配偶が、文明の進歩のために不自然なる種々の制裁を其上に加へらるるに至り、爲めに戀愛の失意者不遇者によつて情死の如き人道上憐むべき悲慘事が行はるゝに及べることを論じた長篇を、霞ヶ浦の湖畔にあつて起草した。雜誌が保證金を收めて無い（收める資力が無かつたのである）文學雜誌てあつたから、近松の戯曲中の心中物を論ずるに托して書いた。

雜誌の發刊に就ては、初めは或る富める一靑年から資力上の補助を受ける筈てあつた、第一號の出版費だけは其人の手から得たが、其人の家庭の事情から第二號以下に對して之を仰ぐことが出來なかつた。

初號發刊の際は、印刷屋との交渉も雜誌の校正も雜誌屋への配布も一二の人の助力を藉つて殆ど獨力に經營した。

第二號以後の發行に就ては頗る苦心してゐた、偶々印刷所て出會つた北上屋書店の主人が引受けて出版してくれる約束が出來て漸く刊行を續けることを得た。

初號を出した時、其の『非文明』『自然復歸』の主張に對して、或る新聞の批評家から丁髷（ちよんまげ）主義との冷評を被つた。

其批評家は數年後には自ら所謂自然主義の作家となつてゐた。

(3) 學生よりもみじめてあつた

東京に還つて暫くは友人の家に同居してゐた。庭に巨きな老木の聳えた寂びた家てあつた。友人と二人の外に女中も無い一種の自炊生活て、パンや蕎麥て過す日が多く、晩飯は大道の露店の茶飯の立喰ひて濟ますこともあつた。

其内に友人の細君が上京し、予は下宿屋へ移つた。天鼓初號の編輯や發送は其下宿屋の二階の薄汚ない一室てなされたのてあつた。

是より先き東京日々新聞が伊東巳代治氏の手から加藤高明氏の手に歸した時、犬養木堂氏の仲介て同新聞の近事片々の記者となる交渉を受けた。此時初めて加

藤高明氏にも會つた、世評の樣な傲慢な人とは感じなかつた。俸給は五十圓といふ先方の申出てあつたが、折柄雜誌發行の計畫が進行中の上に、漸く足を洗つた許りの新聞記者生活に逆戻りすることに氣が進まなかつた、傭はれ人となつて月給に縛られるよりも、成るべく獨立の自由が望ましかつたので、法外な要求の提出をして、其話は中絶した。

雜誌の發行は豫期に反した結果となり、出版を書店の手に委ねた爲め、予は僅に二十圓の編輯費を其書肆から受ける外定まつた收入の無い身となつた。

此間に岡山の新聞社に居た頃の舊稿を集めて出版したが、其中の一冊壺中硯と題する者は秩序壞亂の名の下に發賣禁止になつた。

此の以後予の著書は出す毎に、同じ運命に遭ふことになつた。

僅かに二十金では下宿屋の仕拂ひにも不足であつた、當時の予の生活は寧ろ學生よりも貧しくみじめな者であつた。行李一個の外は、机も蒲團も宿から借りたもので濟ましてゐた。

其上に、此時は未だ妻は離別せぬ前であつた、上京の際一時家兄の許に托して來たものの、家兄に對しても何時までも其まゝに棄て置くべきでも無かつた。

妻は上京した、併し予には家を成すべき資力は固より無かつた。已むを得ず又妻を其妻の兄の家に托するの恥辱を忍んだ。

窮困の愈よ逼つた際、恰も支那に在る藤田劍峰から渡淸を勸めて來た。

予は再び大陸に去つた。

日露講和の成立した頃で、予は長崎で、日比谷事件の電報を見た。

正誤

前月の「數奇傳」は頁數前後したる爲め意味不明となりたる箇所あり。即ち百十頁より直ちに百十三頁に讀み續け百十四頁の終より百十一頁に返り百十二頁と讀み、百十二頁より百十五頁に讀むべきものなり。此段深く著者及び讀者に謝す。

オリムピアの競技の話

文學博士　箕作元八

今回開かるゝオリムピック競技には、日本からも初めて選手を出すといふ事であるが、此競技會の名の起原はいふ迄でもなく古の希臘に行はれたオリムピアの競技に基くことであらう。て茲に希臘史上――或は世界史上に有名なるオリムピア祭及び其競技についてお話をして、昔を偲んで見るのも强ち興味の無い事ではあるまい。

一體オリムピアといふ所は何處にあるかといふに、希臘の南の方のペロポネソス半島即ち今のレモアの西部にあるのであるが、其位置を委しくいへばモレアの西の方にザキントス即ち今のザンテといふ島がある。其島と對ひ合ふ所にエピタリオンといふ河がある。其北の方はピサチス、南の方はプリペリアで、共にエリス州の中にある。オリムピアは其ピサチスの南の方にあるので、即ちエピタリオン河の中流のあたりに當るのである。

此オリムピアといふ所は、希臘最上の神である所のゼウスを祭つた所で、つまりゼウスの神領である。希臘の傳説や歷史にはゼウスに關した事が甚だ多いが、何時頃から、此處に祭るやうになつたのか、其れは明かでない。然し希臘全體として之を祭るやうになつたのは傳説によれば紀元前八百八十年であるといはれて居る。エリスの偉人エフイトスといふものが、スパルタの憲法を作つたといはるゝ彼の有名なリクルグスと相談をして、之を希臘の一般祭典となし、其處で競技を行ふの風習を作つたのである。然しそれが盛んになつたのは紀元前七百七十六年頃であつて、此年の祭りを以て第一回のオリムピア祭紀元としたのである。そ

れから四年毎に大祭をしたのであるが、希臘の年代をあらはすに屢々第何回オリムピア祭の時といふ風にいふから、此オリムピア祭紀元たる七百七十六年は大いに記憶すべき年である。即ち第五回オリムピア祭といへば其後二十年に當り第十回といへば四十年に當るから、直ぐに年を繰ることが出來るのである。

此祭りに關係することの出來るのは希臘民族丈けであつて、若し希臘民族であれば遠方の殖民地に居つても、地中海の端に居つても、或は黒海の邊りに居つても、此祭りに參加することが出來る。唯然し自由獨立の町でなければならぬ。だから此祭りは一方に於て希臘民族聯合の中心となり、一方に於て自主獨立の氣象を奬勵することになつた。彼のテーベの英雄エパミノンダスがペロポネソス半島に征め入つて、スパルタの勢力を挫き、メッセニア州をスパルタから獨立させた。メッセニアも昔は此祭りに選手を出して居つたが、スパルタに隷屬した以來、之を出し得なくなつたのである。然るにエパミノンダスが之を獨立させた爲めに再び此祭典に參加するの權利を得、第百三回のオリムピアに選手を出したのである、即ち紀元前三百六十八年の中夏であつた。其時メッセニアから小兒競爭の選手として出たダミスコスといふ少年が勝者となつて、メッセニアの非常なる名譽となつたといふ事がある。かういふ事が歴史に傳へらるゝのを見ても、いかに此競技に勝つのが名譽とせられて居つたかゞ分る。

此祭りは五日間續く。競技の種類はペンタチロンと名づけて主もなるものが五つある。即ち飛越、槍投、競走、角力、それから今一つはデスコスといふ金の平圓板を抛げることである。此五つの中にもいろ／＼種類がある。例へば競走の中にも長距離競走もあれば短距離競走もある。角力にも投げ捨てから抑へ込み、又拳闘もある。其他競馬もあれば競車もある。車は勿論二輪車であつて、二頭立と四頭立とある。外にもいろ／＼の競技があるが、前にいつた五つが主もなるものである。そして其勝つたものには月桂樹の冠を與へる。其月桂樹は兩親共生きて居る子供が金の庖丁で枝

を蔵つたものでなくてはいけない。其月桂樹で作つた冠をゼウスの神前に供へて置いて、勝つたものを神前に連れて來て與へるから、希臘人が之を名譽とするのが非常のものだ。神前に於ても勿論特別の御馳走に預るが、銘々の國へ歸つてもいろ／＼饗される。アテネでは特別の賓客として御馳走をするし、スパルタでは御馳走をせぬ代り、王の護衛兵とする。其外どの市でも皆それ／＼名譽の表彰法がある。そして競技者には勿論大人もあれば子供もある。

此祭りを主宰するのはエリス市であつて、エリス市の家柄のものから數人委員となつて、何日にいよ／＼祭りを開くとか、どういふ競技をやるとかいふ事を各國に通知したり何かする。此等の委員はヘラノデケと名づける。即ち希臘人の審判官といふ意味である。其下に警察官のやうなものがあつて、祭りの秩序を保つ。各國からは使臣が行く。使臣には其市に於ける一番位も高く家柄もよい人がなる。此祭りの重んぜられて居つた事が、こゝにも亦窺はれる、

オリムピアの境内は三つに分れて居る。第一はアルチスというて即ち神殿夫自身のある處、それから競技の行はるゝ廣い場所と、神官だの祭典の委員だの、各國使臣の宿舍などのある所とだ。いよ／＼競技が終ると、最後の祭りをして、各國からの捧物を供へ、勝者を御馳走したりする。

競技に勝つたものが如何に尊敬されるかといふ一例をお話すれば、ロードス人の中でヂアゴリデー家といふのがあつて、不思議にも其家から多數の政治家や將軍を出してゐるのみならず、又此オリムピアの競技に勝つ人を出して居る。其中でもドリオウスといふ人が殊に勝れた人で、三度續けてオリムピアの勝利を得た。ロードスは初め殆んどアテネの從屬國であつたが、ドリオウスは其獨立を計つてアテネに背くことに力を盡した。自ら船を仕立てゝ海戰をやつた。處がとう／＼負けて擒になつた、アテネは無論之を殺すことになつて居るのであるが、オリムピアの競技に勝つた者を殺すのは惜いといふので、民會の投票で、無條件

て以てドリオウスを放免した。此競技の勝利者はそれ程尊敬されて居つたのである。

又此祭典の時には詩人、辯舌家なども出て銘々得意のものをやる。時によると此祭典でやつた演説は一國の輿論となることがある。スパルタの極く盛んな時にアテネの辯士が大膽に之を攻撃して輿論を喚起した事がある。又詩人は此祭りの時に自作を讀み上げて忽ち大名を博するといふ事もある。ヘロドタスは彼の有名な歴史の一節を此祭りに讀み上げたことがある。そして此等の勝れたるものには賞牌を與ふる。だから此祭典は一面希臘民族の結合となり一面自主獨立の氣象を奬勵するのみならず、又希臘文明の光彩を發揚するの機會をも作つたのである。

此祭りの主宰者はエリスであることをいつたが、只一度其權利を外に奪はれた事がある。それは何時かといふとアルカデア州が一時エパミノンダスによつて同盟が出來、エリスを侵して、遂にオリムピアを占領した。そこでエリスを罷めてピザといふ小さな町を此祭りの主宰者とした事がある。それは第百四回のオリムピア祭の事であるから即ち紀元前三百六十四年の事である。此時祭りの招待狀をピザからも出すし、又エリスからも出た。處がエリスは非常に憤激してアルカヂアを征めた。恰度祭りの最中にエリス人がドン／＼征め入つた。エリス人は元來勇敢な人種ではないのであるが、此時の權幕は恐ろしいもので、非常な勢で征め入つた。然し中に入ると神殿のあたりが混雜し、殊に路が細いものだから充分戰ふことが出來ずに擊退された。之れはゼウス神の境内で血を流して神聖を瀆した大事件として希臘人の非常に殘念がる事である。其外アルカヂア人が神殿の金を借りたといふ事も分り旁々不都合だといふので、此第百四回の祭りを取消し、エリスは依然として祭りの主宰者となる事になつた。

此祭りの一番盛んであつたのは紀元前六世紀頃からして、ペロポネソス戰爭の終り頃までゝあるからして、先づ六五世紀頃といつてよいのである。その後も久しく續けられたが、希臘に内亂があつたり、終には羅馬

に滅ぼされたから、從て祭りもなくなつて了つたのである。

先きにいひ忘れたが、祭りをやる日は定まつて居る。即ち夏至の次の滿月の日に行ふことになつて居つた。又勝つたものは其名前と自分の正當の父の名前とを神前で讀み上げられて、記錄に載せらるゝことになつて居つた。一體希臘人は餘り金錢を重んじない國民であつて、金錢によつてどうする斯うするといふ事がなかつた。それは一つは當時は近代ほど生活が困難でなかつたといふことがあるかも知れぬし、又學問文學をやる人でも外に生計を支ふる職業を持つて居つた爲めもあらうが、大體の國民性が金錢に對しては極く淡い考を持つて居つたやうである。學者でも文人でも皆各職業を持つて居た例をいへば彼のソクラテスでもプラトーンでも又醫聖といはるゝヒポクラテスでも皆學問文藝以外生計を支ふる職業を有つて居つた。だから弟子から月謝も取らずに敎へて居つたのである。又詩文でも其爲めに得るものは名譽であつて金錢ではなかつた。今の文士のやうに金の爲めに書くなどゝいふ事は決して無かつた。昔て波斯王が希臘に征め入つた時、才學ある優勝者を金錢を以て賞せずして月桂冠を以て表彰する國民、金錢よりも名譽を尊ぶ國民は侮ることが出來ないといふたといふ事がある。

此オリムピアの競技が二十世紀になつてから獨逸によつて再興され、今度のやうに日本からも選手を出すやうになつたのであるが、昔のオリムピア競技は前に話したやうなもので、今のは丸でヘレネスの意味が失はれて居るのであるから、只名目丈けを籍りたもので其性質が全然違ふて居るといふ事は多言するまでもあるまい。(完)

革命

黑頭巾

其一

●南風催ふして、冬日和の暖かなること五月の如し。午前に檐端に倚子して、閑に南園に臨む。此の時の快適心中自から餘裕あり。

●今朝、掃きし園の早や、力無き枯葉の、風無きに、落ち埋めて、柘榴は枝ばかり繁り、櫻の林は、梢に、少しく黄葉殘れり。カナメの常盤なるさへ、木の間透かして明かるく、唯だ、藤棚の藤ばかりぞ、蔓の空に舞ひ上りて、青々の時の姿、尙ほ生きて見え、藤豆の、色濃く、垂れたるが、吾が園の、一點、靈犀の氣を、今日に、集め得たるものなれ。

●秋の晩の、うらがれし畑には、ヘチマの大きく下がりたるも、何と無く、ツマラヌものなるべし。藤豆の、堅く、強く、濃く、生々の氣を、保全するには若くものあらず。

●吾輩は、今、藤豆に對して、此の頃の事を想ひ、「革命」に想ひ耽りつゝあり。

其二

●藤豆は支那の革命也。これ無くば、荒みに荒みし、此頃の漢人種の冬空に、一點の靈氣の凝統せるものを見る可らざりし也。

●長髮賊の騷動は、譬へば秋晩のヘチマの如くなりき。大きかりしかども終に腐りぬ。

●今の革命軍は、思の外軍勢少なし、然れども、小さく、堅く、濃き中に、尙ほ漢人種の多年の活氣を想ひ浮べしむるもの無くんばあらず。

●藤豆は、腐りて落つること無かるべし。若し能く冬の空に、支へ得て、一陽來復の時を見る事もあらん乎。

其三

●革命無くんば支那無し。表といへば必ず裏あらざること無く、支那といへば革命の歴史の裏付くるものあり。革命は支那の花といふは必ずしも當らず。

●革命は支那の彈力也。彈力無きゴムを想像するは難

し、彈力無ければ、ゴムは則ち死せる也。革命無き支那あること無く、革命無ければ支那は死せる也。

◉ゴム毬を藏すこと久しきに及ぶも、彈力は滅びず。試みに、地に擲たば、彈力を現はさん。

◉漢人の彈力は、既に亡びしかとも想はれし今日、尙ほ革命の、突如として、勢を以て起るを見れば、支那は貯へられたるゴム毬なりし也。

◉革命は、寧ろ、漢人の復活に非ず。漢人種の「生存證書」ならずんばあらず。

其四

◉漢人種は革命を以て、世界に向つて、自箇の生存證書を要求するものならずんばあらず。

◉花の年々開くは、草木の生存を證明す。此意味に於て、革命は支那の花たり。

◉花開かざるも草木の活くることあり。野火、宿根を燒き盡さず、春風に、また芽を生ず。此の場合に於て、革命は、芽也。

其五

◉革命無き國は、他の革命を以て、自から警醒するに足る。革命の國も亦以て自から戒むべし。

◉革命する者も、革命さるゝ者も、共に、自から殷鑑と爲すべきものあり。

◉革命は、現示なり。革命は默示なり。

其六

◉「周雖舊邦、其命維新」、は周祚の長かりし所以を語る。然れども、此の一語の中、支那に於ける革命の先天的たる事を表章するもの無くんばあらず。

◉試みに、「雖舊邦」の三字に見よ。舊邦の、革命に遭遇するは、其宿命なるの感、其の根底に存せすんばあらざるべし。

◉或は言ふ、世に萬年の天子あること無しと。天子は人を言ふにあらず。元首の位なり。支那に、永遠の帝統未だあらず。

◉漠焉たる太古の時より支那人は、國祚に對しては、極めて悲觀せり。

◉天下は一人の天下に非ずと爲し、聖人も亦た匹夫に國祚を讓る。國祚の交替は則ち革命なり。

◉濁れる血は、年代に依つて純化せられず、結婚に依つて純化せられず。支那人は年を經ても、外國と交際するも、革命の血は、渝らず、いつまでも其の血管に漲ぎる。革命は、支那人にありては、血の天刑なり。

其七

●漢人勝つ乎、滿人勝つ乎。滿人は退いて據る可きの地ある乎。

●支那分立する乎。君主政體繼續さるゝ乎。共和政體建つ乎。

●袁世凱は終に吳三桂たる可き乎、黃興、黎元洪、いづれか大統領たる可き乎。

●支那と漢人の將來は、いろ〳〵の興味を以て、世界に環視されつゝあり、革命は、現在の事實也。

其　八

●濁れる血と雖も、刺激無くんば湧き立たず。刺激は漢人の海外留學ならずんばあらず。

●雨を將來するものは風也。草木を蘇するものは春風也。枯らすものは風なり。風は大勢也。

●一箇の大學に視るも、海外留學は、つねに講座を新らしくしつゝあり。

●海外留學は、新らしきものを持ち來たすに非ず、大勢を將來する也。

●今の革命軍が、特に、日本人及び日本留學に關係多き事を云爲するを須ゐず。其の事が、政治、外交上、如何樣に干係あるにせよ、兎に角、漢人は、日本留學に依つて、世界の大勢に打たれたるなり。之に依つて、風を、本國に將來したる也。

●漢人をして海外に留學せしむるに至れるは、世界の大勢なり。漢人の革命は、世界の大勢なり。

●海岸線ある國は、海潮に打たれざる能はず。彼等は、大勢の海風に吹かれて、遂に、其の濁血を沸騰せしめたるに過ぎず。

其　九

●吾輩嘗て、放翁の「不斷海風吹月來」の句を愛す。月は輝けども新たならず、吹き來る風は不斷に新らし。

●多くの場合に於て、革命さるゝものは、如何に大なるも、舊るくして、革命する者は、小なるも新たらし。

●堂々たる滿洲朝廷の威儀は、疲勞と困弊の舊色彩を帶び、新智識と新生命は革命軍に在り。

●今の革命軍は果して能く如何程の事を成就し得可き乎。其の成功を豫算するは必ずしも容易にあらず。然れども、革命軍の大小多寡は問題にあらず。「新」は、つねに力也。

其　十

●革命の前には物價は消滅す。富貴も才幹も、すべて其の存在を失ふ。

●富貴といひ、才幹といひ、珍寳といふも、革命無き間の榮華のみ。

●袁世凱は、富貴才幹の一表現に過ぎず。彼は、革命の前に降るべき乎、或は誤つて、革命の砲彈の一標的となるに至る可き乎。

●袁は德の人にあらず、略の人、力の人にあらず、才の人。其の變轉融通の妙は既に內外に知らる。

●猫の眼は、刻々に變化すと雖も、自箇の變化にして、外敵に變化を及ぼす所以にはあらず。今日の際、袁の態度、能く千變萬化の妙を發揮し得るとも、革命軍に對して、果して能く何等の影響を與へ得べき乎。

●若し、滿洲朝廷の運命にして、尙ほ幾干の天幸を保ち得しならば、袁の政治的生命は、最早や、長からざりし也。

●袁は、假令、何等の成功無しとするも、此の際、社稷の大事に當れるは、彼の名をして支那史に不朽ならしむる所以、寧ろ政治家として、幸福ならずとせんや。

其十一

●革命は氣なり、形にあらず、巨官、大家もいふに足らず、唯だ、此の氣に乘ずる者のみ恐る可し。一亭長、一書生も亦た大事を成すに足る。

●革命者は、一箇の地盤あるを要す。漢高も亭長たりしが故に起りたり。黃興孫逸仙の輩、既に一亭長の比に非ざるべし。

●革命者の地盤は、其の人格に在り、肩書、閱歷にあらず。既に、人格あれば官位あらざるも地盤あらざること無し。

●一亭長の漢高が、風雲を捲起したるは、海底の暗礁が、大波瀾の中心となりしにも似たるべし。

●古來、支那の政治は、野に遺賢無きを理想とす。彼の一亭長の遺賢の、最も大なる者にあらずや。

●賢人を、悉く擧げて朝に列せしむるは、革命を防ぐ一策、少くとも、暗礁を引上げて、岩礁として波上に曝らす所以たるを失はず。

●檻中の虎は恐るゝを要せず、草莽の大蛇は則ち大に怖るべし、繫がれざる、隱くれたる大蛇は實力也。

●非凡の人格は、容易に革命の氣に乘ず。一たび此の氣に乘ずれば、淵底の龍、風雲に際會するが如し。龍の恐る可きは風雲の氣にあり。古來、支那人の所謂、龍氣は則ち革命の氣ならずんばあらず。

●風雲の氣起るも、龍兒、餘りに小さければ乘ること

能はず。革命の雄者が、人格の外、一箇の地盤を必要とする所以なり。

其十二

●嘗て、曲藝者の、劍を舞はすを見るに、其の光芒の亂飛して、危險の情、人目を射るだけ、それだけ、藝も大膽も見ゆれども、當人は頗る小心翼々として、美婦の鷄卵を取扱ふと一般の氣分あり。

●天に雷霆、地に地震、世の中に、革命ほど無法なるものはあらず。而して鯰の擧は如何に振ひ、雷公の打皷の手は如何に柔靱なるやは知らず、唯だ知る、革命の雄者は、如何にも無法大膽に見えて、其の實、謹愼、大德の人格たらずんばあらず。

●古來、革命軍の雄者、恭謙讓の人物に非ずして、最後の成功を占め得たる者あるを聞かず。假令、一時、虐殺の暴威を揮ふ者あるも、久しからずして、自から血祭に供せられずんば、一敗して溝壑に斃死するのみ。

●黎元洪は、吾輩、未だ其の詳を知らず、然れども謙讓の人たる事、漸く著聞す。

●後漢史を讀み、光武帝の擧兵の事に及び、「謹厚者、亦た之を爲す乎」の一言に到り、光武の能く大業を成就せる所以を知る。

●小謹者は、苟くも太平の時に志を得る。而して大謹者は則ち革命の雄者たる也。

●漫に倜儻者を以て亂世の雄とするを已めよ。「倜儻」のそのもの、自から無事の世に波瀾を起し易し。而して謹厚の大小は淸平の時には鑑別され易からず、淸平時は、寧ろ、小謹者をして志を得しめ易きなり。

其十三

●黄興は、日本に留學せし頃、吾輩、彼を敎授せしことあるかとも思へども、彼の風貌、記憶に上り來らず。

●彼は、嘗て、一たび革命の運動を試みし事あり。日本に在りし時も、孫逸仙、章炳麟等と共に、錦輝館に大會を催ふして、同志を鼓舞せし事もあり。彼は、元來、革命兒也。

●聞く、廣東の義擧、壯圖一敗するや、彼は巧みに白魚に扮して、捕鯨の巨綱を脫し去る。其の事、既に凡ならず。

●彼は、手指の彈傷をつゝみて、上海に奔り、和裝して、日本醫馬島鉎之助に來りて治を求む。局部麻醉を施すにもあらず、彼は、更にいふ、モ少しズット思切

つて腐肉を切り除いて、速かに全癒せん事を願ふ

●馬島は磊落なる醫學士也。未だ黄を識らず、其の言を壯として其の異常の人たるを想像するのみ。後に至りて、彼の事を聞き、談鋒を交へざりしを悔ゆといふ。

●黄の聲名は日に隆し。康有爲は學殖文章一家を爲せども器度足らず、孫逸仙は才略あれども、氣宇大ならざるが如し。黄か黎か、自重して德を養ひ、新興國の黃袍を著くるの人とならん。

●黄にして、若し、功成り名遂げて、位を黎に讓り、退いて江湖に居らば、彼の人物は、高きこと一等を加へん。

●張子房は、博浪沙に鐵槌を飛ばして天下を震動す。彼は革命の急先鋒なり。而して、偵吏に羅致せられず、事成りて爵位に束縛せられず、萬古、人をして其の英風を欽せしむ。陳勝呉廣は擧兵の先を爲すと雖も、力足らず。吾輩を以て見れば、黄の傚ふ可きは張子房ならん。

其十四

●革命の氣、支那に蘊蓄すること既に久し。事に觸れて、往々、其の端を見る。海外に留學生ありて以來、殊に繁かりき。

●清廷の大臣、革命の志士に豫防するの志ありしもの必ずしも稀なりとはなさず。然れども、遂に一策の百年の計を爲し得る者無かりし也。

●張之洞は、輓近、支那の柱石とす。彼は學問あり。朱子學派の人物として清朝史を飾るに足る。彼は、尤も革命を慮りて、而して彼の新教育は、却て、尤も革命の運命を早からしめたり。

●彼は、清朝、社稷の老臣にして、また革命の恩人たらずんばあらず。

●彼は、南清に、極力、新教育を輸入し、支那の開發の一半の功は彼に向つて期待されぬ。而して彼は、つねに、留學生の動靜及び其の思潮に對し、探偵の眼を睜はることを怠らず。海外の當局者にも、種々の情報を聞かん事を求めつゝありき。

●聞く、彼は雍容、有德の士人たり。而して精力拔群、其の客を引接して、教育及び政治の秘計を論ずるに當りては、徹宵疲れず。往々、夜半に初まり黎明に及ぶ。彼の睡眠時間は甚だ少かりき。

●彼は、此の如くにして、勵精以て、支那の開發と、革命の防遏とに從事す。其の新教育が、開發と同時に、革命を將來せんことは、彼の志に非ざりしなり。

●彼の新敎育奬勵の態度は、稍、松平樂翁公の異學禁に似たるもの無くんばあらず。樂翁公は、學政擴張と共に、異學禁を勵行したるは、其の志の在るところを知るべし。而して異學禁は、所謂異學を壓するに足らず、却つて、學政の擴張は、各藩々の興隆を促がして、德川氏の社稷の短命を招きたる也。

●然りと雖も、此の二人者は、此の時に當り、敎育興隆を措て施すべきの長策あること無し。此の二人者の態度の神經過敏に罹りし事は議す可きもの無くんばあらずと雖も、其の志は則ち諒とせざるを得ず。

其十五

●革命は大病にして急性也。非常の猛斷を以て、之を壓倒するに非ずんば、則ち彼、舊體を破壞し了らずんば已まず。

●大病といふも、例へば胃癌の如し。その起るの前、徑路必ずしも短かしとせじ。不養生、その精を耗し、病根は深く膏肓に入る。此の時に、大病は、突如として頭を擡げ來る。病を以て名づくと雖も、其の實は、特殊の病といはんよりも、身體一班の情態の、極めて困阨、疲弊の窮境に名づくといふも妨げず。

●大病といふとも、醫師、手を下すの餘地無くんばあらず。全體の旣に、困憊して、由つて重患を爲す時は、藥餌の特効あるものを求めんとするも難し。

●政治を爲すは、病を治むるが如し。今の支那の革命の如きは、部分の病に非ずして全身の病也。寧ろ、樹の枯れて朽ちて、猛烈なる黴菌を發生するにも似たり。當面手を下すの地、唯だ、幹を伐りて、新芽を舊根に求むるの外無けん。

●支那の政治史に、革命を繰返すこと、間歇泉の如くなるを見れば、支那人は、早く政治に疲るゝの民也。政治の改善と進歩との能力を缺くの民也。能く一系統の政治を創立し得れども、能く之を發達せしむるの頭腦を有せず。

●彼等は、機軸ある一建築を爲し得る、而して之が修繕と維持との工夫を缺如す。建築の出來たる儘に之を放置して、舊るくして氣に入らぬようになれば、直ちに之を破壞して、更に新築に取掛る。

●彼等の著たる衣は、絢爛の美ありとも、往々、其の襟は垢に光る。彼等は、手入したる淸衣を著くることを解せず。晏子の一狐裘三十年といふもの、定めて不潔なりしならん想像するに餘あり。

●彼等は、又た、時々、大病に、全身を一新するを見

れば、彼等の肉體も亦た自から改善、耐久の力を缺如するものならずんばあらず。

●身體は本也。此身ありて此心あり。諸子百家の立言に徹して、支那人の特性を知るべし。

●支那には學說の新立あり。學統の發達あること無し。彼等は、立言の民にして、研究の民にあらず。

●支那民族は、新築、立言、革命を其の民族性とすること此の如し。此の三者は、皆、革命ならざるはなし。

●「革命」といふは强き事に相違無し。然れども、其の實、弱く、早く疲るゝ身心を有する民族に、特發する持病ならずんばあらず。

●吾輩は、今の革命に際し、此の好機會を利用して、日本人が支那に對する、各種の研究、觀察を爲すあらん事を望む。

其十六

●革命は豫知し得可き乎。防遏し得可き乎。

●蓮の花の開くは、ポンと音すといへども之を聞くべき機會を捕へ易からず。然れども蓮花の開く舞臺は、既に定まりてあり。

●松蕈の、地上を抽く瞬間を見たる人は多からず。然れども、松蕈の生ずべき地點は、又た豫定されてあり。

●「山雨欲」來風滿」樓」といふは支那人自から言へり。革命の來らんとする時勢を豫想するは、決して難からず。

●吾輩嘗て、支那學生の暴動するを見たり。その瞬間まで平靜なりしも、突嗟に暴動し、鼎沸し、全員は、自制の力を失つて狂奔せり。花園の小池に石を亂擲して、波を捲くにも似たり。

●子三浦梧樓嘗て語りき。彼等が猶ほ奇兵隊に爲して山口に在しとき、一夜、兵員、月明に浮かれて、三五人は、やがて群衆となり、歌ひ、鼓うち、調子づき節づき、隊長の牽制するに及びて、激して、一變して、暴動となれり。

●革命の爆發は、蓮花の開き、松蕈の抽くと同じく、其の端緒は豫測し易からず。殊に、今の革命は、火藥庫の爆發と一般、元來、爆發す可きものを封鎖し、貯藏したりしを、一點、不注意の火は、爆發を齎らし、其の刹那に、革命星を天外に飛ばしたるものゝみ。

●水滸傳の楔子に、洪太尉、魔殿を開いて、百八星を世に出すの記事は、流石に、支那の小說家能くも革命の序幕を、寫し得たるよ。

其十七

●吾輩、嘗て、フライターグのルーテル傳を讀み、ルーテル出現前の大勢を叙するの文に、人心、恰も渡り鳥の、北歸の際に近づき、騒ぎ立つ胸の、それのようなるに比するに至り、譬喩の巧妙なるに感ず。

●革命は革命軍にあらず。支那の人心に在り。春の野に、草の萌ゆるが如く、梅雨の節に、黴の萬物を蝕すが如く、革命の氣、天地に滿ち、人も草も革命の心なさゞるは無きなり。

●支那の人心は、渡り鳥の騒ぐ胸のように、心、革命に躍りつゝあり。雁の飛んで家鴨の飛ぶといふも、漫に眞似するにもあらず、騒ぐ胸の、等しく雁にも家鴨にも宿れる也。

●今の革命に騒ぐ胸は、鎮むべきようなし。あらゆる胸を鐵索に縛するに非ざるよりは、渡り鳥の安處する季節に引戻すの外無かる可し。

金僊、夜來りて復辟戰を挑む。盤上の輪贏、また風雨を小觀するを妨げず。傍に、尚ほ一客の冷然として形勢を論ずるあり。

黒頭巾記

女優に對して

○余の見たる外國の女優と日本の女優

中村吉藏

自分が紐育滯在中に見た有名な女優の中で、米國第一と云はれてゐるフイスク夫人の扮したイプセン劇「ロスメル家」の女主人公リベカ、ウエストの印象はまだ忘られぬものゝ一つである。そのリベカのフイスク夫人の顏は、派手な、美しいといふ方ではなくて、寧ろ淋しく、落着いて、何處かに智識的の冷やかな色が見えて、眼なども思慮深い閃を持つてゐた、一體、此の夫人の聲は、音樂的臺辭の情緒を細やかに消化し

分ける事の出來る天分を有つてゐるといふ定評があるのだが、當時は、自分はそれ程にも感じないで、唯見てゐる中に、最後の幕の、ロスマーと一緒に、手を取合つて、二人が水車小屋の流れに身を投じに行くといふ刹那、燃ゆるやうな熱情が、リベカの體中を熔けさせる程な強いアートの表現を見せて、今までの智識的の婦人が、唯、熱情、それ自身になつて、戸口から消えて行つたのが、今猶、鮮かに眼先に殘つてゐる、斯ういふ藝は、唯、眼とか、顔とか、手足の先とかの技巧ではなくて、全身の表情――寧ろ深い心情の表出とても云ふべきものゝ一つであらうと思はれる、このフィスク夫人は社會劇、史劇、喜劇の各方面の、いろ／＼變つた女主人公に扮して、細かく演じ分ける技藝上の屈折性に富み、頭脳もナカ／＼確りしたもので、自分て四五の戯曲すら作つてゐる、ハーバート大學に聘せられて演劇上の公演をした事もある、その技藝に於ても見識に於ても立派に米國の女優を代表する地位にある人と思はれる。

それからモード、アダムスといふ女優は、人氣の點てはフィスク夫人以上てあるかも知れぬ、小柄な、眼鼻立の可愛い、一種の柔味と潤ひを持つた、流暢な聲て、スラ／＼と臺辭を運んで行く、女優の身て、屢々男主人公に扮し、喝采を得てゐる處は米國の小サラ、ベルナードとても云ふ傍がある、自分はこの女優が「旅役者」といふ喜劇て矢張男主人公に扮したのを見たが、あまり感服はしなかつた。元來が女の聲だから、矢ッ張男の調子には成り切れない、昨年は「雄鷄」に扮して、牝鷄が塒をつくるといふやうな、一部の批評を受けてゐるが、これは道理の事であると思ふ、彼のハーヴアート大學の運動場て四萬人の觀客の前に、露天興行の「オルレアンの少女」に扮して大評判を得たといふのは、この女優としてその役柄によく適つたものを撰んだからてあらう。

それからナヂモヴ夫人の事は一度ならず、他の雜誌にも書いてゐるから、詳しくは云はぬが、この夫人は露國人だから、趣味、識見が全然大陸的――殊に北

歐的である、彼の女の得意としてゐるイプセン劇に關しては、一種獨創的の見解を持つてゐて、その標準の上から劇中の人物や性格をインタープリートしてゐる、それから又「イプセン劇の女主人公は我々の日常生活に見る箇性的のもの許りだが、沙翁劇の女主人公は類型的で、我々に興味がない」などと公言して、トルストイ流の破偶像的の氣象を發揮してゐる處もその特色である、髮はスラブ式に眞黑で、眼には冷い光と媚るやうな色と暖かい懷味とが、自由自在に現れて來る、「ノラ」と「ヘッダガブラー」とは、全て別人の如く扮し分けるといふので、米國の劇評家を驚かせてゐる、近年、ナヂモヷ座まで出來上つたといふのだから、彼女の紐育劇界に於ける立脚地は一層鞏固のものとなつたであらう、それから又二三年前亡くなつたが、此も露國女優で、地位も人氣も第一流であつたコシザーチエフスキー夫人が紐育に來た時も、四五回續けて見物に行つたが、此の女優の見識や學問は、ナヂモヷ夫人以上のやうに思はれた、尤も伯爵夫人の肩書を有してはゐたが、實際は離婚してゐるので、宗教上丈の關係で、昔の名前を持つてゐるのらしかつた、矢張髮の黑い、眼に沈鬱な光を有つた、落着いた顏で、フィスク夫人と多少似た智識的の調子も出てゐたが、併し、フィスク夫人は米國的の何處か晴れ〳〵しい處があるのに引かへ、コシサーチエフスキー夫人の方は、北歐的の重苦しい感を與へる或物があつた、マーテルリンク劇を最も近代的だと云つてゐて、而もその劇の女主人公に扮するのが得意らしかつたが、歷史劇は一切排斥して、「自分等の生活に關係のないものは、何等の興味がない」と云ふやうな意見を吐いてゐた。

それから又英國の有名なる女優、カムペル夫人も紐育に來て近代劇を演じて見せてくれた、この女優は伊太利の血が混つてゐるらしいが、一體、利かぬ氣の、主我的の氣分が、その顏面に現はれてゐる、それでゐて何處かに病的の調子も出てゐて、デューゼの寫眞顏などと思合はされる處がないでもない、聲の調子は多少鼻にかゝる感もするが、磁石的で力強く見物の胸に迫

るやうな[illegible]所を有つてゐる、ピネロの代表作「第二タンカレー夫人」の女主人公ポーラは、この女優がその初興行を演じて、一の記錄を作つてゐる、自分も紐育で矢張この夫人のポーラを見たが、あの病的な、半生の暗い運命を擔つて、光明の空に憧れ、藻掻いてゐる、憐むべき婦人の細い情緒や、動き易い氣分をふつくりした技術の光で包んで、舞臺上に活現せしめた手際は立派なものだと思つてゐる、その他、この女優の「ヘッダ、ガブラー」や「マグダ」なども一々力強き演出であつたといふ印象がまだ殘つてゐる。

獨逸ではアグネス、ゾルマに次いで、名女優の一人と云はれてゐる「レッシング座」のエリザ、レーマンは屢々見物した、このレーマンは大分肉附の豊かな、顔なども丸く太つた方で、所謂美人といふタイプではない、だから彼女の扮するものは「野鴨」のヘルマーの妻君ギナのやうな、下婢上りの、デブ／＼して、色氣のぬけた、世帶じみた女房とか、又は若い娘に扮するなら、ハウプトマンの「グリセルダ」のやうな、百姓娘で腕力の强い、一寸と西洋の巴式といふやうなのが得意である、若々しい花々しい役柄には、その體質とか、容貌とかの上で向き様はないが、澁い、色の變つた女に扮しては、その情調をさま／＼に變化して巧みに出してゐる。

又同じレッシング座に、イレネ、トリーシユといふ立派な女優がゐる、これは同座のイプセン劇には、無くてならぬ人である、スラリとした、何方かと云へば瘦形で、眉も眼も輪廓が整つた美人である、この女優の「ロスメル家」のリベカと、フイスク夫人のと比べて見ると、女性の丸味とか、しッとりした潤とかいふものは、フイスク夫人の方には現はれてゐなかつたやうに思ふが、最後のロスマーと一緒に、水に赴く時の表情は、トリーシユの方には、變化が見えなかつた、情熱の火が燃えて出なかつたといふ憾があつた、併し一體の聲の調子には、憂欝が流れ亘つてゐて、又熱情も罩つてゐる、聞く耳に快い響を與へてくれる、今一人イダ、オルロフといふ女優も、豊かな天分と巧な藝を

見せてゐた、「野鴨」の十四歲の少女ヘドウヰヒに扮した時の印象が自分の眼に最も鮮かに染み付いてゐる、少くとも十年以上も若い少女に逆戻して、姿と云ひ、形と云ひ、聲の調子と云ひ、寸分の隙間もなく、端的にその役に成り了せてゐたのは、尋常一樣の技倆ではないと思はせた、無論、日本でも齒の拔けた老優が、十七八の若い女に扮して、巧みに演じてゐる例も多いが、そんなのは矢張技巧的に流れる、髮一筋も間に入れない程、「現實」に迫るといふ域には遠いと思ふ、無論西洋の女優に、この少女ヘドウヰヒに扮して觀客の嘆賞を受けてゐる者は他にも多いのだが、このオルロフのヘドウヰヒなどは、西洋の女優の、技藝が、如何に現實的の生命を有してゐるかといふ、その立派な例の一つに入ると思ふ。

世界の大女優として、オリヂナリーを有し、技藝上の屈折性に富み、微妙な音樂的の聲の持主として、六十有餘歲の年齡を忘られてゐるサラ、ベルナールは、伯林で一度、巴里で一度見た、成る程、階段が全て異つてゐる丈に、齡と共に老著れてゐる日本の女優久米八などが唯、昔日の名聲の蔭に喘いで生きてゐるやうな類とは大分譯が違つて、未だに水々したものである。劇中の性格のパッションが最高調に達して、例へば日本のお芝居めいたやうな處になると、その大なる特技が自由自在に發揮されて遺憾がないといふやうな、花やかな派手々々しい藝風で、巧みに、サルドーや、ロスタン邊りの原作を活かしてはゐるが、近代的の深味のある、デリケートな心理描寫といふ點では、獨逸や露國邊の有名な女優に比しては何うかといふ疑惑が起つた、殊に見物の喝采を待受けるやうな、佛蘭西の劇場のゴンペンションが藝の上に附き纏つてゐるやうに見えたのは、自分の慊らなく思つた點である。

併し、サラ、ベルナールが伯林滯在中の景氣は大したもので、止宿してゐる一流のホテルは一二階を全部借切り、美しい毛氈を窓から下ろし、幾流の旗を風に飄してゐるといふ素晴らしい勢であつた、金を取る事も第一等であらう、近頃米國へ來て一二ケ月の間に、百

數十萬弗を持つて行つたといふ話である、一體に米國は金が多いから、俳優の給金も比較的高いやうだが、獨逸邊では大した者でなく、第一流のエリザ、レーマンが一夜二百マーク即百圓位の相場らしい、その他推して知るべしである。

兎に角、以上擧げた人々計りでなく、西洋の有名な女優は一般に、學問や識見が高い、劇計りでなく、活きた人生を解釋して、それで自己の技藝の根本をふ培といふ用意を怠らない、又技藝そのものにかけての稽古や苦心は一通りのものでなく、全く獻身的態度で行つてゐる、俳優學校修業時代から、毎日々々、泣かされる位やかましい叱咤策勵の下に、研究を仕遂げるといふ習慣を作つてゐる。

この他、オペラのプリ、マドンナの事は茲で預るが所謂女優といふ名稱の附くのは、立派な演劇的の技藝を持つて相當の劇場の舞臺に立つものを云ふので、それ以下の米國の合唱娘（コーラスガール）とか、踊り子（バレット・ダンサー）とかいふ類、獨逸の舞姫（ダンチエリン）などいふ種類は、階級の宛（まる）で違つたものである。

日本で以前見た女優の中で、貞奴などは美人といふ方ではあるが、技藝の上で彼是云ふ程度には至つてゐなかつた、然るに、西洋ではこの貞奴が日本の大女優として紹介されてゐる、英のアーサーシモンズの如き一流の批評家がその論文集の中にも貞奴の爲めに一題目を設けてゐる程であるし、獨逸の劇評家、ツアーペルの如きも日本の大女優として紹介してゐる、併し舞踊の「道成寺」が西洋人の目に珍らしかつたので、その第一印象でスッカリ魅せられて了つたものらしい。

今の處、帝國劇場の新らしい女優連の前途は注目すべきものであらうが、西洋の所謂、女優といふ特得の地位とはまだ大分隔りがある、も少し深い解釋力を必要とする、微細な心理研究を經なくてはならぬやうな六ッかしい脚本でグン／＼責めつけられて、非常の苦心と工夫とを積んだ後でなくては、眞に女優たるの天分と技藝と兩つながら有つてゐるか否かを判斷せらるゝの域に達してゐないと云ふべきものであらうし、猶

この他に、文藝協會にも、新教育の下に研究を積んでゐる女優がある、此所の人々も今の處、未成品ではあるが、先頃「人形の家」のノラを演じて、相當の成効を得た松井女史の如きは、日本の女子でも勉强次第で、將來、西洋の所謂「女優」といふものになるべき見込があるといふ事を示した點で、注意を惹くに足るものと思ふ。

歌舞伎劇は別として、將來、日本の劇壇に起つて來べき新らしい劇には、如何にしても女優が必要である近代社會劇の特徵として、男主人公よりも女主人公の方の活動する場合が却て多い、假令多くなくとも、社會の裏面、家庭の内情などが劇化されるのだから、隨つて女主人公の役は何うしても重くなる、然るに、この種の日常生活に見る、寫實的の主婦や夫人や娘や令孃などに扮するには、男の女形では何うしても不自然な廉が目に立つて來る、細いデリケートな、女の心理表出に伴ふ緩急の情調は、何うしても眞の女性でなくては、完全に演じ難い、西洋の所謂「女優」は、日本の劇の新興運動に缺ぐべからざるものたる事は今更論を俟たない、日本の女の體が小いとか、表情が乏しいとか、社會の事情や、周圍の關係が何うの斯うのといふやうな事は、畢竟枝葉論であつて、今後の劇の上の、女性の心理表出といふ事と、將來の「女優」といふ事とは、緊密な關係を有して、不可離のものである。

然らば今後それ等の女優と男優との、劇場の上の地位は何うであらうかといふに、それは矢張技倆次第であると思ふ、西洋の所謂スター、即座頭格には、男優も女優もゐる、サラベルナールは、サラベルナール座を自分で持つてゐるのである、少くとも、それ位の意氣で、西洋の所謂「女優」の地位に上る女性が、日本からも將來出て來て欲しいと思ふ。

○女優と文藝協會

島村抱月

女優の必要か不必要かといふ樣な議論は最早や今日

ては問題外と信ずる、例へば日本の舊歌舞伎といふ如き變體藝術ならば知らず、苟くも近世以後の西洋劇乃至日本の現代劇に於ては、如何樣な事があつても婦人の事は女優が勤めなくては到底物にならぬ、如何に巧に女聲を作つても到底男には出ぬ女の聲がある、特に例へば歌がかつた者などになると、到底男聲では女の眞似は出來ぬ、臺詞でも或る程度迄は男優が摸し得るとするも、少しく耳のデリケートに發達した人が、目を瞑り、舞臺を見ずに臺詞のみを聞くと、到底其化の皮を現はさゞるを得ぬ、女優を混ぜぬ現代劇などは、目を瞑つて聞いて居ると舞臺の上は皆男のみとなつて仕舞ふ。

又感情の上からいふも、或る種類の情愛は男も女の眞似をし得やうけれども、例へば特別に快活な感情とか、特別に甘いた感情、媚を求むる感情とかいふ、微妙なものになると、到底男では女の眞似は出來ぬ。只女の悲み、怒り、其他凡て強い種類の感情は、或る程度迄男にも眞似られる、つまり日常平凡の感情、若くは特に女性的に弱い細い感情は到底男優では出來ぬ、丁度文藝協會の「人形の家」でも、女主人公ノラが自覺に達する以前の感情的な、即ち彼の一幕邊の可憐な又は快活な、彼の心持及びそれに伴ふ動作表情は迚も男優が摸し得られるものでない、勿論文藝協會のノラも完全ではあるまいが、彼の程度ですら今の處では男優て演出し得るものがあらうとは思へぬ、女なればこそ出來るのである。却て自覺以後の強いノラは或る程度迄男優で演ぜられるかも知れぬ、新劇に女優の必要な事は最早や議論の問題でなく、自明の道理である。

今一つ注意すべき現象は、近代劇特に西洋物の中には女主人公を中心としたものが非常に多い、例へばイプセンの中幕のノラは申すに及ばず、「海の夫人」でもヘッダ、ガブラでも皆左樣である。其他、他の作者の者でも、モンナ、ヴァンナ。マグダなどと數へ立てれば大半は女を中心とした劇である。只單に女を中心に置くのみでなく、男子中心の劇でも必ず一人宛は之に配して重要な女主人公を作る。其重要さが日本の在來

の芝居などとは程度を異にする、殆んど主人公と同じ位の貫目を持つて居る、此等の點から考へて見るも、抑も現代劇は女優が無くては演じ得られぬものである。

然るに今の日本の現状では、其女優を得る事が非常の困難である。帝國劇場などの樣に資力を供給して、卒業してからも直ぐ色々の方面に遣ひ得る準備が着き居れば、比較的志望者も多いのだが、それすら入學の資格を少し高くすれば最早や應募者は數へる程しか無からうと察せられる、文藝協會などでは資力の點で左樣いふ事の出來ぬと同時に入學程度も高い爲に、常に此方で要求する丈の入學志望者を得なくて困て居る。

今の處全體に於て四人程候補者が居るのだけれど、其中先づ先日の試演のノラを勸めた女優が、卒業者として物に爲り掛けて居る。其他も順々に其女優の柄に應じて一人々々に育てて行き度いといふ方針で、關係者が皆骨を折り居る樣だが、直ぐ一年の後には何人出來、二年の後には何人出來るといふ樣な手つ取り早い事には行くまいと思ふ。

大體に於て文藝協會の方針は、舞臺以後の藝術即ち俳優なるものを出來る丈精練して、舞臺以後に於てもそれが兎に角完成した藝術に爲らねば公衆に見せ度ないといふ方針だから、兎に角脚本が舞臺の上に具體して現れればそれで宜いといふ遣り口の試みとは趣を異にする、つまり練り上げて纏まつた藝にならなければ出さぬといふ方針を取つて居る。その爲に實際少くも二ヶ月以上の稽古を積まぬ限りは外に見せぬ。一週間そこらの稽古で直ぐ出すといふ樣な事はせぬ。で運びは少し遲いか知れぬけれど、其代り成るべく完成に近いものを出す事が出來樣と思ふ。先づ一人ノラ形の女優が出來掛つたとすればそれをして出來る丈け其方面に藝を研き、一人前の者に仕上げる。又ヘッダ形の女優が出來掛るとすれば、それをして色々の方面からして其特色を研かせ、一人前のものに作り上げるといふ方針で徐々に進む外ない、只多勢集めてワイ／＼と騷いだからとて其處から藝術は生れて來ぬ。

○女優に就きて

柴田たまき

女優に就て何かの意見を述べよとの御仰せてすが、私はほんの少々歌が歌へると申す丈けて、それて帝劇てオペラを起すに就き、そのオペラ部に聲樂教授を致し、傍らオペラを演ずる際、登場する事になつたのが、ツイ九月の事、女優と云ふ方と御交際も極淺く、その技藝を拜見した事もほんの二三回て、かゝる始末て女優に關する意見を述べる資格は丸て缺けてをるのてすが、兎に角帝劇の樂屋及技藝學校て女優の方々に接觸する機會がありますから、私の感丈けを申上げ度いと存じます。

之れに先んじて申上げ度いのはオペラ部の事て、承る處によればコンツエルトゼンゲルとオペラゼンゲルとは歐米ては後者の方が位置が高いとの事、これは申す迄もなく前者の方は所作なくして、たゞ歌ふのみならず、その歌ふと云ふ事も或場合には聲量が聊か豊かならずとも忍び得るとしても、オペラの唱歌家は聲量が充分て、所作と化粧とを要するのてすから、無論オペラ唱歌家の方が難儀なものてす、處が吾が國ては衣裳を着け化粧を施して唱歌するオペラに出勤するのは音樂會て唱歌するより人前が惡いかの如く迷信するものがないてもありません、そこて誤解から生まれた如き柴田環なる私が帝劇のオペラに出演する事になつた當時からして、女優と私とが、衝突したの、何んのと大騷ぎて新聞に記せられましたが、自分には一向不可解てす、日本は一般に拙速主義だと外人は申しますが、帝劇のオペラ開演も聊か此の傾きがありまして、オペラ部員を募集して間もなく「胡蝶の舞」を演ずる事になり、女優二十餘名が舞踊し且つコーラスを歌はれましたので此處て始めて女優の方と御交際を願ふ事とはなりましたが、世間ては女と申すと虛榮の權化の如く申しますが、私の觀た女優方は何れも普通の令孃と何の異なる處なく、何れも溫和な方てす、況して私は宅ても女生徒に教へ、女優方の若干にも聲樂を教授

してをりますがたゞ〳〵「可愛らしく」て堪まりません、女優に付き世間が惡口をお仰やると腹が立つ位です、然るに一ツの問題は「可愛らしさ」と「威嚴」との兩立如何の件です、但し私の申します「可愛らしさ」は女から女を見た「可愛らしさ」で、世間一般の男性の女性を觀ての「可愛らしさ」とは情味が異なつて居りましやうが、何れにせよ女性には「可愛らしさ」は不可缺の武器で、此の武器が人をも斬り、己れをも殺すかも知れませんが、兎に角特に女優には此の「可愛らしさ」がなくてはならぬもの、それは帝劇の女優には慥かに存在してをりますと思ひます、然るに此の「可愛らしさ」の神聖を守護するものは婦人の「威嚴」であるかと思ひますが、女子の方から男子の方へ何等でも哀願する風が日本にあつて、これが又日本婦人の日本婦人たる處で、美點には相違ありませんが、人妻の「奥様」と通稱せられて、男子との交際から遠ざかつて居つた時代は去つて、女性が漸次男性と交際場裡に立たねばならぬ今日、加之日本の男性には女子に對するガランテリーが缺けてをる現代、益々婦人には「威嚴」が如何に必要なるかを思ひますと、現下の女優に此の「威嚴」なる甲冑が、果して充分堅固なるか、はたいくらか弱所があつて、男性の女卑心には打ち破らるゝ點がありはせぬか、などゝ思ひますと遠慮なく云へば女優諸子は敢て「愛顧者」を求めずして「神々しき威嚴」を以て、世俗に當り、藝術の忠臣たらん事を希望したいのですが、こんな理屈めかしき事が「可愛らしき女優方」のその「可愛らしさ」と一致が出來やうかなどゝ時々思はぬ事もありません、なんと申しても急速輸入を行ひたる日本の事、植えた樹木の數々の中から、また捨てねばならぬものも生じましやう、女優方の前途には益々多くの荊棘が今後に存在すると思ふと同時に、私方のオペラ黨の前途は尙更ら遼遠だと思ひますのみです。

更らに進んで申せば、やゝもすれば、女優の品行を云爲するものもありますが、女優は山の上に立てる城の如くて、何人にも見られて、顔も知られをれば、一寸男子と一所にても、散歩した丈けでも、あれは彼の

女は誰よと云はれましやう、されば人に顏知られぬ女性より、數等嚴重なる監視の下に立てるものです、樂屋內に於ては如何にと云ふに、私もオペラ開演以來樂屋生活の若干を見ましたが、男優杯は何れの部屋にをるすら分らぬ位にて、此方面に於ても女優の品行に云爲すべき事は少なからうと信じます、先頃淸國公使館の參賛官吳振麟氏が女優某と鹽原に會見したりとか、妙な風說を傳へたものがありましたが、これは丸つきりの根無草でありました、要するに世の注意を引けば引く程、想像說や誤報が面白可笑く吹聽せらるゝのですから、場合によりては女優の御方は隨分御氣の毒であると思ひます（私も氣の毒がられてもよい一人でしやう）かく御氣の毒に思ふ半面には、日本の女優にもその人にシエーキ、ハンドの一度も出來れば、男子一生の光榮だと思ふ程の、絕世の佳人が現はれ、天下戀愛界のレコードでも破る樣な雄大（？）が起り、世界の外交が一女優に依つて運轉せらるゝ事位はあつたら、嘸ぞ面白からうと私の好奇心は叫び度い事もあります。

○日本の女優

小山內薰

日本の女優といふ者は、まだ何所にも始まつてゐないやうに思はれる。

三崎座系の女優は女の役者といふだけの者で、吾々の考へてゐるactressといふ者とは丸て別種の者だ。

貞奴系の女優は、三崎座系の女優よりは、稍吾々の考へてゐる女優に近いが、後者が舊派の型に篏つてゐるやうに、前者は新派の型に篏つてゐる。舊派新派が違ふだけの事て、やはり女役者といふ域を脫してゐはない。

堀越姉妹系の女優は、初めは立派に吾々の考へてゐるやうな女優として舞臺に立つたのだが、途中からやはり唯の女役者になつて了つた。しかも紫扇、松蔦な

どの職業を見るに至つたのは返す〴〵惜しまれる。

帝國劇場系の女優は、人數が多いし、舞臺が立派なので、今日では一番勢力があるが、吾々の考へてゐる女優とは大分緣の遠いものである。彼等は舊劇をやれば三崎座系の女優になる、新劇をやれば貞奴系の女優になる。從來の型を破りさうな人も一人二人はあるが、根本の敎育法が、その方向に向いてゐないのだから、どうも爲方があるまい。

文藝協會系の女優だけは、吾々の考へてゐる女優と全く同じ方向へ向いてゐる筈である。併し舞臺の上の實際はまだ中々その方へ向いてはゐない。やはりまだコンエンションに使はれてゐる、トラジションに煩はされてゐる。あのノラやあのリンデン夫人で滿足出來るなら、女優養成に骨を折るがものはない。

新時代劇系乃至獨立劇場系の女優については言ふがものはない。新社會劇系では露英女史が稍振つたが、舞臺の上の消息はその後全く絕えてゐる。

栗島系に葛城文子といふ腕利きがあるが、演技の題目が題目だから、進歩發展のしやうもあるまい。

日本の女優といふ者は、まだ何所にも始まつてゐないやうに思はれる。

○女優無用論

青柳有美

西洋に女優があるから、日本にも女優が無ければならぬと思ふのが、抑々第一の謬見である。

女の役は女が扮せねば不自然に流れ、到底女の心持を完全に現す事の出來ぬものと思ふのが、續いて第二の謬見である。

日本にも女優の無かッたのでは無い。歌舞伎の祖出

雲阿國は女てある。若し女優が、今日の洋劇心醉家の唱道するやうに、しかく演劇に必須のものならば、日本の演劇進化史は女優を除却し去るべき筈なく、女の役は矢張女優が之を扮する事になッて今日に至ッたに相違無からう。然るに、女優が追々と廢れて男優に女形なるものを生ずるに至ッたところを觀ると、女は女役に扮しても俳優に不適當なる點の多いものたる事が知れる。歴史は欺くべからずだ。

女優を、進歩せる演劇に必ず無ければならぬものゝやうにいふ論者は、女性の心理作用を解せぬ素人てある。

女役の俳優は、唯女の姿を舞臺に現し女の肉聲を觀客の耳に達せしめ、女の擧動を舞臺でして見せさへすれば、それて能事終れるとしたら、成る程、女役の俳優は女優に限り、如何な名人の女形男優ても、到底女優には及ぶまい。

然し、女役に扮する俳優の本務は、單に女の姿、肉聲、擧動、更に一歩進んて女の感情を實現しても、それて終れりとは云へず、最も緊要なる點は、主觀を沒却するまてにして、脚本によりて與へられる或る客觀に同化するところにある。

これは、心意力の劣等なる女性の企てゝ能く爲し得る處に非ずて、之を求められても能はざる處だ。如何に修業を積んだ女優と雖ども又然り。女優も矢張女性て、其心意力は男性よりも遙に劣等てある。

女形男優が女役に扮すると、その姿、肉聲、擧動及び感情發露の徑路等に於ては、或は同じ役に扮する女優に劣るかも知れんが、此の欠點は、女形男優が其男性たる優等の心意力を利用し、能く主觀を與へられたる或る客觀に同化し得る長所によりて補ひ得て尚ほ餘りありだ。

下手な人間の役者よりは、桐竹紋十郎の使ッた人形が、遙に脚本中の與へられた或る其人らしくあッたては無いか。

女優は女性の普遍性を遺憾無く發現する事は出來やうが、或る與へられたる女の特異性を演出することは

出來ぬ。それては、女が折角俳優になつても其の目的が毫も遂せられぬ事になッてしまふ。

以上が、女優無用論の主點。

女形男優ては、女役に扮しても、俗にいふ人情のうつらぬところがあるとは、洋劇心酔の女優三拝九拝論者が能く口癖にする論點だ。

然し、素と演劇は男女實地のイチャ／＼を御覧に入れるためのものては無く、實地の材料が想化せられて演出せらるゝ仕組になッて居るのだ。その中に女役には總て實地の女が現れ出て演ずることになり、人情が大にうつッてくると、舞臺面から想化の色が抜けてしまッて、演劇の美術としての價値を全く失はしめ、醜劣この上無きものにしてしまふ。そんな事なら、態々演劇々々と立ち騒ぐまてにも及ばず、裏長屋の夫婦喧嘩か、夜中日比谷公園の森の中て若い男女の密會でもして居るさまを、實地にトクと觀るが遥にマシてある、實に能く人情がうつッてるよ。

演劇の演劇たる價値は、女形男優が女役に扮して、餘り人情の能くうつらぬところに寧ろある。餘り人情がうつり過ぎると、觀客思はず「フン！畜生め！」と叫びたくなる。それては、演劇の目的も何も、全くメチャ／＼だ。

以上が、女優無用論の第二論點。

男と女とが、或る界限以上に感情の密接するのを避けやうとすれば、互に遠慮控目の心を以て常に相對し、其間に相當のレスペクタブル、ヂスタンスを維持せねばならぬ。是に於てか、若し女優が總て女役に扮する事になると、男役に扮する男優は、舞臺の上ても、幾分か遠慮控目にして女優との間にレスペクタブル、ヂスタンスを維持する氣味合になるべき筈のものだ。女優の男優に對する又然りて、此處一番といふ大事な瀬戸際になるや、男優の方からも女優の方からも互に踏み切ッて進めず、スチル、サスペンションをやらねばならぬ窮に陥る。

故に、男優ばかりの舞臺よりも、女役に扮する女優を混じた舞臺の方が、演劇本來の意味から言へば、寧

ろ却て人情がうつらぬ事になる。

以上が女優無用論の第三論點。

○佛蘭西の女優

永井荷風

佛蘭西の女優の話てすか。私は個人としての女優はよく知らないが、芝居は時々見に行つたのて、舞臺上に於ける女優は可なり知つてゐる積りてす。先づ佛蘭西あたりては女優の社會的地位が極めて高い。どんな立派な場所へても威張つて押し出して行かれる。又表面はなか〳〵尊敬されて居る。尤も裏へ廻つて見たら隨分如何はしい事もあるてせう。例へばあの連中の家へは何伯爵とか某侯爵とかいふ人々が出入する。それ等が女優の保護者になつて居る。一流の女優て保護者を持たぬものはないてせう。其保護者と女優との關係なども洗ひ浚ひして見たらどういふものてすか。日本の新聞などには無數の艶種や攻撃の材料を給することだらうと思ふ。然し佛蘭西たありては藝術家に對してさういふ私行を干くやうな事をしない。大抵の事は見ぬ振り聞かぬ振りにして居る。だから裏面は兎に角、彼等は威張つて社會の表面に立つて居ることが出來るのである。

御承知の通り、外國ては男優は男に、女優は女に扮するのが、お定りてあるが、彼の有名なサラ、ベルナールなどは男役も演る。私もあの人のハムレットに扮したのも見たし、又ロスタンの「エーグロン」(鷲の子)といふ那翁一世の子を主人公にした脚本の其主人公になつたのも見た。もう六十以上のお婆さんだが、若々しいものて、聲もよく、二十位のエーグロンの主人公はなか〳〵よく演つた。只ハムレットは隨分奇なものて、お尻が出張つてゐるのに、あの黑い着物を着た恰好は變なものだつた。又あの人に限らず、佛蘭西てやるハムレットなどは頗る佛蘭西化されたもので、ハムレットも粹な貴公子になつて居るし、オフエリアに對する言葉などもまるて口説のやうに聞える。だからあ

の人のハムレットは私には感心されなかつた。

外國では男優は男に、女優は女に扮すると申したが、それは第一流の劇場での事で、所謂寄席藝人となれば、男もどん〳〵女の事をする。延若などよりもつと、女らしく出來た奴がゐて、聲も身のこなしも全く女のやうにやる。男に出來ないやうな事を好んでやる。それは日本の女形(ヲヤマ)などよりも遙かに旨い。然し觀客が之をヤンヤと喝采するのは、眞面目な藝術的な意味ではなくて、只曲藝として賞讃するのである。

ミュッセとかユーゴーとかいふ詩人の出た頃は佛蘭西でも一番よい女優が出たものと見えて、ラシエルとかソフキ、クロアゼットなどいふ女優の事は今でも記憶して話す人が多い。日本で言へば多之助といふやうな所と思ふ。

又西洋では十二三から十七八位の少年にはみんな女優が扮する。それは男を使ふよりも身體の小さい、マセタ女の子を使ふ方が感情をあらはすに都合がよいからでせう。

亞米利加でも大分女優を見たが、矢張り佛蘭西の方より劣るやうである。いはゞ佛蘭西の摸倣をして居るといふ形と思ふ。尤もサザン。マーローといふ夫婦づれの役者などは一流の名優で、其專門とする沙翁劇などでは倫敦でも大變の評判を取つたもので、サザンのハムレット。マーローのオフエリアなどはなか〳〵よかつた。又此二人がハウプトマンの「沈鐘」を演ずるのを見たが、あの劇などは沙翁劇などゝ似通つた所がある爲(せい)か、之も面白かつた。サザンの藝術家に、マーローのあの井戸から出て來る女、共に可なりの出來であつた。それから露西亞のモスコーから逃げて來た、ナヂモヷなどいふ女優も、今ではすつかり亞米利加の役者になつて居るが、其手腕は遙かに亞米利加の役者を凌ぐもので、發音などにまだ可笑しい所あつても、藝で以て非常の喝采を博して居る。

日本では女優問題の起つたのも極く近頃の事で、且つ今のやうな教育の方法では果して物になるかならんか分らぬ程であるが、西洋では人氣の點からは勿論、

技藝の點からでも女優の方が主となつて居つて、男優は之を補助する位になつて居る。女優は仕手、男優は脇師といふ形である。又脚本なども近來のものは皆女主人公のものが多く、男は女主人公の煩悶を助けたり、柔げたりする役を勤めて居る形がある。沙翁劇とか若くは其他のクラシカルな劇ではさうでもないが、イプセン初め所謂近代劇では、女の方に主人公や儲け役が多く、此點からも女優が幅を利かし得るやうになつて居る。

　女優の收入は固より多いもので、且つ保護者も附いて居る事であるから、非常に金でも溜りさうなものであるが、根が派手な商賣で、交際費などもかゝる爲めであらう、大抵金には困んで居るやうである。西洋で儲かるものは役者よりも作者である。少しアタる作を書けば忽ち金持になる。役者と作者との關係は日本とは正反對である。こんな話で御免を蒙りませう。お役に立つならいゝ加減に書いておいて下さい。

○女優と參政權

松居駿河町人

◎イプセンの『人形の家』を、その書卸し以後三十三年も經つて、初めて見たり聞いたりして、俄かに「新代の女」の、「解放されたる女」のと、利いたか振りをする國民もある中に、保守的だの、頑固だの、あんなに演劇の後れて居る國はありませんのと、ハイカラの利いた屋さんたちに、散々ばら惡口は云はれても、さすがに英國なんぞは進んだものですねえ。その後れた演劇に關はる女優――平素がいやに素人じみた人間の多い女優でさへ、フランチヤイズ、リーグ即ち婦人參政權同盟といふ恐ろしいものを作つて居ますからね。

◎つい先月の始め、此同盟が倫敦のクライテリオン座で大會をやつた處が、非常な多數の女優が集會して、大に婦人の位置の爲めに氣を吐いたといふ事です、其時の司會者はペン、ウェスタキ夫人即ち有名な俳優ベン、ウェブスター氏の細君で、自分自身もメー、ウヰッテ

ーといふ藝名で嬌名を大陸の東西に馳せた女優、新聞と女優との親密なる關係について大演説を試み、更に他の婦人參政權の團體と一致して、和解案の通過を計るべしといふ決議文を朗讀しました。するとアッダアレーといふ坊さんが飛出して、基督教は既往に於て、大に婦人の位置を高めた、而して自分は宗教の人として、大に今日の婦人運動に同情を寄せるものであるなどゝ油をかけ、更に進んで諸卿は婦人參政權論者としても身分あり、思慮ぶかき方々であるから、徒らに婦人全體の投票權を得るまで待つ事なく、濟し崩しに少しづゝでも權利を取つて置くに限るなどゝ嗾しかけました。

◎すると今度は小説家で、詩人で、美術家で、美術批評家で、脚本家で、例の『英國婦人の戀の玉章』といふ本を匿名でかいて、大に英國文壇を騷がした事のある、例のローレンス、ハウスマンといふ先生が現はれて、納税反對の政策について大議論をやり、自分の娘は此婦人參政權の主義の爲めに、ホーローウェー監獄に入監されて居たが、今朝漸う出獄した、併し彼は參政權が婦人の手に入るまでは、飽まで納税を拒むつもりであるなどゝ、大に女優たちをおだて上げて、大々的喝采を博しました。

◎と、今度はシェーリエル、マッタア孃が起上つて、女優參政權同盟の壇上は自由な場所である、何人でもこゝに上つて、自分の信ずる所を忌憚なく述ぶべきである。思ふに、社會はたゞ駿々としてデモクラシーにのみ向つて動いて行く、而してその第一波こそは、實に亞米利加市民茶税反對に始まる。自分は理想家であるが、宗教上の信仰をば最も理想的に政治と一致せしめたマッジユーのやり方は、自分の大に贊成する所のものであるなどゝ威張る。

◎すると、今度は御近所のセント、パンクラス區で、貧民救濟事業に中つて居るゼラルド、コンニンガムといふ先生が飛出して、其オーソリチーなる貧民救濟問題から說き起し、勞働者たる婦人の位置を高めんとせば、勢ひ女子參政權が必要になるなどゝ煽り立てます。

最後に王立音樂學士會員ゲルトルード、イングリス孃が「醒覺」の歌をうたひ、それから希臘劇やマルテルリンクの作で有名なエデス、オライザ孃が、朗讀をやりました。

◎此婦人參政權同盟の連中は、矢張同じ月の二十七日に、ライシアム座で同盟が發企の晝間興行をやる事になつて居ました。その狂言の中には、彫刻家で、ローヤル、アカデミシアンで、サアの爵位をもつて居るゼオルジ、フランプトン氏の創意にかゝる活人畫がある筈です。之はテルザ、デル、リエゴの「女の醒覺」といふ歌の心を繪に現はしたもので、歌は有名なメリー、スチェアルト孃が唄ひ、登場の女優はといふと、リヽー、ブレートン。アリス、クローフォード。モード、クレッセル。フォリス、デーア。マベル、ラヴなどゝいふえらい連中ばかりです。此中には日本でいふと故左團次といふ樣な武士的俳優の細君で、時代物の女主人公で賣つて居る人もありますし、花形として美貌ならぶものはなしといふ人氣俳優もあります。そんな連中がみんな女子參政權運動の黄金を得るため、無料で舞臺へ上るのであるから、其熱心の度も推察するに難くは無いぢやございませんか。

◎亭主が「さあ」といふ時に、自分に同情してくれないからといふ位な事で、始めて目を醒すなどゝいふ女は今日ではもう時代遲れです。眞に覺醒したる婦人は、政治上、經濟上、社會上に男と權利を爭ふ女でなければなりません。亭主が可愛がつて與れない位で、泣つ面をする女を、流石「新代の婦人」などゝいふ男の顏が見てやりたい位なものです。併し前申上げた婦人參政權同盟の英國女優連だからと云て、イブセンやハウプトマンや、ストリンドベルヒやアンドレーフやブラッコやでなければ、新代劇の脚本でないなどゝいふ不心得はもつて居りません。呑氣極まる「ヴェニスの商人」のポーシヤも致します、嫉妬ぶかい亭主にいはれない虐殺に逢つても決して怨みもしない伊太利の婦人にもなります、レストレーション、コメヂーの女性にもなるし、ロバートソン、チャンバア、ドラマの女主人公にもなります。舞臺即ち生活、藝術即ち生活といふ樣な究屈な考へはもつて居ないのです。縱令もつて居る女優があつても、それは生活の意義の解釋に於て、日本の一部の文學者に觀察されてるものと違ふところがあるのです。これでなければ「新代の女」ではありませんやねえ。

人物評論（二十三）

衆議院議長の候補者たる

杉田定一と大岡育造

△結局は大岡か

曲肱政客



ハヽあ議長問題か、杉田は爲りたいが山一杯さ、大岡も爲りたいが山一杯さ。そして共に盛に運動して居る、が遣り方が違ふ。二人とも人格丸出し、性質通の遣り方をして居る。

杉田はチャイルドライキてある、て或る點には無邪氣に見えもする、併し强情は隨分强情なのだけれども誰にでもペタ〳〵頭を下げて打つけて頼む。四角四面に「いやもう大した御役にも立ちませんが、大分年もいつてまするて、今一度立たせて頂きたいと思ひまするが」と切口上で如何にも眞正直に持込んで來られると、頼まれた方でも厭とも言へず、弱つて居るといふ有様てある、がもう善い加減に耄碌して居る、彼には自由黨以來ズッと今日迄少しも節操を變へぬといふ丈が取得なので、他には何もないって一遍だけ、其戒名として議長にしてやつたのである。彼に取つては最早や死しても餘榮ありとすべきだと皆が信じて居る。然るに杉田が又も議長とならうとするのは、皆がチャンチャラ可笑しいとして笑つて居るのだ。けれども杉田は悟らず、愚を丸出しにして頼むから、此點で又皆が如何にも可愛いといふ觀念を持つ。

一方の大岡は不人望極めて居る。何故かといふと、内心は原の樣に野心勃々てあり乍ら、表面は左り氣なく粧ふて濟まし込まうとする、議長問題に就いても、長谷場、元田は彼樣な事をして居る、原、松田も左樣てある。杉田は耄碌して居る。鳩山は死ぬ、あせらずとも自分に來ると高を括つて居る、それが面憎い、一體普段から信義を以て人に接する方でない、衒う樣な何處か人を茶化す樣な氣持で喋る、一寸仲間の者に出逢つても、やあ閣下と來る「閣下此頃は如何でげすな大將御羽振りが宜しうムりますな」と、態とらしい緩い重い調子で語り掛ける、だから大岡に逢ふものは一言て皆胸を惡くする。能く胸襟を開いて語るものはない。いや接するものは皆、厭味タップリな奴だ、胸襟の開ける男ぢや無いと言つて來る。其不人望といつたら極端に不人望である。

それ故彼を措いて若し他に有るならそれを推さう、好しんは尾崎でも宜い。又花形式になれば戸水寛人でも宜い、一つ彼奴に鼻を明かしてやらうといふものもある、中にも極端なものは、何來年は總選擧だ、それ迄僅か一年間の議長なんど如何でも宜い、政友會には

此の如く大きな襟懷があるといつて、一つ雅量を示す積りで自黨からでなく、思ひ切つて外へ持つてつたら如何だといふものさへある。皆大岡が面憎いからの事だ。

けれども詰る所は斯うして氣を揉ませて、散々大岡を苛め拔いた所で結局は彼に往くだらう。杉田は所詮駄目なのだから、杉田は北信で擔ぐなどいふけれども、擧げば上野安太郎位の一部の者が、多少爲にする所あつてすればする程のもの、眞面目にやる人は無い併し斯ういつたからとて是は少くも五七人を率ゐる人々の意見だけを言ふのだから、率ゐらるゝ議員連の意向は、又銘々の胸に這入つたら如何いふものか知れぬ。

大岡は杉田と違つてそれは議論に於ける腕は有ろうが腕といつても理論で詰め得る限り丈であつて、一旦六かしい問題が起り、滿場騷然、錯亂紛糾の大混戰と爲つたら到底彼の手にはおへぬ。左樣なつちや理屈では駄目だ、德望を以て抑へなくてはならぬのだが、其處に至ると彼は駄目だ。松田ててもあると、大聲に調子も急遽てて來て、まあまあ、う一つ、左樣言つても、う一つと如何にも苦澁の態を示して居る中に、一人止し二人止し三人止すて議場は兎に角靜まつて仕舞う、それは黨員が銘々議長が大分困つて來たと見ると、困らせては氣の毒だと考へて言ふべき事も控へるからだ。が大岡になつたとしたら如何だらう、皆が奴大分困つて來たわい、面白い、もつと困らせろで尙ほ盛にやり出すに相違ない、それに松田ならこそ露骨に苦しい時には苦しい色を見せるが、大岡になると故ら平氣を粧ひ取濟ました顏をする、すればそれが面憎いといふので尙騷ぎ立てるといふ事になる。大岡の弊は衒はざるに衒ふのである。卽ち衒ひはせぬ、御覽の儘のあけすけだといふ樣に見せたい處が弊である。何も彼が大した學歷あるでなし、旨く大きいものの間に交つてやあ〱言つて來、國民協會から其顏で政友會へ入り込んで今日ゐるに至つたといふ丈で、生地を剝いて語りあつたら識見の彼を超ゆるも黨内のはにまだ幾らもあらう。それを左樣高く止まつて氣取るから好かれぬ。

彼は一擧一動、坐るにも起つにも歩くにも物言ふにも注意して大きく見せ様々々々と勉めて居る。兎に角人からは坐るにも起つにもゆつたりと、歩くにもノッソリ〳〵〳〵重く大股に、物言ふにもあせらず騒がず鷹揚な調子に。斯うなくては大人物と見えぬからと態とするらしく見られる。空つ惚ける、小さな人物でも名刺を通じて尋ねると、一眉毛も動かさずに、是は誰かいなと先づ隣席の人に訊く。それからハヽあ、左様てあつたかいな、と受けて、漸やくの事てウム左様々々と忘れた記憶を初めて呼び出す様な態度て、それから此方へといはせる調子。小さい者など記憶しては此方の人物に障るといふ見えをする。て「我輩が伊藤公と淸國を漫遊した時、其時桂が……」といふ様に、成るたけ大きい人物をばかり拾つて小さいのを抜きにして話しかける。如何にも態とらしい。

氣取り方にも色々ある。元田なども矢張り氣取らぬてないが大岡の様に衒ひはせぬ。話を持込むにも短兵急に打つけにやる。例せば「此春から十二月迄に我輩は黨の爲に何れ程盡力したか知れやしない。彼の事件も左様だ此事件も左様だ、皆我輩が奔走したてないか、すれば今是位の事を我輩がしたからつて宜いぢやないか」といふ、それて足りぬならまだ仕舞つてあるといふ様に疊み掛ける。それが大岡だと左様は出ぬ、先方の言ふなりに持たせて逆らはずに、大様に見せる、そして其中に底意を掬める、「いや如何も、私などは皆様の御申附て駈け廻りましたもの丶、彼の事も左様、此事も左様、大した効果もなく、一向早や何の御役にも立ちませんて」と、濟まし切つて言ふ、が其實自己の功績を左様した言ひ廻しの中に現はす様に氣附かれる様にとする。向つた場合は如何てあつたとしても、後になれば元田の方は正直だといはれるが、大岡の方は厭な奴といはれる。尾崎などの氣取るのは大岡などの此様な下卑た風とは違ふ。尾崎は如何にも高く自ら標置して居るので、長谷場、原、松田何かあらんといふ意氣込、實際に大きく考へ込んて居る、そして大岡よりも廉潔などいふ點も疑はれぬ丈に、側からも先づ氣

取つた丈には取つてやる。大岡の憎まれ恨まれる程に憎まれ恨まれるといふ事がない。が此度の議長問題などには無論彼は目を呉れない、高が僅か一年ばかりの議長を如何するといふ氣位て居る。もつと高い處に目を着けて居る。尾崎は又黨に居り乍ら餘り黨の心を心として動いて居ぬ。黨の事に身を入れて居らぬ、黨員に怩まずに自分一人で動いて居る樣子がある。それ故幹部の相談にも「左樣々々尾崎が居るつけね、ては誰からか一應話して置いて呉れ給へ」といふ樣に扱はれる。殆んど繼つ子て居る。だから今議長問題となつて先て運動もせぬのに皆が頭を下げて持つて行くのも亦癪だ。て矢張り如何しても大岡の物にならうが、併し澁澤太郎あたりの子分連は頻に尾崎を立てたがつて居る、若し尾崎にして起つ氣になつたらそれこそ大岡に取つての强敵てあらう。が尾崎は起たぬ。

△大岡ドンと杉田ドン

議院の一人

時節が時節丈けに、下院議長の候補者問題がそろ〱頭を上げて來た。ヤレ大岡だの杉田だの、兩老人が東西土俵から上つて取組となりさうてある。何方も大抵似た角力てある。肩を凝らして力瘤を入れる程の事もあるまい。只此際に自分の考を一言すれば、政黨の意味を加へた內閣ならば、立法府には相當の尊敬を拂はねばならぬ。之は何れの憲政國に於てもその通りてある。英佛の如き憲政國に於ては、內閣の更迭する毎に、之が相談に與るのは兩院の議長てある。此等の國ては、下院議長は確かに元老の一人として尊敬せらるゝ。それ丈け議會に威力がある所以てある。現內閣が前官僚黨內閣ならば兎も角も、あれても政友會といふ一の政黨を加味した積りの內閣てある以上は、せめて下院の議長位には、少し尊敬を拂ふたら如何のものか。大岡ドンといひ、杉田ドンといひ、貴政友會に於

て左樣尊敬なさる御人物てありますか。我黨の主もなる領袖は此人也と、世間に向つて口巾つたく言はるゝ人物てありますか。若し左樣てないと言はるゝならば、多士濟々たる筈の大政黨中、もつと誰かありさうなものだ。一時內閣を預けられた嬉しさに、議會なんどはどうでもいゝと思はるゝかは知らねども、人自ら侮つて而して後人之を侮るといふ結論が、其候補者の後から隨伴はしはせぬかと、要らざる心配をするのみである。

但し比較して見れば、兩君の間にも甲乙はあらう。單に働きといふ點からいへば、大岡君なりと何人も言ふてあらうが、働きそれのみを取るのなら、大岡君以上の敏腕家は二百の政友會代議士中、指を屈するに暇があるまい。下院に於ける議長なるものは、多少尊敬の拂はるゝ人物が欲しいてはないか。此點からいへは、瘦せても枯れても杉田君は、四十年一日の如く民黨として戰つて來た老武者である。我々は寧ろ働なき杉田君によつて、議場を指揮せらるべく、巾著切の手によつて、立ての座れのと指圖せらるゝ事を、不名譽だと感ずる一人である。

△敏と鈍、陽と陰

早川鐵冶

大岡と杉田？　それは面白からう、敏と鈍、陽と陰といふ對照だらうね、大岡は敏の人、陽の人だ、が悧巧で目先きが見え過ぎる丈に節操は如何かな。

初は嚶鳴社の一部で沼間守一の派に屬する改進黨員であつた。長州人だから閥族であるに拘らず、それに屬せずして改進黨員となつた。沼間死し、田口(卯吉)死し、波多野(傳三郎)死し、嚶鳴社員で現在して居るものは、今では大岡と島田(三郎)、肥塚(龍)位のものだらう、それが品川さんの國民協會を立てる時に加はつて旗頭となり、又伊藤の政友會を作る時に轉じて其旗頭と爲つたのだ。が元々長州人である丈にその派の官僚とも疎遠でない。曾根、桂とも善い、それだから

政友會員ではあるけれども、アハ好くば桂黨ともなり得る。

杉田定一はそれと違ひ、終始一貫政友會の人だ、が故老故參であり乍ら境遇は一向持てない、それ故我輩が進歩黨に緣故のあつた時分に、そんなにして居るよりも、いつそ大隈と一所に進歩黨で働かんかと勸めた事もあつたが、其際彼の曰ふには、政友會に居つてこそ杉田定一である。それが今進歩黨へ行つては最早や駄目だ、杉田は腐つて仕舞ふと、我輩は此一言此態度に恐ろしく惚れた、で副議長選擧の折にも、我輩は大隈系であるに拘らず、杉田の人格高き所以を稱揚して、運動してまでも彼を立てて遂に其椅子に倚らせたのだ。

器の上よりいへば大岡は能辯の上に法律思想にも富んで居る。之を議長問題からいふとすれば適れの伎倆を持つて居やう、杉田が議長の事もあつたけれども、其時は彼に其伎倆があつたといふでなく、それよりも寧ろ正直者で、苛めるが氣の毒だから、皆が差扣へて餘り議長を困らせん樣にした丈といふのだらう、けれども議長には德望を要する、只伎倆さへあれば宜いといふものでない、此點では杉田は大岡の上だ。

米國あたりでも矢張り左樣の樣だ、切れ過ぎるものは德望が欠けて衆に推される譯にいかぬ。ダニエル、ウエブストル。ジエームス、ブレーンの如きは屢次侯補に立つたけれども遂に大統領に爲れなかつた、餘り銳い人は總理には爲れぬ、井上侯の如きが矢張り左樣である。

尤もローズヴエルトが大統領となつたけれども、それも兩三日前金子堅太郎に面談した時同人の云ふには彼れはマツキンレーの時に副大統領と爲つて居たからだ、マツキニレしが偶然殪れたものだから、其儘大統領の椅子が彼に廻つた迄だと言つたが、如何にも左樣だらう。大岡をローズヴエルトと比較しては少し話が大袈裟過ぎるが、併し大岡は小なるローズヴエルトと言つても宜い、餘りに銳く、縱橫に切れ廻る、子分も有るがそれ丈敵が多い。一時中央新聞を持つたけれど

も餘り前途を見るの明より、算盤珠に掛けて賣却して仕舞つた。何しろ賢い男だ、が今日では只腕ある政治家、一騎打の政治家といふよりほか言へぬ。衆議院議長たり得る伎倆はあるけれども、只德望を負はざる爲に駄目であらうか、寧ろ三十年政友會と苦節を共にした杉田の方が適任だと思はれる。

餘技としては大岡には義太夫を以て育造太夫の名がある。杉田も詩を曲りなりにも作る。

要するに大岡は政治家として優に食つていける人物である、杉田も其初は仲々感心なもの、家は越前福井の豪農で舊家であつたが、雲井龍雄等の天下の志士の跡を追うて出て、民權自由を唱へて土佐に行き、板垣の子分と爲り、斯くして今日に至つたのである。が今日では意氣銷磨し盡し、又昔日の如く死を以て寡力でやるといふ勇氣は無いらしい。

近頃聞く所によると、大臣運動をしたなどいふ事だが、此の如きは立法部を自らアンダー、エスチメートしたものだ。斯うなつては情けない、衆議院議長は當に總理大臣と其勢位相當るべき者である、否左樣でなくては叶はぬ、それ位の自負心がなくてはいけぬ。然るに何ぞや曾て衆議院議長たりし杉田定一が一大臣の位置を爭うて光榮とせんとは、自ら卑うするの甚しきものである、衆議院議長の椅子を見縊るの甚しきものである。總理をでも望むなら格別、彼としては今度首尾好く衆議院議長を運動して旨く贏得する事でも出來たならそれを以て滿足する方が立派である。

兎に角當年の志士杉田定一は早や十年前に死んだのだ、彼は鄕里で不義不悌の弟を殺して牢に入つた事もあるが、左樣の勇氣ある杉田も今は只空しく形骸を止むるばかり、一個田舍の好々爺として存在するのみである。

△議長問題と杉田と大岡

靜觀居主人

衆議院で多數を占めて居る黨派が又自分の黨派から

議長を出さうとするのは、自黨の黨利を計る爲めといふ考てありませう。こいつはオイソレと何時ても許されることてはない。議長は議場整理の役目を持つて居る。成るべく公平に、多數は多數、少數は少數、如何に少數てあつても其説は其力相應に伸び得るやうに取計らうのは議長の役目てある。從つて議長に選ばるゝ人は公平といふ點に於ては少しも論が無いといふ人を選びたいものてある。

國によつては、殊に民主々義の國ては、主權が重もに衆議院に集つて居る。さういふ國柄ては議長はどうかすると民望の集點になるといふ程の政治家を擧げるといふ例が無いてもない。それて其政治家は入つては内閣の總理大臣となり或は大統領となる。出てゝは衆議院の議長となるといふ仕組てある。日本の制度はさうてはない。憲法がさういふ風の習慣を作り出すやうに出來てゐない。だから議長には黨派の區別なく公平な誠實な、忠勤專一と心懸くる人物を擧げたい。然し之は私の理想てあつて、實際には行はれますまい。矢張り從來のやうに多數黨たる政友會から出て、自黨の黨利を計り、場合によつては少數黨に壓迫を試みることを辭しないといふ風になりませう。

も一つは議長も矢張り一つの地位てある。一つの官職てある。からして衆議院の多數黨たる政友會て内閣を取つた今日、行政府の長官の椅子に洩れた不平の分子を祭り上げて置く必要上から、議長の椅子が明いて居れば其明いた椅子に据ゑつけなければならぬ事情がある。之れはまァ致し方が無いとてもいひませう。

そこて今度長谷場君が文部大臣になつた爲めに、議長の椅子が明いた、其明いた椅子には何れ政友會から出て來て据ることになりませう。之を外の黨派には讓りはしなからう。自分の黨派から持つて行くとすれば果して誰を持つて行くか。鳩山君が生きて居れば有力な候補者てあつたてせう。又尾崎といふ人も一度大臣になつた人だ。然しこれは東京市長といふ役目を承はつて居る。さういふ役目を有つて居る人はまァ〳〵役目に滿足さしておいて、議長は外に讓れといふ事にて

もなりますか。尾崎君自身も多分さういふ考でありませう。さうすれば熱心な運動をやつて、是非議長になりたいといふ競爭者は、矢張り杉田君と大岡君でありませう。

然しながら此二人であつたら大體の上から言つて、あんまり政友會の爲めにならんかも知れぬと思ふ。一方は技量が乏しい。一方は人望が足らない。然し私の考ふる所では政友會の多數は杉田君を歡迎しはしないかと思ふ。あの人はまア自由黨の古兵(ふるつはもの)で、技量がなくても聲望がありませう。私は大岡君が負けだらうと思ふ。其外に誰か有力な候補者があるか私には一寸考へ當らない。

△抽籤が宜い

伯爵 大隈重信

議會に威嚴が有るか、議會に威嚴を認ぬとすれば其議長なんどは問題でない。如何でも宜いぢやないか、好い議長を選べば其議會に威嚴が附くといふなら格別だが、其様な事もない。すれば我輩には誰が議長になつたからとて構ふ事はない。

年からすれば杉田は大岡の上だし、閲歷からいつても大岡よりは先輩だ、すれば先づ見た處では杉田の方が好さ相に見える。が杉田はもう一度議長になつて居る。大岡が望んで居るか如何かは知らぬが、望んで居るとしたなら今度は大岡が出た方が宜いもしれぬ、同じものが二度出るよりも顏の變つて方が氣持も新たで宜からう。

それに杉田は、聞く處によると少し老い過ぎたらしい、耳が遠いとやらいふ事だ、議長は聰明でなければならぬ、其中にも耳が一番大切だ、此點からいふと大岡は若いだけ耳が近いだらう。すれば大岡の方が宜いどちらにした所が議長の力で議會の威嚴を増すでもなければ損するでもないから如何でも宜いぢやないか。

不人望の噂? 不人望必ずしも惡くはない、力ある者は人に嫌はれるものだ、嫌はれるといつたら原の方

が大岡より上だらう。それはそれ丈力があるからだ、星亨などは其最も嫌はれる方だつたらうが、嫌はれもせず好かれもせぬ人間なら平凡だ。爲すなきの人間だ。袁世凱は如何だ、最も不人望最も嫌はれたものだらうが、一旦時非にして天下濟世の才を思ふ時になつたら又出されたじやないか。此先如何なる事かしらぬが兎に角今の處てはあれ丈にやつてる不人望てなくてはいけぬが。不人望にも不人望がある。大岡の不人望がチヨコマカした小さい事で彼是言はれて居るといふのならいけぬ、が其處は我輩には分らぬ。

一寸見た處押出しも好し、辯も切れる、ニコ〱して居て愛嬌も宜し、そして小豆轉がした樣に悧巧に立廻るから善さ相なものだ。

尾崎を推すものがある？　尾崎に議長は勝るまい。尾崎は議長に不適任だ。尾崎は如何しても辯論の雄だから戰士だ。一騎打の將だ。が尾崎の働く舞臺は最う無くなつた、今の議會は辯論ては動かぬ。もつと別なもので動いて居る、其處が我輩の議會に威嚴を認めず價値を認めぬ所以てある。

此樣な議會に議長なんぞ如何ても宜いぢやないか、誰ても望むものに遣らしたら宜い。杉田と大岡とどつちも望むなら仕方がない、抽籤てやらしたが宜い。其方が宜い。

△杉田君と大岡君

田川大吉郎

◎兩君の中ては、僕は比較的大岡君を知つて居ます。杉田君に就ては殆んど知りません、僕は其古樸なる風貌を衆議院に於て見るを樂しむの外は、只モー日本政黨史の初世紀を飾る、其歷史上の人と思ふて、床しく、懷かしく感じて居る位ゐに過ぎないのです。

◎兩君に就てと謂ふよりも、寧ろ衆議院議長に就て委しく申上げて見ませう。

◎僕は日本の衆議院議長を今日に於ての晴の位地、名譽の舞台だと思ふて居る、其理由は且らく舍いて、總

理大臣なら兎に角、總理大臣て無くも、內閣の浮沈を双肩に荷ふて立つ、有爲の位地なら兎も角、然らざる限りは、僕は衆議院議長を以て大臣等の位地とは換へ度ないと思ふて居る、此點から僕は長谷場氏が、議長を去つて大臣に爲つたのを、議長の爲にも惜み、特に長谷場氏の爲にも惜んで居る。

◎長谷場氏既に然り、途上の說に由れば元田肇氏は、氏さへ欲すれば、自然議長たることを得べき順番に當つて居つたといふ事、然るに氏はそれを棄てゝ、拓植總裁と爲つたといふ事、果して其ならば、又元田氏の見識意氣をも疑はざるを得ない次第て、僕は重ね〳〵衆議院議長の位地の爲に之を惜まざるを得ない、日本の憲政の振はざる所因は、こゝにも痛切に看ることが出來ると、僕はつく〴〵感じた次第である。

◎所へ、大岡君と杉田君が此位地を爭はるゝといふ噂、其力倆からしていへば、僕は遲疑せず、團扇を大岡君に揚げる、僕の見る所ては、大岡君は議長としての適者てある、大岡君の才がそれに適して居ると謂ふのみに止まらない、僕の見る所ては、大岡君は衆議院中、罕に見る所の議長の適者てある、長谷場君も相應の適者てあつたが、單に伎倆の點から言ふと、大岡君は長谷場君に優るとも劣らない議長の適者てある、僕は大岡君の議長振を數次見たことのある經驗に徵し、確信を以て然く斷言する。

◎杉田君も林田君等に言はせると、立派な議長てある、立派な議長に爲る見込がある、見かけに似合はぬ上品な所もある、故に杉田君は割合に其下に喜ばれる議長だ、而して大岡君は、失禮ながら其下にそれ程は喜ばれぬ議長だ、勿論、林田君は八面玲瓏の人、大岡君を議長にいたゞいて進むには、一點の難色もあるまいけれど、大岡君はどこに欠點があるか、其下に、何となく嫌はれる、いやがられる、時としては沙上の偶語を招き易い傾のある人だ。

◎杉田君を議長とすれば、其しくじつた場合にも多少の同情があつて、滅多には死地に陷るまい、大岡君を議長とすれば、容易にしくじるまいが、少しても、し

くじつたと爲ると、議場は騒々しく爲るに極まつて居る、それこそ八方の猛者が、八方から起つて、遠慮會釋も無く詰めかける、揚げ足を取る、理窟を言ふ、こねる、もじる、騒々しさ限りもあるまい、無論、此時に當つても、僕は猶ほ、大岡君の執拗の意地、縱横の機才、どんな調子で、どんな工合にこれを斬り開くか、それはあせりもしよう、あはてもしよう、やり損ひも亦しようけれど、そこに彼がもがいて努める、其才智の絞り工合を、興味を以て眺める一人と爲るのであるが、僕は、大岡君の伎倆を信ずるだけ、其波瀾洶湧の狀を、一層甚しからうと想像するものである。

◎それにも拘らず、僕は大岡君の議長と爲ることを最早既定の事實だと思ふ、ナニそんなことがあるものかと謂ふ人もあらうけれど、僕は今に至つて之を疑ふのは、餘りに邪慳に過ぎる、これはモーさう極つたものと見るのが、先づ政界の普通の情理だらうと思ふて居るのである、或は尾崎行雄君との說をも聞かねては無いが、僕は敢て否と曰ふ、僕は其說を爲す者を以て第一に尾崎君の心事を知らない人、第二に又餘りに政界の情實を無視した人と曰ふ、政界の水の流れを其自然に導いて、それに多少の路をつけるだけならば、今年の議長の椅子は、どうしても大岡君のもので無ければなるまい。

◎杉田君に對しては、僕は、君が議長を望まれざることを望む、僕の思ふ所を言へば、杉田君の如き、古自由黨の名士は、今は大臣とか、議長とかの位地を見向きもしないで、所謂冠冕を土芥に比して、高く擧がり、高く止まり、英雄身後の名をよくする途を考へらるべき時だと思ふ、或は門下生等が、君の掉尾の名の爲に、議長の位地を望み、之を競ふのだとも謂ふが、以ての外の事、これは君の譽れを揚げんとして、反つて君の節を汚す者である、即ち君の晩節を汚す者である、四時の序、其功を成す者は去る、自由黨の志士には自由黨の志士の面目本領があつて、今日は其自由黨の志士が、往年の氣を負ふて得意高歌すべき時では無い、英雄首べを回らせば即ち神仙、僕は君が此際は寧ろ長松

子に從つて遊ぶ英雄神仙の事を願ふのである。

◎大岡君が議長と爲つて、杉田君が平の議員で、其の下風に屈するは、君の耐ふる所で無いといふか、何をか下風と曰ひ、何をか上流といふ、其上流とか下風とかいふことは、畢竟するに世上の俗毀譽に執着した說では無いか、杉田君の經歷と、其年齒は、最早其執着から離るべきの時では無いか、顧みれば自由黨の志士、其初めは皆花の如くであつた、花の如かりし志士の中、君は僅に生き殘つて居る一人である、僕は君が大臣たり、議長たることを以て、其始めの花の如かりし生涯の好き結末とは思はない、花の如く開きたる者は又花の如く散るべし、士の散り際は殊に大事である、僕は此見地から之を君に希望するのである。

◎添へて申すが、僕はかゝる意味の高踏勇退を敢て君にのみ望むのでは無い、大石正己君は近年禪に凝つて居られると聞く、これ君がやがて禪に隱れらるゝ前兆ではあるまいか、果して然らば又以て君の晩年を飾るべしである、犬養君は大石君よりも我執の强ゐ人である、而して其志は常に支那に存じて居る、支那の革命亂も意外に刧を經た今日は、犬養君の雄飛を促がす上乘の機會を作りつゝあるのであるまいか、僕は此樣にして、政友會にも、國民派にも、老來世機に僻しといふ人の起るべき氣運を待望しつゝあるのである、而して天成の好機、杉田君に其魁を爲せとすゝむるのである。

◎此くて尾崎君は動かず、杉田君は出でず、大岡君の舞臺は獨り手に開かれて、此度の議會は大岡君の指示に任せる事に爲る、好くと好かないとは合いて、僕は今回の衆議院議長の位地を此樣に見て居る。

◎若し夫れ大岡君が衆議院議長の官舍に入ると、僕は同官舍が、久し振にして、思ひがけ無くも、新たに美術の粧ひを受け、歷代の議長官舍に罕に見る趣味を加ふるだらうと思ふのである、これ亦一つの生彩である、但、其趣味の高下、深淺は、謂ふ迄も無く、人のすき〲、要するに品題の外である。

△結局は大岡のもの

四谿隱士

杉田は兎に角も舊自由黨の有志家て、自由黨となつても節を曲げずに來て居る、素養もある。漢籍も見て居る。がどーも氣轉が利かぬ、法律思想もなし、人間が堅過ぎる。といふ點て、其手腕からいふと如何かと思ふ。が今日ては手腕よりも寧ろ經歷が大切と思はれる。

大岡は傲慢の風があつて應對が下手である、初から自由黨て育つた人てなく、自由黨的の發達をして來ぬからだらう。改進黨から國民協會に轉じ、それから自由黨に移つたのだからね、思つたより普通の學問があり、漢籍も少しは讀める、法律思想もある、相當の辯舌も持つて居る。議會の上て働ける。いや僕の見る所ては慥に議會中の第一流と思ふ。

どちらも望んては居るが、何れかといへば大岡が結局議長となるだろうと思ふ。

△大岡と杉田の人物

覆面冠者

大岡の雅號は硯海といふのてあるが、古から馬關の海を硯の海と稱するから、彼が馬關の海近く生れたといふ事は其雅號を見ても分る。馬關から日本海岸について北の方へ行けば川棚といふ溫泉がある。其溫泉は昔井上侯なども隱れた處て、九州の邊の人がよく遊びに來る所てある。その溫泉から二三里行くと、矢張り海岸の田舍町に小串といふ處がある。そこに大岡育齋といふ漢方醫がある。なか〳〵門構へなども大きくやつて居つたが、大岡は其人の息子てある。當時の青年にはよくあつた事てあるが、十八歲か九歲の時に脫走して東京に上り、司法省の法學校に入つたが、卒業せずに廢めた。卒業せずに廢めたが才氣があつたものだから辯護士になつた。殊に彼は刑事辯護にかけては非常に得意てあつて、彼の辯護はよく人情に訴へて、裁判官をも感心させ、傍聽人をも泣かせた相だ。刑事は

民事と違つて法理てないから、彼は人情論から旨く説きつけるのである。彼はいはゞ一種の巧言令色の徒てある。さう旨く行つたものだから可なり財産を作り、それから鑛山などにも手を出して相當の富を成した。彼はなか〱よい鑛山を手に入れたもので、巨智部博士なども大岡はよい鑛山を持つて居るなどゝ羨んだ相てある。近頃は骨董に手を出したが、一彼の骨董は決して損をしない。兎角儲ける事ばかりをやる。どこかコスイ處がある。其コスイ處が人氣のない所だらう。彼の弟に大岡力といふものがある。之は「京城日報」が「國民」のものになる前に、其社長をして居たのであるが、私立法律學校の出身て、才は到底兄貴に及ばない。此頃は骨董を商賣にして居るけれども、此方面に於ても矢張り兄貴に及ばないといふ話だ。

大岡といふ先生はなか〱の交際家て、ドノ元老の處へも出入する。然し今日ては三田の桂公の處へ一番足繁く行くやうてある。つまり利を見て走る性質て、利益のある所は何處へても行く。彼は長州の出身てあるが、彼を重もに引立てた人は矢張故伊藤公てある。こゝによく彼の人格をあらはした面白い話がある。一體伊藤公と山縣公との軋轢は古いもので、兩公に昵近して居る人程其間の幾微に通ずる。山縣公は澤山幕僚を持つて居つて、山縣の爲めに死ぬるといふ乾兒が可なりある。處が伊藤公は適材を適所に置くといふ流儀て乾兒も何も作らない。て、伊藤公が死んでも其爲めに死ぬるものがあるまいといふ噂の盛んにあつた時だ。一夜大岡は伊藤公と閑談の末に、公に向て、「閣下は國家の大忠臣にして勳功他に比すべきなきの大政治家てあるに拘らず、閣下の爲めに一命を抛つの志士なしと噂せらるゝのは如何にも殘念てある。閣下萬一の際には私不肖と雖も閣下の爲めに死するの覺悟てある」と熱誠らしく言つた。すると伊藤公顏色を變じて怒つた。「貴樣は甚だ不埒な奴だ。オレの爲めには少しも死んて貰ひたくない。日本の國の爲めに死すべきて、一私人の爲めに死ぬといふ馬鹿な事があるか」と酷く叱られた。これは大岡の人格を丸出しにしたもので、

彼は萬事此調子である。伊藤公も世話はしたものゝ眞から彼を信じてはゐなかつたらしい。小器用て役には立つし、永らく政友會の爲めに働いて、總務委員にもなつて居つたから、重寶な奴位に思つてゐたらうが、忠順な人物とは思うてゐなかつたてせう。つまりいゝ加減にあしらつてゐたゞらうと思ふ。

大岡は又餘り學問のない男だ。大してわるい人てはないが、何かこう小人のやうに思はれる。一言ていふと忌味のある人だ。元老諸公には嘗め附くやうにするが下の人にはなか／＼威張る。中央新聞の社長としても下の人を隨分ひどく使つたやうだ。大岡は政友會員として西園寺侯の爲めにも勤めるか、又桂公の御用も聽く。文章も大して上手てないが一寸は書ける。時には硯海と署名しても書く。兎に角一寸器用な男だ。弟も一寸才子てあつて文章も書けるが、文章にかけても矢張り兄貴の方が上なやうだ。彼は二人の客が居ると、一人の有名な人には挨拶するが、有名てない方は見向きもせぬといふ方だ。だから政治家として利巧なやうて、又拔けて居る所もある。然し選擧などにかけてはなか／＼旨い。田舍の人を外らさぬ呼吸などは旨いものてある。今ては自分の生れた所からずつと離れた所までも手を延ばして、選擧について非常に手廣い根據を持つて居る。彼が大臣を望んで居ることは非常なもので、大臣になりたいと寢言を言うたといふ事が彼の友人の間の噂になつて居る。

杉田は見た事はあるが、親しく話した事がない。アレは以前は非常に評判の男だつた。福井縣の大庄屋いはゞ郷士の家柄て、財産なども餘程あつた。それが父親から續いて政黨の爲めに使ひ果した。岩狄越前地方に於ける自由黨の大元老てある。彼が縣會議長をやつて居る頃には人望隆々どして「國士」を以ていはれたものだ。然し其頃からして、大岡のやうに才のある方てはなく、何處か頑とした所があつて重きをなした。今ては貧乏にもなつたし、又餘程耄碌して氣焰も上らなくなつた。人望も國士と呼ばれた頃程はないやうてある。然し何にしろ大きな財産を政黨の爲めにみんな使つた

のであるから、矢張重ぜられては居る。

大岡と杉田とは一見しても違ふ。大岡は紳商のやうな風がある。杉田はどうしても百姓としか見えない。頬が痩けて髮が蓬々として居る。大岡は髮が無く肥つて居る。大岡は金持の如く見え、杉田は貧乏人の如く見える。大岡は物を言ふにも勿體振つていふし。杉田は朴柄にして些の飾氣もない。杉田の人物をあらはす滑稽な話がある。私が東海道の或旅館に泊つてゐた時に杉田も其處へやつて來た。例の通り百姓としか見えぬ杉田であるから、其旅館では明いてる室があるのに、わざ／＼行燈部屋のやうな處へ突込んだ。其時あとから又後藤新平がやつて來た。後藤はあの通り風采堂々として居るし、二階の一番よい部屋に案内された。杉田の方では後藤の來た事を知つたてせうが、後藤は杉田の來てる事を知らなかつたてせう。そこの息子は東京の學校へ入つて居つたが、其時家に歸つて居つて翌朝宿帳を繰つて見ると衆議院議長杉田定一といふのがある。そしてその人は行燈部屋のやうな處に置かれて居る。非常にビックリして大いに惶てたが、其時はもう汽車の發車に間がなかつた。て、仕方がないからステーションまて人をつけて叮重な見送をさせたら、杉田は實に氣の毒だといふて大變禮を言うた。宿屋ては實に感心な人だといふて今ても褒めて居る。これが大岡ならばさうは行かぬ。宿屋にても何ても威張る。若し杉田のやうにされたら、失敬な、衆議院議長の大岡を知らぬかといふ風をするだらう。此威張らぬのが杉田の人望のある所以だ。大岡はどうしても成上り者の風があり、杉田には鄉士の面影がある。大岡は東京市會議長もやつた人てあるから、衆議院議長をやつても當世流に旨くやりませう。が人望はなか／＼得られまい。

大岡はあの通り運動も旨いし、働きもあるに拘らず、議長にも大臣にも長谷場より後れた所を見ると、どこか人に好かれぬ所があるに違ひない。演說などもなか／＼旨いもので、杉田などは足元にも追つかない。杉田は護國寺の裏に二千坪か三千坪かの土地を買

つて家を建てたさうてあるが、イクラか金ても出來たのか知ら。杉田は極めて質朴てある。議長の時などは今少し威張つてもよかりさうに思はれた。役人風は少しもなく、田舍へ行つて物を買ふにも一々お辭義をして買ふ。矢張庄屋か何かの大きなものに適當した器と思ふ。事務家として腕を振ふ人とは思はれない。(完)

和歌

尾上柴舟選

○　西村孤舟

静かなりかゝる夕にけだものは姿も見せず死ぬといふなり

若ければなと言ひなして遊びたる時をみかへる我れの悲しさ

大空のそこひに近く白き鳥秋に光りて南にとべり

つゆ草のくきのすれあふ音のして初秋の風生れ出づる朝

別れたる二人が途(みち)にあふ如く指の小きずのいたむ夕ぐれ

赤あきつはねひからして墓草の上にむらがる秋のあかるさ

○　細井魚袋

ひよわなる妻に味方し父母とあらそひし夜をこほろぎのなく

あるときはかくれて妻と父母をあしざまにいふ身となりしかな

悲しみにつかれしまふたなにを見る上總の海の秋のゆふぐれ

曇日のもとを額(ぬか)たれ道ばたの石をけりゆく姿かなしも

むらがりてまづしく咲きし山そばにわれうれひありあはれ秋風

そばの花さびしう咲ける野の中のあかるき家にものぬへる妻

砂山のひなたに伏して日にひかる東京灣を見る男われ

○　千住湘江

さびしきは虫の音ならず蒼ずめる月かげならず君がよこ顔

おど〳〵と世の眼に怖ぢてあるほどに若き心は釘うたれあり

いまだなほ心うごきぬ提燈のともしの風にあふらるゝごと

たへがたきやるせなさこそいとよけれかくして

あれば我か生ける知る

碧梧桐の聲たてゝ泣く十月のたそがれ時のものなやみかな

ぼんぼりの灯をみるごとくいとあはき悲しみぞ來る宵を歩めば

世に生きて世ととほざかりわれを見るあはれの姉をもちしよろこび

○　　押垣青花

初秋の夜の青さをふるはしてなく虫のあり別離のかなしみ

しづ〳〵と月の上れる青き夜を霧のながるゝうすら悲しさ

君を戀ふわれの思ひをくもらしてなける月夜の遠きこほろぎ

うしなひし愛になげよとそゝるかやこほろぎのなく白き月かげ

秋のきてとり〳〵虫の鳴くことがいかなれば斯く身にし泌むらむ

○　　京極秋二

秋の山ふとの思に君が名をよべば木だまの何ぞ淋しき

月ありきたれしうなじの青白き色のみ今朝は眼に浮びくる

霜ひかる枯野のすゑにひとすぢの糸の樣なる青き海かな

つと馬車が森を出づれば眼もはるに淡く煙を吐く山ぞ見ゆ

ふととれば鏡の底にみにくくも我泣顏のうつる夕暮

○　　藤見さよ子

わりなうも水のほとりの葦の葉に悲しき夢を思ふ夕ぐれ

月さやかに照らす野の面にやせ肩のわがうしろかげみるもさびしや

泣きたさをひともと殘る淋しげのさくらもみぢにまぎらす夕べ

椰子の花咲くらむ國へうばはれて行くわれをしも忘れたまふな

かしらいたく重き夕べの空の色水のいろにも秋はゆくかや

母さまと君にならひてひくう呼ぶ我が聲音さへうれしかりしを

○　　林　久男

別れ來し都會に紅き灯のうるむ頃とし思ひ森に入り行く(伊賀にて)

仄明るき草の匂ひにひたりつゝやるせなう君を思ひつゞくる

悲しみの失せて佗びしき男住む家に來てなけ秋のこほろぎ

○　　内田月城

君とわかれはこばす足のたゆたひや青き蓬に月光の沁む

風絶えてわが青蚊帳の搖れやめば夜の更けゆくに馬追も啼く

野にきたり白き花などつみてゐぬなげきのゝちのさびしき心

○　　北里麥笛

人遠く秋の野に來てしみ〴〵と日のぬくもりをなづかしむ晝

草の花多く實となり逝く秋の野の柵にして見る夕燒の雲

落日のあとの小庭をさまよひて淋しくなりぬいざ灯に行かむ

たゞ白き蒲團かぶりて秋の夜を寢たる男は淋しからずや

○　　梅原雪花

ひる過の微温のなかに蕎麥の花ほろ醉ひしごと咲ける靜けさ

いづこよりいづこにか行く赤あきつ汝思ふとき涙わりなし

この手足また今日の塵にまみれむや曉の風流れ初めける

○　　長谷川牛丸

病む眼もて庭など見ればうすものにおほはれしごと悲しみが來る

見たくなき鏡を心强ひて見す黄なる顔また吾が眼にうつる

○　　中村柊花

夜もすがら透き羽の露をふりはらひなき明せしかあはれ鈴虫

秋くれば不孝の男ひそやかに旅を慕ふて寢るをしらずや

わが聲か茫莫として果しらずまよひゆくなり秋晴の野を

○ 齋藤甫

柳の葉ちり〻ちり〻と降りそゝぐ廓の前のちひさき流れ
君がおとす泪つめたき水となり秋の光りをやはらかに吸ふ
見もやらず來たる人をばあてみよと君言ふ儘にちひさく答ふ

○ 戶島家路

新刊の口繪めくりて書肆に立つ明るき瓦斯の下の人々
十月の淋しう落つる夕陽(ひ)の前に十字(クロス)の塔の啓示(さとし)に立てり

○ 井口葉歌

遠き灯もかなしや一人陸橋に立ちたる心秋にあひぬる
ふと胸に冷たき思浮べつゝ霧ながるゝ街をわが行く
ほんのりとさ霧の中に見出せる名知らぬ國をながむる心

○ 山本玉洗

天地の衰ふる時わが魂は何處に行かむそれの知りたや
天地もわれの如くに昨日に似し事繰り返し衰へつべし

○ 久津村茫人

月見草仄かに白き夜の霧にふるへて咲ける河原かなしや
凝つとして物を見つむる君が瞳の黑く輝く淋しき日かな

○ 小川流葉

我が吐きし煙草の烟の事もなく空に消え行く影のさびしさ
花なれば摘まねば物の飽きたらぬ心となりて悲しまぬ我
憐れみは女に悲し羨みてねたまるゝことの如何にうれしき

○ 中里富

おほどかに裾野の傾斜きはまれるはての山々雲かゝるなり(乙女峠にて)
淋しくもはなれて獨り歌さゝて被く蒲團のかをり親しき

○ 若木花次郎

伊勢の津のくるわの話船頭の伯父に聞く日に降る小雨かな

新らしき家の主となりてより眼ざめにすへる煙草の味かな

ところところに若き女が布晒らす庄内川の秋日和かな

○　鈴木風影

屋根低き家の彼方に久世山の夕日の黄葉てらてらと見ゆ

赤城山我が行く方に見え初めぬ心漸く喜びを得つ

○　村上白愁子

野より山にわが往き來する一條の路より見たる初秋の海

眠り落ちし都會の上に初秋の月の光が白々と照る

○　みすゞのや

櫛とれば君が落毛のからみ居ぬ今日もさびしき留守を吾守る

君歸り來りしゆうべまたも得ぬはじめて君を得し日のこゝろ

○　川田登美雄

誰やらが待つ身となるなと云ひたりし言葉思ひぬ君を待つ宵

別れ來しおそき夜落葉ふみてよりおぼえ初めけるふところ手かな

○　萩村秋水

押入れの暗き隅よりわが宵に迫る空氣の寒き旅の夜

○　木森刀水

二ッの目手にておほへどなほ君のうつれるを見てつひにおほはず

君得むとましぐらに行く狂人の我れなるを知りおどろきしかな

○　龜山敬外

消ゆべくもあらなく思ふ天地に初秋の風吹き初めにけり

わがゆくへ極まることの思はるゝ日ありと思ふ日のさびしさや

○　加藤爲子

うれしきは箱根の宿のはした女が十七の日のわれを知ること

旅心わくがまゝにも筆とりて誰れにともなく消息をかく

○　森　青　栗

いさかひて妻をはなれしわが身こば酒舗の白き卓上になぐ

ものおもひつかれし頭玻瑠窓の夜の空氣にひたす一時

○　増　田　未　狂

うす光る盥の水に釣りて來し金鮒などをはなすたそがれ

○　中　里　富

彼岸花むらがり咲ける野の涯の青やまなみに秋はうごけり

百舌が啼くくぬ木林に秋草をしきて歌ふはかなしき歌ぞ

○　雲　の　城

月白き夜半にかへれば下宿屋の障子一間が寂しげに浮く

○　山　本　春　久

自分てふものが此の世に生れ來しことがそもそも悲しかりけり

悲しみを忘れんとしてことさらに弟などを叱る此のごろ

○　崖　野　名　護　蘭

吾が煙草いさり火ほどは明るらん海につき出し高き崖の上

○　田　久　保　紅　村

六段の箏曲を引く君が顔自由劇見る君の面ざし

秋の町アスハルト煮る工夫等の眞黒く光る顏に日は照る

○　木　村　北　鳥

離り來て夜々好くこそさびしけれこの野はわれを吸はん灯もなし

○　酒　井　夕　林

ほのしろきあしたの色は船室にならべる青き寐顏を匂へり

我が船のそばを過ぎゆく漁船の灯の明けの海につらなりて見ゆ

○　京　青　磁

味噌汁の香など漂ふ秋の朝初めてふれる霜もなつかし

○　高　波　死　江

いまさらの如く仰ぎぬ晩秋の風吹く晝の空の紺
青

○　高瀬焦雨

晩の夏しやがれ聲して啼く蟬と欅の黄いろき葉
となつかしむ

○　前田黄昏

あざけりし男の顔を思ひつゝ冷たき床に君れを
哀れむ

○　宮村哲雄

秋雨の夜はかず／＼の悲しみを獨りもとめて泣
きぬいるかな

○　川村紫水

離れたる戀のかへるを待つ如きわびしき日なり
秋雨のふる

○　村上骨仙子

秋の日のうすら光が想思樹のわくら葉の上をは
ふが悲しさ

○　石引夢男

ほの白き葵の花咲く大洋の夜明の色のなつかし
きかな

○　森生栗

われとわが髪をつかみて打ち伏し口惜より胸よ
りせまる思に

○　空哀子

パトの灯に花柚の匂嗅ぎし夜の胸の冷たされ
かしあるらむ

○　下浦潭水

秋の日を片頰に受けて物思ひし昔が戀ひし窓が
戀ひしき

○　和地永生

わが摩耶よわが六甲よ淋しくも漂泊人は汝に別
れむ

○　香取秋二

ひた／＼と波よる岸のかけ石に座して夜潮の白
きを眺む

○　渡邊紅影

をさなき日暗かゝれしらかべに滲むが如きタ
日まつはる

應募和歌は
東京市小石川區原町百十五番地尾上柴舟宛
封筒の表面には「中央公論歌稿」の六字を朱書すべし

俳句

除夜　高田蝶衣選

除夜をこの貧に居る疊野草とも　杜鵑花
除夜を饑く講堂の灯人なき如し　同
除夜うれし文屑に相思の君据えて　同
寡言會遊の人と在り除夜夢の如し　同
水郷を恃む糊口も思ふ除夜　同
除夜をこの尻重に訪はれ酒のあり　同
人をしての擯斥に除夜莞爾たり　同
陶家なれば冷さずの竈か年名殘　花駁史
綻を縫はて店子や今年盡　同
除夜の戸の風鳴りも殊に婦のなかり　同
舟の年夜を艫波に搖れや行く　同
行年の請托も寄する侘しけれ　同
雜魚寐亦咎めずと大年の座や　同
鴛鴦の能う見しが除夜の宿となり　芋郎

除夜の宿勞ふに樽缺かざりし　同
除夜人の果報を借に訪はれたる　同
親子鳥また鳴くやうや除夜の森　同
除夜の戸の支へにや臼置かれたり　同
除夜を限り貯積の物に灯を献ず　白靑
建言の成りし報知も除夜半に　同
人無きに點灯も會館の除夜　同
除夜祭る卓上に凝冷の物　同
寺訪うて除夜の灯守に道歌聞く　冬城
麹室に火運ぶ婦除夜の座を起ちて　同
改版に削らん章や除夜に讀む　同
勝公事の廻し文來る大晦日　同
除夜の宿祖暦を祭る庭灯　波月
除夜の威文才もなき窮措大　同
島社渦風の除夜の灯を上げに　同
書架の跡青う疊に除夜の宿　同
除夜の眼故人の驕奢思ひ覺む　星象
眼及へば働く除夜の手足かな　同
小判まく噂に過ぎし廓の除夜　同
除夜貧し尼が蓄借りにけり　同
迫るところありて除夜の慈悲めり　摘星辰

川を隔つる筍峯に除夜の鐘起る　同
外臣をまじへて除夜を軍議寒む　同
公私兩立せて除夜の卦に惑あり　不粱庵
道を説く師に餘財ある歲除かな　同
除夜の鐘紀文は耳をほらせけり　同
除夜の鐘百鬼は西に走るべし　蒼蛇
家用與らず殿に除夜を宿直して　同
挂冠の年の除夜爽にあるが如　同
客去つて年の夜惜む鼓かな　蝗郎
我老いたり一管の筆除夜に泣く　同
お藏臼をかたくとざしぬ年の宵　同
師が耳朶の大きさを除夜の灯に思ふ　愛香
家を分けしも除夜は一つに語らひて　同
仕官すれば除夜も他國にこの旅泊　同
集稿の一掃除夜の努力かな　但翠
角焚べて大望を占す除夜の爐に　同
代參の闡の幸大廟の除夜籠り　同
除夜の星や門榻巨人の如く立つ　蒼古
凛零の山驛に二十五回除夜　同
除夜更けて波響に醒むる懷思かな　三石
短檠の一と時映ゆ除夜に詩選なる　同

嗚咽の聲降れる宿り除夜の風　兎國
耳順にして遺獄解しぬ除夜の風　同
除夜寒う主君の短を言ひ得しや　綠羊
除夜寡兵神加護に氣を張らせける　同
人魚見し漁夫呼んで除夜を話柄富む　柳子
要するに髮染めよとの書除夜に來て　同
除夜の鐘一味に不歸の賊ありて　象眠
端山なる庵居の我や除夜安し　同
師事すれば粥に貧せず除夜の鐘　胡鬼子
開廳を飾る梅買へり除夜の市　同
政々難じて筆禍悔ゆ除夜雨淋し　六綠
犬吠ゆを塀に鞭うつ除夜の主　芳葩
泣訴容れられし歸路除夜の市ヶ見て　愚案
佯狂も年ありてこゝに除夜の鐘　紫明
先住を頽爐に慕ふ除夜の鐘　楚丘
禁足の我踏む除夜の餅席　愛子
大三十日通夜の大爐の火勢哉　秋紅
新發意の病に侍せり除夜の鐘　行々子
遺孤擁す苦心に知るや除夜の霜　國郎
戀に泣かず宿望を想ふ除夜の窓　青輪
障子張りも終ふに茶呼ぶや除夜の鐘　曉湖

髮洗ふ湯の煮えかへり除夜の鐘　帶柿

妻の忌む一夜錺や除夜の鐘　舞都波

社前除夜を明かす人あり薪焚いて　孤風子

業によりて得し名衰へぬ除夜の鐘　丁字

課題　初暦、古暦(新年號)　十二月五日〆切
　　　千鳥　一月十日〆切

規定　▽一人卅句限▽新年號は四十句限〆切繰上
　　　▽用紙半紙▽淡路假屋在釜口高田蝶衣宛

雑詠　蝶衣

灯光に菊死して四壁氷り照る

風に撓む戸に貫木す爐守り居て

走筆冴えて雁背の霜を思ふかな

雨聲釜中よりす除夜詩を祭る

通り魔に障子陰るや短き日

大年の魚の荷殻や有馬道

ゆく年を宿の女と通ず呪禁師

一顆の柚子惜み哭れて秋寒ムを知る

吹寄せ葉今朝多き戸口弊履凍て

年の忙を種取に又訪訪はる宿

蛾害の木根に鹽俵卷く　殘暑(正誤再出)

評論

バルフオア氏退隱
（英國統一黨首領更迭）

一

十一月上旬、英國統一黨首領アーサー、バルフオア氏、飄然黨首を辭す。天下之を聞いて駭然たり。知らず、彼は何故に退隱せざるを得ざりし乎。

彼や齡正に六十有三、決して老ひたらずと言ふ可からず。政壇に起つと四十年、幾度か大臣となり、宰相となる、人生の榮譽、玆に極ると謂つ可し。況んや頃日屢々不健康の報を傳ふるに於てをや。彼れ已に功名に飽き、權力に飽き、江山依然として靑き處、獨り淸風に臥せんとする乎。

彼や生來文學を好み、哲理を談ずるを樂む。政事に齷齪して、錦心繡腸爲めに汚るゝの想あり、如かず俗事を一擲して、好む所に向はんには、斯くの如きもの彼が退隱の眞情と見る可き乎。

否な〳〵、斯くの如くんば、吾人は多く言ふを欲せざる也。然かも事の實際に徵せば、彼は自ら退隱したりと言はんよりも、寧ろ退隱を餘儀無くせられたりと言はざる可からず、何ぞや。彼が退隱の原因は統一黨員の不平也。換言すれば、彼は其幕僚の意を失ひ、協力者の尊信を失ひたりし也。

二

アーサー、バルフオア、彼は僅かに運命の寵兒也。

一八四八年ゼームス、エム、バルフオアの子として生る、母は即ちサリスベリー侯家の第二女なり。二十五歳にして下院に入り、四年後サリスベリー侯、外相となるや、一躍外相秘書官となり、其サ侯と共に伯林會議に臨みたりしは人の知るが如く也。一八八〇年以後彼は重に議會に活躍し、所謂第四黨として靑年政事家の牛耳を執れりき。一八八五年より六年迄地方行政院總裁となり、一八八六年蘇格蘭事務大臣となり、翌年

愛蘭事務大臣に轉ぜりき、爾後或は大藏卿となり、一九〇二年サリスベリー卿の後を繼ぎて首相となる。日英同盟條約、英佛協約の如き、彼が執政期に締結せられたる所也。

アーサー、バルフォア、彼は慥かに運命の寵兒也。彼の榮達が斯くの如く急速なりしは、彼自身の力と言はんよりも、サリスベリー侯との血縁あるが爲めなりき彼固より凡物にあらず、凡物ならんには、サ侯の後援も其甲斐無かりしならん。然かも彼の榮達を以て、彼自身の實力に執りて開拓せられたる所とは言ひ難かりき。其一躍外相秘書官となり、再躍地方局長となり、三躍蘇格蘭大臣となり、四躍愛蘭大臣（當時愛蘭問題喧しかりし際なれば非常の重職）となりたるは、異常の進達たりき、左れど彼は其榮轉に先ちて未だ曾つて之が昇任を辯護するに足る雄腕を示せるとあらざりき。

斯くの如くなれば、彼は裸一貫の男としては、到底首相若くは黨首の器にあらざりき。他は少焉らく措くも、彼には一大缺點あり。何ぞや意思の薄弱則ち是也。

三

人或は言ふ、黨首の資格は雄辯に在りと。蓋し下院を以て政治の中心とする英國に於ては、雄辯は黨首たるの一要條件たらん。然かも吾人は此點に於てバルフォア氏の非難す可きを見ず、學究的と嘲られたるは昔日の事、今日に於ける彼の辯論は、首相アスキス氏の犀利を缺くも、堂々正々、洵に一世の雄たるを失はざれば也。人或は言ふ、黨首の資格は浩量に在りと、吾人は又此點に於てもバルフォア氏を難するの意無き也

然れども黨首には更らに重大なる要求あり、意思鞏固なると是也。決斷力乏かる可からざると是也。

バルフォア氏は我西園寺侯に似て物に凝滯せざる所あり、私人としては美質ならんも、黨首としては何となく不足勝ちの點ありき、殊に彼は往々自ら堅固の主張を有せず、他人の意見に動かさるゝと多かりき、フォトナイト、レビュの一評論家は彼を論じて曰く、黨首にして誤謬に陷るとするも、自身より出でたる誤謬ならば、猶一縷の希望あり、然れども常に他人の政策を採用し、殊に或時は一方の助言に從ひ、或時は他方の助言（全く異れる）に從つては、最早や何等の望みあらざる也と、

吾人は死人に鞭つを欲せず、之と同じく又た自ら隱退したる友國の名流を貶黜するを欲せず、然かも事實

の應々たるを奈何。

バルフォア氏と雖も全く決斷と勇氣とを示せるに無きにあらざりき。其愛蘭卿時代に於ける奮鬪は目覺ましからざるにあらざりき。然かも彼の決斷、勇氣とは得意時代の決斷、勇氣にして、失意時代の決斷勇氣にあらざりき。彼は勝軍の勇士にして敗軍の豪傑にあらざりき、勿論今日統一黨の衰勢は、時勢也、又全黨の罪也。彼のみの罪にあらず、左れど彼が黨首として其罪の一半を分たざる可からざるも亦言を俟たず。

見よ、彼は如何にして人心を失ひたる乎。一九〇三年ジョセフ、チエムバーレン氏、關稅改革を唱道するや、彼は曖昧糢稜の態度を示し「彼自ら彼の心を知らざる」が如かりき。爾後統一黨の一新聞と一雜誌とは盛んに黨首更迭の聲を放ちし也。一九〇五年の總選擧が三百五十四の大多數を以て自由黨の勝利に歸したるは、統一黨首の逡巡躊躇が全黨の戰鬪力を緩うせる爲めに外ならず。一九〇九年の社會主義的豫算問題、將た昨今兩年の上院改革問題に際する彼の態度も、往々にして逡巡と狐疑とを示せりき。是に至て黨人何ぞ能く彼に心服するものあらん哉。

四

彼に飽きたる人心は、漸く新黨首を懷へりき。然かも最近之が引退を促したる機會は如何、曰くハルスベリー卿等の反抗則ち是也。

今年八月十日は英國に執りて記憶す可き貴族の公葬日なりき、上院否認權剝奪案通過し上院は事實上立法の大權を喪失したる日なるを以て也。同案は如何にして通過したる乎。皇帝が貴族新造保障を與へさせ給へる結果、上院内の統一黨は自ら屈服したりし也、如何にしてか此屈服は來りたる、吁嗟是れ黨首バルフォア氏がランスダウン卿と共に軟化を主張したる爲めにあらざる乎。

統一黨硬分子あり、所謂「ダイ、ハード」と仇名せられたるハルスベリー卿アオステン、チエムバレーン氏等の一派是也。之等は黨首の命を無視して、飽く迄奮鬪したりき。事決するの後此徒のみより成る一團體自ら生じたりしが、十月に至り、彼等は黨首に相談なくして、ハルスベリ倶樂部なる政治團體を組織せりき而して其表面黨首排斥を否認せるに係らず、底意が茲に在るは瞭々、疑ふ可くもあらざりき。

明敏なるバルフォア氏、何ぞ悟らざらん。功名に飽き、權力に飽きたる彼は、遂に退隱したりし也。

打ち明けて言へば、上院否認權案（皇帝の貴族新造保障を得たる後の）に對する彼の態度は、常識に訴ふるも、止むを得ざりし所なるを疑はず、ハルスベリー一派の行動こそ却て野次馬的の嫌ありき。然れどもこは唯だ一の機會と言ふ可きのみ。根本原因は、彼が業に已に人心を失ひたるに在るを記す可き也。

五

バルフォワ氏已に去る。後繼者は誰、曰く前商務次官下院議員アンドリユボナア、ロー氏是。

ロー氏は一八五八年加奈陀に生れ、幼時グラスゴー市に移り、鐵商となり、其組合長たり。一九〇〇年選まれ下院議員となり、一九〇二年以後約三年バルフオア内閣の商務次官たりき。チエムバレーン氏の味方として熱心に關税改革を主張せるを以て名あり。辯論の雄たる所、辣腕の聞へある所、亦た好箇の首領たるを失はざる也。

如何にして中原の鹿は、彼の掌に歸したる乎。蓋し過激派のオステン、チエムバレーン（老チエムバレーンの子）氏は穩和派に善からず、穩和派のウオター、ロング氏は過激派に善からず、遂に彼の順番とはなりたる也。吾人は切に望む、過激、穩和兩派（兩派の存在がバルフオア氏を苦しましめたるは勿論なるが）が幸ひに新首領の下に融和して、黨勢を擴張するに至らんことを

竊かに前途を望めば、愛蘭自治なる重大問題あり、英國の運命が依つて係はる所也。況んや亦關税問題も默過す可からざるの狀にあるに於てをや。此間に當つて、新進首領の措置果して如何。潜心之を注視するもの、何んぞ獨り吾人のみと言はん哉。

波斯攝政辭職

波斯攝政ナスル、エル、ムルク、十一月中旬を以て辭職す、吾人は切りに波斯國運の危きを想ふ。

ナスル、エル、ムルクは明敏の政事家也。幼弱の君主を奉じて、大政を總攬すると一年ならざるに、廢帝の變亂あり、漸くにして平治すれば、復又露國の壓迫相踵ひで臻る、先きに米國大統領タフト氏の推薦に依り同國財政監督に就任せるモルガン、シユスター氏、同國内地秩序紊亂（英露兩國の苦情の源たる）が一に討伐費缺乏に基けるを洞察し、印度陸軍のストック少佐を招聘し、徵税憲兵隊を組織し、以て國庫の充實を謀らんとするや、露國は强硬に抗議し、英國もその抗

議を默認す、シユスター氏爲めに帽を拋つて嘆じて曰く、英露兩國は一九〇七年協約に於て波斯の獨立及領土保全を保障し乍ら、其行爲を見れば着々其獨立の破壞に力むと、

十一月上旬、露國叛將スル、エ、サルタネの財產を保護す、蓋し將來廢帝派勃興の曉、之に恩を賣らんと欲する也、而して波斯政府法規に依り之を沒收すれば露國は領事侮辱を以て之に迫る、攝政の辭職の近因は其暴狀に憤慨して遂に大職を拋ちたるに在り、然かもその遠因は露英の波斯併吞の意思、掩はんと欲して掩ふ可からざるものあるに在り。

觀來つて、誰か一點同情の涙を灑がざるものぞ、吁嗟亡び行く國の姿ほど、憐れなるはあらざるなり。

米國各洲選擧

十一月上旬擧行の米國各洲議會選擧は、大體共和黨の勝利に歸したり、紐育洲の如き最も然り、タフト大統領以下の得意以て察するに足る。

何ぞや、今年の洲會選擧は、大統領選擧の前年に當る、而して政局の傾向、昨年よりも一層共和黨に可なりとせば、明年の事も、或は深く憂ふるに足らざる可きか、然かも精確なる勝敗の數字に至ては今以て判明せず、吾人は少焉らく最後の判斷を憚らんとす。

（懷沙隱客）

新刊批評

◉日本俳諧史　池田秋旻編　日就社發行

歌を以て知られた秋旻氏に此著ある、人は稍意外とするかも知れぬ、我々も左様考へたい、同時に此各の價値を疑ふかも知れぬ。我々も左様考へたかつた。が能く思ふと是は謂はれない事だ。小說を作らぬ者が現に小說を評するでないか、そして世間では其評家たる權威を疑はぬてないか。獨り之を歌句に於て疑ふ譯はない。歌俳人たり得ずとも歌俳の見るの目さへあれば歌俳の評家とは爲り得る譯だ、已に評家たれば共道の史家たり得る多分の要素を有する譯だ。秋旻氏の歌を以て知らるゝといふも氏に實は幾千の歌作があるか、歌作よりも寧ろ選者として知られて居る。秋旻氏に作るの腕は如何でも知るの明がありとするなら、歌に於けると同樣俳句にも亦發言權を要求して差支ない。作家ならぬ評家には却て何派にも偏らぬ識見があつて正しい論斷の下る事もあると思ふ。我々は此考で本書を迎へる。全篇菊版六百七十九頁、其中百六頁は明治の子規一人に割いてある。ね蔭樣で俳以外の子規の面目をも知るを得、面白くはあつたが、繁簡詳略の權衡は如何あらうか。と思はるゝ節位はあらうけれど、大體に於て俳句發生の脈から其分派の發展迄が明確に分る。長所は冗からずして能 分らすに在る。各篇末に於ける諸家の俳系と其

要俳書の解題とは貴實な好い工夫である、俳句其者に對する見解、それから蕪翁の批評、それから明治俳壇の論斷などに就いては異見を立つる向もあるか知れぬが、それは人各々心ありて已むを得まい。守る所ある評家の筆で千人模樣の物は書けまい。兎に角何人にも俳諧發展の經過を知らす好著だと丈は斷定する。(定價金壹圓四十錢)

▲時代思想　村井知至著　北文館出版

一寸此書を讀み此書を掩うて先づ痛切に我等の頭に來た感じは、ユニテリアン、メソヂストと基督諸教徒の門を分け派を別けて、其處に幾干の宣教師牧師が神の宣傳に貴ろい空虛の聲を絞つて居るかといふ事である。著者は基督教で育ち基督教で、矢張り顯れば內容の疑はしい傳道說法をやつて來た事を、今は醒めたる人として自白して居る。そして今の一般の基督教を譯もタワイも無き外國思想の舶來物として居る、如何にも左樣であらう、我々には貴ろい聲の主に幾干の信念の籠つて居る事かと疑ふ。只心底く强き者は道を求め所に醒めそして此の如き告白をするが、其直からざる心術强からざる意思の者は矢張り日々夜々殿堂に立つて空虛な聲を弄して居る。此に捉はるゝ我々の同胞は實に危い事ではないか、氏の宗教觀には猶我々に飽らぬ多分を殘すが、兎に角醒めよと勸むる其聲は力あるものだ。迷へる衆生は兎に角一旦此書の洗禮を受けて、新に靈的研究をするが宜いと思ふ。(定價金壹圓拾錢)

▲國體の本義　福本日南著　啓成社發行

日南氏の文は、正に可、奇に可。雅に可、俗に可。正奇相錯綜し、雅俗相調和する所最も可。此點當さに推して海內第一とすべし。此篇我日本帝國立國の根本義を闡明し、國體の尊嚴、君臣の情誼、說き盡して餘蘊なし。蓋し最も時弊を拯ふに足るの良著として之を江湖に推奬す。若し單に文を以ていへば、此編は奇よりも正を用ひ、俗よりも雅を選び、自ら蒼古にして莊重の調を成せり。蓋し內容之を然らしめたる也。(定價金六十錢)

▲趣味の人　黑頭巾著　新潮社發行

收むる所「趣味の人」「帝都の新聞經營者」「油の乘つた男」「薩摩芋と人格」「南瓜と人格」「登獄記」の六篇、蓋し卷頭の一篇を採つて書名とせる也。此中「薩摩芋と人格」「南瓜と人格」の二篇を除いて、他は皆嘗て本誌に掲載せられたるもの、讀者皆氏の一種奔放にして奇變なる文體と、着想にして趣味ある觀察との面白味と知了せらるべし。「帝都の新聞經營者」「登獄記」等面白からざるにあらざるも、吾輩を以て見れば「薩摩芋と人格」の一篇最も壓卷となす。晝日に短らして、夜の次第に長きを咜つ人にとつて絕好の讀み物也。(定價七十錢)

▲越後記　杉村楚人冠著　萬松堂發行

著者が四十五日間越後全國を歷遊して觀察したる所を敍述或は論議したるものにして、在來の多くの記行文觀察記などに比して遙かに勝れたり。添ふる所の「越後日記」亦極めて趣味多く。著者一流の觀察文章、何人をも一息に讀み畢らしめずんば止まず。(定價金九十五錢)

▲淸國革命實戰記　關濟淵著　春秋社發行

支那革命の由來より革命黨の性質、革命黨首領の人物、陸軍の情況、官界の人物等を說きたるものにして、時節柄一讀の價値あり。卷頭には支那名士の寫眞及び地圖を添へたり。(定價六十錢)

▲山上より　水野葉舟著　春陽堂發行

「山上より」「招牌より」「漁村より」「密室」の四篇を收む。主として記行體小話にして、此種のものには著者の清新にして微細なる觀察と文體とが最も適はしきを覺ゆ。(定價金廿五錢)

▲太平洋の優越者　三枝勇佐著　寳文館發行

世界の大勢よりして太平洋の價値及び之に利害關係を有する列强の地位を論じ、之が優越者即ち世界の優勝者なるべきを說述せり。膨脹せんとする我日本國民は一讀して自己の地位を知覺するを要す。(定價八十五錢)

▲支那印象記　小林愛雄著　敬文館發行

簡潔な支那現代の風物記である。革命の支那に對する好奇心には、いゝ背景を與へるものであらう。場所は東濟の概略にわたり、簡單ではあるが、筆致も多くの支那印象記の中では、明かなものゝ一である。(金七十錢)

▲情死の研究　大道和一著　同文館發行

情死に關する古今東西の材料を、出來る限り蒐めて之を順序よく配列してある。どうも未だ研究といふ處までは行つて居ないやうであるが、材料の豐富なのは第一の特色である。唯、著者の問題に對する態度及材料と覺見との融和に些の欠くる處がある。然し情死に關する研究材料を讀む積りならば興味の深いものいに相違ない。(金一圓八十錢)

▲寫生法大觀　竹內次郎著　光風館發行

寫生を中心とした圖畫教科用として專ら作られたるものである。普通の娛樂には適せぬ程、叮寧親切である。(金二圓四十錢)

▲文話歌話　金子薰園著　大同館發行

文章和歌に關する著者が折々の感想錄である。悲しい夢のやうな初秋の木立に夕月の掛るやうな感慨で記された、軟かな隨筆である。殊に卷末の文章月令には亦朗誦に價するものが多い。(金五十錢)

▲歐米感想錄　中島力造著　東亞堂發兌

著者が歸朝後の講演集である。新しい歐米が與へる新しい生活の教料である。問題は多く社交乃至教育の事にかゝつて居る。(金八十錢)

▲活例名家書簡　桑田春風編　啓成社發行

活例とは實際的作例といふ意味である。能ふ限り多方面にわたつてある努力は充分に認められる。活例の如何は兎も角、書簡集としては、一寸得難いものである。(金一圓)

▲趣味の日記　桑田春風編　良明堂發行

讀物としては前の書簡集よりも面白さうである。內容に適はしい、厭味のない體裁のいゝ集錄の方針は書簡集に等しいやうである。(金九十五錢)

▲最近學藝大觀　教育學術界增刊　同文館發行

哲學、心理學、倫理學、教育學、教授法、社會學、美學、音樂、繪畫の各方面にわたる講演集である。一括された輓近學界の大小事乃至趨勢を窺ふ事が出來る。便利な書物である。(金六十錢)

▲國民道德第一　宇野哲人纂輯　學界指針社發行

官長の「直毘靈」「玉鉾百首」東湖の「弘道館記述義」「回天詩史」「常陸帶」「東湖詩歌抄」齊昭の「告志篇」「烈公詩文抄」觀瀾の「中興鑑言」維貞の「國基」「國基題詠集」等先哲が國民道德に關する著作を集めてある。此中には讀書界にとつて珍しい物が尠くない。(金一圓)

▲民師改善模範夫婦　澤田順次郎著　啓成社發行

ユーゼニックス具體の基礎か模範夫婦の構成にありとして、之に實際的な方法と智識とを與へたものである。九百頁の大册であるが、材料の不整頓が目につくやうである。(金二圓)

▲坂本龍馬　和田天華著　東亞堂發行

維新勤王家の興味ある傳記である。材料の蒐集、考證等にも著者の自信は深いやうである。普通の讀物としては面白いに違ない。(金一圓十錢)

▲女の一念　岡本綺堂著　今古堂發行

女の髮が男を殺したといふ英國の物語を飜案したものである、此のまゝ芝居になりさうである。(金三十八錢)

▲筆と舌　加藤咄堂著　丙午出版社發行

著者が二十年來の思出の多い雜錄である。名ある人の修養史としても、無名の人の傳記としても、又は後進の參考としても多數の讀者を滿足させるに足るものであると思ふ。(金七十錢)

▲新撰漢文要義　高木武著　大同館發行

漢文といふものゝ要領を戚る可く速く、簡單に會得さする爲めに、特に中等教育にある者等の爲めに、書かれたものである。親切である。(金五十五錢)

▲皇位の絶對と日本民族　亀谷天尊著　名教學會發行

皇位の絶對と日本民族の信仰、樂的日本、正閏論、破壞思想等が重なる項目である。(金五十錢)

▲伊能忠敬　伊能登著　忠敬會發行

新學の祖忠敬の傳記である。之に測量日記が附けてある。此會の專攻であるから、確かなものである。(金一圓)

▲老莊畫談　松村介石文　齋藤松洲畫

老莊の原文に適した松村氏獨特の文をそへ、之に松洲氏のうまみがあつて美しい畫が挿んである、四六版二倍の大さに、茶地に黄色の表題ある裝釘秩入である。流石に左久良書房の意匠で、立派なものである。(左久良書房發行、金二圓二十錢)

△日本文藝叢書……………東亞堂發行
　大平記第五(上製金三十錢)
　いろは文庫下(上製金三十錢)
　(並製金二十錢)

△學生文庫…………至誠堂發行
　常山紀談(中)(金三十錢)

△英文懐中日記(金三十五錢)……………東京堂發行

△英文日記(金五十錢)……………仝上

【天下萬世の龜鑑字々皆血、國民必讀の經典句々皆涙】

毛利元昭公題辭
島津忠濟公題辭
德川圀順侯題辭
山縣有朋公題辭
松方正義侯題辭
井上馨侯題辭
桂太郎公題辭
東久世通禧伯題辭
寺内正毅伯題辭
土方久元伯題辭
渡邊千秋伯題辭
股野琢氏序文
德富猪一郎氏序文

【製本既成】

天覽

維新志士正氣集

特價 金五圓 送料 内地 貳拾錢 臺灣朝鮮 四拾錢

▲【未曾有の廉價】▼

【註文】必ず前金或は引換小包の事 【送本】著金順に付註文の早き程入手の時も又早し

【本文】◉寛政諸家◉賴氏一門◉象山、瑞皐◉秋帆、坦庵◉諸公卿◉七卿◉畿内◉水戸◉櫻田◉坂下◉薩州◉長州◉土州◉越前◉尾州◉大和◉生野◉近江◉信州◉加賀◉播州◉宇和島◉肥後◉佐賀◉東北◉禁門◉筑波山◉諸州、以上の志士二百六十六家の傳記並に諸文章、詩、歌、俳句、書柬、日記等 三百八十六頁

【遺墨】コロタイプ 三十九點 寫眞石版 二百〇一點 二百三十八頁 計六百五十一頁

【體裁】表紙 絹紬 大和綴 帙入 菊二倍 舶來極上等紙 製本 高尚淸雅 眞に空前の美本

滿天下の士をして、驚倒せしめ感歎せしめたる、國民新聞社主催維新志士遺墨展覽會の、記念出版として此の正氣集は成れり。此書は嘗て出版せられたる「維新志士遺芳帖」とは、其の撰著の方法を殊にす。即ち前者と全然別物にして同會に出陳せる、志士數百家の詩歌遺文は、悉く之を收載し、寛政の昔より、明治の維新に至るまで、鄕貫に依り、事變に從うて之を類別し、詳傳に添ふに解説を以てす。即ち列傳體維新史にして、字々皆血、句々皆涙、實に是れ活孝經なり、活忠經なり。此の正氣集を讀んで、感激し興起せざる者は、決して日本國民にあらず、良家家庭の讀物として、軍家、學校の教育資料として、謹て本書を捧ぐ。

發行所 東京市京橋區日吉町 民友社

電話新橋 五一一五
振替東京 一三一〇〇

(中付の一)

四六二倍一千六百頁說明事項三千百有餘

定價拾五圓

青山學院神學校教授 ドクトル、オブ、デビニチイ（神學博士）

高木壬太郎著

長八寸九分巾六寸五分厚二寸五分背革箱入上製

既製發賣

基督教大辭典

特價 本年中 拾貳圓

基督教大辭典は、即ち基督教百科全書にして、基督教に關する事項は勿論、之と間接交渉ある文學、哲學、政治、法律、鄉土、歷史、美術、科學に關する事項をも網羅したる大著述なり。

故に本書壹卷を備ふる時は、基督教に關する專門書數十卷を加へて思想界の傳記を蒐めたるに等し

基督教は歐米今日の文明の淵源を成せる者にして、之を解せざれば、遂に文明の眞相を探る可からず。故に本辭典は、本邦の宗教家政治家教育家文學者新聞雜誌記者語學者歷史家學生の坐右に備て適切に利益を感ずべき書也

發兌 東京銀座 振五五三 警醒社書店

關西賣捌 大阪 福音社書店 久留米 菊竹金文堂

初戀

森田草平

何か書かねば成らぬ。何も書くことがないのに、何か知ら書かねば成らぬ。私はこれ迄金子のために書いたことはない、藝術のための藝術だなぞと思つたことは尙更ない。私は只自分のために書いた。

自分のためだと云つたら、又偉さうに聞えるかも知れぬが、そんな積りはない。只、ラヴ、レッターを書くやうな心持て書いたと云ふ程の意味てある。他人のためにラヴ、レッターを書くものは有るまい、又他人に賴んて書いて貰ふものも有るまい。

こんな意味て、自分のために書いた。

作者として、こんな態度が本當か、本當のものてないか、自分ても知らない。

若し人間が一生ラブレツターを書いて暮せるものなら、それでも構はなからう。一生ラブ、レツターを書いて暮せるものなら――

西の山に太陽が燃えながら沈んで行く。

二階の籐椅子に凭れながら、私はうつとりと秋の空を見守つた。空氣は澄みに澄んで、何處からともなく音のない音が聞えて來るやうである。

こんな時、心から歌が唄へたらと思ふ。

俗謠でも可い、何んな野鄙な流行唄でも可い。聲を出して唄つて見たい、自然の歌聲に節を合せて見たい。

併し無理に聲を出さうとしても、咽喉に引かゝつて、如何しても出ぬ。幾許焦燥つて見ても、出ぬものは出ぬ。歌の唄へないものは、時として啞も同然である。

夕方、ぶらりと街へ出て見た。

少時、夜の人込みの中に交つて、露店を見て歩いたが不圖横丁へ曲つて、とある牛乳屋の軒をくゞつた。見るともなく、卓子の上の官報をはぐつて居ると、「暫くお出に成りませんでしたね」と、主婦さんが牛乳を持つて來た。

「えゝ?」と、眼を上げたが、主婦さんはにたにた世辭笑ひをしながら立つて居る。私は主婦さんの顏を記憶えて居る。併し主婦さんが私を知つて居るのは訝しい。私が記憶えて居るのには譯がある。

大學に居る頃始めて此店へ立寄つたが、帳場の主婦さんを見ると、私ははつと思つた。八年前に私を捨てた女に生寫しだからである。好く〳〵見たら、矢張違つて居たが、其後、此處へ來るたび、何うも其女ぢやないか知らと氣が迷つた。

今夜は、ひよんな事から、又初戀の女を想ひ出した。私は二たびあの女に逢ふことはあるまい。一たび逢つて、生死も知らず、別れると云ふことは、兎に角儘ならぬ浮世の一つである。

切めてあの女に似た物好きな女が來て、あの女の話をせよと迫つたら、——左樣したら、口ぢや言へない、筆で書くと斷つて、初戀の話でも書かうもの。

勿論一人の前で云ふべき話である。

一

私が十三の歳であつた。恰度尾濃に大地震のあつた二三年後のことである。

私は或町の片田舍に母親と二人で淋しい生活をして居た。そこへ、一日、東京から着いたと云つて、一人の男が訪ねて來た。脚袢を脱いで座敷へ上つて、「私は此處の家の御新造の弟だ」と云つた。母親の弟なら、私のためには叔父である。私が母方の身寄と云ふものを見たのも、これが始めてゞある。

母親が何んな心持で此叔父を迎へたのか、何にせよ少さい時分のことだから私には分らない。只、其時母親が私に云つたことだけ覺えて居る。三人の同胞の中で、只一人の男の子の弟が、十六の歳に家出

をしたまゝ、皆目行方が知れない。兩親もたづね倦んで、到頭死んだものと諦めて葬禮迄出した。後々の法事法要も懇に吊つた。それが兩親も此世を去り、妹も後を追ふて、二十年も經つた今日に成つてからひよつこり出て來たのだと――私は其話が面白かつた。併し叔父の顏を見ると、何處かぎす〱してそんな面白味のあるやうな顏ではない。

兎に角、無人ではあり、それに父方の親類と云つては祖母の里が一軒あつたが、久しく往來も絶えて居たので、叔父は其儘私の家に居つくことに成つた。別段仕事もないので、私の相手をして折鶴をしたり、釣竿の修繕をしたりして、毎日ぶら〱として居た。一二箇月左樣して居る間に、如何云ひくるめたものか、母親の手許から若干の金子を引出して、町へ出て商賣を始めた。其商賣が普通の商賣ではない。

五六年前から、此町にも鐵道がついて、それと一緒に遊廓が出來た。監獄署の裏から溷川に沿ふて下つた畑中に建てられたので、大門もあれば、本通りには柳の樹を植えて、夕されば張店と云ふことをする。凡て吉原の樣子を寫したものださうな。一時は物珍らしさに全盛を極めたが、大地震からこちらへばつたり火が熄えた樣に寂れた。中には、景氣の立直る迄持ちこたへることが出來ないで店を閉める家もあつた。其中の一軒を叔父が引受けたのである。

こんな商賣を始める位だから、叔父と云ふのは行方の知れなかつた間何處で何をして來たのだらう。一切私には分らない。母親も何と思つてそれに同意したものか、別に聞かうともしなければ聞いたこと

もない。只、思ひの外に金子が入ると云ふので、母親が折々思案に暮れた容子を見かけたことがある。田地を抵當に入れて金子を借りる所なぞも、他所ながら見聞きした。

私は母親から變人だと思はれて居たらしい。又多少憚られても居た。別段變人な譯はないが、他の子供と違つて、朝夕机に凭れて讀書に耽ける。それだけで最う母親なぞの眼には變な子だと映つたらしい。讀書と云つても、其頃私は活版本の岩見武勇傳と自雷也物語とを讀んで、それに味を占めたので、土藏の隅からよれ／＼に成つた賴豪阿闍梨怪鼠傳を捜出して、夜晝それに讀み耽つた。固よりそれが曲亭馬琴の作だとも、插畫が北齋だとも知る筈がない。讀んでさへ居れば何でも可いのである。

ある日、學校から歸ると、見慣れぬ女のお客さんがあつた。髮の結ひ樣、着物の着こなし迄、其風俗が此邊の在所には見かけない。と云つて、町の女とも違ふ。併し子供にはそんな事の分らう筈はない。只妙な女だと思つた。日當りの好い椽側て、母親と向ひ合つて、袂の長い絹物の上に襷掛けをしながら、無器用な手附てふじ豆の筋を取つて居る。それを取つては籃の中へ入れる。左樣しながら、二人て何やら話をして居る。

「只今」と云つて見たが、返辭がない。

私は上框に片足掛けたまゝ、少時立つて居たが、其儘顏を背向けて奥の間へ這入つて行つた。机の上に本袋を抛り出して、靜手と坐つて居る。

「亮さ、歸らしやつたかえ」と、母親の聲が聞えた。

私は默つて返辭をしなかつた。

「亮はま?」と云つたのは、其女の聲らしい。

其後は能く分らなかつた。何やらぼそ〳〵と云ふ話聲が聞えて居たが、急に二人とも聲を揃えて笑ひ出した。私は何だか自分が笑はれて居るやうな氣がして、此儘逃出したい位に思つた。

て、遽てゝ讀みかけの賴豪阿闍梨を取出して、其上に眼を曝した。

それにしても、あの女は何處から來たのだらう。

今度叔父の持つた家にはいろ〳〵の女が居ると聞いた。女ばかりの家だとも聞いた。何うも其中の女らしい。始め見た時から何うもそんな氣がして成らぬ。

私の眼は本の上に注がれても、文字一字心にとまるのではない。

「何を見てらつせるの」と、不意に頭の上て其女の聲がした。

私は理由もなく氣後れがして、いよ〳〵本の上に顏を伏せて仕舞つた。

「精出いて勉强しやすなも。」

かう云つて、女はやをら机の端に坐つた。そして、自墮落に片肘出して頰杖を突いたまゝ、凝乎と私の容子を見守つて居るらしい。私は出來るだけ女の方を見まいとした。女も如何したのか、何時迄經つても動きさうにない。

私は、只何となく、三年も前から私を知つて居さうな此女の素振が氣に成つた。其中から始めて女の

女らしい臭ひを嗅いだやうな氣もした。勿論子供だけに、それとは分らぬ。分らぬながら心が戰いた。一つは女氣のない、紅も白粉も見たことのない在所の家に育つたためでもあらう。

「亮さや、〳〵」と、背戸で母親の喚ぶ聲がした。

「あゝ」と、大きな聲で返辭をした。

「此處へ來て、無花果摘つてお呉れか、土産に持たせて歸すのぢやに。」

「あゝ、摘つて上げよ」と云つたまゝ、ばた〳〵と駈出した。

「田毎も見に來やあせ」(四)と、二たび母親の聲がした。田毎と云ふのは其女の名らしい。

三人は井戸端の無花果の樹の下に立つて、尻が紫色にはぢけて、ぽと〳〵と液汁の垂りさうなのを見附けては、物干竿の先ではたき落した。それが小さな手籃に一杯に成る頃には、私も其女と平氣で口を利く樣に成つた。

間もなく、女は迎ひに來た腕車に乘せられて戻つて行つた。(五)立ちしなに、私を喚んで、

「貴方や、叔父さまの家へも遊びに入らつせ。御馳走しますぜえも」と、こんなお愛相らしいことも云つた。

後で此女が叔父の家のお職女郎で、病氣して休んで居たのを保養がてら遊びに來たのだとも聞いた。田毎と云ふ源氏名は忘れても、一緒に無花果を喰つた女のことは長く忘れなかつた。

此話はこれだけで濟んだ。

其間に、秋も暮れて冬の初めに成つた。私の家は地震の時に倒れかゝつたのを、突支棒をかつたまゝ、それ儘に成つて居たが、今度いよ〳〵修繕を加へることにした。大工や日傭の入つてる間は、家では勉强も出來ぬし、それに一里足らずの道を毎日町の小學校へ通つて居たから、學校へ近い便利もあると云ふので、私は少時叔父の家へ泊ることに成つた。最初は叔父がすゝめて、母親も承知したものらしい。

ある日、私は本袋を肩に掛けたまゝ叔父に連れられて行つた。町つゞきの畑の中に、二階三階と一際高い屋根の折襞なつた一廓がある。何日ぞや川祭の夜に遠くから三階の灯を眺めて、あれが金津の遊廓だと敎へられたこともあつた。彼處へ行くのだと思ふと、子供らしい物珍らしさの中にも、一種の不安が動いた。尤も、そんな所へ行くのが可厭だとも汚らはしいとも思ふのではない。私はおど〳〵しながら叔父の後へにくつ着いて小走りに走つた。

大門と云ふものも見た。白晝の遊廓はからつとして人通りもない。何の家も森として物音一つ聞えぬ。只街の眞中に喞筒の汲井戸があつて、其側で洋犬が二疋戯れ合つて居たが、二疋とも何處かへ駈けて行つて仕舞つた。

叔父の家は直ぐ其前にあつた。

「此處だよ」と云はれて振向くと、入口に淺黄の暖簾を垂れて、「神風樓」と白く染拔いたのが見えた。打水の跡もしつとりとして、閾の上には盛鹽が三つ盛上げてあつた。

私は叔父に隨いて暖簾をくゞつた。段梯子の横から張店のうしろへ出ると、帳場の上に神棚が祭つて

あつて、長火鉢に大きな鐵瓶の湯が沸つて居た。そこを拔けて、風呂場や料理場の前を通りながら、とん／＼と廊下を降りると、裏座敷へ出る、一人年増の女が横に成つて居た。
「おい、／＼、起きないか。お前からしてぐた／＼寢てちや、外の者のしめしが附きやしねえ」と、口小言を云ひながら、叔父は一閑張の机を持出して、「此奴は上等だ。ね、此處で遣つてる分にや、誰も還入つて來やしないから幾許でも勉强が出來る。」
私は其机の前に坐つて見た。
年増の女はむつくり起上つて、ぼり／＼二の腕を掻いて居たが、「これ、姉はんの何かいも、好う入りやあたな」と、にた／＼笑ひながら私の側へ寄つて來た。
此女は叔父が此商賣を始めるについて、急に貰つた細君ださうな。
其晩、叔父は帳場に坐つて、ちびり／＼盃を舐めて居た。私も其側で夕飯を喰べたが、いち早く箸を下に置いた。そして、所在なさに、帳場のうしろに貼つてある藝子の引札を一つ／＼讀んで見た。双つ一とあるのが、何のことやら分らなかつた。
そこへ新奇に出來た叔母さんが表から驅込んで來て、
「入らつせ、／＼、松泉樓で店を附け出したに入らつせ。お山さん見せて上げますに入らつせ」と、氣立たましく喚んだ。
私はうぢ／＼として立たうともしなかつた。

「お山は内にだつて居るさ」と、叔父は苦笑ひして居たが、「何だ、店を附けるんだなんて、下足札なんぞ鳴らすなア、ありや小店てするこつた。」

「早よ入りやアせんか。お可厭かいも」と、叔母さんは私の顔を見い／＼上つて來たが、赤く成つた鼻の先を長火鉢の上へ突出して、「なも、お前はま、梅本ぢや又新子が出るぜえも」と、今度は叔父の方へ向いて云つた。

「他所のことは如何ても可いやな。梅本だの壽だのと云つたつて、何だ。本元からして、高が新地のおさ尾ぢや無えか。神風樓とこ云やアお前、關東ぢや豪義なもんだな。」

叔父は醉つて、何やら譯の分らぬことを云つて居た。後て聞いたが、何ても十三人居る妓どもの中て、五人迄塒をして、今日の檢査ても又一人取られたと云ふので機嫌が惡かつたのださうな。

やがて二階からいろんな女がぞろ／＼と下りて來た。皆々鬘を被つたやうな髮の結方をして、白壁の樣に白粉を塗つて居た。段梯子を降り切ると、云合せた樣に端折つて居た丹前の裾を下して、べちやべちやと饒舌りながら、一人づゝ張店の方へ出て行く。

私はぼんやりしてそれを見て居た。何だか好い衣物を着た女の行儀の惡いのが、不思議なやうな、胸の惡いやうな心持がして、直に裏座敷へ戻つて寐て仕舞つた。

明くる日は日曜てあつた。私は話相手もなく退屈な一日を過した。帳場へ行つても仲居や豆どんが晝寐をして居るし、机に向つて見ても、如何云ふものか本を讀む氣にも成らぬ。戸外へ出て見る氣には何

更成れなかつた。

午後の一時頃、裏木戸を開けて一人の客を送出した女があつた。その後姿が何日ぞや宅へ來たあの女らしい。二たび錠を卸して此方を向いた所を見ると、矢張左樣であつた。庭下駄を穿いたまゝ、私の居る座敷の直ぐ前を通つたが、何か心の急くこともあるのか振回つて見やうともせず、其儘とん〳〵と裏梯子から上つて行つた。私はそれを見送つたまゝ、何だか物足らぬやうな心持がした。

少時左樣して居たが、不圖思ひ立つて、二階へ上つて見る氣に成つた。わざと梯子を違へて、帳場の前から上つて見た。表二階の十疊間には、しつぽく臺と大きな鬼面の火鉢が置いてある切りで、何一つ見當らない。其隣の部屋で、四五人の女が寄つて、何やらぺちや〳〵と饒舌つて居る話聲が聞えたが、私はそつと反れて裏の方へ廻つた。行燈部屋の前で豆どんが洋燈掃除をして居るのを見かけた。其側を避けて通つて、廊下の外れ迄行つて見た。女の部屋の前には、黒塗の札に各自の名が書いて下げてある。私は一つ〳〵それを讀んで行つた。一番奥の部屋の前で「田毎」と云ふ字を見當つた。私は何がなしにはつと思つた。

見ると、障子が一枚開け放したまゝてある。おづ〳〵、其間から覗いて見た。上置のついた簞笥の前に、一人の女が彼方向きに成つて、耳の邊り迄搔巻を引被つたまゝ寐て居る。あの女だ、あの赤ちやけた髪の寄々としたのが、あの女に違ひない。客を送出して、其儘部屋へ歸つて寐たものらしい。部屋の中は森閑として、時たま長火鉢に掛けた鐵瓶の口から有るか無きかの湯氣の輪の上るのが見える。

私は物珍らし相に凝乎と女の寐態を見守つて居たが、つと眼を反らして、うしろ向きに廊下の欄干に凭れた。此家の裏は黒板塀の下に一間巾の瀦川が流れて、それに沿うて田舍道が通つて居る。其道の向ふは一面に霜枯れの田野がつゞく。黒い桑の葉がごろ〳〵して、薄い午後の日影は當つて居ても、何となく風が寒さうである。不圖見ると、正面のやゝ黄ばんだ森の外れに、ぼか〳〵と煙が湧く。つゞいて轟と地面を撼がすやうな音が聞えた。

「あゝ、汽車が――」

私は思はず口走つた。そして、此方の森から彼方の森迄、田圃に沿つて、うね〳〵と駛る汽車を見送つた。

「亮はま、何時入りやアた。」

背後で、女の聲が聞えた。振回つて見ると、何時の間にやら女は寢返りを打つて、此方を向いて枕をしたまゝ、眼を開いて居る。

「一遍此處へ入りやアせ」と、片手を疊の上迄伸ばしたが、「いやかいも」と云つて、其儘又うつとりと半眼に成つて行く。

私は女の紅く膨れ上つた眼瞼を見ながら、それ限り物を言つて吳れぬのが、何だか物足らぬやうな氣もした。

やがて女は又不意に眼を開いた。四邊をぎろ〳〵見廻して居たが、急に腹ン這ひに成つて、長煙管の

雁首て朱塗の煙草の箱を引寄せながら、一つ大きな欠伸をした。
「亮はま、お前はまえも、好え人だに其處にある燐寸取つて頂戴はんか。」
「何れ」と云つて、私は部屋の中に這入つたが、「あ、これか」と、長火鉢の猫板の上にあつた燐寸を執つて女の手に渡した。
女は燐寸を擦つて、お腹の中迄煙草の烟を吸込んだ。それから又物臭さうな手附をして、二度目の煙草を詰めながら、ぷ——と鼻の孔から太い烟の柱を吹出した。
私は不思議相に其顔を見守つた。
二三服立てつゞけに吸つて、ぽんと煙管を抛り出したが、其儘左の頬を枕紙に押附けて、
「お前はまえも、些とも叔父さまと似てりやアはんなも——阿母さまとも澤山似てぢやない。」
かう云つて、一寸言葉を途切らしたが、
「本當に好え生際だなも——女でも欲しいやうだがいも」と、ぢろ〱私の顔を眺めて居る。
私は生れてから未だ自分の顔について彼是云はれたことがないので、かつと逆上せるやうな心持がしながら、矢張うぢ〱として其處に坐つて居た。
「あゝ、左樣々々、好え物があるに待つてりやアせ」と、女は突然起上つて、何やら箪笥の上置の中を捜して居たが、
「亮はま、最一遍私に頼まれとくりやアはんか」と、最う別な事を云つて居る。

「何ちやな」と、私は始めて口を利いた。
「えゝ」と、向ふを向いた儘返辭をしたが、やがて二三通の手紙と封筒とを持つて、私の側へ擦寄るやうにして、
「あのえも、男の手て、此上書をして頂戴なも」と、狡猾さうな、相手を調戯ふやうな眼附をして、私の顏を覗き込んだ。
私は只默つて點頭いた。此女から物を頼まれるのが嬉しいやうな心持もした。
「本當に書いとくりやアすの」と、女は念を押して、違棚から硯箱を下ろして來た。そして片手で墨を磨りながら、筆の穗を前齒て嚙んで、私の手に渡した。
私は女の云ふが儘に宛名を書いた。
「裏には、稻垣――左樣、私がおくめだかてなも、粂雄として頂戴はんか。粂太郎でも粂吉でも宜しいわなも。」
こんな事を言ひ〳〵私の書いて行く手許を見守つて居たが、「左樣々々、それて好えわいも。此方の住所は書かんと置いて頂戴。」
かう云つて、封筒を手に執つて讀み下して見た。
「えゝ、何うも有難う。序に最一枚頼むぞなも。」
後の二枚も女の云ふ通りに書いて渡した。女はそれを受取つて、直に封をして出すと云ふでもなく、

其儘硯箱の押出へ仕舞ひ込んだ。私はそれを見ると、何だか手持無沙汰て其處に居づらいやうな心持がして、ばた〳〵と段梯子を駈け下りて仕舞つた。

日暮前に、又二階へ上つて見た。西向の窓の障子の下に鏡臺を据ゑて、女は湯上りの寒さにも萎げず、兩肌を脱いて、頻に身粧ひをして居た。足音を聞いて、一寸振回つたが、

「如何しやアした。あんなに逃げて行つて仕舞つて――」と云つたまゝ、頸を伸ばして、襟脚の白粉を兎の足てなぞつて居る。

私は簞笥の角に凭れて、がちや〳〵と抽手を鳴らして居た。女も別に口を利くてもなく、眉毛に墨を入れたり、口紅を注したりして居たが、最後に最う一遍刷毛て鼻の上をはたいて、

「さ、最うこれてお仕舞ひだぞいも」と、兩肌を入れながら、此方を向いた。大きな黒眼がちの眼に露を含んて、晝間とは丸て別人の樣にも見えた。

「何故逃げて行きやアした、折角上げましたものを取らず」と、笑つて居る。

私はにや〳〵としながら、何時迄もそこに立つて居た。やがて外の部屋から女どもが寄合つて來て、喧々云ひながら張店へ出る仕度をする間も、片隅にしやがんて、物珍らしさうに見て居た。

明くる日は學校へ行つた。併し女郎屋へ來て居ると云ふことは、誰にも云はなかつた。心ては上りを待兼ねて、伴侶から外れる樣にして、こつそりと戻つて來た。そして、直に二階へ遊びに行つた。

こんな風にして、暇さへあれば、私は此女の部屋に入浸つて居る樣に成つた。時々例の上書を書かさ

れた。何故私に書かせるのだと云ふことも、私には解つて居た。私は此女の云ふことなら、何でも喜んでした。外の女から頼まれて書いて遣ることもあつた。終ひには女と一緒に手習ひもした。

「亮はま、あゝ毎日田毎さんの部屋へ行つて、何して貰やアす」と、仲居の片眼が私を捉へて云つた。

「何もして貰やせん。」

「あんな事云つてりやアすが、乾度何かして貰やしたに違ひない。」

私は調戯はれるのだと思つたから、默つて居た。

「油舐りの田毎さんに舐つて貰やアすのぢやろ」と、仲居はしち冗く繰回した。

「何ぢや、油舐りつて何ぢやい。」

「はゝゝ」と笑つたまゝ、「叔母さまに聞いてりやアせ。それ、油舐りぢやて怖いぞな。」

何だか子供扱ひにされるのが忌々しいので、押しても聞かなかつた。又他人に聞いて見る氣にも成れぬので、心にかゝりながら其儘にして置いたが、油舐りと云ふ異名は隨分名高いものらしい。其後もちよい〳〵耳にした。

ある日、叔母と仲居との話を傍聞きして、やつと其譯が分つた。

此女はもと新地の淸々樓に居た。矢張田毎と云ふ源氏名で出て居た、顏立は取立てゝ云ふ程でもないが、どこか氣が利いて、一寸三味線も彈ける。お客に依つては、新内のさわり位好い聲て唄つて聞かせるので、座敷が持てる。藝者を上げるよりも面白いと云ふ評判が立つて、一時は素張らしく賣つたもの

だ。それが爲に檢番から苦情も出た位だが、間もなく大垣在のさる物持に引かされて行つた。ところで、そんな女のことだから、何うも田舍に燻つて居る氣に成れない。如何かして其處の家を出ようと思ふのだが、深い世話に成つたおぼえもあるし、幾許そんな稼業をして來た女だと云つても、左樣々々義理を外したことも出來にくい。それぢやと云つて、其儘辛抱することは尙更出來ぬ。いろ／＼考へた揚句、不圖一策を想ひついた。

　それが油舐りの一條である。

　世の中にろく／＼首と云ふものがある。美しい女が夜寢て居ると、女の首だけする／＼と伸びて、鎌首を擡げた樣に行燈の油を舐めたり、水甕の水を呑みに出たりする。それで眼が覺めて見ると、當人は一向知らぬと云ふのである。まさか頸まで伸ばす譯には行かぬが、切めて油を舐める眞似でもしたら、向ふから愛想を盡かして出て行けと云はれまいものでもなからうと云ふので、早速其仕度に取かゝつた。毎晩男の寢息を窺つて、こつそり床を拔けて出る。それから行燈の向ふへ廻つて、此方へ影が映るやうにしながら、ぴちや／＼と皿の油を舐める。勿論出來るだけ男には氣附かれない樣にした。男が身動きでもしたら、ぴたりと止める。凝乎と息を殺して、男が寢附くのを待つて、又そろ／＼と出掛ける。隨分氣の長い話ではあるが、そこが手際の入る所である。斯うして、毎晩根氣よく續けて居る間に、男も氣が附いた。そつと女の寢床へ手を遣つて見ると居ない。はてなと、四邊を見廻したが、枕元に置いてある有明の中へ首を突込んで、ぴちや／＼と油を舐めて居る。それが明くる晩もつゞく。其又明くる晩も

つゝく、左樣なると、男も怖氣が附いて來た。幾許執心を掛けた女でも、左樣云ふ女では家に置かれない。で、何氣なく女を喚んで、少し都合があつて暇を遣るから、お前に當てがつた物は悉皆持つて出て行つて呉れと言ひ渡した。女は思ふ壺に嵌つて來たと云ふ心持を色にも見せず、それでは是非が御座いませんからと、體よく其場を下つて、身のまはりの物は小片布一つ殘さず持出した。そして、又元の古巣へ舞ひ戻つて、一箇月も經たぬ間に同じ家から勤めに出た。男の方でも、後で一杯喰はされたと氣が附いたらうが、大家の主人ではあるし、それ限りに成つて仕舞つた。油舐りと云ふ異名はそこから出た。

其後、半年餘り新地に居たが、神風樓が出來ると一緒に鞍替して來たのだと云ふことである。こんな話を繰回して、

「それでも、能くせき可厭ぢやつたと見えるわなも。本當に菜種油を舐つたんぢやろか」と、仲居はやつこらさと尻を持上げながら云つた。

「そりや些とは喉へも行つたのさな。」

「はゝゝ」と、二人は笑ひながら立上つた。

私は少時其後に立つて居たが、急につか〳〵と二階へ上つて、女の部屋へ行つて見た。女は今日も蒲團の上に寐轉んで居たが、足音を聞くと、眼をぱつちり開いて、お出で〳〵をするやうに、夜着の片袖を持上げた。

あの口で油を舐めたのか、本當にそんな事をしたのか知ら——

それが訊きたいと思つても、如何しても口へ出ぬ。私はだん〳〵女の側へ近づいた。女の顔を見詰めたまゝ、ぢり〳〵と側へ寄つて行つた。云ひたい、云ひたいと思ふことが、如何しても云はれない。

「如何しやアした」と云ひながら、平常の樣に兩手で私を引寄せた。私は女の頸の下へ頭を押附けたまゝ、一人ぽろ〳〵と泣いて居た。

其後、油紙の一條は噯びにも出さなかつた。

師走の二十一日に、祖母の法事がつとまると云ふので、私は一寸自宅へ戻つたが、冬休暇の間は其儘自宅に居ることにした。一箇月餘りもあんな所の賑やかな生活に慣れただけ、母親と二人、それに作男を加へても、三人鼻を突合せて膳に向ふのが、何となく淋しかつた。殊に喰物が不味かつた。小さい時から喰ひ慣れた、お鰹節にお醤油をかけてお飯に添えて喫べるのが、何うも可厭で堪らない。

それでも、暮の二十八日には例年の通り餅搗きをした。今年は叔父の家の分も一所に搗いて、町からも手傳ひに來ると云ふので、朝から大騒ぎをした。日暮前から搗き始めて、夜通し杵の音がして居た。そして、明くる日の午近くやつと搗きをはつた。四斗樽の上に飾るのだと云つて、樽の鏡の外へはみ出る程の鏡餅もこしらへた。大晦日の日、皆それを荷車に積んで曳いて行つた。

除夜、元日、何事もなく濟んだ。

二日の朝、始めて神風樓へ行つて見た。大門を這入ると、廓の中は門松で林の樣に見えた。何處の樓も切剝ぎ竹に根こぎにした松や梅の古木をあしらつて、盛砂に景氣を添えてある。毎も晝間は森として

人通りもない街の上に、派手な裾模様の双つ一や姐さんらしいのが、印絆纏の上に双子の羽織を引掛けた男どもと一緒に成つて、羽根を突いてきやツきやと騒いで居る。赤い顔をして、格子先をぶら〳〵歩いて居る男も見える。私はあはてゝ叔父の家の軒下へ駈込んだ。

見ると、家の中が森閑として居る。少時梯子段の下に立つて待つて居たが、誰も出て來ない。何だか當の外れたやうな氣もした。

そこへ、ばた〳〵と例の叔母さんが二階から降りて來たが、

「あ、亮はまか」と云つたまゝ、此方へとも云はず、あたふたと奥へ這つて行つた。

私は飽氣に取られて立つて居た。つゞいて、のそ〳〵と隻眼の仲居が降りて來たので、

「如何したんぢやい」と訊くと。

「えゝ」と、梯子段を降りて仕舞つて、「田毎さんが酒に醉つて叔父さまと喧嘩したんぢやぞな。そりや一時えらかつたに。」

「何故そんな事したんぢやろ。」

「何故つて、そりや云ふに云はれん譯があるのさな。まア可えに、一遍二階へ行つて見てりやアせ。」

「左樣」と云つて、二階を見上げたが、女が醉拂つて居ると聞いたので、思ひ切つて直に上つて見る氣にも成れない。

少時うぢ〳〵して居たが、一段づゝ段梯子を上つて、そつと引附を覗いて見た。そこに五六人の女が

立つたり坐つたりして、何やらぼそ〳〵と話して居たが、一人が振向くと、外の女も皆一齊に振回つた。

私は直に奥の部屋へ行つて見た。女は懷手をして兩脚を投出したまゝ、簞笥の抽出に凭れて居たが、上眼にぢろりと私の顏を見た限り、直に又眼を伏せて、何時迄待つても何とも云はぬ。每もとは容子が違ふので、私から何か云はうとしても口へ出ない。少時立つて見て居たが、あきらめて階下へ降りて來た。

何ても、其晩から客へ出ないと言ひ張つて、ぢぶくつて居たのださうなが、それでも午過ぎに馴染の客が來たと云ふので、其男を相手に陽氣にはしやいて居た。三味線や太鼓の音も聞えた。そんな譯て、私は女の座敷へ行くことも出來ず、一人勸工場の側の吹矢へ行つて、吹矢を吹いて暮した。そして、明くる朝早く自宅へ歸つて仕舞つた。

此後、私はたまに叔父の家へ行くことはあつても、長く逗留して學校へ通ふやうなことはなかつた。女の部屋へも滅多に行かなかつた。私には能く解らないが、家の稼業も思はしくなく、だん〳〵店も寂れて行くらしい。叔父自身他所の樓へ上つて騷いて戻つて來て、それが悶着の種子に成ることもあつた。

そんな風て二三箇月經つたが、陽氣がぽか〳〵として桃の花の咲く時節に成つても、一向景氣が立直らない。其間、叔父は內密て店を他人に讓つて、其金子を持つて、夜逃げ同樣に名古屋へ上げ越して行つた。そこて小料理屋の樣なものを始めたと云ふことだが、それからと云ふもの、私は一度も叔父の顏を見たことはない。又、勿論私の家へ顏を出したこともない。

一年許りして、叔父が酒毒のために死んだと云ふ噂が傳はつた。其時は最う小料理屋の店も閉めて、何處かの裏長屋へでも這入つて居たものらしい。例の叔母さんは如何したらう。

「あれも感心な女ぢやぞえ。貞次が死ぬ迄側について居て面倒見たのぢやさうな。」

母親はこんな事を云つて居た。

二

私は十四の春を迎へた。

其頃から、私は俄然として大人びて來た。身長もずる〳〵と伸びて、一人前の小男よりはずつと高かつた。子供らしい遊びにはすつかり興味が失せて、同級の仲間の者なぞが夢にも知らないやうな、大人の世界に對して苦しい憧憬を感じて來た。そして、一人寂しい日を送つた。

勿論早熟だとは云はれやう。併し、私には左樣云ふ時期に際して、男だてら邊服を氣にしたり、女と云ふ女が氣にかゝると云ふやうな心持は知らなかつた。日常目に觸れるやうな女は、私とは緣もゆかりもない。私の心にとまる女は、只小說本や講談の中に棲んで居た。たとへば花見の歸りに若衆を見染めて、戀わづらひをしたり、それから乳母の仲立てやう〳〵思ひが愜つたり、愜つたかと思へば又別れたりして、惡漢に勾引かされるやら、苦界へ身を沈めるやら、さま〴〵憂目を見た揚句、二たび男に逅り合ふと云つたやうな女であつた。此一年間に、私は何れだけ小說や講談物を讀んだか知れない。尤も、

作者の名も知らず、表題さへ知らずに讀むのだから、後では一つとして覺えて居らぬ。只、次から次へ讀みに讀んだ。高潮に達した所へ來ると、明の鐘を聞いて床へ這入つたことも一度や二度ではない。夜も晝も夢を見て居るやうな心持がつゞいた。夢の中へ入り込む女には只一人廓で知つた女があつた。

其後、あの女のことは忘れるともなく忘れて居た。それが、何時となく、二たび心にかゝる樣に成つた。あの當時の事を一つ〳〵想ひ出して、二たび眼の前に泛べて見ることもあつた。

あの女も、一旦廓を出て、しばらく桑名で藝者をして居たが、それも面白くなかつたのか、此頃又金津へ舞ひ戻つてつとめをして居ると云ふ噂もうす〳〵聞いた。併し逢ひたいとは思つても、わざ〳〵逢ひに行つて見るだけの執心はなかつた。

昔から稗史小說の作者は、遊女を卑しいもの、擯斥すべきものとしては敎へない。寧ろ威嚴のあるもの、押の利くもの、女と生れたらあやかりたい位のものにした。私はたゞ云はれる儘に左樣信じた。それに、あゝ云ふ事情からあゝ云ふ種類の女を知つたので、普通の人の持つやうな、女郎を歯ひすべからざるものとするやうな心持は、悲しいかな、一度も持つたことがない。只、現實に見る女郎には、物本で讀む浮川竹の女に見るやうな、水仙の根を切つて花瓶に挿したやうなしほれがない、萎れた寂しみがない。そこに一種の反感を持たせるものがある。

兎に角、小說や稗史を讀みながらも、時々あの女の姿が紙の上にちらついて、雪の降る夜、裏庭の松の樹に縛られて、鴨手に折檻されて居る遊君をあの女だと思つたり、それを私が塀を乘越えて助けに行

つたりするにはしたが、未だ錢を握つて遊廓へ足を踏み入れるだけの度胸はなかつた。そんなにして、其年も無事に暮れた。

明けの年の春、私は鶯谷の小學校を卒業した。此儘田舍に殘つて百姓に成らうか、それとも上京して學問をしようかと云ふことが問題に成つた。年貢米を貰つて、冬は獵銃を擔いで林の中をあさつたり、夏は寫眞器でも肩にして水邊をぶらついて、一生のらりくらりして暮すのも氣樂で好いかも知れぬ。只、それでは何だか殘惜しい。見ない所も見たい、知らない所も知りたい。殊に此儘田舍の壯佼には成りたくない。四圍の男や女とは違つたものに成りたい、違つたものとして迎へられたい。私はいろ〳〵思ひ惱んだ揚句、卒業したら買ふ筈の獵銃と寫眞器とを捨てゝ、一人知らぬ旅路に上つた。

上京して、始めて志した學校へ行つて見た時、私はその狹いと汚いとに惘れた。芝口に宿を取つたまゝ、一週間許り通つて見たが、先生も生徒も教へることも詰らない。全體東京の街からして、雜駁でむさくろしい。如何しても長く居つく氣がしない。いよ〳〵故郷へかへるつもりに成つて、同宿の男に案内を賴んで、上野、淺草と見物して廻る間に、其男は私の紙入を浚つて逐電した。仕方がないから、山下の宿に泊つて、故郷へ書留郵便を出した。電報では意を盡さぬし、書留郵便なら普通の郵便よりも早いと思つたからである。

二三日して、故郷から一人の男が出て來た。其男に伴れられて、私は始めて下宿屋と云ふものゝ軒をくゞつた。其處から、又元の學校へ通ふことに成つた。下宿屋の起臥程味氣ないものはない。私の夢は

一

宵々に故山へ飛んだ。不思議なことに、私の夢に入るものは故郷の家を衛る母親でもない、勿論遊び仲間の友達でもない。あの女であつた。廓に居る女であつた。

夏の休暇に成つた。遊學と歸省、此二つの言葉位當時の私に快くも懐かしく響いたものはない。而も遊學に失望した私は、何の位歸省を待ち兼たらう。明日の朝立つと云ふ前の夕、銀座で少々の買物をして、革鞄に詰めて、枕頭に置いて眠りに就いた夜は、私の一生の間でも、實際幸福な夜であつたらしい。が、いよ〳〵汽車が故郷の町へ着いて、開札口を出た時、私は最う一種の物足らなさに襲はれた。歸省をする位なら、停車場へは弟や妹が迎へに來て貰ひたい。妹の年は十三で、弟は九つ位で有つて欲しい。併し一人子の私には弟も妹もない。妹の連れて、最一人同い年の妹にも來て貰ひたい。其頃のセンチメンタルな小說に魅せられて、心潛に許嫁の女を描いて居た私には、それがないのも、何とやら物足らない。私を迎へには、家の作男が荷車を引いて來て居た。

毎日、家にぶら〳〵して居ると、一層物足りない。偶には作男の小伜で釣の上手な奴にそゝのかされて、漁師の船を借りて、大川へ釣に出て見たが、それも興味を持たぬものには一向面白くない。柳の下に船をもやわせて、小伜が綸を垂れて居る間私は胴の間に寐轉んで、水蔭の『女房殺し』や眉山の『大盃』に讀み耽つて其儘歸つて來ることが多かつた。

長良の川祭の夜かと覺えて居る。未だ日のある頃から出かけて行つて、彼方此方人込みの中を押されながら、宮の裏へ出た。賑やかな人いきれの中を拔けて來ただけ、急にひつそりとして、ちらほら通る

人影も侘びし相に見える。川の流れについて、だん／＼堤を下つて見た。だん／＼祭の場から遠ざかつた。

渡船場を上つて、堤の上へ登つて來る一團がある。其後から、一人の女がおくれて上つて來た。何うもそれが二年前に別れた例の叔母さんらしい。私は思はず足を止めて、

「おい」と喚んで見た。其あとに叔母さんとは如何しても口へ出ない。

叔母さんは一寸眼を上げたが、其儘私の前迄來て、

「まア亮はまか、やつとか目だなも」と、さも人懷こいやうな表情をする。

「えゝ」と云つただけて、別に云ふ言葉を知らない。

「彼時から阿母はまは御機嫌よろしいかなも。」

又、「えゝ」と云つて、少時默つて居たが、「僕は、此春から東京へ行つて居るんだぜ。」

「東京へなも――矢張勉强にかいも。」

私は只點頭いて見せた。

「あゝ、今は夏休みて歸つてらつせるだなも」と、私の顔を見て居たが、「一遍金津へ遊びに來やアせんか。田毎さんも居りやアすぜえも。」

私は心持顏が赧く成るやうに思つた。

少時して、「何と云ふ家に居るの」と訊いて見た。

「田毎さんかな。」

「うむ、叔母さんても――何方ても。」

「えゝ、田毎さんはなも、金波樓知つてりやアすぢやろがな、角のあの家に居やアすに、一遍逢ひに行つてりやアせ。」

かう云つて、叔母さんはにや／＼笑つて居る。

隨分きまりの惡い思ひをしながら、それても何處やら嬉しさうな心持を隱し切れなかつた。其夜、家へ歸つてからも、同じ事ばかり思ひつゞけて居た。夜が明けても、未だ同じやうな心持である。

午過ぎ、例の小伜を誘つて、大川へ釣に出て見た。だん／＼船を下へ流させた。下るに伴れて、遊廓が近づいて來る。此邊から堤へ登れば、廓の裏までは四五町もあるまい。

「おい、一寸向ふの岸へ船をつけて呉れんか。」

「何處ぞへ行くのかな。」

「うむ、町へ買物に行つて來るから。」

小伜は云ふが儘に、船首を堤の下の砂地へ着けた。

「此處に待つちよるのかな。」

「なに、歸つて來たら喚ぶて、何處へなと漕いて行つて居るが可い。」

かう云ひ棄てたまゝ、堤の腹を驅け上つた。堤の上に立つて、一寸向ふに見える家の棟の高い一廓を

見渡したが、其儘又駈け下りて、田圃の中につゞく小路を一散に走つた。誰か見て居るやうな氣がして、只もう走らずには居られなかつた。日光が頭の上から照附けて、田の水も沸立つやうな日であつた。

裏門から廓の中へ入ると、傍目も振らず、金波樓の門口(かどぐち)へ來た。流石に一度は通り越したが、二度目に又其前迄戻つて來て、つと軒下をくゞつた。土間に突立つたまゝ、

「おい、〳〵」と喚んで見たが、皆晝寢でもして居ると見えて、一向返辭をしない。

「おい〳〵、誰も居らんのかい。」

二たび泣出しさうな聲を出して喚んだ。

「へえお出やす」と、直ぐそこの腰高障子の中から寢惚けたやうな、頓狂な聲が聞えた。

やがて、亂次(しどけ)ない風をした女が上框へ出て來て、

「お出やす、何うも失禮をしました」と云ひながら、ぢろ〳〵私の姿を眺めて居る。

「上つても可いかい。」

「え、何卒」と遽てゝ云つたが、藁草履を穿いて、編笠を抱えた私の様子が、何うも腑に落ちぬらしい。

私は構はず梯子段を上つた。後から跟いて來た女中に向つて、

「田毎と云ふのが此家(このうち)に居るんだね。」

「えゝ、見えます。田毎さん喚びましよかなも。」

「あゝ。」

一人引附に殘されて、ぽつねんと待つて居ると、やがてばたん〳〵と悠然した重草履の音がして、

「まア」と云つたまゝ、相手の女は襖の前に立止まつた。

私は立上つてつか〳〵と側へ寄つた。

女は少時私と眼を見合せて居たが、

「部屋へ入らつせ」と云つたまゝ、くるりと背後を向けた。そして、急ぎ足に廊下を引回して行く。

私は胸を躍らせながら其後に從つた。

いきなり障子を兩方へ開け放して、

「かう遣つて置かうかいも」と、云ひながら、べつたり長火鉢の前に坐つた。私にも向ひ合つて坐らせた。何とか言出して呉れるかと思つたが、何とも云はない。

「これ如何しやうなも」と、仲居が引附に忘れて來た編笠を持つて來た。

「あゝ、それか」と云つて、私は傍から引たくらうとした。

「何だいも、それは」と、女は笑つて見て居る。

「釣に來たものだから。」

「好え物釣りに來やしたな。」

二人が聲を合せて笑つた。私は眞赤に成りながら、相手の女が憎いやうにも思つた。女は何と思つて居るのだらう、何と思つて私が此處へ來たと思つて居るのだらう。

「左樣だかえも」と、女は笑ひ止んで、「此お人知りやアせんか。私が元居た家の息子さんだぜえも。」

「へえ、神風樓の。左樣かいも」と、仲居はぢろ／＼私の顏を見て居る。

「左樣ぢやないや」と、私は遮てゝ取消した。

「えゝ、息子さんと云ふ譯でもないけれど」と、女はいろんな當時の事を言出して、「毎日一緒に手習ひをしたでしよ。貴方も記憶えて居やアすか。」

併し、私はあの頃の私ぢやない、あの時分の私だとは思つて貰ひたくない。左樣思はれるのが可厭さに、仲居が

「何ぞ取つて參りましよか」と云つた時にも、直に、

「私は酒が飮めるんだぜ」と云つた。

「お酒上りやすの。」

「あゝ、東京ぢや誰でも呑むんだよ。」

かう云つた時には、自分ながら嬉しかつた。

仲居が出て行つた後で、

「さ、浴衣と着代へやアすな」と、簞笥から糊のごわ／＼したのを出して、背後から被らせた。帶迄結んで貰つて、二たび座に着いたが、兩方の肩から襟の邊りを振回つて、何だか影護いやうな心持もした。子供扱ひにされるのは可厭でも、こんな所へ來る並の客の樣に遇はれるのも好い心持てはない。

やがて三つ丼に銚子をつけて持つて來た。

「御面倒さま」と、女はそれを受取つたが、「私達二人て好え樣にするに、ほかつて置いて休んどくりやア。」

「へえ〳〵、そんなら御氣隨に」と、仲居は其儘引下つた。

私は盃を取上げて二つ三つ續けざまに乾した。女も默つて其後から注いで居たが、急に銚子を引くやうにして、

「最う止めて置きやアせ。無理に飮むと、後で苦しいぜえも。」

「ぢや、上げやう」と、私は出した盃を相手に突附けるやうにした。

「私最う澤山」と、大業に顏を蹙めたが、手に持つた銚子を下に置いて、酒を切り上げることにした。

私は思はずどきりとした。

「ね、そんで可えてしよ」と、甞ねて云はれて、私は女の云ふ儘に成つた。

女は

「一寸待つてりやすな」と、其儘階下へ降りて行つた。何をしに行つたのだらう。何だか看護婦が患者でも取扱ふ樣にされるのが怖ろしいやうでもあり、又物足らぬやうでもある。

少時して、何やら鼻唄をうたひながら廊下を戻つて來た。

二人は部屋の中に閉籠つた。

「幾つに成りやアしたいも」と、女が訊く。

「十五」と、私は小さい聲で云つた。

「私より八つ下だなも」と云つて、女は笑つた。

一時間許り後、二人は又長火鉢の前に向ひ合つて坐つた。私はうつとりとして女の顔を眺めた。女の容子がまるで違つて見える。私の眼には、最早元の女ぢやない。女も私のことを何と思つて居るのだらう。それが聞いて見たい、それが知りたい。

とは云へ、女は別に何とも思つて居ないらしい。細帶のまゝ立膝をして、重たさうに鐵瓶の湯を湯ざましへうつしたが、其儘朱羅宇の煙管を引寄せて、一服ゆつたりと吸ひ込んで、ぷうと鼻の孔から吹出した。私には出來ぬ藝當である。私の吸へぬ煙草を吸つて、私の出來ぬことをする。それが忌々しい樣でもある。

此の私は何時迄も歸りたくはなかつた。只、日が暮れてどさくさ仕出してから廓を出るのが可厭さに、思ひ切つて立上つた。女は裏の木戸迄送り出したが、

「阿母はまに、私に逢つて來たと云やアすか」と、わざとらしく笑ひながら訊いた。

「そんな事は云はないさ。」

「左樣、それなら好えわな。」

私は木戸を出ると、又一散に駈出した。街の角を曲らうとして、一寸振向いたが、女は未だ元の所に

立つて居た。

大川まで一息に駈け戻つた。小倅はさも待ちくたびれたやうに、堤の下へ船をつけて、ぼんやりして居た。

「些たア捕れたかい」と訊いたが、只氣の無ささうに、

「えゝ」と云つて棹を突張つた。

暗がりの水の上を半里餘り漕いで上つて、百姓家の夕飯過ぎに自宅へ戻つた。寢床へ入つてからも、たぶ／＼と船緣を洗ふさゞ波の音が耳について離れなかつた。

明くる朝、目が覺めると、先づ廓の女を思つた。昨日逢ひに行つて、又今日も行くと云ふことが、先の女に對して氣恥かしいやうにも思つたが、辛抱が出來ずに、例の小倅をそゝのかして、船に乘つて出た。

女は私の顏を見ると、只淋しさうな笑ひ方をした。私はそれが氣にかゝつた。何處やら前に知つて居た頃の其女とは違つて居るらしい。が、何時迄そんな事の心にかゝる年頃でもない。その日も、何をしたやら知らぬ間に日が暮れて、いや／＼送り出されて戻つた。

それからは、毎日の樣に廓通ひをした。毎日、同じ時刻に船に乘つて出て、同じ時刻に戻つて來た。晝間だから、何日行つても、樓中が森として、女も私一人を待つて居るやうに見える。何時の間にやら、私は女を自分一人のものゝ樣に思ひ出した。始終眼は輝いて居ても、丸で物の見えない私は、自分の火の手さへ高まつたら、相手も一緒に高まつたものと思ふ外はない。又、左樣思ふのを、誰一人妨げるも

のもなかつた。

いよ〳〵夏休みもをはりと成つた。

八月三十一日の朝、町の停車場から汽車に乘つたと見せかけて、直に引回して、女の許に隱れて居た。此一週間位、夢心地に醉つて居たことはない、一生あるまい。自分で何をして、何を云つたかも覺えて居らぬ、女が何んな事を云つたかも覺えて居らぬ。只、女は素直に相手をして居た、乳母が子供の世話をするやうに遇らつて居た。

一週間經つて、半分身體を殘して行くやうな思ひをしながら郎を立つた。

三

東京から、無暗に手紙を出した。返事が來れば、直に又其返事を出した。側の思わくなぞには未だ氣が附かない。當人は何と思つてそれを受取つたらう。兎に角、後れがちながら返事は來た。それが五通とたまり、十通と重なつて、終ひには束にして藏つて置いた。かうして一年の間つゞいた。

又夏休みが間近かに成つた。恰度五月の節句の頃である。半月餘りたよりが絶えたと思つたら、不意に其女から一通の手紙を受取つた。裏書に名古屋市門前町何十何番戸とあるので、先づ胸が騷いた。開けて見ると、去年の暮から二三度出た老人の客に、不圖した話のはづみから急に引かされて、十日程前に此地へ來た。相手は造酒舗の隱居てある。年寄のことてはあるし、ほんの出來心て引かせて貰つたの

だから、長う續く筈はない。晩くて二三箇月もしたら暇が貰へるだらう。そしたら貴方の側へ行つて、縱分何をしてなりとも添ひ遂げるから、必ず惡う思つて呉れるなと云ふ知せてある。

私は生れて最初のデスイリユウジヨンに出逢つた。遊女と云ふ名には、何處か濡ほひがある、たよたよとした所がある。併し人の妾が何だ、妾には同情も絲瓜もない。遊女は畜生にも劣つた境涯かも知らぬが、未だしも人の子が成る。妾には畜生が成る。あの女が隱居の妾に成らうとは思はなかつた。

私は眼が眩んで、四邊が暗く成るやうに思つた。一日一夜興奮した揚句、直に其家を出よと書いて出した。愚圖々々して出なけりや、何も彼も捨てゝ置いて、此方から出かけて行くと書き添えた。返事は今にも如何かするから短氣を出さずに待つて居て呉れと云ふのだが、其頃は大分心持も納まつて、直に出掛けて行く程ではなかつた。

其後は、此方から出す手紙も間遠に成つた。何うも樣子が宛名の所には居ないらしい。それだのに居所も知らせぬ。何處かへ消えて行つて仕舞ひさうな氣もして、心も心ならず日を送つた。其間に、やつと休暇が來た。

夏の朝、旅裝もそこ〳〵にして新橋を立つた。かねて打合せもしてあるから、笹島の停車場へ着くと、うろ〳〵場内を見渡したが、如何したのか女の姿が見えぬ。かつとして矢庭に腕車を傭つて駈出さうとした時、

「もし」と、背後から聲を掛けたものがある。「まア遽てゝ何處へ行きやアすか。」

「何處へ行くものか」と思つたが、好く〳〵見ると、女の容子が何處か窶れて、服裝も思つた程好くない。何だか當が外れたやうな心持がして思つたことも口へ出ない。其儘腕車をかへして、女に伴れられて、とある裏小路の旅人宿に泊つた。

私は始めて此女が素人の風をしたのを見た。併し最早私のものぢやない。左樣思ふと堪らない。如何して可いかも解らない。他人に身受をされるものなら、何故其前に一言知らせて呉れぬか。其前に知つて居たら、私だつて如何にか成らぬことはない。母親の前に出て、斯うした譯だと有樣を白状したら、それ位の身代金は出して呉れぬこともなからう。私は母親を見くびつて居たから、本當に左樣思つた。縦令出さぬ迄も出させて見せる、命にかけても出させて見せる。そんな事情は女の方でも分つて居る筈だ。女にしても、隱居の妾に成るよりは、私の家へ來る方が仕合せであつたらう――

「そんな事云やアしても」と、女は口を挿んだ。「阿母はまには、私お目にかゝることの出來ん譯があるてなも。」

「何故々々、如何してそんな事を云ふんだい」と詰め寄せた。

「如何してと云つて、そりや、いろ〳〵譯が有るわいも。」

「解らない、私には解らない。二人が夫婦に成るものなら、お前が阿母さんに逢はぬ譯には行かんぢやないか。それとも私の許へ來て呉れると云つたのが嘘かい、お前は私に嘘を云つたのかい。」

「いゝえ」と、頭振を揮つたまゝ、何とも言はぬ。

私も少時默つて居たが、「ぢや、最う云はない。濟んだ事は云はないから來てお呉れ。私の許へ來て呉れるのが可厭なら、私から出て行く。何處へでも行くよ。」

「貴方えも、今年十六に成りやアしたのだなア」と、不意に女が云つた。

「何故歳見たいなもの聞くんだい。」

「でも――貴方が三十に成りやアすと、私は幾歳に成るんぢやろ。かうつと、今年辰の二十九ぢやで」と、眼を瞑つて指折り數へながら、「恰度四十三だぜえも。そんなお婆さんでも好えかいも」と、うそ〳〵笑つて居る。

四十三にはさのみ驚かぬ。私も何時かは四十三に成るのだ。併し女は確か私より八つ上だと覺えて居る。女の口からも左樣聞いたやうな覺えがある。

「如何しやアした。何を考へてらつせるか」と二たび女が訊ねた。

「何も考へてやせん。歳なんぞ幾つだつて可いんだ。歳のことなぞ考へやせん。私は只お前と別れたくない。お前が來て呉れなけりや本當に如何成るか分らないよ。」

「そんなに云やアすと」と云ひかけて、女は言葉を途切らしたが、「だが、今は左樣思つて居りやアしても、三十に成つてから考へて見やアせ。屹度思ひ當りやアすに。」

「そんな、そんな人間だと思つて居るんかい。私はそんなんぢやアない、そんな薄情な人間ぢやない、」

「えゝ、そりや分つて居ますとて。」

「分つてるなら、何もそんな。」

「まアそんな話は止めて置かうかいも。折角私も無理をして出て來たんだに、しつぽりと逢つてお呉れやアさんか」と、つく〴〵相手の顔を覗き込むやうにして、「こんな事をしてりや、まるで帯屋の逆見たいだなも。」

「何だい、そりや。」

「何ても好えわなも。」

私は又女のするが儘に成つた。二人は徹宵ぼそ〳〵と絶間なく話して居たが、明方に成つてうと〳〵とした。眼を覺ました時にも、寢汗てしつとりとして、半ば夢心地が離れない。

やがて、十時頃に朝飯を濟ましたが、私は如何しても此處を立つ氣がしない。何時迄も此處に居たい、女も此處に止めて置きたい。

「私一遍自宅へかへつて來ますぜえも」と、女が云ひ出した。

「いやだ、未だ歸つちや可厭だ。」

「そんな事云やアしても。」

「ね、今日一日だけは可いだらう。切めて日暮迄も」と、私は哀願するやうに云つた。

「それが、昨日も出られぬのを無理に出て來たのだて、如何しても今日は歸つて居らんと――えゝ、何と云やしても。」

「だつて」と、相手の顏を見詰めたまゝ、「お前の許へは十日に一度か、半月に一度しか遣つて來ないと云ふんぢないか。それなら何もそんなに遽てゝ歸らなきや成らぬ筈はない。」

「えゝ」と云つて、私の顏を見返したまゝ、少時何とも云はぬ。

「ぢや」と云ひ掛けたが、頭の中はびくりと動いた。「左樣ぢやないと云ふんだね。」

女は默つて點頭いた。

「造酒舖の隱居だと云ふことも。」

二たび女は默つて點頭いた。

「ぢや、何だい。其人は何だい。」

「本當は――本當は博打を打ちやす人でなも、其方の親分だと云ふことだがいも」と、一寸私の顏を見ながら、又早口に言葉を繼いで、「それだて、こんな事が知れやうもんなら、何んな目に遭ふか――ひよつとしたら殺されて仕舞ふかも知れんぜえも。萬一そんな事にても成つて、私だけなら可えが、貴方に迄――」

私は飽氣に取られて、何とも云ふことが出來なかつた。如何思つて可いかも分らない。

「だて、如何しても今日は歸らな――好えかいも、其間又都合を見て逢えるやうにするてなも。貴方も一度お宅へ歸りやアせな惡いぜえも。」

かう云ひ／＼歸つて行く仕度をして、「私もそんな顏を見て歸つて行くと、何日迄も氣がゝりだてなも。」

好えかいも、乾度來月の五日過ぎには、私が實家へ行くと云つて内を出るてなも、其時に貴方も四日市迄來てお呉りやアせ。え、左樣して頂戴なも。」

少時返辭を待つて居たが、

「そんなら、最う行くぜえも」と、女は部屋を出て行つた。

其後に、私は一人座つて居た。

あの女が遊び人と一所に成つた――あの女が。元々自分が好きて成つたのか、それとも――それが聞きたい、それが聞きたかつた。好きて成つたんだとすりや、そんな女に用はない。私とは緣がない。何うもあの女にはそんな所がある、私には分らぬやうな暗い半面がある。

其夕、汽車て自宅へ戻るには戻つた。二三日は人にも會はず、氣拔けがした樣にして、うつら〳〵日を送つた。そして、毎日同じ事ばかり繰回して考へた。

或朝、郵便脚夫の手から一封の手紙を受取つた。差出人の名がない。私はそれを讀むと俄に其日の午後口實を設けて家を出た。

四日市の町を外れて、山の手へ一里半許り上つて行くと、名もない溫泉宿が一軒ある。そこに行つて待合せよと、手紙にあるのを手賴にして出た。知らぬ所へ行くのと、女に逢ふと云ふ期待とて心を震はせながら、汽車や腕車に搖られて、夕ぐれ目指す宿へ着いた。店に駄菓子を並べて、草鞋や馬の沓さへ釣してあるが、奥は思ひの外に廣い。古めかしい勾欄が築山や泉水の端をめぐつて、内湯も沸く。女は

と聞いて見たが、未だ着かぬと云ふ。其夜は裏の松山に騷ぐ風の音を聞きながら、一人眠りについた。
明くる日、午前中待つて見たが、未だ來ない。午後は此村に盆の村芝居があると云ふので、私は苛々しながら氣を紛らしに行つて見た。例の畑の中に蓆を引張つた小屋である。宿の女中に案内をさせて棧敷についたが、幕合の騷々しいこと夥しい。物賣がわめく、子供が泣く、棧敷がひしめく。寢不足の頭にはぐん／＼響くやうな騷動である。私は幕開きも待たず這々の體で逃げ出した。
かへりには宿の前を通り過ぎて、一丁許り行つてから氣が附いて引返した。廊下で行逢つた女中が、
「あの四日市からお待兼の方が見えました」と告げた。
私ははつと思ひながら襖を開けた。
「お歸りやす」と、女は身體を振向けて「晩かつたかいも、大變待つて頂戴したさうだなも。」
「うむ」と云つたまゝ座についた。
私は女の顏を見ると、二たび逢へないものに逢つたやうな氣がして、云ひたいことも口へ出ない。一緒に酒を飲んだり湯に入つたりして、ぐつ／＼と日が暮れた。
それでも女が私の前で平氣で其男のことを言ひ出して、肝癖が強いから一度も外へ出して呉れない、今度始めて十日許り留守に成つたので、早速實家へ行くと云ひ置いて出て來たのだなぞと、事もなげに話すのを聞いては堪らない。私は苛々する心を抑へながら、
「そんな男が、お前は好きなのかい、好きてそんな男の許へ行つたのかい」と、私は詰るやうに訊いた。

女は意外な面持をして見返したが、
「いゝえ、好きぢやない。誰もあんな怖ろしい人の好きなものが有りますものか。」
「ぢや、何故そんな所へ行つたんだい。好きでないものが、何故始めに左様成つたんだい。」
女は唇を噛んだまゝ少時默つて居たが、
「それが因果だわいも、私の因果で仕様がないわいも。」
「ぢや、矢張好きだと云ふんだね。」
「いゝえ、嫌ひでも仕様がない。彼樣云ふ男に見込まれたが最後、幾許可厭だと思つても逃れ樣がない。未だ貴方には解らんがえも、あゝ云ふ人達と云ふものは、一旦見込んだら、縦令殺してでも自分の思ひ通りにせな置かんのだぜえも。又殺さうと思つたら殺し損ないはない。それが可厭なら、あの人達の云ふが儘に成つて思ひ通りにされて居るより外に仕様がない。」
そんな事が有るだらうか、そんな無法な事が此世の中にあるのだらうか。私は相手の顔から眼を離し得なかつた。
「それぢや、お前は其男の云ふが儘に成つて居るんだね。此後も成る積りなんだね。」
女は默つて居る。
「如何しても」と、私は泣聲に成つて相手の身體を揺振つた。「如何して私を捨てゝ行くのかい。これ、最一遍私の許へ來て吳れることは出來んのかい、如何しても出來んのかい。」

「勘忍して頂戴」と、女も涙聲て云つたまゝ、疊に顔を伏せて仕舞つた。
「いや、勘忍しない、私は何處迄も勘忍しない」と、頑是のないことを言ひ張つて、「それよりも私の云ふことを諾いてお呉れ、私の云ふ通りに成つてお呉れ。」
「そんな事云つてりやアして」と、女は顔を上げて、「私が急に居らん様に成つたら如何しやァすか。不意に姿を隱したら――」
「そんな事をする積りかい」と、私はおづ〳〵相手を見守つた。
女の云ふ所に依れば、其男は北海道の空知太へ移住する計畫を立てゝ、今度もそれが爲に旅行したので、旅行先から歸れば、直に此地を引拂ふ手筈に成つて居る。勿論女も伴れて行く。今も云つたやうに、此際男の言葉に違ふなどとは思ひも寄らぬ。何處迄も云ふが儘に成つて連れて行かれる所へ隨いて行く外はないと云ふのである。
空知太と聞いて、私は此女が死んで行くやうに思つた。最う爭つて見る氣力もない。只一生懸命に女の身體を放しまいとした。
「本當にそんな所へ行く氣かい、行くつもりに成つて居るのかい。」
「最う何も言はずに氣い好くして頂戴」と、女は涙に哽れた聲をして、「これから未だ七八日あるて、其間好な事して遊ぼかいも。何ても相手に成りますぜえも。」
私はそれを嫌だと云ふ勢もなかつた。

明くる朝に成つて、伊勢詣りでもしようかと云はれたが。何うもそんな氣はない。何日迄も此處に居りたいと云つた。そして、毎日遣瀬なげに女の顔を見てばかり暮した。

七日目に其處を立つて笹島の停車場へ戻つたが、前に泊つた旅籠屋に立寄つて、女は其儘別れて行かうとした。私は如何しても最一度逢ひたいと云つて、女も承知した。

他人目を憚つて、女の後から見え隱れに隨いて行つて、舞津の隱れ家も突とめた。とある二階家の隣りの露次を明けて、一寸振回つたまゝ、女はつと姿を隱した。其夜、暗がりに紛れて、二三度其家の前を通つて見たが、空家の樣に森として物音一つ聞えない。夜露にしつとりと袂も濡れた頃、やつと諦めて宿へかへつた。

次の日、かねて示し合せた時刻に例の露次口に行つて、ほと〳〵と木戸を叩いた。やがて誰やら足音を忍んで近づいたかと思ふと、細目に木戸を開けて、女がそつと顔を出した。そして何にも云はずに小手招きする。

私は默つて木戸の中へ這入つた。何本も青桐の立つて居る中に古びた茶席めいた平家があつて、女はそこへ連れて行つた。其内側は案外こじんまりと人の住む樣にしつらえて、長火鉢には鐵瓶の湯も沸つて居た。

「昨宵は淋しかつたよ、私には迚も堪へられさうもない。」

私は座に着くと、直にかう云つた。

女は手を上げて制するやうにしたが、
「能く來て頂戴したなも、怖ろしいことなかつたかいも。」
「怖かつたよ。」
つと立上つて、私の側へ摺寄るやうにしながら、「誰も見えせんで可ぇわいも。」
私はそれてもがた〳〵と胴震ひした。
日暮前に、女は木戸から私を送り出さうとした。私は女の袂を握つたまゝ離さなかつた。仕方がないので、途中迄送つて來た。私は田圃道をぐる〳〵廻りながら、何時迄も別れやうとしない。とつぷりと日も暮れた。
「何處迄行つても同じ事だて、最う歸るぜぇも」と、女は幾度か繰返した。
私は其都度何とも云はずに女の袂を摑んだ。日が暮れて、人顏が見えなく成つてからは握りづめにして離さなかつた。
「一遍そこ離して頂戴。最う歸つて居らんと、本當に惡いてなも。」
「いやだ、〳〵、如何しても離さない。」
「そんな無理な事云やアしても」と、女は立止まつて引振斷るやうにした。
「何方が無理だ。如何してもお前は私を捨てる氣かい、捨てゝ行くつもりかい。」
私は葱畑の中に座つたまゝ、ぼろ〳〵と淚を流した。流れる後から、淚は夜風に乾いた。其後から又

新しい涙が流れた。

女も側に据がんで背中を撫てて居た。

「私はいやだ、お前に捨てられるのは可厭だ」と、時々想ひ出したやうに云つた。

畑の畔を人が通るたびに、二人は聲を呑んだ。時間は何れ程經つたか分らぬ。

「最う行くが可えかいも」と、女の聲が聞えた。

私は默つて居た。

何時の間にやら、女は其處に居なかつた。

それから十三年に成る。

私は二たび其女を見ない。此後も恐らく逢ふことはなからう。

偶には何處に居るやらと思はぬこともない。當時、本當に北海道へ行つたものと諦めたが、今に成つて見りや、あの女の云つたことは皆嘘て、つい近所に生きて居る樣に思ふこともある。

靑桐の中の家は、其後行つて見ぬから分らない。（をはり）



梅龍の話

小山内薫

着いた晩はどうもなかつたの。―繪葉書屋の女の子が、あたしのお煎餅を泥坊したのよ。それをあたしがめッけたんて大騒ぎだつたわ。でも姐さんが可哀さうだから勘辨してお遣りッて言ふから、勘辨してやつたの。(赤坂のお酌梅龍が去年箱根塔の澤の鈴木て大水に會つた時の話をするのである。姐さんといふのは一時は日本一とまで唄はれた程聞えた美人て、年は若いが極めて落ちついた何事にも襤褸を見せないといふ質の女である。これと同じ内の玉龍といふお酌と、新橋のお酌の若菜といふのと、それから梅龍の内の女中のお富といふのと、斯う五人て箱根へ湯治に行つてゐたのである。梅龍は眼の涼しい鼻の細い如何にも上品な可愛い子だが、食べる事に掛けては、今言つ

た新橋の若菜と大食のお酌の兩大關と言はれてゐる。梅龍の話に喰べ物の出て來ない事は決して無い」

水の出たのはその明くる日の晩よ。あたしお湯へ這入つて髮を洗つてゐたの。洗粉を忘れて行つたんでせう。爲方がないから玉子で洗つたのよ。臭くッて嫌ひだけど我慢して。さうすると、なんだか急にお湯が黑くなつて來て、杉ッ葉や何かが下の方から浮いて來るのよ。妙だと思つてると、お富どんが飛んで來て、「水ですから、逃げるんですから、水ですから、逃げるんですから。」ッて大慌てなの。何だか分らないから、よく聞くと、山つなみとかで大水が出たから逃げるんだッて言ふんでせう。それから大急ぎでお湯を出たの。髮がまだよく洗ひ切れないんでせう。氣持が惡いから香水をぶつかけたら、尙臭くなッちまッたの。爲方がないから洗ひ髮をタオルで向う鉢卷なの。好い着物は汚すといけないからッて、お富どんがみんな鞄の中へ納つてしまつたんでせう。あたし宿屋の貸浴衣の長いのをズル／＼引き摺つて逃げ出したの。でも若し喰べ物が無くなると困ると思つたから、牛の鑵詰と福神漬の鑵詰の口の明けたのを懷に捩ぢ込んで出たの。ところが慌てて福神漬の口の方を下にしたもんだから、お露がお腹ん中へこぼれてグチャ／＼なの。氣味が惡いッたらなかつたわ。

外へ出ると、眞暗で雨がドシャ降りなの。半鐘の音だの、人の騷ぐ聲だのは聞えるけど、一體どこにどの位水が出たんだか、まるで分らないのよ。兎に角向う側の春本ッて藝者屋へ逃げるんだッて言ふから、あたしも附いて行くと、もうそこの家は人で一ぱいなの。鈴木のお客さんをみんなそこへ逃がしたんでせう。下駄なんか丸でどれが誰のだか分らないやうに澤山脫いであるの。

その内に向う川岸の藝者屋が川へ落ちたつて言ふのよ。なんだか少し恐いと思つてると、水力が切れて電氣がみんな消えて了つたの。

蠟燭を上げますから一本宛お取りなさいッて言ふ人があるの。それからみんな手探りて一本宛貰ふのよ。あたしそッと二度手を出して二本取つて遣つたわ。あたし達はそれから二階へ通されたの。貰つた蠟燭は、大根の輪切りにしてあるのを臺にして、それへ一本宛さして、みんな自分の前へ一宛置いてるのよ。姐さんはお守をちやんと前へ置いて、お行儀よく座つて兩手を合せて一生懸命に何か拜んでゐるの。

春本の藝者はあたし達を東京の藝者だと思つたらしいの。《梅龍は時々こんな物の言ひやうをする。自分は藝者といふ者と一向關係がないやうに言ふのてある。それてはお孃さんぶつてゐるのかと言ふと、さうてもないのてある。要するに唯何ても構はず思つた通りをドシ〳〵しやべるのてある。》だけど、聞くのも惡いと思つたんてせう。なんだかモジ〳〵モジ〳〵してるのよ。『こんな所にゐては充りません。』だの何だのッて言ふの。なんだか愚痴見たいな心細い話ばかりするのよ。

その内に向うの山が崩れたッて噂なの。

すると何だか、轉がつて來たものがあるから、見ると、おむすびなの。一つ宛ッきや呉れないのよ。それてもお腹が減つてたからおいしかッてよ。姐さんはどうしても喰べられないッて言ふから、あたし姐さんの分も喰べて上げたの。お數は懷の福神漬を出したんだけど、若菜さんは、そんなお腹ん中てこ

ぼれた物なんか穢なくて喰べられないッて言ふの。だから、あたし一人で喰べたわ。

とう〳〵その晩は夜明かしよ。

朝の三時頃にお星樣が見えたの。その時のみんなの喜びやうッたら無かつたわ。

明くる朝は、又雨風がひどいのよ。いつまでそこの藝者屋にもゐられないし、それにもう塔の澤は一體に危くなつたから、今度は湯本の福住へ逃げるんだッて言ふのよ。

出ようと思ふと、床の間に紙入が一つ乘つてるのよ。あたし姐さんのだと思つたから、澄まして自分の懷へ入れッちまッたの。すると、そこへどッかの奥さんが上つて來て、『あの、若しやこの床の間に紙入が乘つてはゐませんでしたかしら。』ッて、あたしに聞くのよ。さあ、あたしどうしようかと思つちまッたわ。あたしは確に姐さんのだと思つてるけども、若し姐さんので無ければ、その方のに違ひないでせう。でもそこで自分の懷から出して聞いて見る譯にも行かないわ。自分の懷から出して見せて、若しその奥さんのだッたら、きまりが惡いでせう。だから、あたし目を白ッ黒しながら、『いいえ。そんな物ありませんでしたよ。』ッて言つたの。さうすると、『さうですか。どうも失禮しました。』ッて、その方は直ぐ下へ降りておしまひなすつたの。

姐さんは恐い顔をしてよ。『梅ちやん。お前さん、知つてゐて隱してゐるんぢやあるまいねえ。人間てものは、かういふ時には妙な氣を起し易いもんだから、氣を附けなくちやあいけないよ。お前さん若し持つてるなら、お願ひだから出してお呉れ。』ッて言ふんでせう。あたし何だか氣味が惡くなつて來て、

『だつて、これは、姐さんのでせう。』ッて、懐から紙入を出して見せたの。すると姐さんは尚と恐い顔になつてよ。『ほら御覧。持つてるぢやないか。よそ樣の物を懐へ入れるといふ事がありますか。』ッて言ふの。『だッて、あたし姐さんのだと思つたんですもの。』ッて言ふと、『直ぐ下へ持つてッてお返しして入らつしやい。』ッて言ふのよ。それから、あたし下へ持つてッて、『今よく探しましたら、戸棚のわきにありました。』ッて、その奥さんに渡したの。奥さんは幾度も幾度もお禮を言ふのよ。ほんとに、あたしあんなに困つた事は無かつたわ。顔がぽッぽして、汗びッしよりなの。

それから仕度をして外へ出ると、ザアザアッて雨なの。橋を渡らうとすると、橋の板が一枚一枚めくれさうにしてゐるのよ。姐さんは死んでも渡るのは厭だつていふの。でも逃げないと危いからッて、あたしとお富どんて、抱へるやうにしてやつと渡らせたの。あたしも若菜さんも平氣なものよ。あんな面白い事なかつたわ。〔大抵な人は一度斯ういふ目に會ふと懲りるものだが、梅龍は一向平氣なものである。これから却つて水が好きになつたと言ふのだから驚く。こなひだも溜池に水が出て、梅龍の家の揚板の下まで水が這入つた時も、自分の荷物だけはちやんと二階の安全な所へ納つて置いてから、尻ッぱしよりで下をはしやぎ廻つたといふ利己的な奴である。〕

やつと湯本の福住へ着いて、やれ安心とお湯へ這入つてると、こゝも危くなつたから、又逃げるんだッて言ふの。大變な雨風で傘も何もさせやしないのよ。姐さんは、お金がないと困るッて、信玄袋だけ持つて逃げたの。

やつと別館へ着いたと思つたら、姐さんが目を廻してひツくり返つて了つたの。別館にはもう大勢お客が逃げて來てゐるのよ。するとそのお客の中から、大學生見たいな方がどういふ譯だか、マントで顔を隱して、コップに注いだ葡萄酒をマントの下から出して下すつたのよ。それを飲むと姐さんは直ぐ氣が附いたの。「あんまり心配したり雨に濡れたりしたからなんでせう。〔この事はその後都新聞へ文章面白く書かれた。その大學生は或博士の秘藏息子であつた。梅龍の姉は大學生の親切が元で思はぬ戀に落ちたといふ風な極古風な艶種であつたが、梅龍はいつも『まさか。』と言つて、否定するのである。〕それからお醫者を呼ぶと、芝居のお醫者さん見たいなお醫者さんが來てよ。そりやあ、ほんとに芝居の通りよ。いやに勿體ぶつて。それて藪醫者なの。なんにも分りやあしないのよ。とう／＼終に分らないものだから、家の方が水で危いからとか何とか言つて、逃げ出して行つて了つたのよ。ほんとにあんなお醫者ッて始めて見たわ。でも、姐さんは直ぐよくなつたの。

別館では大勢で焚き出しをしてるのよ。あたし前の晩におむすび二つ喰べたッきりでせう。お腹が減つてたから隨分喰べてよ。姐さんの分もお富どんの分も大抵あたしが喰べちまつたの。

明くる日お天氣になつたから、玉龍さんと若菜さんと三人で玉簾の瀧へ行つて見たの。方々、水が往來を流れてゐて面白かつたわ。玉簾の庭はメチャ／＼なの。瀧はいつもの倍の倍の倍位大きくなつてゐるのよ。あのお池の側の離れ見たいなものね、あれなんかも流れッちまッてゐるのよ。

なんにも喰べる物がないから、お茶屋で懷中じる粉を買つて、お湯で解いて飲んだの。そしたら小さ

い日の丸の旗が出てよ。旅順口なんて書いてあるの。餘ッ程古い懷中じる粉なのねえ。(懷中じる粉は買つたのではないのである。お茶屋ではもう何所かへ逃げて了つて誰もゐなかつたのである。梅龍達はそこらに落ちてゐた懷中じる粉を拾つて來て水で解いて飲んだのである。これはもうお富に聞いて、わたしはちやんと知つてゐる。)

それから歸り道に大きな石を拾つたの。それは隨分大きな石なのよ。三人で一生懸命に持ちやげたの。どうかして、この石で姐さんを欺して遣らうと思つて、新聞屋へ寄つて、新聞紙を一枚貰つたの。それからその新聞紙で石を丁寧に包んで、おはぎの積りで持つて歸つたの。

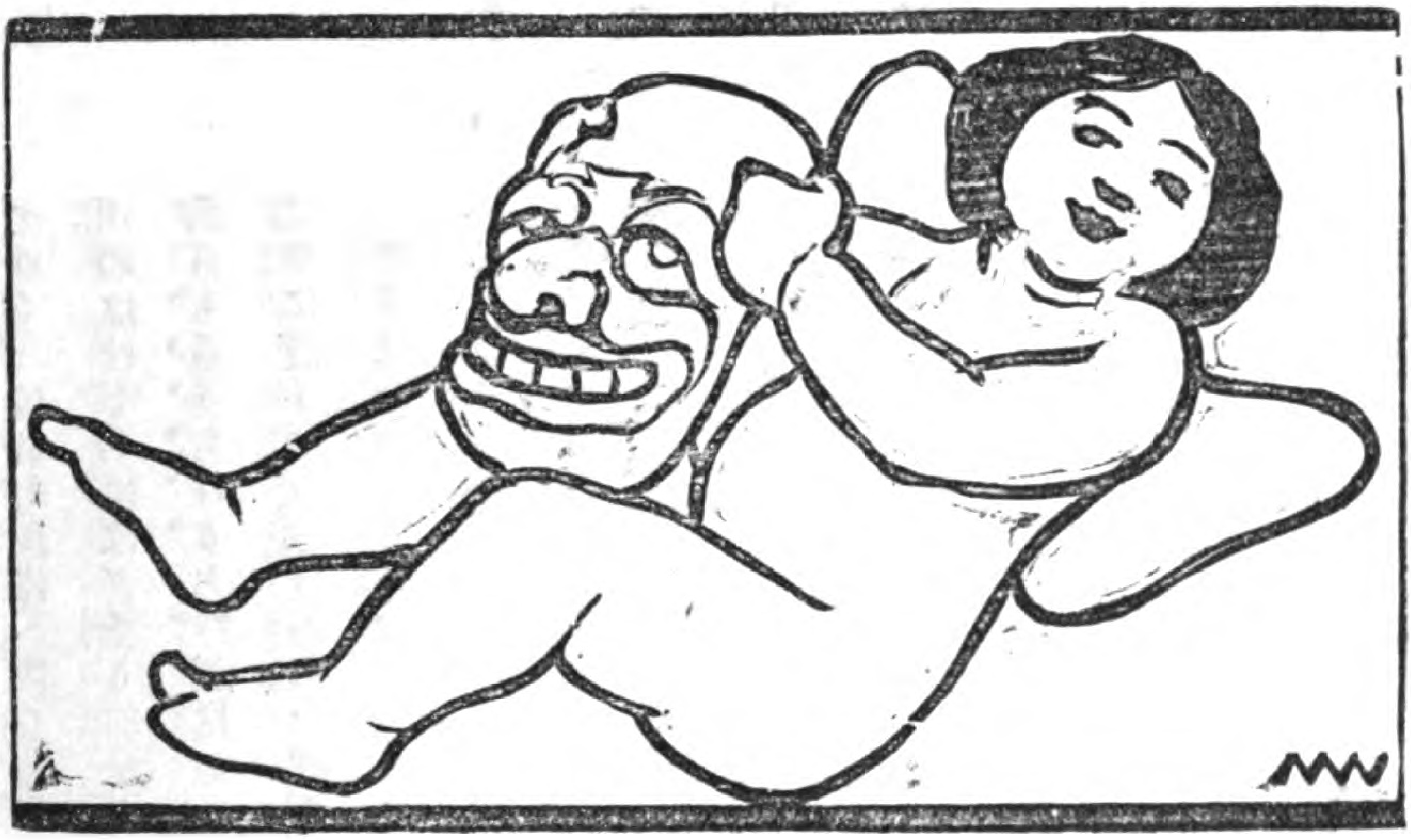
家へ歸ると姐さんは一人で本を讀んでるのよ。『姐さん、おはぎをお土産に買つて來ましたよ。』ツて、石を出すと、姐さんは本から眼を放さないで『あいよ。』ツて手を出したの。受けると馬鹿に重いもんでせう。きやあッて言つて驚いて庭へ投げ出しちまつたの。地響きがしてよ。姐さん隨分怒つたわ。

庭に穴があいたもんだから宿屋の人にも叱られてよ。でも隨分面白かつたわ。

水の時の話はそれッきりだけど、まだ跡で面白い事があつてよ。あたし達の泊つた箱根の春本の藝者で小玉とか何とか言ふ人が、この頃赤坂へ來てゐるのよ。こなひだ三河屋で一緒になつたら、向うの方で頻に水の時の話をしてゐるのよ。あの時は家へ來て泊つた鈴木のお客に餘所行の下駄を二足とも穿いて行かれて了つて、あんな困つた事はなかつたッて言つてるのよ。水が濟んでから二三日してお座敷へ行かうと思ふと下駄が足駄も駒下駄も兩方とも無かつたんですッて。

あたし、どきッとしてよ。あたしが穿いて出た下駄に違ひないんですもの。あたしあの時なんてめ構はず出てゐる下駄を突ッかけて出た覚えがあるの。

それから、あたしその小玉さんとか言ふ人にあやまつたわ。あたし、あやまるの大嫌ひだけども、泥坊ッて言はれるのは厭だからあやまつたの。そしたら、向うぢやもうあたしの顔よく覚えてゐなかつたわ。損しちやつたはねえ。



かよわきもの

長谷川時雨

外はまつ暗に暮れきつてゐた。宵暗の小さな島はひたひた岸にあげてきた滿潮に、霜の深い夜ごろでありながら、何處にか潮の香がこもつてゐて、乾ききつた北風にも、何となく柔らかい濕り氣がある。

眞砂座の座附茶屋から出た秋子は、劇場の前の強いアーク燈の光りを背にあびて、中洲の橋を渡つて車を急がせた。三河樣の邸跡の大樹の枝が、暗の夜に一層黑い影をつくつてゐる河岸ッぷちを行くとき秋子は車の上から中洲の空を振返つて見た。大川の水は路より高く潮があげてゐるかのようにふくらんで、やや明るい色に押上げ

てゆく。佐賀町河岸へゆく渡船は番小屋に灯も見えない。中洲と舊土洲邸の石崖にかこまれた懐の、緑川のはけくちにはとまり船が多くもやつてゐると見えて、濃く黒く、暗が重なつて影をつくつて、其間からちらりちらりと灯が見えてゐる。家々のかげにかくれた劇場のアーク燈は、光りの末がまるく、青く紫にぼーつと霜げた色にぼやけてゐる。

秋子はやつと手袋のボタンをかけおはつた。人いきれのする中から出て來たので、河風が一層身にしみる。深々と捲いた襟巻を鼻のあたりまで引上げて、此度は向つて行く方の空を眺めた。其處には黒青い雲の底から白い薄光りの糠星と、青い光りの小さな星のまたたいてゐるのが、まるつきりの暗夜より淋しく見えた。其光りの寒げに冷たさうなのを見てゐると、秋子は車の上の寒さが身にしみて肩をすぼめた。手足の冷るほどな額の熱いのが、手をふれて見ないでもよく知れた。心持ち引詰め加減にしてある前髪がうるさいほど氣になつて、だん〱被冠さつてきて眼の上にくつついてしまうような心地がする。抄ひあげるようにして見ると、前髪は却て向ひ風に後の方にねてゐる位で、亂れ髮も額には引ついてはゐなかつた。秋子は別段持病もちてはないが、あまり强かりとしてゐない細つこい體を、此頃寝不足がつづいたり、外出がちて寒い風に吹かれ通し、其上氣忙しない思ひの重なつてゐるのを、人前ては氣を引立てゐる。それだけ餘計に勞れやすい體質が勞れきつてゐるのだと、自分て哀れみもした。すこし勞はりたいとも考へた。けれどそれも此處拾日ばかり許されない譯がある。

今何を見てきたつけかと、ふと今迄ゐた眞砂座の舞臺を秋子は思ひださうとした。何てあつたらう、

何だつけしらと、惱ましい額をおさへて考へても思出されない。凝と眼をつぶつてゐると耳の底で、何かの機械の車が廻つてゐるやうな音がする。どうしても思ひだされぬので、劇場へいつた迄の順序を繰返して見た。専科へ通ふ學校を二時間だけで濟ませて、四時過に歸つてくると、濱町の梶井からすぐに來てくれといふ迎ひがあつたと、家の者も氣忙しさうに告げて、車まで乘つてゆくばかりに仕度がしてあつた。重苦しい頭をささへた細つこい頸を冬の日にあてゝ、うなだれがちにぼんやりと包をかかへて歸つてきた秋子は梶井さんから呼びに來たのは、ああ、あの事件だとすぐに氣がついた。そしてぼんのくぼを日にさらして、とぼとぼ歸つて來たとは大違ひに引締めた顏をして濱町の家へいつた。すると梶井さんの細君になつてゐる從姉が一人殘つてゐて、梶井さんは秋子のくるのを眞砂座で待つてゐるとの事であつた。從姉は秋子をつれて後から來るやうに言附けられて、殘つてゐたのである。

中洲の芝居へ行くと、梶井さんは例の通り全盛を極めて、西の棧敷をずつと拔かせ、寛たりとして唇に盃をあてながらにこついてゐた。傍には仲のよいお友達で、濱町の家に寢泊りもする山内さんもゐる此頃は從姉の家へばかり足がむいて、學校を忘れることをおぼへた秋子の弟もゐた。此座で名をあげた新派の、村井一座で顏を見る俳優達も大勢取巻きにきてゐる。柳橋の藝妓もゐた。其處へ秋子は從姉に連れられていつた。梶井さんは秋子の顏を見ると

「あつちやん此方の切符は出來ましたよ、本符付の方は貴女の方でとつておいて下さい。何其方の家の顏もあるから三百人位は直さ。」といつた。それから居ざんまいを改めて

「然しどうもお呼立をして濟みません、御苦勞樣」と挨拶を仕直した。

其そつのない通人らしい樣子に、年齡ならばたいした違ひのない人であるのに、おまけに秋子自身を中心としての仕事ゆゑ、此方からこそ何とか挨拶をしなくてはすまぬのを

「いゝえどういたしまして」と逆なことをいつてから「種々有難うございます」と附足すより外秋子には適當した言葉も出なかつた。

梶井さんはすつかり飲込んで、大樣にそれを受けてゐた。秋子はやつと山内さんに挨拶をするだけの餘裕が出來た。顏を見知つてゐる藝妓達が會釋をすると、俳優達も頭を動かした。

「連中の日には幹事は無論私ですがね、そこにゐる有象無象がみんなお手傳ひつていふのだから大變ですぜ」と梶井さんは俳優達に指さしゝた。すると其中で頭立つた一人が、誰さんも上ると言つてをりました。彼さんも是非ゆくといつてゐましたと、新派の名ある俳優を名差しにしていつた。そして

「此度はどうもその、何とも御名譽のことゝて」と改まつた言方をした。從姉はそれがをかしいとて笑つた。

「全くなんだね、脚本見物つていふんだから珍らしいや、ね　ところでそれが居寢りの出るようなのだと猶面白い。歸るときに眼を引こすつて、誠に結構なんざ、何が結構なんだか分らないところが猶好いね」

梶井さんの惡口を他人事か何ぞのように、秋子は他の人と一所に笑つてきいてゐた。

ついそれが今方、耳にし、目にし、自分もしたことを、一年も二年も前にあつたことのように秋子は思ひ出した。それからさきはほぐれた絲をそこら中へ手繰りだす口を附けたようにらちくちなく、誰の言つたこと、彼の樣子振りと、種々なことが一所くたに連絡して浮び出してくる。其中でも梶井さんが「うまいと思つたのは木挽町へはまるやうにして、おまけに白襟の貴婦人方にうけの宜いように、侍るとか候とかいふ言葉にした事さ。だけれど他ぢやいけませんよ、劇場が木挽町で成駒屋がゐて、御見物が十日間白襟の買切りといふ、此度のような上流むきの時でなくつちや、拜見するはうが其方から惡くすると慈善金を頂かなくつちや納まらないかも知れない。」と言つたのが、其時はさほどにも聽かなかつたが、靜に考へ出すと、まつたくさうだと身にしみて領かれる。

傍には劇道に明るい山內さんもお出なされた。あんな、下手が描いた繪卷物の中の人物のような。色彩も個性もない者を數多くならべて、內容は少しもない、貧しい空想に作りあげたものを、どうして舞臺にのる作だといふ、情ない目のくらい自信を持つてゐたてあらう。そして幸か不幸か、それが華々しく當代一流の俳優に演じられるようになつた。翌々日はどういふ批評をきくてあらう。それよりもそれよりも、今梶井さんの傍に居られた山內さんは、どんなに片腹痛く思はれたかと思ふと、秋子は恥しさにかつとして、例のように、體中に冷たい汗がはつと出た。懷中には二百枚からの連中切符を持つてゐる。それには秋子の名にちなんだ、村雨會といふ連中の名が刷られてあると思ふと、晴がましい表にたつ其日の不安が先立つて、右の肋膜がだるく、肩の凝が堪られぬように氣の張りが崩折れてきた。

車はいつか、秋子の家に近く、深川へ渡る長い橋にかかつてゐる。秋子はほつと息をして、中洲の芝居では舞臺の引幕を眺めたばかりで、何も見なかつたのだと氣がついた。誰が出勤して、何の狂言かといふことも知らないでゐるのであつた。秋子の頭に殘つてゐるのは梶井さんの連中と、梶井さんの言葉と赤黒く爛れた電氣燈の光りと、濁つた空氣の中に見た、底黒く見えた見物人の澤山な顔とであつた。

秋子は車が轅を門口におろした時に、今夜こそやつと自分の體になれると思つた。すると彼方へ出す返事、何處へだす禮状と、幾つか書かなくてはならない手紙の、つかへてゐるのがありますとばかり、忘れてゐたことをぐつと頭の奥の方から押出して來て、思出させるのにほつとした。其外にも書かなくてはならない、日限りで受合つてある雜誌社のものもある。

「すぐお出かけになるから其つもりで」と下女が、車夫に言附けてゐるようにきこえた。それを聽流して奥の間へはいると

「あ、お歸りなさい。手紙を御覧になつて」

出迎へながら秋子の妹は、姉の顔色のよくないのを凝と見た。

「お約束がしてあつた筈だつてね。間違ひなくお出下さいつて、日本橋の姉さんのところから使がきたのよ。」

あゝさうだつけ、そんな約束もした、が

「今日だつたてせうか」とあやふやに聽いてきた、日と時間を、秋子は妹にきくやうにした。

「私もきいたようなのですけれど、すつかり忘れてゐましたのよ。ゑゝ築地の宮古へ八時からですつてもし忘れてゐらつしやるといけないと思つて、手紙を濱町へ持たせてあげたのよ。」

何事にも冷淡な、自分の部屋からあんまり出て來た事のない妹にしては、珍らしいほど氣をつけて、次の間には花莚の上に、すぐにも手を通して着て行かれるように、秋子の模樣ものが取揃へて出してある。

「行らつしやるならお風呂へはいつてらつしやいな。寒いのが違つてよ」といつたが「だけれど、あんまり勞れてゐらつしやるなら、斷つたつて好いてしよ。」と、上衣も脱がず、襟卷きもとらずに火鉢にもたれてゐる秋子の樣子を見ると、氣に障らぬように遠慮のある調子でいつた。

「さうね」

秋子は煮きらない返事をして額をおさへてゐた。今宵秋子を招待しようといふのは、或家を中にしてお互に遠い親類のはしになつてゐる人である。秋子はどういふものか此招待が眞面目なものではないようにも考へられた。先方には面白半分の遊びごとでも、身分も位置も、年齢のつもりもはるかに高い人に、禮のない事をすることは出來ないと思つた。そしてものうい體を起して浴室へはこび、暖まつて氣分のすこし癒つたのをしほに髮をときつけ、白い襟を重ねて、紋のある着物をれいれいしく着粧つた。帶を廻しかけて伏眼になると、何となしに秋子は熱い涙のうるんでくるのをとめられなかつた。かうして一日のうちに幾度か、恥かしい思ひ、面はゆき思ひをし、晴がましく、見へすいた追從に、熱くなり

寒くなり、心を顫かしてゐるものを、人の目には虚榮の滿足を得た、春の空高く舞上る小雲雀のようにも思へよう。約らぬ、ほんとに約らぬ作、專問家の鑑識から見たならば、とるにも足らぬ評の下しようもない愚作が懸賞にあたつて、日本一の劇場の舞台にのるといふのを、好奇心の强い世間では、其的にたつ當人はかよわい者て、名と實とともなはぬを恐れ、晝間の梟のように、絶へず不安に慄へてゐるものを、夜の世界に驕る梟のように、我は顔に思ひあがつてでもゐるようにとつて、其高慢さを見て興じてやらうと思ふのてはなからうかと、秋子にはそんな邪推も幾分かこもつた涙が、胸に一ぱいになつた。

秋子を今宵招待しようといふ人は、子爵樣と呼ばれるかなりな年齢の、名望のある人である。秋子は仲にたつ人から、常にこの子爵の裏面ばかりをきかされてゐた。其子爵は美しい年のゆかぬ藝妓や舞妓を選好んて、腕白者が妹のもつてゐる姐樣の首をむしりとつたり、咲きかけた花の枝を折りとつて、花を散らしてしまふような、無慙な事をするのを好むといふことを忘れてゐなかつた。然し今迄二三度は其子爵に秋子は面會してゐる。唯見たところは肥肉なよく笑ふ人てある。仲にたつてゐる女があんまりあてにならぬことをいふ、言葉に信用のおけない女といふことも知つてゐるので、其女一人を便りに出かけるのは心細くもあつた。

　其女のことを、秋子は妙な綾から姉さんとよんてゐた。秋子とは水と油のような、溶けあひにくさうなまるて違つた氣質て、他人の目からはとても仲の合いさうな、似通つたところは見えなかつたが、秋子が神經質らしくて、其癖ずぼらなところのあるのを買込んてゐる、割合に人のよいガチヤガチヤした

機嫌買ひの女であつた。實業家の夫人とよばれて、夜更けてからの無理酒に身をそこねた、昔の面影とはまるで違つた、憎らしいほどの健康體になつても、濃い眉毛をよせて煙草をのむとき、金の吸口に、ぐつと噛んだあとを殘すのが、消えきらぬ昔の名殘かと秋子は見入つたこともあつた。

詫しい夜だと秋子はつくづく思つた。霜げた街は何處の家も早く戸閉してゐる。二月の月は朝日のさす間も、午後も寐入つたように淋しい。ことに夕暮れから夜へかけての詫しさ、家の中に家内集つてゐてさへ、涙のさしぐまれる時もあるのに、人にはいはれぬ淋しい思ひを抱いて、一生に幾度もない華やかな日の、其一日のうちだと思ひながら、勞れた顏を取繕ろつて、強て笑をつくつて、此夕暮から夜にかけて巷に車を走らせてゐる。そんな約らぬ事迄兩親達がよろこぶにつけ、秋子には言ひようもなく愁く、重荷だと感じられた。

築地の夜のしづかさは、乘つてゐるゴム輪のきしるのが、ぴつたりと身に添ふようであつた。何家かの垣根から洩れて、梅の薫りは路ばたにまで漂ふてゐる。小意氣な片折戸をあけて、格子の中の障子にほんのりと燈火のさしてゐるうちが幾軒となくあつた。其家の一軒からは、ぴんとはねた、響の強い三の糸の音がきこえた。何となくひつそりした中に、ざわめいてゐる黑い影のあやのあるような、細い小路を通りぬけると、本願寺の伽藍の大屋根から、寒い風が吹落してゐた。宵の間の黑雲はきれて、月はないが霜夜に冴えた空になつてゐる。お添地にゆく小路の立木の枝は、風にあたつてかさかさと鳴つてゐる。石垣の崩れから卵塔の陰の見ゆる、淋しい町のはづれに、狐にばかされたように赤い灯のぱつと

さした、奥の方から調子の外れた笑ひ聲と、ぽかぽかときこえる空虛な鼓の音のする、宮古といふ家の玄關へ秋子は立つた。

大勢の女中に導かれて奥の座敷へ通り、屏風のかげて亂れた髮をときつけてゐると、姉さんとよぶ女が、笑ふ時にちらりと光る、上齒の奥の金齒を見せて出てきた。秋子の後へまはつて襟もとを揃へてくれながら

「羽織なんか脱がなくつたつて好いつたらさ。私の家ぢや、ダイヤの指輪を祝つてやりましたつて威かしてやつたわ、あんな小つぽけなのだつて言ひつこなしだよ。あのお爺さん、お揃ひの時計でも誂へてくれると好いんだけれど」

と言ひながら、秋子が脱ぎかけた羽織の袖を入れさせ、前へ廻つて自分で其紐を締て、秋子の胸をたたいた。女中達は此姉さんを、此處の老女將の知己なのでよく知つてゐた。秋子が迷惑さうに手をひかれてゆくのを却て笑つた。其室の床には、期より早い菜の花が、椿の根添へにさして、古い壺に投込んである。椿は白い色であつた。

桐の丸胴の火鉢の前には、三金輪に淺黃緞子の座布團が敷いてある。秋子は冷た手を暖めながら四邊りを見廻した。障子の中硝子からは、椽に近い霜除けをした木の枝と、ほんのり點した燈籠の灯とが見える。姉さんは秋子の手を、煙管を持たぬはうの手で握つて

「まあ何て冷たいのだらう、どうしてこんなに冷るの」と、わざとらしい眉を顰めた。

秋子は客によんでおきながら、どうして子爵が挨拶に來ないのかと、姉さんに問ひたくてたまらなかつた。それを言ふと、それはじまつたと笑はれてしまふので堪忍をしてゐた。姉さんはその様子をじろじろ見て

「また考へこんでゐるのね、姉だよこの人は。だから何だか淋しさうな眼附きに見えるのだわ。始のうちは、随分それて心配させられたもんだわ。何故つたつてさ、此方が一生懸命に面白く咄しをしてゐるとさ、笑つて聴いてゐたくせに、いつの間にか返事が變になつたと思ふと、ぼんやりして、一人で勝手に考へ込んでゐるのだもの。今こそ此人の癖だと知つてゐるけれど、ほんとに驚かされちやつた何が氣に入らなかつたのかと思つて。だつてさ、べそでもかきさうなのだもの、傍から見ればまるで私が小突いてゐるように見えまさあね。」と言つて

「およしよう秋ちやん」と秋子の肩へ手をかけて搖すつた。秋子は仕方なしに笑つて姉さんの顔を見た。其處へ老女將がはいつてきた。姉さんはおかみさんの顔を見ると、

「ねえおかみ、私は此人の束髪がばさばさて氣に入らなかつたのだけれど、矢ッ張り今度のような事があると束髪の方が好いね。日本髪にすれば意氣になるのだけれどね」秋子の前髪の下へ手をいれてぐつと上へあげて見せた。秋子がそれを煩しさうにすると

「およしよそんな事をするのは、束髪の方が品が好いよ、藝妓なんかぢやないのだから」とおかみさんは押止めた。おかみさんは小さな髷を上の方へ根上りに結つた、艶々した眼鼻立ちのよい老女である。

「忙しいの忙しくないのつて、だけれどもうぢきさ。今夜はお爺さんをつかまへてお正月をしようね、私もはいるから」と秋子には分らない相談をして、

「何しろお爺さんを挨拶によこそう、お客をして顔を出さないなんて事はない。尤ももうあつちも直に散會だから、それて失禮してゐるのかも知れないのさ。まあ好いや好いや、知らない同士ぢやなし、其内に二階の方のお座敷も出來るから。」

秋子に言ふのか姉さんに向つていふのか、兎に角おかみさんは一人承知をして去つてしまつた。

「藝妓藝妓つて安つぽくいふけれど、藝妓て儲けてゐるくせに……、昔の花魁てをかしいね」姉さんはおかみさんの出てゆく後姿を見てつぶやいてゐる。それをきこえぬように言ふのでもなかつた。きかぬようでもなかつたが振向きもしない。秋子の方が氣の毒らしく思つたが、さつぱりした人達だとほほゑまれもした。

「おや、笑つてゐるの。」姉さんは秋子のことを、をかしな人だと言つて笑つた。

秋子の微笑んだのには譯がある。それは箱根のある温泉宿の女將を思出したからてあつた。世の中を思ふままにきりぬけて來た其家の老女將は、男の放縦な一面のみを好くしり盡してゐるので、男ほど馬鹿なものはないと言つてゐる。そして自分を律にして、女の傑いのがほんとの傑いのだと思込んでゐる其人も以前は柳橋で鳴らした藝妓て、自分の男の子よりも女の子の方に望みをかけてゐる。

秋子はそれをさうと姉さんには告げなかつた。姉さんも自分を買込んでゐる女てある。女だつてとい

ふ氣性の勝つた女である。秋子が力まないのを齒がゆがつて、此場合を應用しないのを、つけつけといふ女である。

黑ちりめんの五つ紋に袴をつけた、例の通りにこにこしてゐる子爵にともなはれて、二階の廣間へ席をかへた。離れた別の廣間には、亂酒になつてゐる宴會の崩れがあつた。

美しい粒選りの若い藝妓達は、所在なさに長く曳いた着物の褄さきを揃へて、三五人づつ固つて並んでゐる。銀杏がへしの髷の小さい老妓は、二三人で火鉢をよせて細い煙管を出しかけてゐる。女客二人に配膳をするには、ありあまるほどに藝妓も女中も出てゐる。子爵は二人の前へ斜に座つて、袴の襞をきちんと呻しかけた。老女將は秋子の傍へ座つて、此料理がおいしいからとか、このお腕が好い加減だからと、一々蓋をとつたりお皿を前へよせたりして、幼い孫の世話をやくように、膝へ半巾までかけさせようとした。若い藝妓達は綺麗な眼に笑みをふくんで、その樣を興ありげに眺めてゐた。

「强かりしておくんなさいよ。私達だつて嬉しいやね、ほんとだよ他人ごとだとは思やしないのだから。」

おかみさんは幾度かそんな意味の言葉を繰かへした。秋子は其度毎に人々の眼が、自分の額に集まるようで、面ほどりがして四邊の煌かしさに、却て電燈の色が黑いようにさへ思はれた。

「ほんとに强かりして、後をうんと踏應へておくんなさいよ。ぢつき世間ぢや女なんていふものはとくるからね、おまけに馬鹿ものが、どんな事を考へないとも限らないからね。決して騙されちやいけませんよ。」

おかみさんの聲は、しんみりと秋子の胸に答へた。

「其通りだ。」子爵もしんみりとしてゐる。

「何もよく心得てお出なのだらうから、決して自分ぢや大丈夫だと思つてお出てもね、心にすこしでも透があつちや駄目ですよ。男といふものは先方から、面白さうだと思ふと手を盡すからね。」

「おばあさん好く云つてあげた。秋子さんよく聽いてお置きなさい。此人がかういふ場處で、さういふことを云ふのは、それこそ肺腑から出た言葉なのですから、永い間の……」

「おだまりなさいよ、子爵がそんな事をいへるものですか。」

しんみりした處を、姉さんがはしやいた調子で攪まぜてしまつた。姉さんは藝妓達の方へ

「ねえ、さうぢやありませんか、ねえ」といつたが、一人が態と笑顏をしたばかりで妙に座が白けた。

「此處にばかり居なくつても好い、他へも顏を出しておいて」子爵は藝妓達にむかつて、氣樂に勸めさせるように言つた。

「さうだとも、彼方もあんまり淋しくしちや惡いよ。お出、おいて」

女將の言葉で四五人が出ていつた。

「ねえ、おかみもう御膳をきりあげてはじめようか」

姉さんは眞面目なはなしに厭がきたように見えた。秋子はそつと時計を見ると十二時に近かつた。

「何を始めようとお言ひなさるの。どうも秋子さんの前だが、姉さんは鐵火で困りますね、鬼神のおま

つ以上です。」と子爵はゆつたりと笑つてゐる。

「秋ちやんに見得をして、今夜は嫌にお爺ちやんが殿様ぶります。今夜は私の處へとめるといつて、秋ちやんの車は歸してあるのですから」といつて、秋子の困つてゐる様子などにはまるで關係のないやうな顔をして、子爵が勝つたら芝居の切符を、五十枚買はせると、姉さんは一人ぎめをして、せつせとお腹をこしらへてゐる。

老妓達はお膳をひくと、挨拶をしてもらつていつてしまつた。一人の若いのが女将さんと私語いてゐたが、傾いて出ていつた。姉さんは肘で秋子を突いて、それが子爵の馴染だと小聲で云つた。

やがて其人が黒つぽい衣類に代へて來た。秋子の眼には薄い髪の毛と、地味な帶の間の、肉色の帶上げとが眼についた。いつそ水淺黄ならば、寒さうに見えても淸からう。眞紅ならばあれほど媚かしくはあるまいと考へた。あの肉色のやうな、なまあたたかい、柔らか味のある女になつては、此後世に一人立ちしてゆく事はむづかしいと、女将はそれとなく親切にいつてくれた。誘惑などにかかるやうな、媚かしい瞳をもつやうな女には、なりたくないとは自分でも思つてゐる。淋しい、淋しいと思つて暮す方が、回顧つてからの心地もよく、自分にも適してゐるやうに思はれる。白くては染る色が種々にある寒さうでも冷さうでも水淺黄に、淸いあつさりした生涯が送れれば送りたい。てなければ、寐むつてゐる山のやうな、灰色に消てしまつてもよい。底深く封じこめた深紅の焔を、知る人はたつた一人でなくてはならない。

秋子は痛む胸をおさへて眼を伏せると、心に燒附けてある人の面影が浮んできた。この面影さへ薄れてゆかずば、心の精進に惑ひはないと心強く思つた。

肉色の帶上げの主は、秋子達と同じ敷物をしいた。老女將も進められて敷いた。秋子の招待された時間は、お膳を下げると同時に過ぎて、秋子はたつた一人、姉さんの歸りをまつお供にしかすぎなかつた其人達とは座をへだてて、しよんぼりと、夜寒を身にしみて味ひながら、小さな札を手器用にあつかふ四人の手許をながめてゐた。淋しいと思つたり、考へ事をするのには、あんまり秋子は勞れきつてしまつてゐた。暖い我家の寢床を戀しく思ひながらも、身を起すのも物憂く、引止められるのが見えすいて歸りますと思ひきつていふのも、態と興味をそぐようにならうと、徒口になるようで言出すのも嫌になつてゐた。

夜更けての物の味は薄いとて、强烈なウヰスキーがはこばれた。樂しみのまとひにはづれてゐる秋子は、お酒の仲間にも外れてゐる野暮であつた。影の薄い取のけ者は、ものをはこんで來ても、人々の勝敗に氣をとられてる女中の眼から洩れて、熱いお茶ひとつ貰ふことも出來ず、白い灰になつてゆく火鉢を前に、袖を重ねて肩をすぼめてゐる。

と廊下で、醉漢の罵る聲と、中年の女の怒鳴る聲が入亂れてきこえた。

「何だらう」

女將がめくらうとする札の上へ、子爵は手を廣げてとめて耳をたてた。

「騒々しいぢやないか。何だい、何事だつていふんだい」
女將はじれつたさうに呼んで、手を鳴らして女中をよんだ。
弄そばるる、色を賣る女は、其處にも肉色のしごきしどけなく昏酔して倒れてゐるといふ。秋子は、かよわきものと哀れんで、さくに堪へぬ其女の醉體をさくまいとした。ウヰスキーに血の狂ふた女達は女同士の同情もなく
「あきれかへつたね、どんな姿をしてゐるんだい。」と毒々しく言つた。それでも流石におかみさんは樣子を見にいつた。
「見て來てやらうかしら」
姉さんは面白さうに思ひやりもなくいふと、
「隨分なんてすもの、覗いておやりなさいましよ」女中が慘酷なことを進める。
「姉さん」
秋子は堪らなくなつて聲をかけると、
「かまふものか、秋ちやんも御覽よ」と出ていつてしまつた。入違ひに女將がはいつてきた。
「どうしたのだい」
子爵の聲も興ありげに、秋子にはきこえなされた。
「どうもかうもつて生意氣なんてさあね、お客樣が惡い事はない、當人がそんなようにされる事をした

のてさ」
女將の聲は、出入りの若い藝妓の不始末を罵つて、不興氣にいつてお客を立ててゐても、何處にか涙を飮んでゐる、弱い商業と堪へてゐる不滿が見える。
「いえ子爵の御存じのぢやありませんよ、くだらないのですけれど、宴會だからかけてやつたのでさあね、家あたりへ始て來て生意氣な。」
それが藝妓ばかりへいふのではなく、客へもかけて云つてゐるようにきこえた。
「飮めもしないのにお猪口をはやらせたのですつてさ。だからたまらないわ、あつちからも、こつちからも、ウヰスキーだビールだつて、ちやんぽんに、ちつとも高盃のあく間がないようにされたのだつて。」と肉色の帶上げが語つた。
「仲間にも憎まれたのだね、始てはいつて藝もないのだから」
「さうだつて、變な商業をつい此間までしてゐたのですとさ。それをお客樣が知つてゐたのですつて」
「客も客だあね、田舍ものにや料理店さんの格も分らないのだ。家て馬鹿なまねをされてたまるものか。」
女將の調子は激しきつてゐた。
「お客もお客だけれど、女も女ぢやないか、あのだらしなさつて、口から泡をふいてさ、まつ青になつて疊にじかに島田を押附けてさ。嫌だつてつちやない、着物の前もなにもこんなになつて」姉さんは仰山らしく其樣子までして見せた。

「怒鳴つてゐたのは仲次らしかつたぢやないか」

「ええ仲次さんよ。心配して見にきて見附けたのでせう。そんなに御心配なら見てらつしやい。」と言つて、肉色の帯上げの女は姉さんと顔を見合せて笑つた。

「ばからしい、自分の家の抱へはよく見えるのさ。なんてあんなものお客がどうするものか、自分も酔つてゐるから首つたまへも噛りついてゐたのさ。」

「ほんとさ。おかみ、あんな者の箱を入れさせないが好いわ」

秋子は姉さんが、どうしてこんな思ひやりのない事をいふのかと疑はれた。女將は、

「體が直つたらすつかりお帳場へ詫をさせて、お客が知れてるから五十圓も見舞ひにとつてやらうよ」

と何氣ないやうに輕くいつた。

それが秋子には嬉しくきかれた。口には強くいつても、弱い者に對して、涙をもつてやつてゐるのが秋子の胸には響いた。人の言葉と、廊下のむかふの小座敷の様子によつて、其場のさまが、どんなに亂がはしくあつたかといふことが察しられる。電燈の照してゐる下に、女はしたたか御酒を吐いてゐたといふ。脚もあらはに、肉色の長じゆばんはこぼれ出してゐたといふ。女には謹まねばならぬ體に障りもある。

秋子は、此夕方から堪へてゐた、泣たいような氣持ちが嘔上げてきて、ほろほろとこぼしてしまつた

「秋子さんえらい事をきいて、吃驚してしまつたのだね。」

子爵はまき直した札を、興の乘らぬさまに投出して、秋子の傍へきて火鉢の火を堀つた。皆も手をやすめて秋子の顏を見た。どうしたのかといくら問はれても、女子の淺間しさ情なさにとは、姉さんには言へなかつた。

二時を打つとやつと歸ることになつた。秋子は姉さんの馬車へ乘つて、クッションに身を埋めると失心したようになつてゐた。馬車は遠く北の方の空があかくなつてゐる火事のある方をむいて、姉さんの別莊の方へ走らせてゐた。

心は勞れてゐて眠られぬ夜を、日が出てからうとうとして、午後に秋子は姉さんの囚はれから逃れて歸つた。留守にした家には、諸方の新聞社の記者が押寄せてゐた。

もみ紳のようにぼやけて、魂にどれほど皺がよつたかと思ふほど、秋子は體がもみくしやになつたようにがつかりとしてゐる。芝居の方からも稽古を見に來いと言はれてゐる。それも見たいような、見たくない心地もして、昨日の舞臺ざらひにでも見ればよいと、人まかせにしてしまひたくも思つた。久しぶりに書齋へはいると、今日屆けなくては濟まぬ原稿も氣になつた。も一度今日來てくれといつた、梶井さんの約束も思出した。筆をとると何心なく、「不安」といふ文字をにじませてしまつた。

夢のようにふらふら或ものゝ上へ、押上げられたと思ふと、目に見えぬ細い綱を捲くのが知れる。氣がついた時分には、もう宙にぶらさがつてゐて、自分の體が衆目の的となつてゐる。はつとすると冷汗が流れてきて、眼がくらんで胴ぶるひが出る。

知らぬ間に頭に戴き首にかけ、腕にかけ手に持つた、花輪や花束の、花も、リボンも慄いてゐる贄に捧げられる小羊は、此様に飾られるものかと、恐ろしいなかにも思ひうかんだ。

とても紫の雲が下つてくるような奇蹟はある筈がない。ない限りは、落ねばならぬ運命であらうか。

衆人は眼をひからせて見護つてゐる。

捲きあげられた時に、喝采の叫びかと思つて、胸をとどろかせたが、あれは續がされて、なるたけ高いところから、まつ逆さまに落てゆくのを見る樂しみの爲に、釣りあげられた幕明きに、そらと息をのんで、唇をあけた音に過ぎなかつたのだ。

それが喝采の聲ときこえるまでに、見物は多人數ある。美しい花を飾らせたのも、落ちて飛び散りくだけるのに、見映のあるようにと、餘計にはづんで飾らせたのであらう。

けれど綱は、ふつつりと手ぎはよくきれない。空になつた瓢箪のように、體は風にもまれて、ふらふらとしてゐる。

氣忙しい見物人は、そろそろ厭がきたか、首筋を揉みながら新らしい見物を見出さうと、地の上を睨み廻して歸り出した。

冷たい涙は止度なくこぼれてくる。涙がかかると花までが萎れて、生きた色もない。

かうしたものか、下にはもう眺てゐる呑氣な人はなかつた。

冷たい冷たい風が吹いて、まつ黒な暗がこめてきた。

ふらふらと書けた原稿紙には、かうした墨の跡が殘つた。秋子はもつと華やかな色彩のあるものが書きたかつたので、讀かへして見る心になれなかつた。仕方がない今考へゐる自分の心の影ゆゑ、殘しておかうと思つた。

昨日の嫌な氣分は、忘れようとしても、寢不足の頭から消さうにもなかつたが、快活な人達の仲間にはいると、秋子の氣も自然と輕く、引出されて笑ひもした。其反對に今日の梶井さんは妙にお酒がそれて、取まきの者へ皮肉な言葉をいたはり氣もなく浴せてゐた。傍には山内さんが取成してやりきれない時は苦笑ひをしてゐた。秋子の弟はまた今日も入りびたつてゐる。秋子はそれが何となく面白くなかつた。

鷄肉を煮て皆な夕飯をすませた。秋子は人いきれと火の氣にのぼせて、高盃の水を飲んでゐた。鳥鍋の煎りつくのへ水をさすのとおなじように御飯のすんだあとの酒席は荒れて興のないまでまづまづしげてあつた。梶井さんの舌は愈々鋭くなつてきて、誰彼の差別なしに皮肉をあびせかけられた。

「秋ちやんにも言ふことがある。」と向直つた。秋子にはそれをそらす上手がなかつた。

「何ですか承はりませう」と、梶井さんの瞳をじつと見詰めた。

「よろしい。ぢや言ひますよ、秋ちやんは惡くすると乞食になる。」といつた。

「こりや甚い」と取巻きのものは茶化してしまはうとしたが、

「だまつてゐろ。」と怒鳴りつけられた。
「どうして秋ちやんはお嫁にゆかないのです。第一今度なんぞのことは、秋ちやんの爲には一生の不幸だ。これて好いなんぞと思ふとそれこそ大變、末にや乞食になりますよ。失禮ながら女の文士なんか何になるのです。お嫁にお出なさらないつていふ、其理由が伺ひたいものですな。」
従姉はとりなしようがなくて、そつと座を外してしまつた。秋子は胸のうちて
「知れよう筈がありません。貴君なんぞに私の胸がしれよう筈がありません、いくら貴君が通人ても」
と思つてゐた。
「お嫁にゆかずとも、心と心が添ふてゐたらばそれてよいてはありませんか。二人揃つてゐたとて、心が離れればなれては何になりませう」と云はれもせぬので、また胸の上へ手をおいて、凝と伏眼になつて心の底の面影を、忘れぬように思ひ入つてゐた。
「それともお一人てゐる方が面白うござんすか」と云はれたをりには、秋子は面影の人の名を心の中てよんだ。秋子の唇は唯顫へるばかりてあつた。
梶井さんは手答へがないので、此度は秋子の弟の方へむかつた。弟は呼かけられると
「ええ」とさも困つたらしい返事をした。山内さんは下手に出ては、猶妙てないと場合を見て、氣の毒さうに俯いて盃をいたづらに廻してゐた。
「氣の毒だが姉さんは、一生しよいこみだと覺悟したまへ。困つてきたらどうにかしてあげるだけの準

備をしておくのさね。仕方がないや、君は長男だ。」と、弟の顔を見据えた。

當惑した弟は、てれた顏を撫でゐる。秋子は胸が一ぱいにつまつてきて、誰が、誰が、誰が、どのようにならうとも弟なんぞの世話にと思ふと、思はずせきあげてきて、聲を洩らすまいとすれば齒をくひしばるほど身が顫へた。

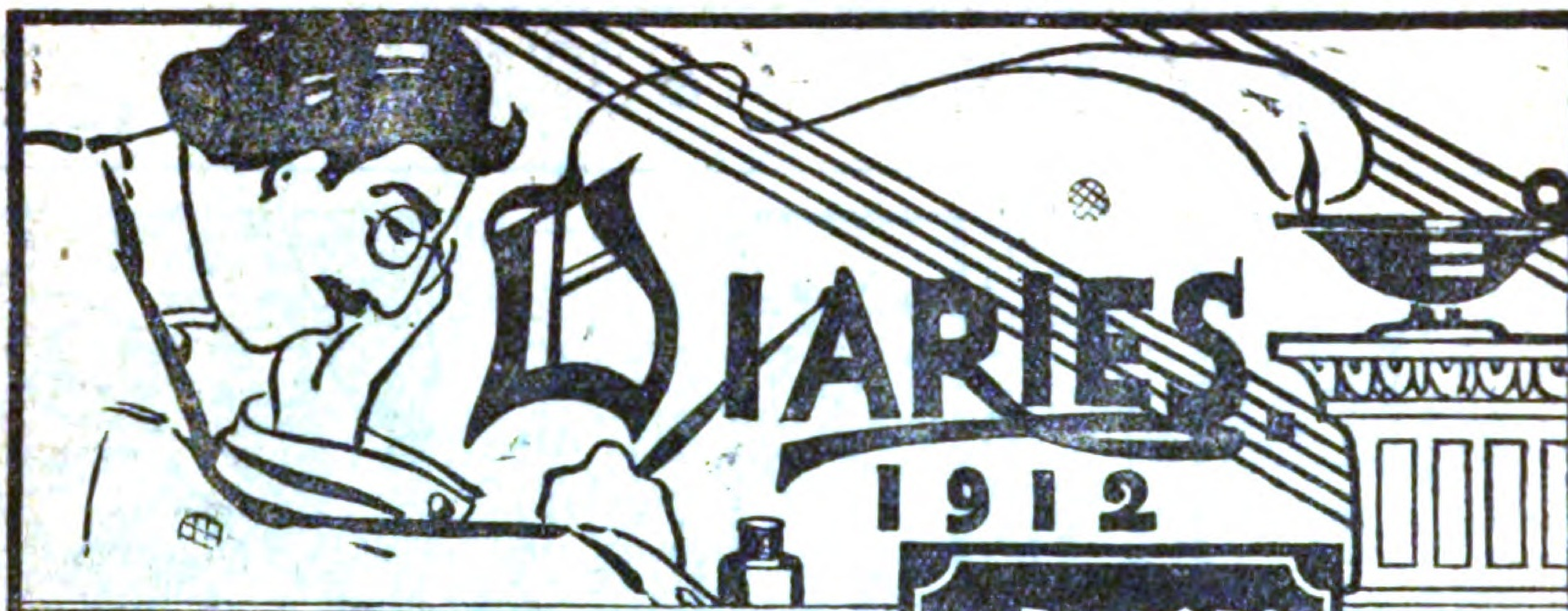
「有難う、決して忘れません。」と口をきると、堪兼た涙が眼瞼を押して流れだした。云はれた人には猶更、弟にも、山内さんにも涙を見せたくない。外の取まきには殊更であつた。興ありげに秋子の顏を眺めてゐる失禮な者もある。そうとしつて止めようとしても涙はとまらなかつた。矢つぱり秋子は、甲斐しよない女だつたと、それさへ添ふて自分と自分が泣かれた。

秋子は從姉の家の門を、洗つたような顏をして出た。泣濡れた頰に、劈輝がきれるかと思はれるほど寒い風が吹いてゐる。

かふして自分は自分の世の中に、一歩づゝ歩み出してゆくのかと、言ひ知らぬ淋しさに、秋子は新しい涙を催した。此後どんな華々しい事に逢ふとても、今夜を思ひ出したなら、どのように詫しく思はれるてあらうとも考へられもした。

—完—

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ



英學新報社編纂

明治四十五年 英文日記

當用
總布特製
價五拾錢
郵稅八錢

懷中
總革特製
價卅五錢
郵稅四錢

愛用諸賢の湧くが如き歡迎と厚き御援助に據りて著しき發達を遂げたる英文日記明年用には獨特の編纂法に依り一層の精を盡し‖爾來年毎に改善を加へ來りて‖殆んど理想に近き‖實用體裁共に兼備したる‖最善の模範的日記!!!倍舊の御愛用あらむことを偏に希ふ。

△年末年始の贈答品に恰當 殘部僅少 至急御求を乞ふ

發兌元
東京本町 博文館 振替二四〇
東京神田 東京堂 振替二七〇

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

三省堂編輯纂・三大辭書重版發行

服部、三島、重野三文學博士監修

漢和大字典

何れの圖書館にも官衙學校にも學者の書齋にも必ず備へざるなき本邦唯一の模範的漢和字書にして版を重ぬる事十八版に及び發行部數十六萬に至る眞に出版界未曾有の重版にして編纂の斬新なる組織の巧妙なるは云までもなく秩序整然として使用簡便なる事眞に天下の逸品なり

第十八版發行

紙數一千九百六十頁
▲上製總革綴　正價金四圓
▲並製總クロース綴　正價金三圓
郵税金二十錢
臺灣樺太清鮮五十錢

漢和新字典

漢字に平易明確なる訓釋を秩序的に施し讀書作文に必要なる文字等は一切網羅して漏すなく又必要なる熟語成語を摘錄せり故に字義を知らんとする者に對しては座右の師たるは勿論亦以て作文の好資料とすべし

第十版發行

紙數千五百九十餘頁
定價金壹圓
郵税不要

國漢文辭典

最も斬新なる編纂法に則り新聞雜誌に多く用ひらるる文字國語漢文讀本中にある難解の文字語句及作文に必要なる用語等を摘錄し誰にも解り易き說明を加へたる近來無比精良廉價の辭書也。

第十二版發行

紙數二千餘頁
定價金六十五錢
郵税不要

發兌元　東京神田裏神保町　三省堂書店　振替貯金口座東京一五九七

信用なき店舗及卑猥なる賣品の廣告掲載は謝絶す

○改正定價　金貳拾五錢外に郵税金貳錢（海外郵税拾貳錢但淸國を除く）

冊數／國別	內國	外國
六冊	金壹圓五拾錢	金貳圓拾錢
十二冊	金參圓	金四圓貳拾錢
以上郵税共		

▲但新年號　春秋二期特別號は各倍册に付普通號二册の代金を申請くべし、即ち一ヶ年通計十五册分の割合なれば一ヶ年分御注文の方は內國は金參圓七拾五錢外國は金五圓貳拾五錢拂込まるべし

送金注意

一郵便爲替　にて御送金の場合は　本鄕西片町十番地反省社　と指定し拂渡局を　東京市東片町局　と指定あれば途中盜取の虞なし

一振替貯金　口座は東京三十四番なり、これにより御送金の方は外に登記料一錢を加えらるべし、然らざれば送金額より差引くにより端金となりて却て面倒となるべし

一郵劵代用　必ず一割增の事

一集金郵便　の便法を利用せらるゝ方は、座ながらにして誌代の拂込をなすことを得べし、御希望の方は拂込金額以外に左記集金委託料及送達料金を加えたる其總額を前以て弊社へ通知せらるべし弊社は直ちに其取扱をなすべし

一金一圓迄　金五錢
一金三圓迄　金六錢
一金五圓迄　金七錢
（集金委託料及送達料）

一受領證請求　は必ず返信料金を要す

明治四十四年十一月廿八日印刷納本
明治四十四年十二月一日發行

（禁轉載）

發行兼編輯人　麻田駒之助
印刷人　天野鉎一

東京市本鄕區駒込西片町十番地
發行所　反省社
振替口座東京三十四番　電話下谷一九九九　電信略號ハンセイ

東京市牛込區市谷加賀町一丁目十二番地
印刷所　秀英舍第一工場

（奥付の前）

CHUO KORON (*The Central Review.*)
By THE HANSEI-SHA PUBLISHING Co., Published Monthly.
Entered at the Post Office at Los Angels, Cal. U.S.A. as second-class mail matter.

歳暮と年始の贈答品

三越はデパートメントストーアなれば、老若男女、あらゆる御方様の御贈答品を漏れなく取揃へて居ります特に三越の「商品切手」は御贈答品として御便利此上もなし。お正月も日一日と近づいて参りました。歳暮年始の御贈答品は此際是非三越より御求め下さる様ひとへに奉願上候。

十二月一日より
玩具展覧會
膳椀茶碗食器新製品陳列會

十二月十日より
羽子板大賣出し

東京駿河町

三越呉服店

此廣告に依り御申込の方は中央公論に依る旨御附記を乞ふ

MADE IN JAPAN